

奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

特集「世界に於ける刑罰の種々相」



1962・11

新鋭・十一月号

奇譚クラス

11月号

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



日本版サド侯爵悦虐絵巻

（本誌の二倍の大きさ）
九枚一組五〇〇円

(送共) 略号「ち9」



「日本版サド侯爵悦虐絵巻」解説
一、女体食卓（大テーブルの中央には股を開いてアグラ縛りにされた全裸の美女が仰向けに寝かされている。ボクは今夜の調理人だ）
二、逆吊女体（ベッドの傍では膝で吊られた真白く輝く女体が目の前にブラさがって、ボクのムチの先で悪戯されるのを待っている。）
三、針のトイレ（針の植った奇妙なトイレ、浣腸を施された美女が今や排泄を強要されている。ボクは覗き窓から眺めている。出歯亀）
四、女体燭台（嚴重なアグラ縛りで乳首に結んだ紐がピンと張っている。仰向いた額に立つんだ）
五、拷問室のペット（お前はボクの可愛い蠟燭に火をつけたボクは一服をつけた）

愛玩物 衣服をすっかり剥いだお前が、その
 真白い肌をくねらせて踊り狂うのだ
 六、浴室の女神（むっちり肉のついた女体
 にグルグル巻いた太縄が水を吸って縮み、足
 を釣られた女神が鞭うたれて後光を放つ）
 七、蛙腹の実験（水道の水がゴボゴボと否応
 なしに口から注がれ、きゃしゃなお腹が妊婦
 のように膨脹するの）
 八、アクロの舞（アクロバットの前歴をかつ
 てボクは君にこんなあられもない恰好を強要
 している。闇に輝く女体は素晴らしい舞踊だ）
 九、排尿の図（さあ、鏡にうつった姿をよく
 見てごらん。赤ちゃんは、こうして抱っこし
 て、オシメカバーをはずしましたようね）

特異な責画を以て一世を風靡した四馬孝画伯が、その奔放なる制作意欲を燃えたぎらせて構想を練ること半歳。口絵に於ける種々の制約に捉らわれることなく、ここに分譲品としての強烈な画集を完成しました。これは通信販売のみにより分譲いたしますので是非直接お申込み下さい。完全なる複製

方法により、原画と寸分違わぬ大
きさ、鮮明度を持つ九葉の画集を
お手元へお届けいたします。
内容はサド侯爵を自称する或
億万長者の青年がその巨大な富を
背景にして、美貌のうら若き女性
を飼育し、訓練し嗜虐する華麗に
して熾烈きわまりないサド・スト
リーの完全絵画化であります。



奇譚クラブ

十一月号
(第十六卷第十号)

目次

ある瞬間の構成

塚本鉄三・撮影・構成

一 ヤ 囚女独禁の像
白肌と黒紐(替ゴムの猿ぐつわ)
襲いくる悪魔の触手
鏡のある緊縛風景
荒縄悦楽

第グラビ

無名失念嬢
絹川文代
梨花悠紀子
大塚啓子
梨花悠紀子

女体切腹

四馬孝

女体切腹(沖繩女子挺身隊員の自決)
介添切腹(姫君自害)

滝れい子

責の構図

四馬孝

(午前〇時十分の静寂)
(女体拘束台)

淑女の足

滝れい子

(足舐めの構図二題)

黒川不二男シリーズ『焼ゴテ』

黒川不二男

緊縛場面点描

杉原虹児・構成

第ニヤ

絹川文代

諦観のまざなし
吊り責め準備風景
飾られた美形の陳列
丈なす黒髪と温かき肌
乳房の量感
海老じばりのワン・カット
責めも一段落して

梨花悠紀子
水本茂美
桜井葉子
大塚啓子
絹川文代

第グラビ

梨花悠紀子

体験小説

悦虐の宿

悦虐の宿

利吉

ガン作・マニヤのノート

芳野眉美

「私のバーでの会話」

辻村隆

マゾヒスト「水本茂美」の登場

柿沼紅二郎

「S体験記」白い襟足の誘惑

南方佳男

映画通信 女優の縛られ演技

花巻京太郎

連載小説 女と蛇

壬生咲夫

創作 盲愛の年譜

江戸禪男

「体験告白」 禪義兄弟

関根彰

「試作室レポート」 おむつカバー

三条卓史

Sプレイに利用できる新しい女性の下着

阿留品又怒

「奴隸国探検」サルジニヤ探訪記

久利須照雄

或るクリスター・アフィニストの空想

佐治麻造

長篇SM小説 宇宙のどこかで

泉辰之助

ホワイト・スレイプの運命 競売台の女

小竹紀夫

MSストーリー 無垢の悪魔

上木慶二

【倒錯の手記】 妻になりたい永遠の願い

扇 芝

女体切腹の構想 壮絶、志士の妻たち

辻村隆

「奇譚三十九夜物語」 (第十九夜)

中田明

「短信」 プレイをあなたと

須藤律夫

「告白的随想」 臍窩慕情

荒森充助

世界に於ける刑罰の種々相

荒森充助

マゾ資料

M フ ォ ト 三 十 態

B7版感光紙焼付

三十ポーズ(三十枚)一組 五〇〇円 (送共)

略号(ま30)

美しい女性の手によって、その豊かな尻に敷かれるマゾ男。この男はマゾモデル募集に応じて合格した幸福な男です。これから、さてどのような虐められ方をするでしょうか。自分をこの男の姿に置き換えて、よくごらん下さい。



凄い迫力、注文殺到の(ま30)の人気!

一枚残らず全部未発表のとおきおきの馬乗り資料



ふくよかな真白い脚で首を絞められて、息もとまるような恍惚感にむせび、白羽二重の足の裏で顔面を踏みにじられて、汚辱の沈潜の中に舌を出して足の指のまたを舐めさせて頂く倒錯感。

身も心も、骨のずいまで屈伏させられたという被虐感をいやというほど与えられるポリウムのある女の臀部は、どしりと背中の上に

据えられて逆にとられた後手の痛さが、たまらなく迫ってくる。

顔乗り、馬乗り、足舐め、踏みつけ、と、美女によって痛めつけられ、屈辱をいやというほど与えられる場面が、傲慢な女王様の勝手気ままなふるまいによって、次々と展開されてゆきます。

ものは試し、一度マニヤの方はごらんになっては如何ですか。

ある瞬間の構成











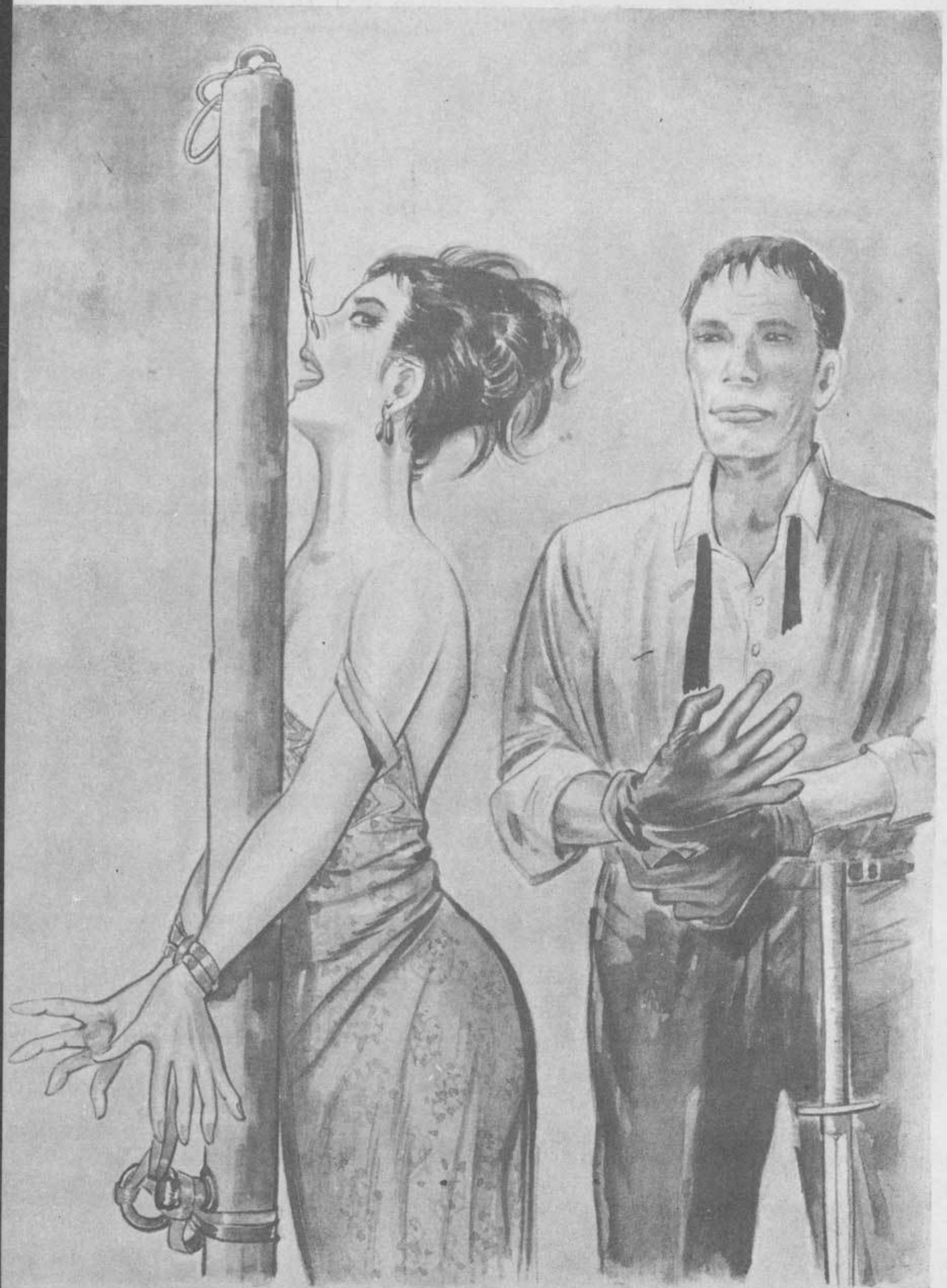






女党员に対する拷問

四馬孝・画





沖縄女子挺身隊員の自決



介添切腹

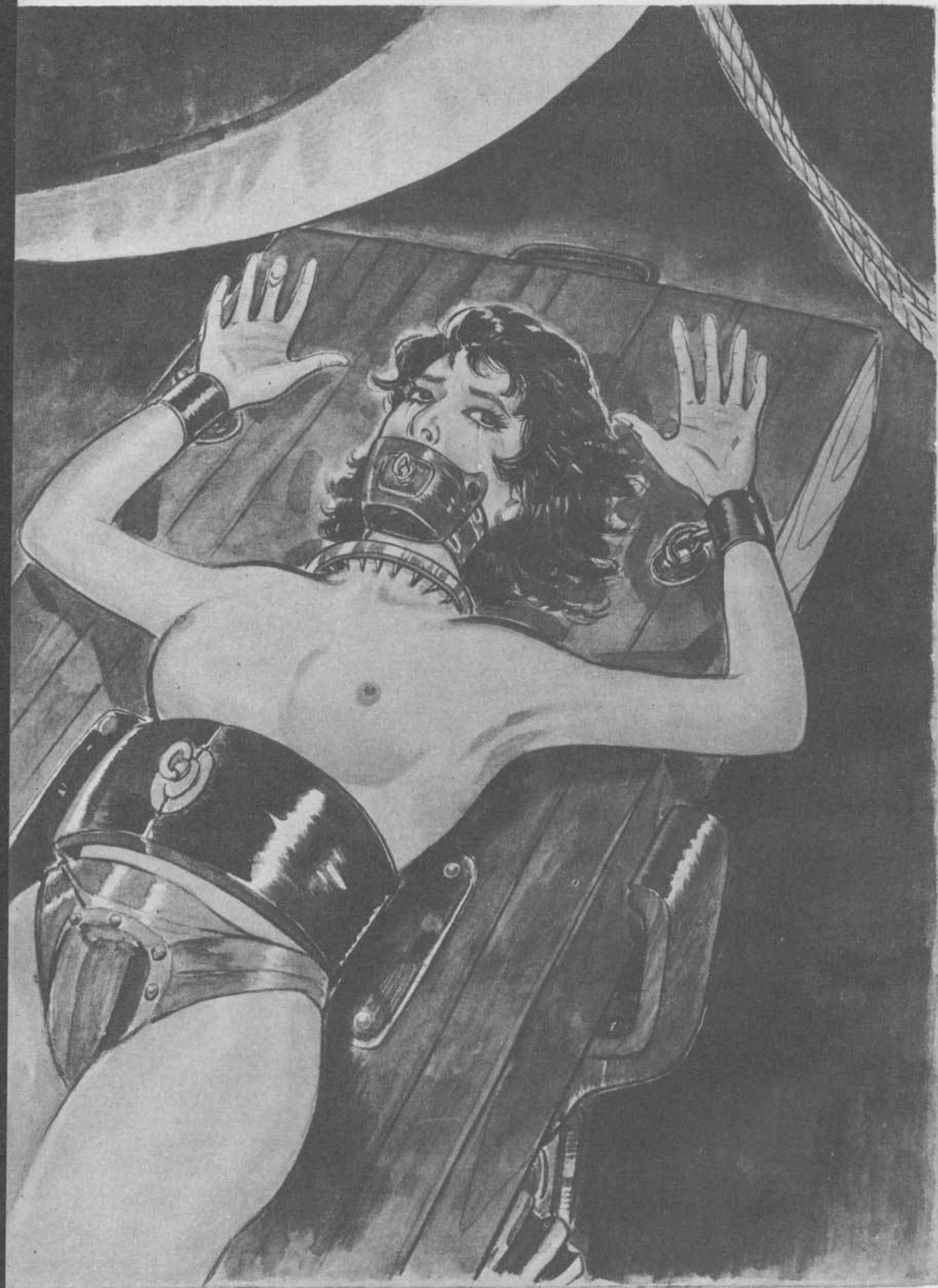


零時十分の静寂

四馬孝・画

女体拘束台

四馬孝・画





淑女の足

瀧 れ い 子 画



女神の足

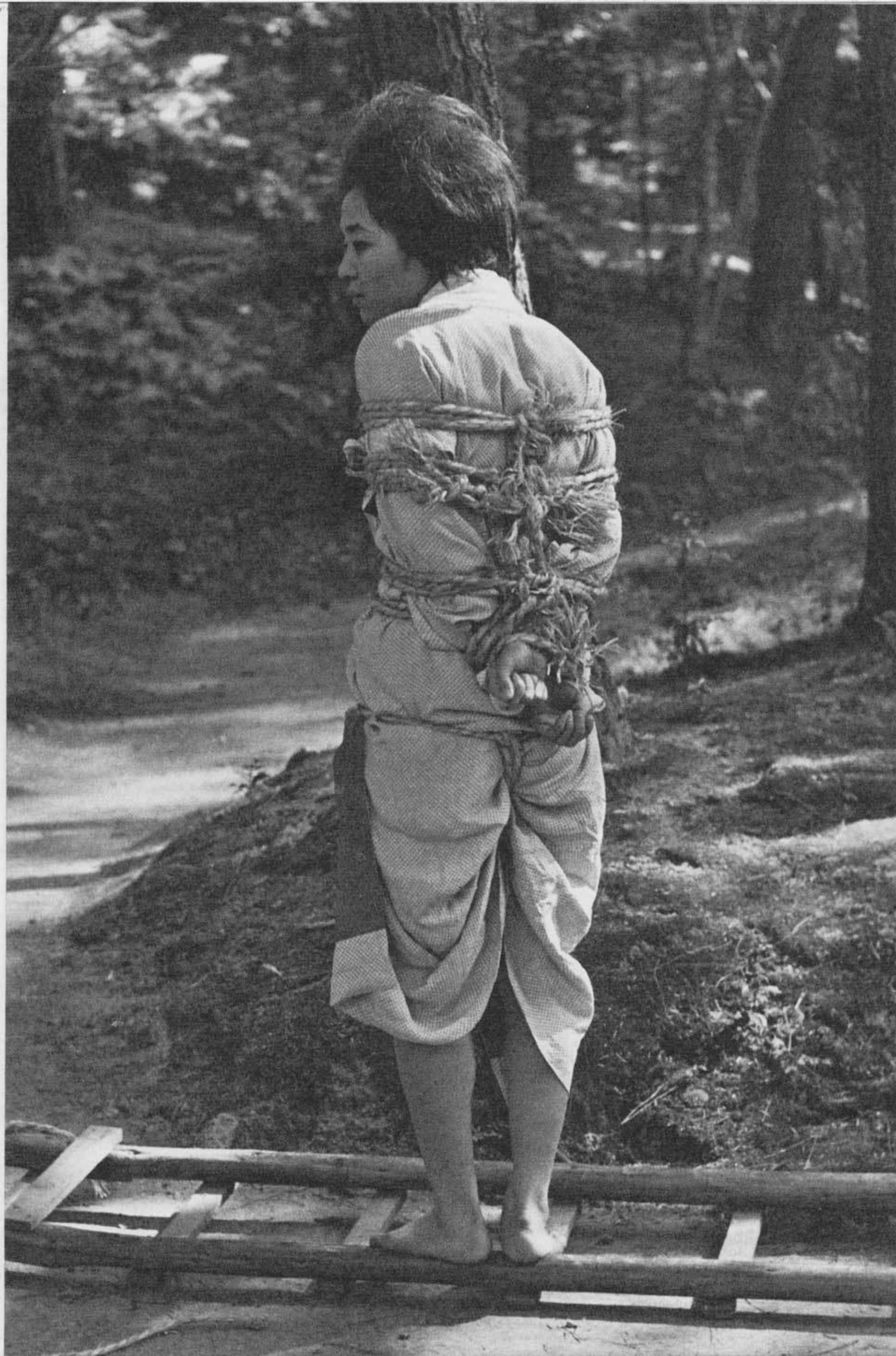
足舐めの構図二題



焼ゴテ

黒川不二男画





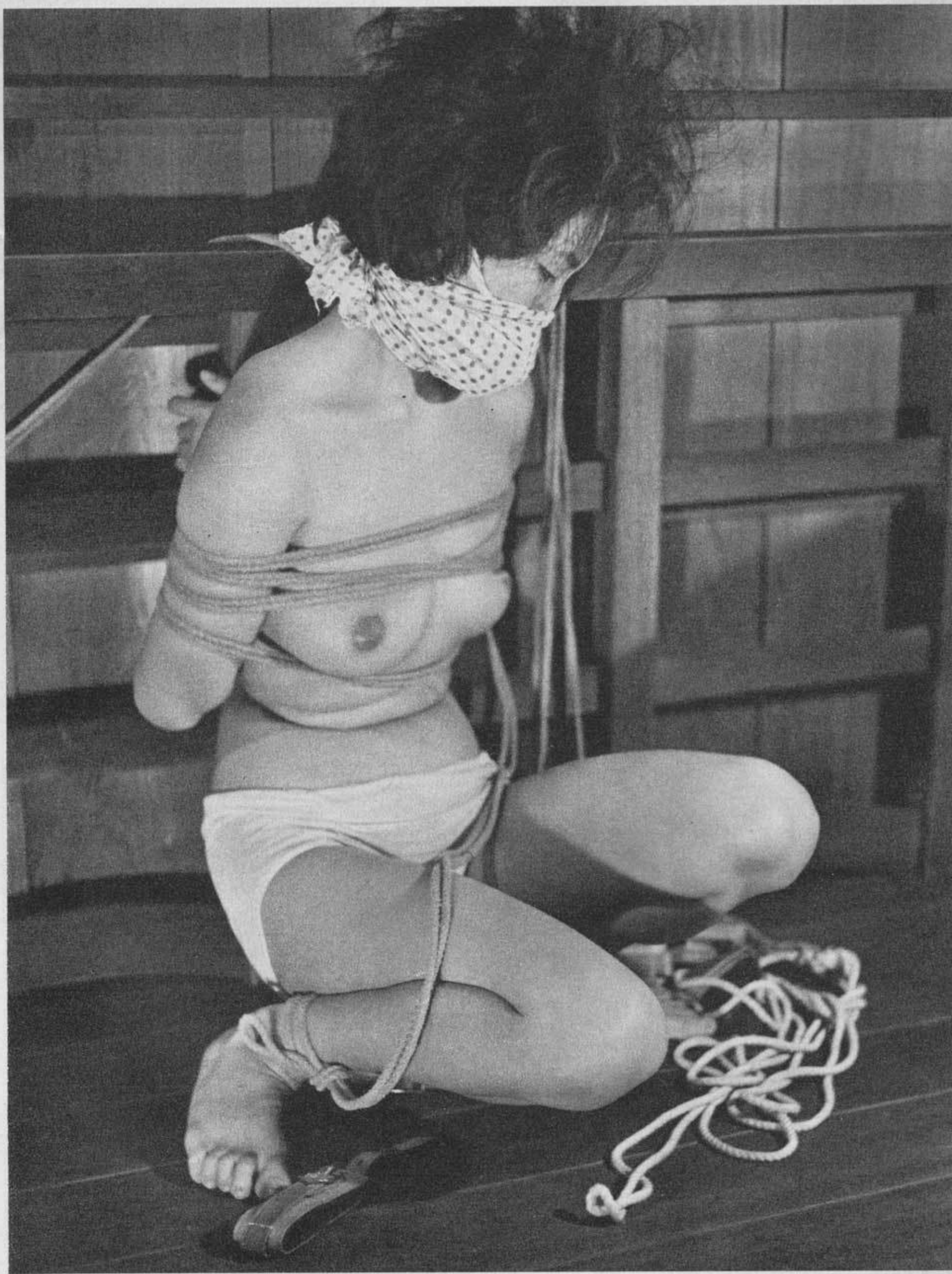














新しい風俗文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1962年 11月号

(第16巻 第10号 通刊第170号)

体験小説

悦 虐 の 宿

えつ

ぎやく

やど

芝

利 吉

(一) ポン引

「なるほどね。旦那……。仲々変った御趣味で……いえね、ヘッヘッ」

その男は私から渡された三葉の小型写真を手にそういうと、マジ／＼と私の顔を見つめて、ニヤツと笑った。

「どうだね。そんなにして遊べる女はいるかね？。どうもね、普通ンじゃ、ちっとも面白くないンだよ。因果なことね。」

「へい、へい。そうですなア、フン縛ってネ。いやがるのを無理矢理縛り上げるのも一風変わった趣向っていうもんですね。」

「どうだい。お代はずむぜ。何とかいいのを見つけて呉れよ。……さア／＼まア一つグツといきなよ、おやじ。」

「へい。ありがとうございます。おっとおっと

どうも旦那、すいやせんね」

そう云った会話の間にも、私もポン引も、それぞれ手にしたその写真——。後手に縛られ、豆しぼりの猿轡に、赤い長襦袢の裾も乱れた横坐りの女の写真。腰巻の裾を押しひろげられて、真白い太ももを、あらわにした、半裸の女の、そむけた頬に喰い込む猿轡。乳房の上にグツと引き締った縄目の痛々しい写真——を熱ッばい眼が離れなかった。

× × ×

そこは上野の駅近く、郵便局の薄黒い建物の横丁に、ひしめいて居る一杯呑屋のチャチな屋台の中である。

ついて今しがた、ホロ酔の頬を夜風に吹かれ乍ら酔ざましがてら、ブラリブラリとこの界隈のポン引の網の中を通過して来た私に、アメ屋横丁の角あたりで、三番目かに声をかけたのが、このポン引英吉であった。

「旦那。旦那。ちよっと、旦那。いいのが居ますよ。お供さして下さい。すぐ近くにですぜ。旦那如何です？。もうそれは、旦那のお好み次第。どんなンでも居ります。」

それまでフンフンと聞き流して二三歩歩きかけた私の足をピタリと止めたその言葉は

(旦那のお好み次第……。)

(よし！ 一つあたってやれ、久し振りに出た東京の、今宵はおぼろの春の宵。宿で一人寝も能がなし、幸い金は大分持っては出たし……久し振りで出ッ喰わしたアブアンチュール！)

と思い廻らす間もあらばこそ、ピタリと立

停って振返った私は、ノソノソと近づいてくる英吉を待った。

「お好み次第って？ どんな好みにも応ずるッてンだナ」

「へい！ どんなンでも！ 一つ遊んでやって下さいよ。」

「フン。俺の好みに合やア話に乗ってもいいぜ。又お礼もタンマリしようじゃないか。」

「そうですか？ どんな女でも居ます。私も

毎日此処で店を出して居るンだ。今までにだって一度も嘘を云ったことたアありません。本当です。へい……。」

二人、ピタリ肩を並べて小言でそう云い乍らいつしか下谷郵便局の前あたりまで来てしまった。

「よし判った。おっさんは仲々正直そうだ。信用するよ。」

「へい。もう絶対大丈夫。めったな処へは参りません。で？ 何ですか？ お好みは、どう云うところですか？」

「ウン。一寸待った。立ち話も何だから、そこへ、附合いなよ。」

と眼顔で横丁に並ぶ(おでん。お酒)の古提灯を指すと、肩でそのノレンを割って入った。

二つのコップに熱い酒が満たされたところで、(さアやんな)と眼で知らせ、コクンと一口、のどをしめしておいて……。

「おっさんよ。俺の好みはだな。と云うよりか、条件としてはな、いいか？。洋装は駄目。洋服にシュミーズなんてのは色ッ気がなくていけねエ。それにズベ公みたいナフラッパーな、すれッからは絶対にお断りだよ。」



御馳走のコップ酒に眼を細めていた英吉はあわてて

「よ……ようがす！ 日本調ですね。かしこまりました。」

「うん。えーと、年は若いにこした事はないが、余ッ程婆アでない限り、お前さんに任せるとしてだ。まア呑めよ。とにかく色気のあるのにしてもらいたいな。赤いものがチラつかないアね。矢張り日本人は、何ッてたッて、長襦袢に腰巻だ。これが色気があって、男心をかき立てる。なア。」

「ごもっともで、御案内致します。ピタッとしたのが居ります。あたしはね、英吉と申しますが、もう何年もこんなことをやって居りますンで。ご安心なすッてお任せを……」

と立ちかけるのを

「オットト、まア待ちなよ。お前は気が早いなア随分。これからだぞ、本題は——まアもう一杯やんなよ。」

「へい。どうもこりゃ、とんだ御散財かけちゃって……ヘッどうも。遠慮なしに……。」

と又腰が落ちつくのを見すまし、素早くあたりの人無きをたしかめた私は、鞆から三葉の写真を、パリリと酒のしみにうす汚れた台の上に出した。

「つまりだね。こう云う風にして遊びたいんだ。」

「ヘッ！」

びっくりして英吉は、私の顔を見上げるとゆっくり、その写真を手にして眺め出した。

「なるほどね旦那……。仲々変った御趣味で……いいえね、ヘッヘッ……」

そう云う英吉の耳もとへ、押ッかぶせる様の私の言葉が続いた。

「お芝居でいいンだ。とにかくだね。女を後手に縛って、猿轡をはめて……それだけでいいんだ。映画や芝居によく出てくるだろう？ いやがる女をネ、引ずり廻してさ……あの儘でいいんだ。これが俺の好みだがネ。どうだい？」

そこでグッと酒を呑むと英吉の返事を促す様に私は一膝乗り出した。

(二) 家出した娘

「よォがす。！ 一つ御案内しましょう。年は二十三ですがネ。お面はまア普通並と云っておきましょか。その代り。何て云うですネ。小股の切れ上ったッてンですか。滅法色気のある娘です。……そうですね。あの娘に赤いものをチラつかしてフン縛ったら、それ

こそふるいつきたいような色気ですぜ。いえ何。氣立ては、極く優しくッてネ。もっとも、この商売にアまだ日が浅うござンしてネ。

え……。これがその。旦那の御話しにピッタリなんで……と云うのがネ。この娘がネ、故郷で、あなた、勤めて居た会社の上役ッてのに、手ごめにされたンですよ。さア縛ったのかどうか……そこまでは何ですがネ。猿轡はされたと云うコッてすよ。……二十の春に――。

どこでどうしたのか詳しいことは知りませんがネ……そうした女なのですからネ。」

どこまで本当か、作り話か知らないが、英吉の、人をそらさない上手い口説に、何となく楽しくなって、これからへの期待がグングンと胸にのし上がって来て口の中が次第に乾いて来るのに、又一口新しい酒を流しこんでおいて、

「しかしね、そう注文通りにゆくかなア。勿論縛り代も出そうし、おッさんにも、お礼はするがね。」

「何アにね。金で買った女ですよ。それこそ、焼いて喰おうと煮て喰おうと……ね。そうでしょう？ それに、ジタバタしたら、それこそ旦那の思う壺でしょうがネ、エッヘッヘ

ッ

「変な笑い方をするなよ。只ね。女はいいとして、どんな場所か知らないけど、他があるからね。」

「大丈夫！そこはね。お内儀と、もう一人だけ女の子を置いただけの、極く静かなところだ。その点は、どんなに引ずり廻してドタバタしたってハタへ何の気兼ねもいらないところだ。……オットト、かんじんの玉が居るかどうかい一寸電話で聞いて来ましょう」

と立ち上る英吉のジャンパーのポケットへ、私はあわてて五百円札を一枚つつ込むと、「電話賃だ。お礼は又するとして、しっかり頼むぜ」

と肩を景気よくどやした。

「オット、合点承知の助……」

と風を喰った風見たいに、元氣よく飛び出して行ったのは、これは上客と見てとっての張切りか、異常な興味に共に興奮してのことか。

後に残った私は、安心して、さて改めて写真の猿轡の女をしげ／＼と見乍ら、さめた酒を口にふくんだ。

「旦那。お楽しみですねヘッヘッ……」

今まで黙々として居た呑み屋の爺がボソッ

とそう云って笑ったのには、参って、テレかくしに、一氣に残った二杯目の酒を呑むと、立ち上った。

(三) 特殊喫茶

何処をどう通ったかは判らない。例の輪タクと稱する奴に、ガタンコトンとゆられ乍ら、視界を閉じた幌の、ゆれる度に街の明るさが、暗くなったり、又明るい通りに出たり、二十分ばかり走ってガタンと止まった。

「え、お待遠さんで。着きました。」

英吉の声に促されて車から降り立った私の眼に、ここは合羽橋の商店街をほんのちょっと入った露路の角ッこ——と読み取れた。

喫茶とあるだけの、うす暗いえらく不景気な内部へ一緒に入ると、何と人ッ子一人居ない五坪ばかりの処に、古めかしいボックスが二つ向き合って居て、成程ドアが閉って居た入口が暗かったのと、中の桃色の螢光灯照明にそれを思わせる、喫茶とは看板だけの女を置いて客を呼ぶ店なのであろう。

電話のせいか、いち早くお内儀らしいのが奥から出て来て、お愛想笑いをすると、

「英さん、ちようどよかったよオ。あの娘ひとりですよ。いえね。もう一人のがネ、あん

た、今朝ッから都合が悪くてね、故郷へ帰っちゃってよオ」

「フンそうかい。まア旦那。首尾はよかった様ですよ。まアおかけになって、……どうです、静かでしょう。それに、この婆さんも何でしたら消えさせてもようがすよ」

「えええ。そりゃあなた。あたしも、もうちと若けりゃ、どうされたって、お相手もしましょうがネ。オホホホ、お邪魔とありゃ三の輪の姉ンとこでも油売りに行きますよ。」

まア、このやりとりで、二人共悪人でもなさそうだし、物騒なことにもなるまいと見て私はお内儀にも英吉にも、大きくうなづいて見せた。

「いやネ。おッかア、まアまず、女を御覧に入れて呉れよ。」

「アイヨ。念に入れて磨いてござんすよ。お風呂にも昼の内入れておいたしするから……いい女になりましたよ。」

とあたふたと二階へ上って行った。

「ねエ旦那。もしもあッしの云うのが間違つて、旦那のお氣に召さなきゃ、何アにいいんですよ。百円もやって呉れりゃ又別のを、御案内しますよ。」

と云っている内に、ひそやかに二階から降

り立った女が、伏眼がちに私の方へお茶を運んで来た。うち紫の着物がよく似合う細面の女であった。

○

「お茶をどうぞ。ヤス子です、どうぞよろしく。」

「オッ減法。きれいになったネ。え？」

と云いかける英吉を、やさしく、にらんで私の方を見ると、かすかに微笑んだその女——ヤス子の瞳が印象的だった。

英吉の（どうです？）旦那。お気に召しましたか？）と云う眼顔にうなずくと、合点々々し乍ら、又引き返しかけたヤス子を

「ちょッ……一寸」と呼び止めた英吉がいきなり手をのばすと、ヤス子の着物の前裾を思い切りまくった。

「アッー、いやッ……」

と赤くなって裾を押さえる瞬間、長襦袢の緋色が、私の眼の中に電光の如く射抜いた。

あわてて二階に上ってゆくヤス子の裾のこぼれに、尚も眼をやっている私に、英吉が

「え、どうです！お気に召すでしょう？」

「うんいいね。あの娘に決めるよ」

「と、どうします？ お時間？それともお泊りで？」

「泊りをつけよう」

「ありがたうございます。でも、何よりでした。旦那のお気に召して。へいあっしもお世話のし甲斐がござんした。ああお内儀さん、お泊りだよ。お礼を申して呉れ。」

入れ代って下りて来たお内儀に、泊りの金に加えて、チップをはずんだのは勿論。英吉にもチップを改めて出した。

「気に入った。いや女もだが、お前さん方もだよ。何かこう恐いんじゃないかと思ったが、仲々いい人達だネ。じゃようく頼むよ。」

「こりやどうも、こんなに戴いちゃって」

「すいませんネ旦那。いいえね。どうぞ御ゆっくりなすって下さいまし。」

「ところで旦那。どう云うことに致ししょう。趣味は……」

「そうね。いや一つ例の調子で……」

「へい。へい。それじゃ、あの子を家出娘と云うことにして、なアおっかア。今しがた上野の網にかかったムク鳥ッて趣味で……お初穂を旦那が散らすと云うことで」

「そうね。あたしゃ、一寸したやり手婆アかね、ホホホホ」

「ここへ引っさらって来ての、逃げ出さねエ様に長襦袢一枚にはぎの、フン縛って猿轡と

云う寸法に……」

「旦那がゆっくりお料理とね。……じゃ英さん、手を貸しとくれ」

「あいよ。こいつアあっしも役徳だア」

と笑いあって、二人が二階に上って行った。

(四) 絶好の演技

「旦那。お待遠さま。どうぞ。」

と案内されて二階に上った私は、先ず小間に通され、そこでお召替えをと、丹前姿にかえると、次の間の襖を開いてお内儀と入って行った。この部屋にチャブ台があり、床の間には床柱を背にして、ヤス子が長襦袢姿で縛られて居る。全く注文通りに、しごきで後手に縛り上げ、更に麻縄を使って床柱に縛りつけ、横坐りにさせられた両足も縛ってあり、これも望み通り豆しほりで猿轡をはめてある。それに又商売とあって襟をグッと押しひろげられ、横にそむけたヤス子の長い睫毛がふるえて居るように見え、パーマでなく、大きくウェーブした普通より長い髪の毛がハラリと白い肩にかかって、まず満点の風景であった。

ものも云わず満足の意を表明して私は、横に控えた英吉やお内儀に大きくうなずいた。

この部屋に連なる四畳半に、なまめかしい布団の準備も、行灯風のスタンドの灯も入っている。ついでお内儀にお酒を二三本云いつけると私は英吉に

「いいね。……いい姿になったねエ」

「へい。じゃ……」とそれとなく私へ、そしてヤス子を省て云うと英吉は立ち上った。

ヤス子の髪の毛をつかんで、こちらへ顔をねじ向けると、

「旦那。いい玉でしょう？ 今しがた、婆アが引づりこんだんですがね。」

「ン。これなら……仲々掘出しものじゃないか……」

「ジタバタしやがるンで、フン縛って無理往生させよってンですがね。さア。観念して云うことを聞くンだ。う？ かわいがってやろうと云いなさるンだぜ、旦那は……」

ヤス子は猿轡の顔をそむけ、長襦袢姿をよじって全身で嫌々をした。（云い含められたとは云い乍ら、仲々タイミングが合ってうまい。）

その中、お調子を運んで来たお内儀も加わって、

「ねエ旦那。とびっきりの上玉ですよ。さア念には念を入れて、お眼にかけましようかね」

と近づく、揃えて縛った足の細紐をといた。トタンにヤス子は足を重ね、内股を堅くしめて身をもがく。ハラリ長襦袢の裾が乱れる。

「何だネ。この娘は……さアお見せするンだよ。ジタバタしたって誰も助けに来やしませんよ。……痛い眼にあうだけ損だよ。旦那。さア、とっくり御覧下さいよ。生娘でござんすよ。」

と云い乍らもがくヤス子を押さえつけ長襦袢の裾をはね、腰巻を見せたのは、芝居ッ氣に加えて、今夜の客への商品を見せたい魂胆か――。

「まあいいやな。じゃ旦那。ゆっくり料理して下さいましな」

「仲人は宵の口。消えてなくなアレ……てネ、おっかア。」

「あいよ。おい！ その可愛い顔をゆっくりいじめてもらいなよ。」

「いじめて、いじめて可愛がられて女にされてか、ハッ／＼じゃ旦那。これで」

「旦那。お楽しみ。ごゆっくりどうぞ」

お世辞ともお芝居ともつかず二人は階下へ消えやがて静かになった。戸締りをして、一人は又もとの職場に、一人は油を売りに……

（五）悪役の醍醐味

そうだ。もうお芝居の幕は、とっくに開いているのだ。さしずめ、私は悪親分と云うところか。

丹前姿でゆっくり酒をなめ乍ら眼は、じつと引きすえられて居るヤス子――いやこの場合は、悪い女衞や、やり手婆の為にさらわれて、救いも来ないままに、やがて私の為に手ごめにされる娘か――なまめかしくも乱れた姿を、見つめて居る。伏眼に顔をそむける頬にクッキリ喰い込んで居る豆しほりの猿轡。

ずり下げられた長襦袢の襟もとに、息づいている真白い肌。緋の中に大柄な花びら模様を染め出した長襦袢の乳房のふくらみあたりに、くびれて居る縄目。横坐りに坐って、乱れた裾からのぞく、これも真赤な縮緬の腰巻。――

私のみだらな視線は、顔から裾へ、裾から顔へと、ゆっくりと、実にゆっくりと何回も上り下りする。やがてツと立ち上ると私は、チャブ台を廊下に出した。これからのプレーに邪魔になる。そうしておいてゆっくり、娘の方をにじり寄る。そう――！ にじり寄るのだ。

ピクツと娘は動くと、さッと身体を堅くする。心なしか、ふるえて居る（神技に近い）。グッとそのやわ肌をつかむと肩を抱きよせる。娘は身をよじって逃げようとするが柱に

縛られた身の悲しさで、身をもがく度に裾が乱れる。全身で嫌々をする。ふるえる。頬にすり寄って、
「フッフッ。可愛いね。……どうだ？ 素直

ガン作・マニアのノート

「私のバーでの会話」

芳野眉美

A、盗品返品

「週刊紙のローカル版を見ていると、よくパンティ泥の話が載っていますね」と私。
「パンティコレクション・マニアの多いこと」とN。

「週刊漫画の郷土珍聞に、パンティ泥をつかまえたのはいいけど、被害者を探すのに困っている話がありましたよ」

「パンティを持参して聞いて歩かなければならないものな」

「中には恥しいほど汚れたものがある、と書いてあった。」

「そんなものを持っていちゃ、いくら被害者でも否定するだろうなあ」

「そうですね」

「いくら協力してくれといってもね、モノ

がモノだけにね」

「オール読物のオール横丁には、盗品を返品した話が載っていましたよ」

「誰のかわかるのかねと」

「盗んだパンティに、名前を書いておいたんだって」

「警察で返品したわけ」

「そうですね」

「貴女が穿いたパンティと認めますか」

「そういう場合、出頭しなけりゃ、いけないでしょうね」

「まあ、被害者だからね」

「防犯に協力することはむずかしい」

「人道問題だな」

「びっくりするやら、恥しいやら」

「週刊漫画には、盗んだパンティ百枚とあるし、オール読物には二年越しのコレクシ

に自由になったらどうだ。」

娘は顔をそむける。フワ／＼と猿轡の奥で息づかいがする。（芝居ッ気充分。）

「よし／＼。どうせ人ッ子一人来る訳じゃない、苦しいか。猿轡を少しゆるめてやろうか」

きつく締った猿轡を、小声の出る程度にゆるめてやる。これも私の注文で口の中は何も入れてないのは、これがよい伴奏になるからである。所謂女の悲鳴にならない悲鳴。――を身になると、より以上効果が上る。（あくまでお芝居だからネ）

「どうだ。これでよからう。さア、その可愛い口で可愛い眼でウンと云え」

「いや／＼……いやです！」

「泣いても、わめいても無駄なこったッ」

と云いつつ柱に縛った縄をとくと、ユサリと向う側へ倒れて逃げようとする長襦袢の裾を、

「オットどっこい！ 逃げようたって……そうはさせないぞ」

押さえて片足をつかむ。

「いや／＼ゆるして！」

逃げる足と、つかまれた足。ハッと緋色が割れて真白い太ももまで……くの足に曲げた足の指がなまめかしい姿。

ヨンとあるけど、そんなに盗めるものでしょうかね」

「そうね、その道のベテランに聞いてみないことにはわからない」

「どうですか、先生」

「法律は守るべきです」

「もらえればいいんですね」

「そう、ことわってね」

「さてもらったことがあるんだな」

B、断 水

「オトイレ、水、出るかしら」

とスラックスの女性が云った。

「出ますよ」

「さっきの喫茶店、断水で、いちいちボーイが水を流しているのよ。彼女、気が弱いでしょう。入れなくて、とうとうがまんしちやったのよ」

と、連れのタイトスカートの女性が云った。顔の倍もある大きなヘアースタイルがよく似合う。

「私なんか平気なんだけどな」

「すうっとした」

と、スラックスが云った。

「苦しかったわ」

「馬鹿だね、そんなもの、がまんするもんじゃないよ」と、口が乱暴になる。

「この人ったら、平気でボーイにあと始末

させるんだから」

「気持がいいじゃない」

「そのボーイになりたかった」とN。

「あら」

「ここが断水じゃなくなって残念ですね、先生」と私。

「私って、コーヒーを飲むとオナカの調子が変わるんだ。合わないだな」と、タイトスカート。

「いやだな、さっきのボーイが可哀そうになった」

「その喫茶店、どこです」とN。

「オトイレ専用のボーイになるおつもりですか」と私。

「そう」

「Hね、この人」

「産婦人科の先生ですよ」と私。

「そうかしら」

「ああ、また調子が変わだ」

「あけすけだね、恥しくなっちゃう」

「いいじゃないの、自然的現象だもの」

「そうです、そうです」とN。

「水を流してくれますか」

「喜んで」

「どうだろう、早く行ってらっしゃいよ」とスラックス。

「うれしくなるな」とN。

私がこちらに向き直そうと手を放す。サツと裾をさばいて腰をくねらせると、いざり乍らあとすざりする。片膝立てた足が投げ出され、伸び縮みする度に緋色が灯にゆれる。

大手を拡げて、私はわざとゆっくり、餌物を追う。

「これ！ ジタバタせずに、こっちへ来るんだ！」

後手に縛られ猿轡をはめられて、逃げもかく女の長襦袢の乱れに、腰巻のひらめきに私は強く日本の女性本来の、——絶対の美。

そして如何なる国の女にも優る色気。ものの哀れと美しさを感じる。

そして、私はこの果敢ない欲望の故に、相手の女を（愛する妻も、恋人も：又本篇の如きその業とする女も含めて）縛って来た。意識してか或は空想しつつ。そして次第に私のこの欲望に同化せしめて行った。

最初からこのよきパートナーをつとめて、名優？ 振りを発揮し、私を夢中にさせたヤス子。そのヤス子が或る時、ニコリ笑って私にこう云った。

「満足した？ 楽しんでもらって嬉しいわ。でも……ウフン。あたしもチョッピリ……じゃない。とても楽しんでるのよ。これで……」

マゾヒスト

「水本茂美」の登場

辻 村 隆

「どう？……うまいったらしいわネ。フフ」

梨花悠紀子の含み笑いが、電話の底で微かに聞きとれた。

「本にのっただろー。ニューフェイス登場って題で……。まあまあ、あんなところさ」

「だけど随分顔を変えたのネ。まるで別人みたいだわ。辻村さんが顔を見ると、すぐ眉毛を太くする癖があるー。それに白粉を濃く塗って、まるでお面見たいじゃないのー」

「水本茂美御本人の希望で、顔を変えたつもりなんだけど、御世辞にもいい顔とはいえないかも知れないネ」

「でー、その後どうなの……」

「御本人に雑誌と、撮ったフォトを見せる約束なんだ。凄く見たがっているけど、出来上がりが悪いので気が進まない。ここ二三日の間に逢う予定になっているんだけどー」

「辻村さんの口癖の、飼育するつもりなんでしょ……。私見たいに……」

「……………」

「ホホ、いいのよ、どうなさろうとー。別段私の知ったことじゃないわ。あのネ、唯一つ云っておきたい事あるの、兄が私の縛られた写真見たらしいのよ」

「だろうと、薄々知っていたよ。で……何か

云った？」

「改めて何も云わないわ。夕食のあとで、フト思い出したように、近頃辻村と逢ったかいと聞いたわ。真剣な顔でね……。私、全然と云ってやったら、疑わしそうに本当だねと、駄目を押して、辻村が今後何を云って来ても会っちゃいけないぞ。お前も結婚前だからなー。自重してくれヨなーだって……」

「口には済まないと思っているよー」

「いいのよ……。緊縛された時の、ジーンと痺れるあの感覚ー、好きでモデルになって、縛られているんだから、気にすることないわ。きっと水本さんだって、そのうちあの



時の感覚が分る様になると思うわ。精々おやりなさいよ——期待して奇クに発表されるのを愉しみにしているわ。ジャあ——さよバイネ」

× × ×
 行きつけの喫茶店で水本茂美と出逢ったあと、私達は冷房のよく効いたS橋河畔のS荘

の一室で、備付の冷蔵庫からビールとチーズを勝手にとり出して、相対していた。

彼女は私の持参した奇クの8・9月合併号の、自分の部分を懸命に読んでいた。

傍らで、私は彼女の反響を伺がい乍ら、黙々とコップの泡をほしていた。

「随分、ヘンテコリンな顔に撮っていますわ

ネ。いくら顔を変えるつもりでも、少し非道いと思いますわ——」

「でも……あの時——」

「顔を変えるのと、不細工にするのとは別の筈ですわ。私、今日は自分でやって見ます」何も云わなくとも、水本茂美は、今日は最初から、そのつもりでいた。私と出逢うことは緊縛のフォートを撮ることを意味しているのかも知れない。

「梨花悠紀子も、そうだったよ——」

「おかしい顔だって、いていたんでしょ。きっと……。」

「素顔の可憐さが、すっかり消されているって言ってたよ」

トランジスタ娘、水本茂美は一寸情なそうに瞳を伏せた。それから思い切ったように、部屋の備え付けの鏡に向うと丹念な化粧にかかった。

始めて水本茂美を撮ってから、恰度二十日許り経過していた。彼女の勤める水産会社がコレラ騒動のとはっちりで、テンヤワンヤの大騒ぎをしたので、彼女もおちおちと余暇が見出せなかった。世間を恐怖の渦に巻きこんだコレラも防疫対策が早くて、大阪は無事と分って、彼女の会社も、どうやら生気を取り

戻したらしく、可成りの損害は蒙ったが、ボツボツ取引が始まり出したと、彼女は部屋とは凡そ場違いな話を暫らく語った。勤めて日の浅い彼女であるが、会社存亡の秋となると、一女事務員と雖も他人事ではないらしい。

コレラの話も上の空で、私は今日の構成を頭に色々描いていた。梨花悠紀子は如何なる緊縛にも堪えたが、彼女は果して、私の緊縛に堪え得る素質を具備しているだろうか――。旅館での緊縛は、小道具に制約がある為、所詮、常套的な縛りに終始してしまい勝ちである。どんな縛り方を想起しても、その縛りが、何時かの日、モデルの誰かに実施した様な気がしてならないのである。

一人の女を様々に緊縛しても、辻村隆式となると、おのずから辻村好みとなって同巧異曲にならざるを得ない。私は彼女の被虐の限界を試すつもりで、最後に海老責めの縛りをやってみることにした。

『濡れぬ先こそ露をもいといえ』と云う言葉はあたかも緊縛のモデルの為につくられたような格言である。

既に緊縛の第一段階を辿った彼女は、私のカメラの支度が出来終るのを待ち兼ねるよう

にして、涼しげなワンピースをスルスルとぬぎ、ブラジャーを外して、部屋の隅で待機の姿勢にあった。

稍、乱暴げに、くるくると長い髪を巻き上げた黒眼勝ちの彼女のフェイスは、凡そ第一目とは似ても似つかぬ別人の如くに変貌していた。矢張り女は、自分に最もよく似合う、化粧を心得えているものである。私はその新鮮さに眼をみはる思いで、バッグの縄をするすると数条とり出した。

平然と彼女はそれを期待するかの様に、縄にややわばった視線を投げかけている。

「少々きついめに縛るけどいい?…」

「多分、我慢出来ると思うんですけど……」

私は彼女の言葉で、最後に試みる筈の海老縛りを、最初に試みたい衝動に駆られた。

縄をもって彼女の背後に廻ると、心得えたかの様に、彼女は少々日焼けした、健康色の小麦の両腕を後手に高々と組んだ。



高手小手に後手に縛ると、その縄を首へ吊り上げて前へ廻し、胸を犇々としめ上げた。両脚を座禅のように組ませ、脚首を縛った

上、上体をぐっと力強く押えつけて跼ませると、脚の縄を肩から背へと廻し、強くしめつけて、ぎりぎりど海老縛りにする。

軽く彼女は「ウーン」と声を立てた様だった。私は委細構わず、更にしめつけて、海老縛りを終った。

前後左右から、更に横に転がし、後に倒し、私は海老責めの姿態を、さまざまの角度からカメラに納めた。

四五分は経過したろうか——。水本茂美の呼吸は少し乱れていた。うっすら額に冷めた汗が沁んでいる。私はそっと後手の縄に触れて見た。縄は強く、一ミリのすき間もなく腕首に深々と喰い込んで、両手指の先は冷めたく、既に感覚を失なっているように思われた。

私は脚と首を連結する縄を解いた。上体が伸びて、彼女は海老縛りの姿から解放されたが、両手、両脚はその儘に縛ってあった。

「苦しかった?……」

「ええ、少し……胸がむかついてきたわ」

「この儘、もう少し縛っておこうか——」

「お好きな様に……」

「フーン、じゃあ、解くのが面倒だから、もう少し縛った儘にしておくよ。何だか縛られて

ているのが好きなようだね」

「ええ、好きだわ」

水本茂美は、私の顔を凝視して、判っきり答えた。頬が紅潮して、アイラインの奥から瞳孔がキラキラと輝きを帯びてくる。

「好き——、そうかね。じゃあ、今日はうんと縛ってやるぞ……」

「辻村さんの好きな様にして頂戴——。お尻をぶつてもいいわ——。吊ったって構わないわ。きつく縛って部屋中引曳り廻された方がいいわ。若し辛抱出来ずに悲鳴あげたら、口の中に手拭を押しこんで、思いつききつく猿轡したっていいわ。もっと縛って……」

急に堰を切ったように、ヒステリックに水本茂美はうわ言のように叫んだ。

臉が赤くうるんで、口を半ば軽く開いて喘ぎ喘ぎ、彼女は尚も口走った。

打って変った妖しい雰囲気、ヒタヒタと部屋中に充満した。

今迄の数多くのモデルに接した中で、この様な積極的な挑戦をした娘は、水本茂美が最初であった。服を纏い、化粧を落せば、一見実に平凡なBGに過ぎぬ彼女の、どこにこうした魔性がひそんでいるのであろうか——。今にして思えば、梨花悠紀子との最初の出

会いの時からして、水本茂美の方が常に能動的であり、イニシャティブを握っていた。

云う迄もなく、私に近づくにしても、彼女は常に積極的に、自ら進んで、こうした世界に足を踏み入れ様としていたのだった。

△この女は、飼育する迄もなく、飼育されてくたうずうずしているんだ。手間が省けると云えばそれ迄だが、寧ろ彼女は、単なるモデルには飽き足らず、奇巧の小説の世界に耽溺しようとしているのだ。自分がヒロインになりたがって、願ってもない偶然が、この女をして有頂天にしているに違いない。単にモデルとして扱うべきか——。私自身、水本茂美とMSのプレイに耽溺すべきか——。既に骰子は投げられて女は身を投げ出している……

私は何故ともなく困惑した。常にこうしたチャンス願っている癖に、いざ目前に身を投げ出した女性自身の姿を見ると、年配の倫理が我にもなく、前後不覚の動作を鈍らせて仕舞うのである。

からくも私は理性を保った。心の奥底まで見透すような、ギラギラした灼熱の茂美の視線を避けて、私は事態を外らそうと努めた。

「両手が痛いだろう。解いてやるよ——」

「痛くない! もっとこの儘にして……」

私は弾きかえされた。

「一対一だから不可ないのだ。そうだ塚本君を呼んでやろう。塚本君よおってくれ……」
私は突嗟に塚本鉄三の喜ぶ顔を思い浮べ、一つの案をさりげなく、しかし言葉は如何にも嗜虐的に切り出した。

「よし——その儘にしておこう。併し一旦君が言い出したからには俺も男だ。泣き出したって解いてやらないぞ。そこでだ。その縛られた裸の姿を、誰かに見せてやるから、そう思え」水本茂美はビクリとした。

「厭よー、人に見せるなんて、死んでも厭だわ——」

「駄目だ。先刻何と云った。辻村さんの好きな様にして頂戴って、云ったじゃないか。俺は第三者の見ている前で、君を思う存分縛り上げて、ヒイヒイ悲鳴をあげさすのが好きなんだ。厭だと云っても、ギリギリ猿轡をはめて、君がウンと云うまで、この革バンドで、お望み通り、ビシビシなぐりつけるが、それでもいいか——」

彼女は、急におびえた弱い瞳になった。おどおどと私を見上げると、蚊のなく様な声で、「でも私、辻村さんと二人っきりで、いつ迄もこうしたいんです。外の人がくると、

甘えられないんですもの……」

彼女が云う迄もない。その本音を私は直感していた。二人でプレイしたい彼女の気持ちを敢て避けようと、私は柄になく荒い言葉を吐いているのに、雰囲気は馴れぬ、可愛い小鳩は、私の見事に恐れをなして、未知の世界の期待と失望と羞恥に身を悶えている。

私は彼女の言葉を無視して奇巧の編集室へ電話した。運よく塚本君は現像所に廻って、現像済みのフィルムを持参して数分前現われたところだった。

「水本茂美とS荘に居るんだけど、すぐ来ない？」

「邪魔じゃないのかい——」

「邪魔をして欲しいのさ……」

「して欲しい？何だか変だぜ……」

「話はその時だ……。何分で来られるー？」

「さあネ、免も角暑いし、裸になったところだが、大急ぎで、飛ばしても、S荘なら二十分はかかるよ。」

「いいよ。すぐ撮れる様に、縛っておくよ」

私は水本茂美が全神経を耳にしているのを察して、言葉少なに電話をきった。

縄をといた途端、あられもなく抱きつかれたら始末に困る。と云って、既に茂美の両掌

は白く色が変わっている。

私は両足をその儘にして、ゆるゆると時間をかけて、彼女の両手首の縄をゆるめた。

「本当に来るのネ」

彼女は恨めしそうに私をにらんだ。

「ああ、私よりも、もっと縛りも上手、写真も上手、口説くのも上手、例の雑誌の塚本君がね……」

「何だか急に腕が痛くなって来たわ。解いて下さる？」

がっかりした表情で、おこりがおちた様に茂美は云った。急に痛みを感じた茂美の気持が、私にも分り過ぎる程分った。

女が激しい被虐の世界に没入して、苦痛が快楽と転換している無我の境地の時には、我にもあらず私は冷静に、自分を判断している。併し、女が一旦昂奮からさめて冷静に帰ると、私は女を再び、忘我の境地へと追いやらねばならない。

私は長年の経験から、女の理性をしびれさせるような行動に出て、行きつくところまで行きついた時、その後に来る虐無の空白が、女に激しい悔恨と、汚辱の爪跡を残して、再び私の前に現われない苦い経験を、幾度か味わっていた。茂美にしても、何時かは、何事

もなく、単なるモデルとして終った事に対する安堵の念を抱くに違いない事を私は信じていた。

何事もなかったからこそ、梨花悠紀子でも、東浦ひかるでも、竹野ひろ子でも、快い想い出のアルバムの一頁として、私に好意をもって、今もこうして交際して行けるのではなからうか。私は水本茂美も失ないたくなかったから、腹八分目の、男として相当つらい据膳を食う立場を敢えて拒否しようとしたのである。

後手の縄をとき乍ら、私はさりげなく、彼女の手をぐっと握りしめた。反応は忽ち強く私の手に還って来た。

縛った儘で、そっと肩を抱いて引き寄せると、彼女は為すが儘に凭れかかって来た。

激しい鼓動が手にとる様にきこえる。

唇が微かに合う。ここ迄が私に許された限界であ

る。冷房完備とは云え、茂美の素肌は熱っぽく汗に濡れていた。

二人で交された囁き……。それは余りにも私達二人のプライバシーの問題だから触れずにおこう。たわ言も睦言も、すべて、塚本君を待つ間のひとときの戯れと云えば、これは余りにも残酷かも知れない。

フト、腕時計を見ると、もう五分もすれば

予定なれば彼は到着する筈である。

私によりかかった茂美の体を起して、私は改めて縄を手にして引絞った。

「縛るよ。いいねー」

「……………」

茂美はうるんだ眼で私を見やって、無言でうなづいた。しばしのひとときが、燃えた茂美を満足させたのかも知れない。

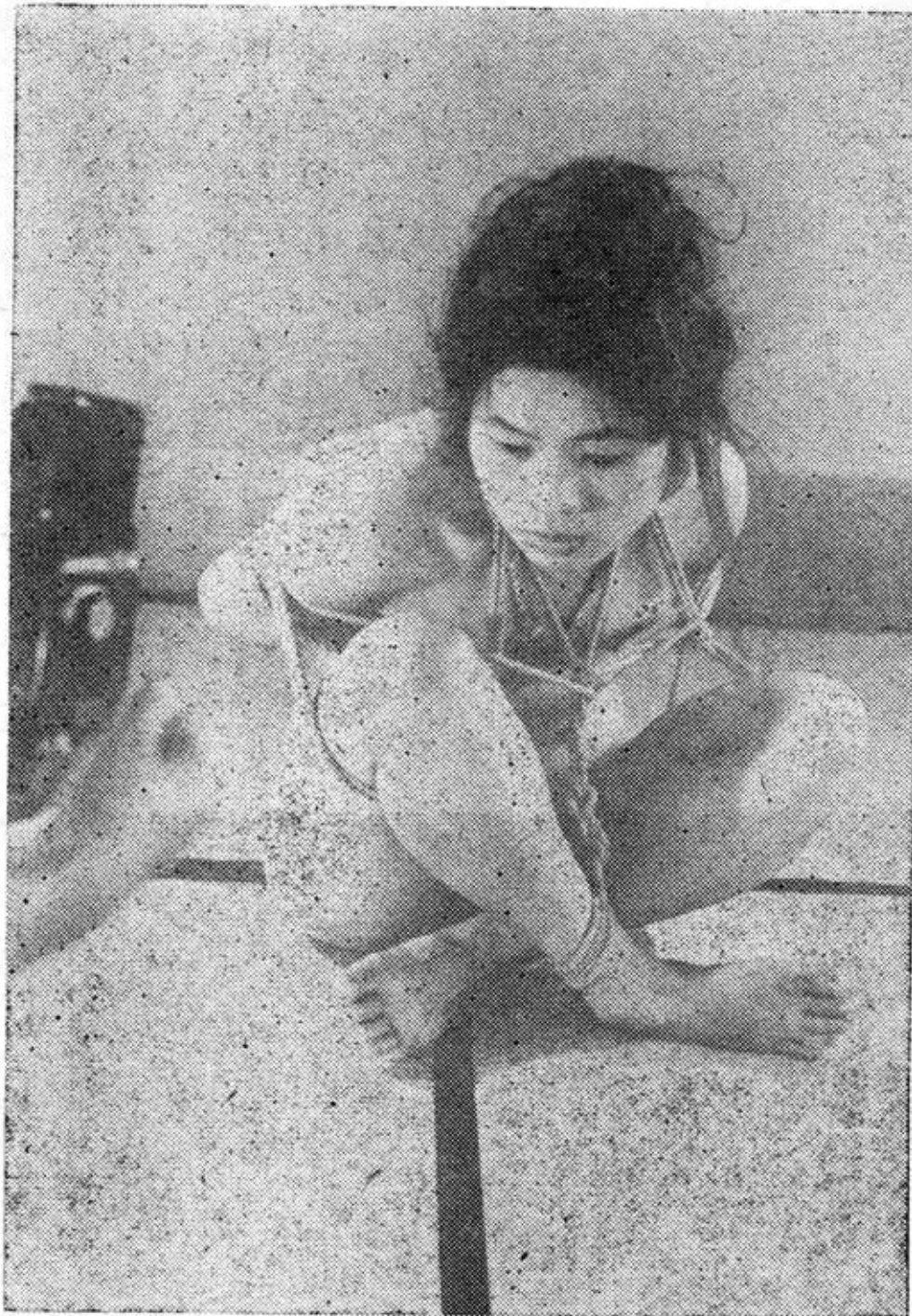
私は最初縛った通りに、再び彼女を海老縛りに犇々と縛り終った。

縄尻で、軽く、茂美の体をビシヤリと打つと、うーフとうめいて、彼女はゴロリと横転した。慌てて私は起してやる。

「痛かったのー」

「好きだわ……」

茂美は全然見当違いの返事をした。縛られるのが好きか、私が好きなのか、どちらともとれる言葉であるが、或いはそのどちらもが好きと云うのが、茂美の本心かも知れない。



その時、床の間の受話器が鳴った。

とり上げると帳場からである。お連れさまが来られたが通してよいかとの問い合せであった。

勿論塚本君に違いない。私は諾と応えて、この間のバッグやコードをかき集め、縛られた茂美の転っている奥の間に片附けて、唐紙を引いた。待つ間もなく、扉がノックされ、女中が顔を覗かせ、後ろから、陽に灼けて精悍な顔つきの塚本君が、鼻の頭に丸い玉の汗を浮べてあわただしく這入って来た。余程急いで来たのか、ホンコンシャツの両肩辺りに汗がベットリとにじんでいる。

女中が去ると、私は彼の耳許で今日の顚末を囁やいた。

「あんたらしくもない——と云って、そこがええとこやな……」

彼は私の肩をひとつどやすと、ガラリと唐紙を開けた。裸の茂美がそこに海老縛りになって顔を伏せていた。心なしか顔色が蒼い。

「ウーン、いかすな……」

塚本君は感嘆の呟きを吐くと、バッグの中から、ミヤフレックスをとり出し、ものも云わず、数枚パチパチと撮った。シャッターの音につれて、カコのストロボが曳光を放つ

た。

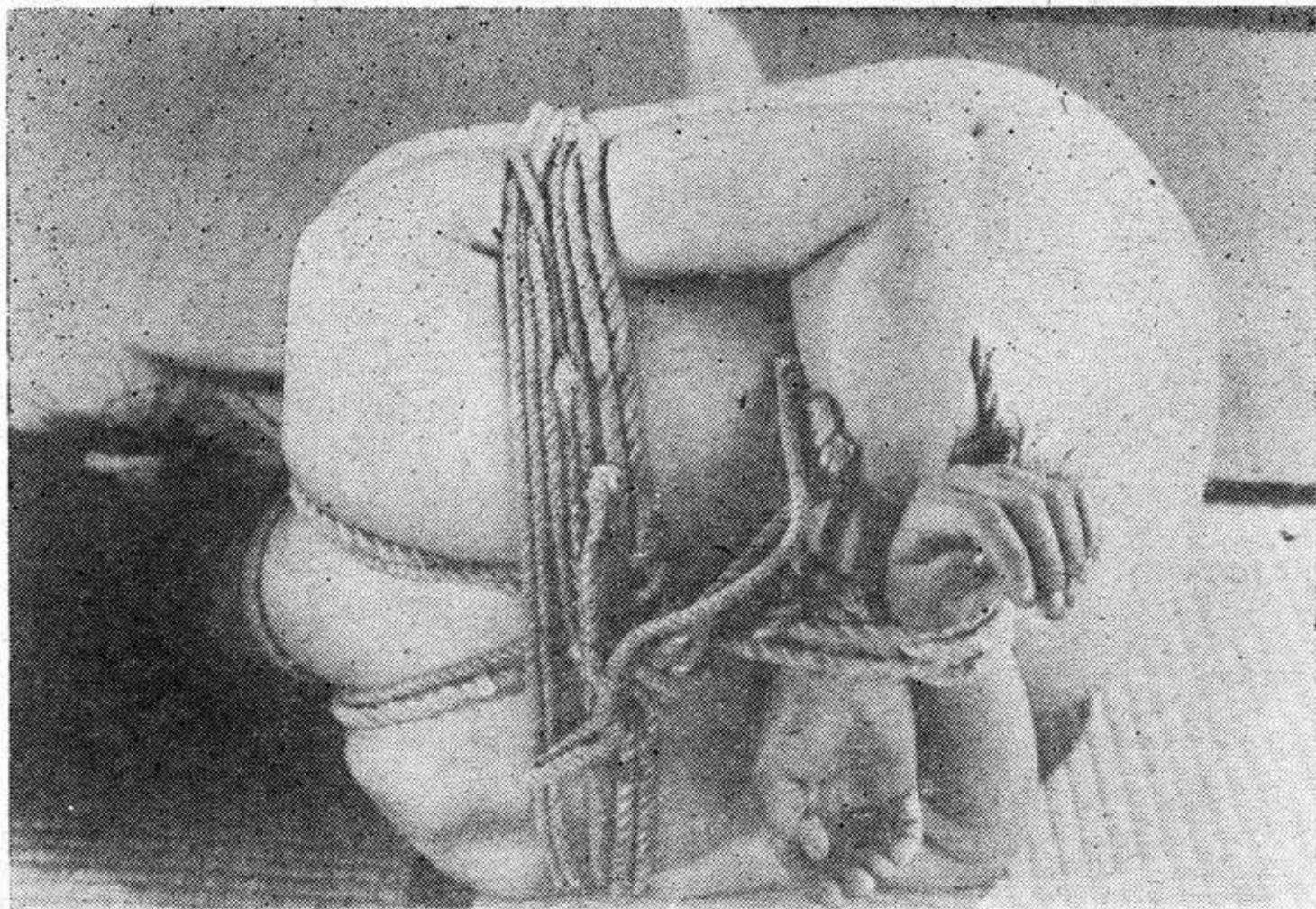
精神的に私はすっかり草臥れていた。精力的な塚本君は、水本茂美をまるで品物でも扱うように手を変え、品を変えて縛っては、シャッターをきった。

私は放心したようにそれを見守っている。それは既に傍観者の立場に過ぎなかった。

私は梨花悠紀子がそうである様に、竹野ひろ子もそうであったし、今又、水本茂美をも心ならずも（と云うと箕田氏に悪いが）塚本君に紹介してしまった。

新人を期待されている本誌のグラビヤ誌上に、水本茂美が登場するのは間違いない事実である。

そして、過去の女達の誰もがそうであった様に、水本茂美も又、総て精力的な名カメラマン塚本君に圧倒されて、易々諾々と彼の命ずるが儘に



水本茂美のエビ責めポーズ

笑い、眉をしかめ、泣き、苦しみ、悶え、数々の縄の練磨に鍛え上げ、磨かれて行く事であらう。

彼女は塚本君に縛られる間にも、チラチラと私を盗み視した。さもその無氣力を嘲笑う様にも見え、又、私の非情を恨んでいるかの様にもとれた。

私に見せた、被虐の愉悦は茂美の顔から消え失せ、云われるが儘に縛られる茂美には、既にモデルめいた諦感の面持に変わっていた。

早々と四本ばかりのフィルムを費消し、一向に冴えぬ私に、塚本君はわざと無頓着を装おって、

「どう、これぐらいでよそうか——大分僕も疲れたよ——」

「そうだね——、じゃあ……」

私は茂美に眼配せした。クリンシンで、さらさらと顔の化粧を落すと、茂美は元のBGスタイルの平凡な娘姿に還元した。

私に身を投げ出して来た茂美の魔性は、その姿からは一片だに見出せなかった。

唯、緊縛の名残りの縄跡が、夏服からむき出された両腕、両手首、両脚首に、いともあざやかにくっきりと、痕跡を留めていた。

恐らく数時間はとれないだろう。

S 荘を出ると、塚本君はいともあっさりと手をあげて、私達二人を残して、車を拾って去った。いつも乍ら、カラツと割り切った彼の心憎い許りの別れ際である。

水本茂美の年も聞かねば、所も聞かない。勿論仕事の点なんか我れ関せず、撮るだけとれば用事がない、後はすべて辻村に任せておけと云った奴の態度に、水本茂美も流石に飽気にとられて、ポカンと車の後を見送っていた。

「さばさばした方ね——」

ポソリと茂美が呟やいた。

「逆海老、おしめカバー、後手足吊りと、仲々やっていたじゃないか——」

「今更、何云ってるの——。知らぬ顔して……」

「奴を呼んだのが気に入らないの——」

「知ってるくせに……。でも、塚本さんて方がいい人だわ。貴方の方がずるいわ、ずっと」

「あの術で、モデルになる娘は、いつか皆、奴に惹かれて行くんだよ——」

水本茂美は黙って、茜空を仰いだ。

「野球見ないこと——。甲子園で巨神戦やってるわ——」

「間に合うの——」

「七時からよ、充分だわ。私阪神タイガースのファンよ。凄いじゃない。きっと優勝よ」生々して茂美は私をしきりに巨神戦に誘った。既に茂美には被虐に耽溺した、先刻のあの憑かれた表情のカケラもない。

△プレミアムつきの内野席が一五〇〇円として二人で三〇〇〇円。此奴、帰りがけの駄賃にねだる気だな。数万の人の浪にもまれに行くか——▽

私は懐勘定し乍ら、先に歩くトランジスタ娘に惹かれて、カメラの入った重いバッグを、えんこらさとかけ直して、うんざりしていた。

△辻村隆はフェミニスト過ぎるぜと、塚本君はよく云うけど、俺は矢張り女には甘く出来ているらしい。▽

私は二三歩先を行く、水本茂美の手足にくっきりと残る縄跡に、冷々する気持で眼を集めた。そんなことには一向お構いなく、彼女は堂々と、縄跡の両手足を夕陽に曝して、暮れなずむ河畔でしきりに車を漁って手を挙げていた。

ひぐらしの聲がひとしきり耳をつく。暑さももうここ暫らくの事であらう。

△S体験記▽

白い襟足の誘惑

柿 沼 紅 二 朗

美しい、何というすっきりした襟足なんだろうー。国電の中で、吊革越しに麗人の横顔をそッとぬすみ見る、思わず出る溜め息。

言葉かける事さえ不可能と知りながら麗人のあとを追ってホームから階段へ、そして出口の雑踏の中に、その後ろ姿を見失った時の胸の淋しさは、もう何とも言いようがないのです。あの白い襟足が幾日も幾日も網膜に焼きついたまま離れない。それに向って私の妄想は夜となく昼となく執拗に浅ましい牙をむき淫虐の爪をかき立てるのです。

振りあげる鞭の下、輾転と苦悶しつづける美しい女体、氣息奄々遂に悶絶してぐったり

となるのを愉悦にむせびながら抱き上げる。

女のすき透るような白いうなじに接吻の雨をそそぐ。こうした光景を心に描きながら、私は手の先にすべ／＼した肌の感触を味い、それが最早自分自身の肌ではなく、全く女性となりきった筋肉の柔軟さと血の温みとを以て私の官能をゆさぶり初めると、もう堪らなくなるのでした。深夜の寒床から犬のような格好で這い出し、何か鞭に代るもの、何でもいいこの肌を通じて苦痛を興えるもの、はつきり言うなら、突かれた皮膚が充血して少しは血がにじむ程度の、だから刃物でなく棒切れのようなもの。私はそれを見つけ出し、妖気

ただよう床の中で一人二役の悩ましい実演をやるのでした。

然し此のあわれむべき私にも神は機会を恵んでくれたのです。幻想ではありません、現実に私の求める相手が現れたのでした。十七才の可憐な乙女ですが、美貌の上に稍小柄ながら、よく均整のとれた肢体、春の淡雪のようにほの白い肌、全体として見た時に魅力が又一倍で、私の好みにそっくりと言いたいのです。何うして此の美しい少女が私と知り合うようになったか、考えようによつては、これはただの偶然ではなくて、私の悲願とでも言いましようか、幻想に出てくる幾人かの女

性にまつわる執念が、強い／＼引力となって目に覚えぬ相手に通じたとも思われるのです。念々実を生ず——斯ういった例は世間にもよくある話ではないでしょうか。

その頃、失業同然であった私は、猫の額ほどの家庭菜園をいじるのが毎日の仕事でしたが、もう倦怠期も過ぎた夫婦二人きりの味気ない生活、来客でもなければ隣家へ出かけ閑談に時を過すのが常でした。菜園の向う側に製パン工場があり、高度の電熱器を使うために丁度地所の境目に立てた電柱には、三十キロのトランスが乗っているのですが、此の柱を立てる時に私の方の庭木を一本引抜くことになったのが縁で、私と工場主西山氏とは懇親の間柄になりました。

山中紀美江——実はこの少女なのです。パン工場で働く数人の女工員の中に、美貌の彼女を見出した私が特に関心を寄せたことは勿論ですが、まだ十七才とはいえ、何うしてこんな所へ就職したのか判断が付きません。何となく可哀

そうな気がして、私は西山氏に訊ねました。

「あの山中紀美江という娘さんね、女工さん

にはちよっと惜しいじゃないですか」

すると、その答えが意外なのです。

「まだ御存じないですか、あの娘は不具者な

んですよ」

「不具者？」

「そうです、左足がちよっと短かいんです。

と言っても歩くのを見ると、そんなに目立たないんですがね、それでパンの秤量という立

ち仕事なら無難だというわけで、使う事にしたのです。交換手を志望したそうですが、採用されなかったそうです。全く惜しいには違いないが」

不具者とは知らなかった。それにしても、もっとましな仕事が見つからないのであろうか、私はその点にも妙に心を惹かれて、本人の身の上に就き顔なじみの女工員いきいてみると、彼女の家は父母と七人の兄妹があり、生活が楽でないという、それに不具の状態について知ったことは、彼女のは関節の障害でなく左右の均衡がとれないというだけで、外見は勿論、立ったり座ったりするにも異状なく、歩く時に左肩が少し下るのでそれとわかる程度なものでした。

当時は残暑まだ衰えぬ八月末で



したから、工場内はパン窯の熱気に満ち、工員達に皆汗だく／＼で、休憩時間になると白い作業帽にエプロンという女工員達にまじって、同じ作業衣の山中紀美江が裏から私の菜園辺りにその美しい顔を見せるのでした。日蔭の涼風を求めて毎日彼女達は（男工員も）やってくるのですが、時には菜園を抜け、縁先のブドウ棚の下まで来て私や妻を相手に話し興ずることも珍らしくはないので、紀美江も来る毎に親しくなり何時からともなく、おじさん、おばさんと呼びかける程になったのです。

十月に入って、その製パン工場で突如として労働争議が起りました。勿論小企業ですが昼夜二部制なので従業員も三十何人という数ですから軽視出来ない。そのストの三日目の出来事でした。西山社長の命をうけ、女工員三人が直営販売店との連絡業務に従事したというかどで、男工員十数名につるしあげられるという事件が起りました。山中紀美江がその中の一人であったことは、新顔であり従順でもあったからで、男工員のために散々小突き廻され、エプロンや下着まで引き破られてしまった彼女は私の家に駆けこんで来ました。「おじさん、とう／＼やられちゃったの」

と訴えるのでした。

「そんな事も起りそうだと思ったから、昨日も注意したのに――」

「でも、出ないわけにはいかないわ」

涙で頬が少しよごれている。それよりも着衣を破られた無残に露出した右肩から胸の方まで、赤く腫れあがったように見え、肩の一部はすりむけて血がにじんでいるのです。妻が応急の手当をしてやる傍らで、私はその時の有様をおもしろく話しかせる彼女の無邪気さに、親子のようなほほえましい愛情を覚えるのでした。

「おじさん、あたし、明日も出てくるわ、悪いかしら？」

「さあ、何うかなア」と受けとめて、妻の方へ視線を向けると、

「紀美ちゃん、およしになったら何う、社長さんに話して何とか落ち着くまでは――」

「だっておばさん、もしクビになったら私、困るわ」

それを聴いて私は頭の中で、十人近い家族が雑居している光景をチラリと想像してみたのですが、同時に紀美江が鉄拳の制裁を惧れないばかりか、寧ろ興味をさえ示している様子に、若しかしたら先天的にマゾ傾向をもっ

ているのではないかと推察したのでした。

「あした又やられるよ、もっと酷いぞ」

「かまわないわ」

「ははは、紀美ちゃんは痛い目に遇うのが好きらしいな」

「あら、違うわよ、おじさん」

あわてる口調、顔が赤らんだところを見ると、内心では私の言葉を肯定している、あの傾向は多分にあるらしい、手を取ればマゾ的誘導に乗ってくる可能性がある――。私はやっとな獲物を見つけたと言いたい悦びを胸のうちに感じながら、機会があれば一度試してみたいと思いました。此の実験は数日後にやってみましたが、果して私の予期した通りでした。

紀美江は見せられた緊縛雑誌を、初めのページからもう眼をかがやかせ、じっと口絵写真に見入りながら早くも耳の根を赤くしているのです。まだ子供っぽいワンピースを着た彼女は籐椅子に身を置き、秋めく庭の涼風をうけながら、あたりに夕闇の迫るのも忘れた如く、ページを繰るごとに深い溜め息をもらすのでした。

「紀美ちゃん、その位にしてお帰り、あとは明晩のおたのしみ、しかし何うだね、読んだ

「気持は——」

「何だか、こわいようね」

「それから？」

「あとは言えないわ」

「ははは、言うなれば、恥かしいんだね」

「知らないッ」

「おじさんの若い頃は、こんな面白い雑誌は無かった、だから知らずに過ぎてしまった、考えると残念でたまらないね」

「でも、こんな事、ほんとにあるの？」

「あるから作者は書いたのだろうね」

「おや／＼今度はこっちの番だね、知らないッて答えようか」

「あら、意地わる、もうきかないわ」

これで打診は十分です。私はい／＼有望だなと思い、それから機会あるごとに同種の雑誌を見せてやり、或る時は秘蔵の責め絵を一枚だけ紙の間に挿入し、それとなく盗み見させることによって、彼女のマゾ的本能を揺すぶり起すのでした。ここまで来れば、もう長々と其後の経過を記するまでもありません。紀美江は勤めの帰りに妻の居ない時などは茶の間に上り込んで、マゾ的な話をきいたり、戯むれに姿見の前であの責め絵にあるような悩ましいポーズをつくって見せたり、あ

る時は夢を追うような瞳で空間をみつめたりして、急速に、私のアイデアに近づいて来たのです。

妻は到底私の性癖に共鳴出来る女でなく、それが私の歪んだ慾望に不満の度を加えるのですが、同時にこの様な悩みや焦燥を妻が感知することを恐れ、私はどんなに細かく気を配ったことか。雑誌のページを開くのさえ油断が出来なかったのです。尚、紀美江に対しても妻の居る時だけは、こういった話をするのを差控えなければならぬ、斯う言った苦心が酬いられたというか、漸く待つて居た機会がおとずれました。

妻が田舎へ行く事になったのです。実家の亡父七年忌の法事でその途次、親戚を訪ねるから二泊か三泊、しかも都合のいいことには出かけて二日目はパン工場が電休で、休日なのでした。紀美江が前日の夕方、勤めが終るや否や私の家へやって来たことは言うまでもありません。髪はおかっぱ、ピンクのセーターを着し紫がかった紺のスカート、何う見ても高校生です。

「何うしたい、お許しが出たの？」

「ええオーケーよ、お母あさんに話したの、おじさんやおばさんの事、前から知ってるか

ら家では安心して居るのよ、あたし、今夜泊れる、うれしいわ」

「よかった、しかし、おばさんが居ないということは？」

「話したわ」

「母あさん、何とか言ったかい？」

「ええ言ったけど、何でもないことなの」

「おじさんは、どんな人だと聞いたろう」

「そう云わなかったわ」

「じゃ、何と云った？」

「何でもなかったのよ、いや！そんなこと訊かないで——」

少し羞恥の色を見せる、兎に角母親の許しを得たことは本当らしい。今夜は来客の予想もないし、いよいよ待望の日頃の夢を実現することが出来そうだと。思いながら私は、早くからわかっておいた風呂に飛び込んで悠々とヒゲを剃り、鏡の中で得意の微笑をうかべるのでした。

甲斐々々しく、食事の支度にとりかかる紀美江。妻が居ないから大かたは缶詰料理ですが、今迄に幾度か夕食を共にし、また手伝わせた事もあるので、今度紀美江に来てもらう事には、妻もあっさりと同意してくれたのです。それも泊り込みという条件は、まあ不可

能だろうときめて――。

食事の用意が出来、紀美江が風呂に入る。私は丹前を着てラジオのスイッチをひねる。しかし耳で聴くだけで頭には入らない。勿論これからの事を思いめぐらして居るのです。いつの間にか、風呂から上った紀美江がもとの通りちゃんと上着までつけ、鏡台の前に座りました。娘向きの浴衣がないので、それも仕方がないが――。

「クリームや何か、使ってもいいよ」

「ほんと？おばさんに叱られないかしら」

湯上りで生き生きと美しくなった頬、それがいかにも嬉しそうでした。

「いい匂いね、これ随分高いんでしょ」

「白粉もつけてごらん」

「白粉なんて、はずかしいわ」

彼女の胸は、広々とした部屋でゆっくり寝ることの楽しさで風船玉のようにふくらんでいるのです。



「紀美ちゃん、今夜は開放されるんだね、しかし独りで寝られるかい？」

「たのしいわ、一人で一枚のお蒲団に寝るなんて、あたし今夜はお嬢さま」

「おばさんの寝巻、着せてやろうか」

「いやよ、あたし、まだお母あさんじゃなくてよ」

赧くなって、ちょっと舌を出して見せる。

その様な少女らしい媚態に、私はいきなり抱

きよせたい衝動を覚えるのでした。元来、酒はあまりいけない口ですが、此夜のブドウ酒の二三杯は程よい気持で、紀美江と楽しい食事がすむともう九時近い、あとは床を敷き、戸締りをするだけです。それを二人がかりでやってしまふと、紀美江は電蓄をかけ始めました。

水色のワルツ、静かに流れるメロデー、何故か知らないが、彼女はいつも此の曲をかけたがるのです。電蓄の上に紙に挿んでおいたあの責め絵を、彼女はそっと見た様でした。それから私達は何をしたろうか、いや何ということもない、音楽をききながら話したり、笑ったりして、時のたつのを知らなかったのです。

「さあ寝よう、寝てから又面白い本でも見て――」

「あら、うれしい！」

二ツ並べて、とは言っても間をずッと引離

して敷いた床でした。電灯を十ワットに切りかえたが、夜更けの故かまだ明るい。私が寝巻になると、紀美江は私の見ている正面で上着を脱ぎ始め、スカートも靴下も手早く脱ぎ捨てると共に遂にシュミーズ一枚になってしまったのです。はッと息を引いて、思わず目を丸くしたことです。これで私の意図が暗黙のうちに通じている事がわかったのです。

彼女は蒲団の上に転がり、嬉々として掛ぶとんを捲ったり、仰向きに寝てみたりするのです。私は次の室から用意の木綿繩と手製の革ムチを持ち出して来ました。

「さあ、縛るぞ」

「いやッ」

はずむような叫びです、そして飛びのいたところを抑さえつける。いやよ、いやよと言いながら抵抗するのが本気でないことを知ると私は遮二無二押し伏せてしまい、易々とうしろ手に縛りあげ、足も膝から下をぐるぐる巻きムチを手にして立ち上りました。すると睫毛の美しい眼がにっこりと笑うのです。胡蝶のように身を伏せるのへ、ピシリ、肩から背へかけて一撃！あッという小さな叫び、その一瞬、私の悲願成就を祝福して、Sの悪魔が手をたたき、よくやった、よくやったと。

ああこの快心の一打、紀美江は遂に鞭の洗礼をうけたのだ、胸をふるわす悦虐の興奮！

私は再びムチをふりあげました。今度はつづけさまに二ツ、三ツと更に力をこめてもう一と鞭！紀美江は細い悲鳴をあげてのけぞりながら横転、肩に波を打たせて、はげしい息づかい、眉根をよせて歯をくいしばり、長い睫毛からポロリと涙がこぼれ落ちる。可憐な少女の見るも悩ましい被虐の表情——私はそれを眼の前においてしばらくは恍惚と、悪魔のような凝視をつづけるのでした。

夜ももう九時を過ぎると此の辺はひっそりとして、隣家も隔っているので、ここでは泣いても叫んでも、何の気づかいも要らないのです。実を言うと私のアイデアは、苦悶する被虐者の表情を見たいのです。悲鳴や呻めき声をききたいのです。だから猿ぐつわは私の好みでなく、縛るにしてもあまり技巧は用いたくないのです。とはいえ紀美江が私の思い通りになってくれるか何うかは未知数だしそれに傷つけてはならない他人の娘、何をやるにも限界があるのは云うまでもありません。

——やがて、

「紀美ちゃん」

顔を近づけそっと呼んでみると、彼女はし

ずかに瞼を開いて

「起して」

苦痛が遠のいたか呼吸もゆるやかに、もう元に返った顔色、上半身を抱き起してやるとそのまま私の方へもたれかかって、早くも明るい微笑を見せる。

「何うだった？最初からひどく打ちすえて悪かったね」

「びっくりしたわ、いきなり縛るなんて」

「でも、だしぬけの方が面白いよ」

「こわいわ、今度は何をやるの？」

私の心の中を覗くように、それは恐怖ではなくて好奇心に燃える眼差しです。

「ははは、今のつづきだよ、続きでも今度はもっと厳しいよ」

「いいわ、もうわかったから、もっともっと打ってよ」

「そうだ、テストは済んだからね。では本番にとりかかろうか」

「ええ早くしてよ、今度はあの絵の様にするんでしょ」

「うむ、あの絵を見て、紀美ちゃんは何う思う？」

「何だかこいわ、でもおじさんは、あの絵の様にしたいんでしょ、きつとそうだわ」

「さあ、何うかなあ、出来ればね——」
「いいわ、おじさんのしたい通りになるわ、だから、早く脱がして」

脱がしてとは、勿論シュミーズに外ならぬ。さてはあの絵の通り裸体になるつもりなのだろう。それを自身望んでいるのだろうか、いや、私から必ず要求されると思い込んでいるのだ。まだ蕾もふくらんだばかりの身を、父親の手に抱かれた時のような甘い甘い情感に浸らせて、媚びとも慇懃ともつかぬ此の「脱がして」という一語は、私の苛責とを甘んじて受けようとする、可憐な要求でなくして何であろう。自分で脱がないで、私の手にゆだねようとするのは、その氣持の現われではないか。

私は手の縄を解いてやり、シュミーズを脱がせました。えもいわれぬ素肌の香りと共に、白バラを思わせるヴィナスの顕現！

「はずかしいわ」
と打つ伏しながら、両手で乳房をかくしてしまう。肩から背のあたり、まだムチのあとが淡らいた虹の如くわずかに残っている。

「だめだめ、さあ、お手々を出して」
あの絵の通り、両手を頭の上の方で交叉させ縛ろうとしたのですが、この時初めて露出

した二の腕の下に、春風にそよぐ様な幾すじかの腋毛——。

「紀美ちゃん、きれいな肌じゃないか、恥かしいどころか、とても素晴らしいよ」

「でも、あたしこんな身体、いらないわ」
こんな身体！電撃のようなその一句が、私の胸をつきました。不具者——だが斯うしている紀美江のどこに、その様な欠陥が感じられようか。

「ばかだなあ、紀美ちゃんは、そんな風に考えてはいけないよ。女として大切なものは何一つ欠けていないじゃないか、それだけで充分なんだ、ね、そう思わないかい？」

「おじさん——」

彼女は泣き声になっていきなり振り向き、私の胸に顔をうずめてしまふのでした。泣きたいのをこらえ、じっと奥歯を噛みしめているのが分るようです。

「さあ、元気を出して」
軽く肩をたたいて引き起すと、ぬれている睫毛もいじらしく、ふり仰いで甘えるような微笑——。

「あたし、おじさんが好き！」
「どんな風に？」
「お父うさんよりも——」

「でも、お父うさんは、こんなに苛めやしないうだろう」

「違うのよ、おじさん、分ってるくせに」
私は笑い出して、

「では、今夜はその覚悟だね、よし、一晩じゅう苛めぬいてやる」

「いいわ、だから、あの絵のようにして！」
小声ではあるが、はっきりと、私の方を見てから静かにその臉を閉じてしまふ、全身を引き緊めてじつと羞恥をこらえる表情——。

無理ありません。処女の身で、いかに納得の上とはいええ、ここまで従順を示すには余程羞恥に耐える気で、齒をくいしばっていることでしょう。「あの絵のように」その一語で私は彼女が仰向きになったわけを知ったのですが、まさか、是れまで正直に組んで来るとは全く予期しなかったのです。

だが、今更酷だと思ったところで、私の氣持はもう押し戻すことが出来ない。悪魔が私の耳元で囁やいている、早くやれ、愚図愚図することは無い！而し私は突嗟に、一ツの工夫を考えねばならなかったのです。

「ちょっと待った」
手早く搔卷を取って紀美江にかけてやり別室から私は何も持ち出して来たか、それは高

さ二尺余りの丸テーブルです。此の上に座ぶとんと三枚重ね、まん中に枕を置くと、紀美江を抱えて来て、腰の下に枕が当たる様に、仰向きのまま乗せてみたのです。すると足の先がぶら下がり、手は宙に浮いた格好で弓の様にのけぞると共に首は背後に屈折して、おかっぱの髪がふさふさと垂れ下がる、見るも痛々しい姿、まるで岩の上に打ちあげられた人魚のよう実にあの絵そっくりのポーズです。

しかし、此のままでは手の重みを支える肩が堪らない。もう一と工夫、その手の縛り目から長押の一方へ、細紐で吊ったのです。ポーズはこれで保てるわけですが、そうして眺めた時に私は又々恍惚境へ引込まれました。この生きている人魚は、もしも此のまま正視をつづけるならば、私はその悩ましさに堪えきれずして、気が狂い出すかも知れない——サッと頭の中を掠める危険信号！私はハッと我れに返ると共に鞭をとりあげました。

打つと同時に、ピタと肌に貼りついた様な感じで鞭が鳴る。前の時とは違って、何か肉感的なものが手に撥ね返って来る。胸から腹の方へかけて、二度、三度、更にもう一と鞭！打つ毎に、悲鳴に似た微かな叫びをきく。豊かに張りきった胸一面は見る見る血走って

大きく喘いでいる。

痛さを耐える眉間の表情、その長い睫毛から額の方へポロポロと涙が流れ落ちる。重心を奪われて自由のきかぬ身体、まるでひっくり返った亀の子のように、わずかに手足や首のあがぎを見せるだけ。だが此のあがきで、彼女が受ける残虐感益々苛烈を加えたことでしょう。しかし私は、鞭を持ったまま紀美江の耳元近く、口を寄せて囁くのでした。

「紀美ちゃん、我慢出来るかい？」

彼女は眼を開かず、苦悶の表情もゆるまなけれども、唇だけは動いて、

「苦しい、とても」

「やめようか」

「やめちゃいや、もっともつとよ」

「ほんとかい？ ではないね、続けるよ」

紀美江の身体を案じる一方、加虐の追求もまた急なのです。

数時間後——。

しずかに睡眠に入った紀美江の寝顔を見て先ずほっとしたもの、私の心は、まだ網膜に残る美しくもまた悩ましい光景を追って、悦楽の夢からさめきれないので。それと、彼女が私に示した可憐な仕草や言葉なども、そのまま胸の中に浮んでくるのでした。紀美

江は枕元の私を見あげて、やや力ない声で、

「おじさん、御免なさい」

と謝まるのです。

「紀美ちゃんが謝まることはないよ、おじさんが悪いのさ、つい夢中になってしまった」「そうじゃないわ、あたしいけなかったの、でも、あたしも夢中で叫んだのね、ほんとほっと打たれたいの」

私は笑い出して、

「なかなかの強気だね、おじさんの方が参るよ、それにしても泣くのもよく泣いたね、泣くから我慢出来るというわけかな」

「でも、しまいに泣けなくなっちゃったわ。」

その時が一番苦しかった」

「そこまで行けばいいのさ、痛いのが感じなくなる、その苦しみがつまり、いい気持なんだから、ねえ、そうなんだろう？」

「いや！ そんなこと訊かないで」

搔卷の襟で顔をかくそうとする、眼のふちを赧く染めて——。

身動きして、すっぱりと搔卷をかぶってしまふ。そこから生温かい肌の香りが、ふんわりと発散するのを、私はこころよく吸い込んだのでした。

その後——。

私と紀美江との間では恋愛とはいえない別の感情が二人を支配して居たようです。それは父親と娘といった様な愛情、本質的には加虐者对被虐者という立場から、相寄り相慕う心情に外ならないのですが、此の限界で紀美江を愛する事が最も無理がなく、又危険も

ないことを私は信じて居たのです。不具という弱味につけ込んで、彼女の純潔を冒そうとする気のないのは勿論、真の愛情を燃やす事の危険も知っている私は、紀美江を被虐者として愛するだけでも、満足出来るのでした。

終りに、それから三カ月程後、紀美江は私の知人の斡旋で、都内の或るスタジオにヌード・モデルとしてデビューしたという事を附加しておきます。

(完)

(映画通信)

女優の縛られ演技

南方佳男

四月から田舎へ転勤して映画と縁が切れてしまった。したがって私の創作材料もすっかり乏しくなった。

映画から遠ざかった証拠には、前任地で東映の「天草四郎時貞」を観てから後、つい最近、大映の「黒とかけ」を観たきりである。

田舎のせいで、私が兼ねがね観たいと思っていた「釈迦」「蒙古

の嵐」など七十ミリ映画は上映されない。松竹の「お吟さま」もまだ来ていない。ただ東映の「恋いや恋い、なすな恋い」は仕事が忙しく観落した。瑛峨三智子の櫛の前の弓責めシーンは、スチールをみると私の好みの責めのようなの

で残念である。

瑛峨三智子という女優さんは、嫌いな女優ではないのだが、どうも彼女の縛りシーンは実感がわかない。あれだけの演技力がありながら、マゾ性が強いのか、縛られシーンの表情は恍惚としていて、私のようなサド漢には何かもの足りないいらだたしい感じを与える。東映の千原しのぶなども同じ傾向がある。

これと反対なのが大映の近藤美恵子、中村玉緒、引退してしまつた大川恵子などだ。いかにも縛られていことがいやでくでたまらないという表情と、寸刻も縄目

から逃れようとするこまめな動きをみせるので実感がこもっているような印象を受ける。

もっと上手い人には、近ごろスクリーンから遠ざかっているようだが、東映の長谷川裕見子がいる。しいたげられた感じの縛られ方とか、反抗的な縛られ方とか、その役その役によって使いわけてみせる。この種の女優さんは非常に少ない。

演技力のある人でも、例えば木暮実千代などやはり役によって違った縛られ演技をみせてくれる。けれども長谷川裕見子のようにオバーに感じるほどの演技をしな

いので印象が弱いし、サラッとしか感じた。体格からして堂々としていて女性の弱々しさに欠けるところもマイナスしているのだから。

体つきがマイナスしている例は東映の丘さとみなども挙げられよう。芝居も上手く、よく縛られもしている。そのくせ傑作がない。

○ 演出者の指導力ということも、もちろん影響は大きい。

監督さんたちは、すでに承知していることだと思うが、私流に注文をつけたなら、可細い人と肥った人、寂しいマスクの人と明るい感じの人、これらそれぞれ違った面に応じた縛り方をする必要があると思う。

中村玉緒のような人なら一寸縛っただけでも、自由を束縛した感じがするが、丘さとのように肉み付きがよいと、体を一ふるいすれば縄が体から抜けやあしないか、といったような感じを知らず知ら

ずに持ってしまう。

この種の女優さんは雁字搦目、それこそ身動きできない縛り方をしなければ縛った感じがでないのではないかと思う。

○ 私が空想家であることは、これまで度々、本誌の紙面を借りて述べている。つい二月号にも、「こんな映画をつくりたい」といった雑感を書いたが、こんどはからずもこの文の中にふれた作品が映画化されるようなので喜んでいく次第だ。

それは東映が松方弘樹主演で撮る「葵の影法師」だ。原作は山田風太郎氏の「江戸忍法帖」である。(注)新聞などで司馬遼太郎氏の原作と発表されたが誤りである。

かつて二年前に東千代之介主演で企画され、なしくずしに実現しなかったものだ。

画面の構成上に難しい点が多かったのだが、どう解決したか興味

を引かれる。

また私の楽しみの一つはラストの刑場シーンで私の好みの縛りシーンが久々にみられそうだからだ。

松方の相手役だから北条きく子

(北条喜久が改名)、北沢典子、立川さゆりあたりだろうが、姫君役だから北条きく子かとも思う。こうした空想を持つことも楽しいものだ。

○ 私は原作もよく読む。脚本家を志したことがあるせいで、何か映画向きの作品を捜すためだ。たまに巡り合えば、シナリオ化をはかることは勿論だ。

これとは逆に映画化が決まった原作を捜すこともある。先輩たちの構成を自分の考えとの比較をするためだ。こんな場合、私のシナリオ構成は、やはり異状にサド場面や縛りにこだわり過ぎることを知る。

田舎に住んでいて各映画会社の企画を知るのは、スポーツ紙の芸

能欄を読むのが一番早い。ときには出演者の名前もでているので、こんな時は私の空想は女優の好みによって飛躍する。

田舎にいてはシナリオを手に入る機会が少ないがキネマ旬報、映画評論、シナリオ、時代映画などの雑誌を注意すれば限られた範囲ながら読める。こうして読む作品は私の空想と実際画面とがあまり変らないから経験というものは恐いものだ。

○ しかしやっぱり映画をみて、ものの足りなくガッカリすることもあ

る。このような眼で映画をみるのは邪道かも知れない。でも私は、長年の体験と性格的に、このようにしか映画をみることができなくなっている。

私と同じような人は全国にはかなり多いと思う。映画界はいまの頭打ち状態の打解策に、こんな点にも目ざめてほしいものだ。(了)



連載小説

花

と

蛇

〔2〕

花巻京太郎

二度目の嫌がらせ

遂に静子夫人は、その日、遠山家に戻って来なかった。私立探偵の山崎は、事務所員と連絡をとり、八方手を尽したが、葉桜団が、何処へ夫人と桂子連れ去ったか、全く、手がかりはつかめない。

次の日の夕方になって、葉桜団からの連絡もなく、いよいよ警察へ訴えるより方法はないと、山崎が悲痛な顔つきになった時、電報を受取って、この異変を知った遠山隆義が大

阪より帰って来た。

夫人と一人娘が不良少女団に監禁されたとくわしく山崎から聞かされるや、隆義は、卒倒せんばかりに驚いた。

出張中も、新婚間もない彼は、静子夫人恋しさで、ろくに仕事も手につかず、色々の予定もくりあげてしまったぐらいであっただけに、魂を宙に飛ばしたような表情で、やがてポロ／＼涙をこぼし始めるのだった。

「金なら、三百万でも四百万でも、悪党達が要求するだけ出す。静子と桂子を早く救い出

してくれ、警察なんぞにとどけちゃいかん。気狂い達は、何をしだすかわからん。」

隆義は、山崎の顔をキッと睨みつけてそういう。

山崎は、はあ、と面目なさそうに頭を下げたが、恐る恐る隆義の顔を見ていった。

「奴等が、連絡をして来ないと残念ながら、そういう取引をする方法ありません。それに、もうぐずぐずはしていられぬ段階へ来ております。実は、一昨日、奴等は、夫人より剥ぎ取った着物だけこちらへとどけて来ると

いう挑戦的な態度をとってるのです。一刻も早く、警察へ知らして、手を打たねば、奥さんとお嬢さんの身は、ます／＼危険にさらされると思うのです」

隆義は、それを聞くと顔色を変えた。

「じゃ、静子は、丸裸にされて、悪党達のおもちゃにされているというのか」

「いえ、そうとは断定出来ませんが、とにかく、危険な状態におかれている事はたしかです」

と、山崎は苦しそうな表情をしながら、葉桜団の一人が投げ込んでいった夫人の衣類を女中の一人に持って来させ、卓の上へ積ませた。

花のように積まれた夫人の着物や下着類を見て、隆義は、眼をパチ／＼させた。帯、帯どめ、長襦袢、肌着から腰巻に至るまでが、卓の上へ積まれ、ふと、静子夫人の色香が、そのあたりにたちこめるような錯覚に、隆義は見舞われたのである。不良少女団が、わざわざこんなものを遠山家に持ちこんだというのは、夫人は、素っ裸のまま、こっちへ監禁されているんだぞと隆義の神経をわざと高ぶらすためのものに違いないが、あまりにも、人を喰った残忍な少女達の思いつきに隆義は

顔をひきつらせてしまったまま、一言もものがいえなくなってしまうた。

山崎も、女中達も、隆義の気持を思うと、いうべき言葉もなく、ただ、苦虫を噛んだような顔で卓の上の夫人の衣類を眺めているだけである。

突然、隆義は、気が狂ったように夫人の長襦袢をわしづかみにして、それを顔に当てる、おいおい泣き出し、声をつまらせて、

「早く静子を救い出してくれ!! わしは、わしは、もう気が狂いそうだ」

と、わめき出すのであった。そこへ、運転手の川田が、また、ただならぬ顔つきで、飛び込んで来た。

「玄関の式台の上に、こんなものが置いてありました」

と、ビニールの風呂敷で包んだものを持ちこんで来る。

山崎は、あわててそれを開けたが、途端にあつと声を出し、

「何だ、君。こんなものを持ちこんで!!」

と、川田を睨みつけた。

ビニールの風呂敷の中には、新聞紙の包みがあり、それを開けると、明らかに人糞らしきものが出て来たのである。茶褐色のそれを

ちらと見て、隆義も女中達も思わず顔をしかめたが、急に卓上の電話が鳴った。

山崎は、受話器をとって、もしもし、と返事をし、ハツとした顔になると、隆義に、

「奴等です。葉桜団の女です」

と、息をつめて隆義に告げた。

隆義も、つばをのみこみ、

「いいかね。金ならいくらでも出す。相手の感情を高ぶらせないように、うまく交渉してくれ」

と、必死な面持でいう。

はい、と山崎はうなずき、再び、受話器を耳にした。

一昨日、脅迫電話をかけて来た同じ女の声のようだった。

「——どう、お金の方、都合ついた」

相手は、ニヤニヤしながら電話をかけているのだろう。いやに落着いた口調だった。

「金の方は都合ついた。すぐ取引しよう。場所と時間を教えてくれ」

山崎は、眼をギラギラさせながら、そういつた。

「へえー。さすがは遠山財閥だね。こちらも安心したよ。じゃ、二三日したら、もう一度連絡するから今日明日中に現ナマを揃えてお

きな。警察なんか知らせたりすりゃ、奥さんとお嬢さんの命はないからね。そのつもりでいな」

「待、待て。二三日なんかいわず、今すぐ取引しようじゃないか。奥さんと桂子さんに一眼、逢わせてくれ」

「ふふふ、そんなにあわてなくてもいいわよ。お二人とも、この取引がすむまで、穴倉の中で、おとなしく待つそうだから。」

「君達、二人をひどい目に逢わしてるんじゃないだろうな。遠山さんは、それが心配で、病気になるにかけておられる。君達も人間ならもう少し良心というものを感じてくれ」

山崎は、さとすように相手に告げた。

「ふん。えらそうな口をきくない。葉桜団は葉桜団なりの待遇の仕方があるんだよ。奥さんもお嬢さんも、逃げ出されちゃ元も子もなくなるので、可哀そうだけど素っ裸にされちゃいるが、食事から、おしっこの始末まで、こちらでちゃんとしてやってるよ。そうそうそちらの旦那さんに、何か奥さんがプレゼントをしたいだろうと思ってね。皆んなで浣腸をしてあげて、お出しになったものを今、とどけたんだけど受取ってくれたかい」

「な、なんだと!!」

受話器を持つ山崎の手がぶる／＼震えた。「ふふふ。どうやら受取ったらしいわね。それは、きれいな奥さんとお嬢さんのとが、ミックスされてあるんだ。恋しくなったら、それを見て私を思い出して、と奥さんのおことづけよ。ふふふ。」

山崎が顔を真赤にして興奮し出したので、隆義が横から心配げにいった。

「君、何といってるんだ。奴等は?」

「はあ、それが、その」

山崎は、隆義にどういっていいかわからない。電話の相手は、つづいていった。

「もしもし、じゃ三日後、お金を受取る場所と時間を教えるわ。それじゃお元気で」

「待て、一寸待ってくれ。貴様達、三日間も奥さんと桂子さんを裸のまま穴倉へ閉じ込めておく気なのか。貴様達は、何というけどものなんだ!!正気なのか!!」

激情すまいと思っても、山崎は、体がわなわな震えるのである。

「心配しなくてもいいわよ。あまり退屈なさらないように私達が適当に可愛がってあげるから。それに、あんなきれいな奥さん、遠山老人一人だけで楽しむってのはないわ。私達だって、お預りしている間ぐらい色々楽しま

せてもらうわよ。今夜も、浣腸してあげるつもりよ。だってね。浣腸される時の奥さんの顔、女の私達でさえふるいつきたくなる位、とっても魅力的なんだもの」

電話は、そこで切れた。

運転手の正体

静子夫人達が監禁されている郊外のバラック小屋へその夜、一台の高級車がついた。それは、遠山家の自家用車なのである。運転手の川田は、車窓から首を出すと、二三回警笛を鳴らした。

小屋の戸ががたがた音を立てて開き、葉桜団の団長である銀子が二人のズベ公を従えるようにして出て来た。

「万事、うまくいったぜ。」

と、川田は、煙草を口にしながら、ニヤニヤして銀子にいう。

「そう。森田組にわたりをつけるとは、あんたもなかなかのやり手だね。だけど、分け前は、フイファイフイファイよ。いくら、あんたと私の仲でも、これだけは、はっきりしとかなきゃね」

「ちえっ、がめつい女だな。」

川田は舌打ちしたが、万更でもない顔つき

で、煙草の煙を吐きながら車から出て来た。

「どう。遠山の連中、警察へ訴えるって、様子はない？」

「大丈夫だ。あの山崎というヘッポコ探偵、今日は傑作だったぜ。お前達が変なものを持ちこんだろ。それが奥さんのものだとかかった時の珍妙な顔だったらなかった」

「ふふふ。さぞ驚いたろうね。だけど、ここであわてちゃいけないよ。相手を出来るだけいら／＼させるんさ。」

「お前も、ズベ公団首領の貫録が、とうとうついちまったな」

最初から、銀子と共謀して、この誘拐計画を立てた川田は笑うのだった。

「ところで、今夜中に奥さんの方は、森田組へ送りこまなきゃならねえ。何しろ、前方じや百万のキャッシュを揃えて、今日の昼から待ってるんだからな」

「だけど、森田組もずいぶん冒険するもんだね。いくら誘拐の権利を買ったって、もし、警察なんぞに手が廻ったら、それこそ元も子も飛ばす事になるじゃないか」

「そこは、抜目あるもんか。向こうは、いくなればその道の玄人だ。それによ。とにかく女は飛び切りの美人ときてるじゃないか。監

禁中に、しこたま写真をとって全国の筋へ流したり、うまくいきや秘密ショウなんかに出演させたりして、二股かけて儲けようって腹なんだ」

川田は、そんな事をいいながら、銀子達とあばら屋へ入る。

三四人のズベ公達が奥で花札トバクをキャッキャ騒ぎながらやっていたが、川田が入って来たのを見ると、

「やあ、兄貴、景気はどうだい」と、声をかけるのだった。

川田は、昔、東京の盛り場を根城にした愚連隊だったが、スケコマシ専門でかなり顔も売ったけど、稼ぎは知れたもの、そこで、一旦は堅気と見せかけて、計画的な大儲けをしようとして運転手として遠山家に住みこみ、機会を狙っていたのだ。

「奥さんとお嬢さんは、何処にいらっしゃるんだ」

と、川田はキョロキョロ四囲を見渡す。「ここだよ」

と、花札バクチをやっていた女達が自分の坐っている畳をこんこんたたいた。

床下の穴倉に、二人を閉じ込めているらしい。彼女達は畳をひっぺがへし、床板を数枚

はがすと、懐中電灯で下方を照らした。二米ばかり縦穴が堀られてあり、懐中電灯に照らされて、白い女体が、その奥にくっきり写し出された。下は、一坪ぐらいの広さになっていて、かび臭い土の上に荒むしろが敷かれ、乳白色の肌を荒縄で縛りあげられた静子夫人が、桂子と後手に縛められた手をつなぎ合われ、互に背を向け合ったまま、うなだれている。お互に口をきいたり出来ないよう二人ともズベ公達の使い古しの下着らしいもので猿轡をはめられ、それに、ビニールのおしめカバーをはかされていた。

「遠山財閥の令夫人やお嬢さんも、こうなっちゃもぐらとかわりないさ。」と、ズベ公達は、懐中電灯を静子夫人の白い横顔に当て、川田に向って笑いながらいう。静子夫人は、眼を閉じたまま、白いうなじを懐中電灯に照らされて、肩をかすかに動かしている。

川田は、凄惨といたいたいぐらに美しい静子夫人の観念しきったような横顔に見入っていたが、銀子にいった。

「ね、いいだろう。ちょっとやそつとじゃ、手の出ない高根の花だ。こんな機会じゃねえと、こちとらなんぞ、手を出すときがないじ

やないか」

「ふん。そういうだろうと思ったよ。スケコマシをやっている時のあんたは、何時でも、最初、まず味見をしていたからね」

「昔の事なんかいうな。俺は、実をいうと、前からこの奥さんに惚れ抜いていたんだよ。自動車で送り向かえする毎、バックミラーにうつる奥さんの顔を見て、一度でもいいからこんな女と……」

「わかったよ。結局、女を抱きたいってんだろ。まあ、あんたにも、ずいぶん世話になった事だし、今夜は、しっぽり濡れさせてあげるよ」

と、銀子は、笑いながらい、配下のズベ公達に、

「奥さんを上へあげな。今夜は、川田の兄貴のお相手をさせるんだ」

アイヨ、とズベ公達は、梯子段を地下へ降り、静子夫人の体を桂子より離して、梯子を登らすべく、一人は、静子夫人の首に縄をかけ上からひっぱり、一人は、うしろから尻を持ちあげるようにして、キャッキャッ騒ぎながら、とうとう上へ押し上げてしまった。

はち切れるばかりに豊満な乳房の上下を荒縄でしめあげられ、身につけているものは、

薄いビニールのおしめカバーだけの静子夫人は、最初、川田を見た時、その裏切行為を憎んで、美しい柳眉を立てて、彼をちらと睨んだものの、次には、何よりも、自分のみじめな恰好の恥しさが先に立って、思わず顔を赤らめ、うつ向いてしまふのだった。

女達は、そんな夫人をひき立てて、柱の前へ坐らし、改めて、柱に縛りつけ始める。

「おや。さすがに令夫人だけあって、お行儀がいいね。ごらんよ。朝から、穴倉の中へ入りっぱなしなのに、全然、おむつカバーを汚しちゃいないよ」

と、ズベ公の一人が驚いたように声をあげた。

「へえ、桂子の方は、派手に汚してるよ。ふふ」

と、穴倉から梯子段をひきあげたズベ公がもう一度下に一人残されている桂子をのぞきこんでそういい、

「明日、取りかえてやるからね。今夜は、辛棒して、そのままお寝み」

と、いって、ハメ板を並べ穴を塞ぐのだった。桂子のすすり泣きが激しく聞こえるが、それも、ハメ板の上へ畳が敷かれると、押し殺されたよう聞こえなくなる。

「猿轡をとってやんな」

銀子がいうと、朱美が、夫人の鼻まで隠している赤いパンティの猿轡を外した。

静子夫人は、少しは楽になったのか、大きく二三度息をし、美しい頬を横に伏せる。

これから、この女愚連隊は、自分に何をする気なのか、彼女は、恐怖のあまり口もきけないのだ。それに、朝から、ずっと、縛られっぱなしなので、背後に廻されている手がしびれ、体中がけだるい。また、一日中、尿意をこらえていたので、下腹に鈍痛のようなものを感じていた。面白半分に、ズベ公達にはかされたおしめカバーを汚し、彼女達の嘲笑を受けるのが口惜しく、ずっとがまんを通していたのである。

川田が、どっこいしょとばかり、静子夫人の前にあぐらをかいて坐った。夫人は、川田を見ると、口惜しいやら恥しいやらで、のどもとが熱っぽくなり、

「川田さん。あなたは、何という、何というひどい事を――」

と、あとは言葉にならず、肩を震わせて嗚咽し始める。遠山にしても、自分にしても、川田に対してはずいぶんと思いやりをかけてきたつもりだ。それが、一体、何の恨みで、



ズベ公達と組み、こんなひどい仕打ちをしなければならぬのだと、夫人は信じられぬ思いなのである。

「奥さん。今更、おつぶついったって仕方がねえよ。とにかく、俺は大金が欲しかったのさ。それに、奥さんがあまりに別嬪すぎた。てっとり早くいえば、金とあんたが欲しかったのさ」

川田は、眼をギラギラさせながら、夫人のふくよかな白い肩、縄に締め上げられた豊かな乳房に見とれつつ、そんな事をいうのであった。

ズベ公達は例によってウイスキーや酒を持ち出して来、夫人の縛りつけられている柱を取り巻くように乗り出して、賑やかにグラスの交換をやり

始める。

「まあ、川田の兄貴、一杯やりなよ。惚れた女の縛られた姿を着にして、酒を飲むなんて、全く愉快じゃないか」

と、もうかなり眼のふちを赤くした銀子がか川田にグラスを渡しウイスキーを注ぎ始める。

川田は、二三杯たてつづけにあふった。今まで、家出娘や遊び好きの娘などをつけ狙い散々、そうした女達を泣かして来た川田であるが、この静子夫人だけは勝手が違う。美人すぎるからというわけなのか、川田は、ともすれば、たじたじとなり、不思議なくらい本来の自分が出て来ないのである。

「しっかりおしよ」

と、銀子が、妙に、調子の出て来ない川田をからかうように肩をたたいて笑った。

「今夜、あんたのお嫁さんになる女を前にしてそんな不景気な面をするもんじゃないよ」

と、銀子がかからかうと、今まで、がっくり首を垂れていた夫人はキッと眉をあげ、憎悪のこもった濃艶なばかりのまなざしを川田に向けた。死んだって、こんな男の矚りものなかなるものか、といった激しい眼つきであった。

それを見た川田は、また、そわ／＼として矢鱈にウイスキーをあふり始める。

朱美が、静子夫人の鼻をいきなり横からつまみあげようとした。夫人は、激しく首を振って、それを逃れ、

「な、なにをするのよ!!」

と声をはりあげる。

朱美は、酒で真赤になった顔をよけいに真赤にして、

「生意気な眼つきで、川田の兄貴を睨んだりするから、その高慢ちきな鼻をひねってやろうとしたんだ。何だい。人質のくせにえらそうな口をきくくない」

と、今度は夫人の横面をぴしゃりと平手でぶった。すると、他のズベ公達も、

「あたい等になてをつくと承知しないよ」

と、夫人の髪をひっぱったり、乳首をつねりあげたり、酒の勢も手伝って無茶苦茶な事を始めるのだった。

「け、けだもの。お前達は、みんなけだものだわ!!」

夫人は、ズベ公達の手の中でわめきつづけた。

「お待ちよ」

と、銀子が、彼女達をおさえた。

女達が手をひっこめると、夫人は、髪を乱し、激しく肩で息をしている。

「奥さん。けだものって、あたい達のことかい」

銀子は、残念なものが底に沈む冷たい眼でじっと夫人を睨む。

静子夫人は、いいようのない恐怖感におののき、唇を噛んで、銀子の眼に射すくめられたよう首を垂れた。

「まあいいよ。今度、そんな事いたら、どんな目に合うか、よく考えるんだね」

銀子がそういうと、静子夫人は恐しさのため、うなずいた。

「悪うございました、と謝るんだ」

朱美が夫人の頭を突く。

「わ、わるうございました」

夫人は、口惜しさに瞳に涙をためてそういつた。

銀子は満足げにうなずいて、

「じゃ、今夜は私の顔を立てて、この川田の兄貴と床入りしてくれるね」

静子夫人は、ハッと顔をあげて、

「そ、それだけは、お願いです。かんにんして下さい」

と、おろ／＼という。／

「何いってゐるんだ。それじゃまだ私達に楯をつく気じゃないか。今までは、この川田さんは、あんた所の使用人だったけど、今日からは、あんたの御主人なのだ。」

横から、朱美がまた口を出した。

「それに、この川田さんはね。女を喜ばす事にかけちゃ天才なんだよ。あんな遠山のじいの事なんかきれいに忘れちまいな。」

静子夫人は、激しく、嗚咽しながら、それだけは、許してと、くりかえすので、業を煮やした銀子が、桂子をひきずり出して、この場で小指を切り落すといひ出した。

「やめて!!そんな恐ろしいこと」

静子夫人は、悲鳴をあげて許しを乞う。

「じゃ、川田さんのものになるってんだね」

銀子は、すすり泣く夫人の顔をのぞきこむようにしてくりかえした。

「泣いてばかりいちゃ、わかんないよ!!はっきりおし」

銀子がきめつけると、夫人は、かすかに首を縦にふり、消えいるようにすすり上げていく。

「そうかい。それで安心したよ」

と、銀子は、実際、安心したようにニッと笑い、川田を見て

「これで、あんたも念願がかなったってわけだね。今夜から、遠山財閥の令夫人は、あんたの女になるってわけさ。さぞ、嬉しいだろうね。まあ、骨身にこたえるほど楽しむがいや」

と銀子はグラスを取り上げ、
「さあ、みんな。今夜のお二人を祝福して、もう一度飲み直しだ。」

と叫ぶと、一同は哀れな夫人を取り囲んで一騒ぎするのであった。

地獄の結婚式

これから、静子夫人と、川田との結婚式を始めようじゃないの、といい出したのは、朱美であった。そりゃ傑作だ、とズベ公達は手を打って喜ぶ。

川田は、もうすっかりいい顔色になって、彼女達というまま、何でも、うんうんとうなずいている。今夜中に、静子夫人をタクシーの荷物入れに押しこみ、森田組へ運ぶ事になっているのだが、明日の朝にしちまえ、とすぐここを出発する気になれなくなったのだ。

そして、川田は女達にせかされて、ニヤニヤしながら、身も世もあらず悶え泣いている静子夫人の横へ坐った。

「似合いの夫婦だよ」

と、ズベ公達は二人を冷やかした。

「汝、この女を今日より情婦として可愛がるか」

と、朱美がふざけた口調でいう。

「へい。俺の情婦とし、毎日、なめるように可愛がってやります」

と、川田が顔をくずしていうと、ズベ公達が、キャッキャツと笑った。

「汝、この男を色男とし、日夜、忠誠をちかい、奴隷的に奉仕するか」

と、今度は静子夫人に向かって朱美はいった。

夫人は、首を垂れたまま、こうした屈辱に肩を震わせているだけで、一言もいわない。答えられる筈はなかった。

「よう。まだ強情を張るつもりかよ」

と、ズベ公の一人が、火のついた煙草を夫人の膝頭に押しつけた。

あっ、と夫人が悲鳴をあげ、のたうち出すと、すかさず朱美が、夫人のあごに手をかけてぐっと顎をこじ上げ、

「はっきり答えな。何時まで金持の奥さんぶってやがるんだ」

夫人の切長の美しい瞳がキラキラ涙で光っ

ている。

「忠、忠誠をちかい——ます」

夫人は、震えるような声でやっといった。

朱美は、舌なめずりでもするような表情で更につづけていう。

「次に、こういういな。川田さんの可愛い赤ちゃんを早く生みたい、とね」

川田が、変なことというなよと照れ出したが朱美も、銀子も、こんな調子で、ブルジョワ夫人を責めつづけるのが楽しくてならないようだった。

「さあ、いうんだ。いわないと、その可愛いお臍を煙草の火で黒こげにしちゃうよ」

と、今度は銀子が煙草の火を夫人の腹部に近づける。

夫人は、激しく嗚咽しながら、蚊の泣くような声で、

「川田さんの可愛い赤ちゃんを——」

早く生みたい、とやっというのだった。

「よし。じゃ三々九度の杯といきやしょう」
朱美が、川田に茶わんを渡して、今度は、日本酒をなみなみと注いだ。

川田は、ちょっとそれを口にしたが、

「ウイスキーとちゃんぽんじゃ、悪酔いすらあ。あとにさしつかえちゃ困るからな。奥さ

んに全部飲んで頂こう」

と、静子夫人の口元へ持つていく。頭を激しく振って、それをさけようと夫人は悶えたが、飲まなきゃ駄目だと川田は、無理やり、片手で夫人の首をかかえるようにして、口の中へ流しこむのであった。

ゴボツゴボツと酒はのどを通り、静子夫人は、眼を白黒させて、むせかえる。茶わんが空になったので、なか／＼いける口じゃないかと朱美はまた茶わんに酒を注ぎ、今度は自分が夫人の口元へ持つて行くのだった。

「ああ、もう許して」

夫人は美しい眉を寄せて首をのけぞらす。

「何だい。あたいの盃が受けられないというのかい。強情をはると、川田の兄いの前で、浣腸させるよ。この酒を浣腸器に入れろというのかい」

と朱美はおどす。想像するだけでも恐いその言葉に、遂に、静子夫人は、朱美のさし出す茶わんに口を当てた。

酒が、夫人ののどを通っていく音を川田は淫靡な笑いをして心地良げに聞いている。「どうだい。こうして飲まされる酒の味は格別だろう」

二杯目の酒を一滴残らず夫人に飲ませた朱

美は、苦しそうに息をする夫人の顔を面白そうに見ていった。

「さあ、これで式は、おわりだ。あとは、お床入りの支度にかからなきゃね」

銀子は、川田にウインクして見せ、すぐ横手の破れ障子を開いた。ベトベトあかびかりした畳がひかれてある陰気な四畳半である。

「部屋は、こんな具合に汚いけど、相手が美人だから、まあ辛棒するんだね」

と銀子は、ズベ公達にせんべい布団を持ち出させ、そこへ敷かす。

「新郎さんの方は、先にお部屋へ入って、新婦のお出ましを待ちな」

と、川田は、先に部屋の中へ追い立てられ破れ障子が閉められる。

それから、銀子と朱美は、もう涙も枯れ果てたような静子夫人をはさむように坐って、

「新婦は、新郎に気にいられるようお化粧をしないでね。きれいな顔が涙でまっくろじやないか」

二人は、ハンカチを取り出して、夫人の顔をふき、ハンドバッグから化粧品を取り出して、彼女の顔をパフではいたり、口紅をつけてやったり、楽しそうに夫人の顔に化粧をしだすのだった。

乱れに乱れた夫人の髪の毛も、銀子が櫛をつかってなであげ、整える。

「明日の朝にや、バラバラになってることだろうが、まあ、女のたしなみさ」

と、銀子は、くすくす笑いながら、夫人のふさふさと絹のような感触をもつ髪をなでつづけるのであった。

「おい。何時までも、何してるんだ」

と、障子の向こうから、川田が待ちくたびれたらしくどなり出した。

「がつがつするんじゃないよ。今、お化粧の最中なんだから」

と、銀子は、どなりかえし

「まあ、間違えるように美人になったよ。一寸、自分で鏡を見てごらん」

と、朱美は、手鏡を出して、夫人の顔の前へ持つていく。静子夫人は、もうすっかり観念したのか、唇を口惜しげに噛んだまま、女達のするままになっていた。ズベ公達も、今は、わいわい騒ぐ者はなく、きれいに化粧された夫人にほんやり見とれている。

最後に、朱美は、香水を出して、夫人の耳や白いのど元、乳房に至るまでふりかける。「さあ、おわったよ」

と、二人は、化粧品をしまいがらいった

が、ふと、夫人の腰の方に眼をやった朱美が「あんた、さっきから、腰をもじもじしているけど、どうしたのさ？」

と聞く。夫人は、真赤な顔になって消えるようにうつむく。先程からがまんがまんとを重ねていたが、茶わん酒を無理やり二杯も飲まされて、もう限界に來ているのだった。

「世話のやける花嫁だね。隣の部屋の押入れに洗面器が入ってるから、花むこに頼みな。」

花むこは親切な人だから、ちゃんと始末してくれるさ」

さあ、お立ち、と二人は柱につないである縄尻を外して、夫人をひき起しにかかった。

よろめくような足どりで、夫人は、運転手の川田が待つ部屋へ引き立てられて行く。歩むごと、ゆるやかに揺れる両尻を銀子と朱美

は顔を見合わして笑いながら、青竹の先で突き、お待ちどうさま、と破れ障子を開けた。

川田は、アロハの胸をひろげて、せんべい布団の上に寝ころび、煙草をふかしていたが静子夫人が、銀子と朱美に縄尻をとられて引き立てられて來たのを見ると、ニヤリとして上体を起した。

「さ、坐りな」

と、銀子は、夫人の尻を突いて、川田の前へ坐らせる。

「いいかい。昨日までは、お前さんが主人で川田さんは使用人だったかも知れないけど、今夜からは逆なんだよ。これからは、川田さんのいう事は、何でも聞かなきゃ駄目だよ」

と、銀子は、夫人にいう。

「至らぬものですが、末長く愛して下さいと

頭を下げな」

と、朱美は、行儀よく川田の前へ坐っている夫人の首のあたりに手をかけて無理やり頭を下げさせるのであった。

銀子は、静子夫人の縄尻を川田に渡して、「じゃ、たっぷり可愛がってあげな。それから、この花嫁さん、お小用がしたいそうだから、頼むわよ。その押入れに洗面器が入ってるからね」

銀子は朱美をうながして立上ったが、体を固くして、その場に小さくなっている静子夫人の頬をちよっとつづいた。

「それじゃ、奥さん。いよ／＼川田さんの女になるわけね。何だか、嫉けるわよ」

といい、声を立てて笑いながら出て行くのだった。

(未完)

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第37号	復刊第36号	復刊第35号	復刊第34号	復刊第33号	復刊第32号	復刊第29号	復刊第28号	復刊第27号	復刊第25号	復刊第24号
(昭和34年11月)	(昭和34年12月)	(昭和34年11月)	(昭和34年11月)	(昭和34年11月)	(昭和34年11月)	(昭和34年11月)	(昭和34年11月)	(昭和34年11月)	(昭和34年11月)	(昭和34年11月)
定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円

復刊第55号	復刊第54号	復刊第53号	復刊第52号	復刊第49号	復刊第48号	復刊第47号	復刊第46号	復刊第45号	復刊第44号	復刊第39号	復刊第38号
(昭和35年2月)	(昭和35年2月)	(昭和35年2月)	(昭和35年2月)	(昭和35年2月)	(昭和35年2月)	(昭和35年2月)	(昭和35年2月)	(昭和35年2月)	(昭和35年2月)	(昭和35年2月)	(昭和35年2月)
定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円

復刊第65号	復刊第64号	復刊第63号	復刊第62号	復刊第61号	復刊第60号	復刊第59号	復刊第58号	復刊第57号	復刊第56号
(昭和35年9月)	(昭和35年9月)	(昭和35年9月)	(昭和35年9月)	(昭和35年9月)	(昭和35年9月)	(昭和35年9月)	(昭和35年9月)	(昭和35年9月)	(昭和35年9月)
定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円

特に定価の半額に奉仕いたします。

この欄に掲載の分は売切れです。御承願願います。

盲 愛 の 年 譜

壬 生 咲 夫



今はもう目しいて光の明るさも感じなくなつた捨吉の網膜にも、恵子の白い顔や肌が、ありありと焼つけられていた。そして、按摩として更生した彼の指先には、肉用鶏のようにぶくぶくと肥って脂ぎった五十女の肌があつた。

姉のたか子は変りはてた捨吉を救護所で見出した。妹は焼死し、父母は行方不明のままに戦争が終結した。

たか子と捨吉の最低の生活が始つた。疎開させていた家具、衣料、貴金属類を手離して二、三年は過すことが出来た。捨吉の失明は決定的となつた。たか子はヤミ市の食堂に働いた。或る夜、たか子はとうとう帰つてこな

倉橋捨吉が失明したのは中学三年の時だつた。悪夢のような戦争はその最後の鬼火を、その夜捨吉たちの頭上にふり撒いたのであつた。彼は落ちかかってくる火の粉を払いのけ死物狂いで逃げ出した。その肩には幼い妹が獅咬みついていた。父母の名を呼びつつ、捨吉は夢中で走った。

突如、前方の真赤に灼け爛れた家がぐらり

と彼めがけて倒れかかってきた。小石につまずいて転倒した。背を焼く熱気で彼は我にかへつた。煙にむせびつつ捨吉は必死で目をこすつた。視界は真暗なのだ。眼の底が烈しく疼いた。

ぐったりとなつた妹を小脇に抱きかかえて捨吉はあえぎ、むせび、盲滅法に走りつづけた……。

かった。捨吉はその夜、マンジリともしなかつた。

追剥ぎ。強姦。殺人……

不吉な予感が彼を千々に苦しめた。

翌日の昼前にたか子は虚脱したようなグッタリした様子で帰ってきた。捨吉の問に對しても不機嫌そうに答えず、鏡台の前で黙って髪を梳いていたが、しばらくして不意に声を忍んで泣き出した。

——市場の顔役が、その前日たか子を事務所へ誘った。ヤミ市は一掃して、その後マーケットを建てるという。顔役は土建業だった。その時に店舗を一軒提供しよう……。

否も応もなかった。

捨吉は全身の血が一ぺんに狂い出すのを感じた。見えぬ眦を引き裂くように見はって彼は顫える拳を握りしめた。

「仕方がないわ、捨ちゃん」

立上ろうとした彼の手にしっかりと縋りついて、たか子はあえぎあえぎいうのだった。

「生きるためよ」

たか子は顔役が——八原龍造という名だったが、八原が決して猛猛な男でないことや、まだ三十を過ぎたばかりであることや、某私立大学を出ていること、将来は自分と結婚す

るようになるだろう、などと一心に説いて捨吉をなだめようとした。

その夜、捨吉は家を出た。

美貌を謳われていた姉を——亡き父母が外交官に女合わせることを唯一の楽しみにしていたそのたか子を、路傍の草のように飽気なく手折られてしまったという、いいような絶望——捨吉はたか子の厄介に迄なってきたて行こうとは思わなかった。

しかし、夜更けの街を歩いていた捨吉は、突然、何者かの一撃を後頭部に受けて昏倒した。追剥ぎであった。彼はその夜のうちに再びたか子のもとに送りかえされていた。

そのうちにマーケットは竣工した。階下がマーケット、階上はアパートであった。捨吉たちはアパートの一室とマーケットの内の一軒を持つようになった。

捨吉が初めて八原と会うようになったのはその頃であった。太い、サビのあるその声は骨格豊かな偉丈夫を思わせた。三十幾才で土建業を牛耳っている精気が言葉に溢れていた。

脱ぎ棄てた八原の上衣を誰もいないとき捨吉は触って、その身柄を想像した。案外小柄であった。長身なたか子よりはるかに低いに違いなかった。その代り肥満していることが

確められた。短軀猪首——捨吉はそんな男を想像し、新らたにムラムラと憎しみが突上げてきた。ひどく手ざわりのよいその上衣に無暗と反感が突上げた。

たか子と八原の對話から、二人がもう普通の夫婦と同じ位親しくしていることを知った。そのことが十九才の捨吉の神経をますます鋭くサイナミ、ひき裂くのであった。彼は盲学校中学部を卒えて高等部へすすんでいた。

捨吉は八原とたか子の関係が忌わしくてならなかった。身の瘠せ細るような思いに苦しめられるのであった。

彼は色街や街娼の話を、上級生から教えられ、そんな話を厭いながらも、やっぱりずると泥沼にひっぱりこまれるように、Y談に耳を傾けずにはいられた。しかし彼の前に現実の女が現れよう筈もなく、女というものは彼にとって雲の上にマボロシのようにふくらんだ薔薇色の夢であった。

彼は茨のトゲの上を這いまわるような思いで女の幻をそのトボシイ記憶の中にまさぐるのだった。——幼稚園のころ親しく遊んだN子の幼いオチョボロ。一緒に淋しい野原に行ったホッペタの紅い近所の子守女。

小学校一年の時、隣組にいた腺病質の透き

通る位白い肌の上品な少女。夏、プールの隅で水着姿のお尻を指先でつついて、彼女の受持教師に発見され、意地悪い折檻を受けた記憶。

その腹癒せに捨吉はその女教師の、何時もスカートがハチ切れはしないかと心配する位丸々と肥えたお尻を、友だちと共に眺めたものであった。又、捨吉は体操の時間のその女教師の姿を、教室の窓越しに盗み見るのが秘かな喜びであった。薄いシャツを小山のようにむっくりと持ち上げている胸のふくらみ、跳躍をするたんびにその小山がユサユサと実り豊かに揺れ動く様をあかず眺めた。

或る日、あんまり夢中になって見とれていて捨吉は、彼の教師が質問しているのに気づかなかつた。捨吉は教師にイヤという程横面をはり飛ばされ、教場の隅に立たされるような結果になってしまった。

彼女のその肥えた体が一そう肥えふとったかのように捨吉に思われた或る日、その女教師は学校を止してしまった。止すと同時に子供を産み、そして捨吉の受持教師と結婚し、彼はその電光石火の早業に呆然となったものだった。

——しかし彼の脳裏にもっとも鮮烈に、生

々しい郷愁と一緒に刻みつけられた一人の少女の面影を捨吉は忘れない。

五年生の時、編入ではいつてきた波江恵子であった。

彼女はフクヨカな頬と豊穠な黒髪と夢見るような情熱的な瞳を持っていた。

ドッチ・ボールをして遊んでいる彼女が、きりきりと体を廻転させるとき、パツとスカートのすそが跳ね上って、その白い太股が露れる時、捨吉は生唾をのみこみ眩しい思いで目を外らざるを得なかった。

六年生の時、学芸会の予行演習の時のことだった。彼は脳貧血を起し、額から冷汗がだらだらと流れ出て視野が真暗になった。教師に支えられて、やっとのことで休養室に休ませられた。

「一寸、一緒に休ませてくれ給えよ」

教師は先に休んでいるらしい生徒にそういつて彼をベッドに横にならせた。しばらくしてじょじょに気分の恢復した彼は、そつと首をもたげて横に並んでいる生徒の顔を見た。

一瞬、捨吉の胸は氷った。恵子であった。

彼女は白い頬に弱々しい微笑を浮べた。そして長い睫毛を羞らつたように伏せて、そつと蒲団を襟もとまで引き上げた。

「倉橋さん、脳ヒンケツ？」

囁くような小声であった。彼は恵子が名前を知っていてくれたのに有頂天になった。どつと血が頭に上ってきて、脳貧血は一ぺんに消しとんでしまったかのようにであった。彼はコクリと頷いた。

「私、心臓が悪いのよ。こんなに早く鳴って」

恵子は胸に手を当てて赫らんだ顔を上げて捨吉を見た。

「どれどれ」

彼の手は我知らず伸び、そして彼女の稚ない胸をブラウスの上からまさぐっていた。心臓が左に在るといふ医学的事実も忘れて彼は恵子の右の肌を懸命に撫でていた。恵子は体を固くして目を閉じた……。

(恵子！恵子！)

彼の指は空しく畳の上を這いずり廻るばかりであった。視界の絶たれた捨吉の眼底には幼い頃の恵子の面影が遠くで微笑を浮べているきりだった。戦争は二人の間を引裂いてしまったのだ。

恵子は焼死したのか。それとも幸福な人妻となつてゐるだろうか——。

充されない、愛の妄想に苦しめられる捨吉

は、長い睫毛を伏せて、そっと蒲団を襟もとまで引上げた可憐な恵子の面影に、針を刺される思いであった。

間もなくたか子と捨吉は——正確にいうとたか子のおそえものとして捨吉はくっついて行ったことになるのだが、八原の家に引移ることになった。八原の細君が病没したのである。たか子は後妻に直ったのだ。

八原の家は邸といつて恥しくない堂々としたものであった。

女中が三人、下男が一人いた。

その中でお花と呼ばれる十六才の女中は相当知能が低いようだった。他の二人から邪慳に取扱われ、辛い仕事ばかりをおしつけられ、でも黙々と勤め上げていた。

「バカだねえお前さんは。又栓めるのを忘れたことだろ。真赤じゃないか」

或る朝女中部屋からそんな声がお花を叱っているのを、捨吉は耳にした。

二月ほど経った頃、捨吉はこのお花に誘われて物置きにはいった。物置きは可成り広く湿っぽい空気がヒヤリと漂っていた。彼女の素ぶりは何時もと異っていた。憐れみを乞うような、おずおずした言葉つきで彼の首に両腕を廻してきた。

突然周囲に嬌声が上った。女中と下男の声だった。見ていたのだ。彼等は捨吉とお花を見詰めていたのだ。いや、彼等はお花を脅かして、この計画にひきずりこんだのであろう。

捨吉の頭からサーッと血の気が失われていった。お花は啜り泣き始めた。

八原の耳にその事件は直ちに届いたようだった。平素から憎み通している八原の前で、捨吉はもう顔を上げることが出来なかった。

その事件は今までこの家で中途半端だった彼の位置を決定的なものとした。捨吉は奉公人たちと一緒に取扱われるようになった。

その頃たか子は身籠っていた。

八原が家に帰ってこない日が多くなった。たか子の憔悴が捨吉には手にとるように分かった。しかし捨吉には、そんな八原に憤りを感じる権利さえないのである。

元来頑健でなかったたか子は重なる心労と肉体的過労のためであろう。死産児を分娩すると共に三日後此世から去ってしまった。捨吉の手を冷たくし、かりと握りしめたまま。

たか子こそ、もっとも清純な女であった、と彼は心の底から姉の悲運を悲しんだ。たか子はもっと幸福な生活を送る人である筈だった。何が姉をこんな不幸におとし入れてしま

ったのだ——。

捨吉は不潔な自分が、生きながらえていることに限りない呪わしさを覚え、たか子のために新らたに涙を流すのであった。

たか子の死と共に、彼は八原の家で全く無縁の人間と化してしまった。

湿っぽい板の間に膝小僧を揃えて坐り、コソコソと茶漬を流しこむと、それが捨吉の中食であった。もう一杯食べたい思いを抑えるのに彼は非常な努力を費さなければならなかった。彼はおヒツの方へ伸ばしかけた手を途中で力なく垂れた。女中の鋭い視線がねっとりと彼の手に揃みついたからだだった。

彼は邪慳に背中を突とばされたように茶碗と小皿とを持ってよろよろと立上った。

汚れた食器を彼は自分で流しまで持って行って洗わなければならなかった。そのまま茶ぶ台においておこうものなら、女中はその中に蠅が真黒にタカッていても追い払おうとはしないだろう。

茶碗を洗いおえると棚に伏せて捨吉は、杖を手に戸外へ出た。彼を按摩に招いてくれる家があるのだった。

血のつながった肉親を持たない捨吉は、文字通り暗黒な将来しか持っていなかった。身

体・五官の満足な一人前の男さえ食ってゆくの血みどろな今の時世に、世間の盲点に冷やかに投げ出されたような捨吉が、一体どんな望を持って生きて行けばいいというんだらう——。

その彼に残された道は按摩の免状をとることだった。学校は職業安定所を通じて見習・アルバイトの口を探してくれた。

まるで大海にふり撒かれた砂粒をすくいるような、それは困難な仕事であった。しかし、生きるためには、手さぐりでも這いずり廻らねばならない。

捨吉を仕事に呼んでくれるのは、仕立物を引受けて、ササヤカに暮している老婆であった。老婆は彼と同年くらいの孫があるのだといい、その孫娘は女中奉公に行っているそうだった。老婆は二階を夫婦者に貸して階下で一人長屋住いしていた。

彼女は老年に通有な頑固や意地悪さを少しも持っていなかった。捨吉はその肩を揉みながら、ふと亡き母を連想した。すると滲み出してくる涙をどうすることも出来なかった。

老婆は彼に同情し、いろいろと身上話を聞いて慰めてくれるのだった。そして捨吉は彼女のお蔭で、他のお得意先を獲得することが

出来た。

彼の腕は次第に上達した。この分では一本立ちになれるのも間のないことと思われた。

お得意先にはいろいろの人がいた。もっとも当惑したのは袋物屋のお内儀さんだった。

彼女は三十七、八——剥きぶりの大女であった。骨組みが太かった。夜鳥のような一種シャガレた声だったが、それが不思議に色っぽかった。お内儀さんは捨吉の手をとっていきりながら、

「綺麗な手なこと」

と、彼の耳たぶに熱い息をふきかけ、彼が身をクネらせて逃れようとする、

「そんな邪慳はいけないよ」

袋物の裁断や仕立てが階下や隣室でゴトゴト行われているのに、お内儀さんのそんな態度は傍若無人なものだった。

彼が肩を揉みほぐしている間も始終淫猥な話をしかけて来、彼は中年女がどんなに動物的なものかということマザマザと知った。

彼は話のついでにそのお内儀さんの噂を遠まわしに老婆に尋ねると、老婆はお内儀さんを知っていて、

「あそこに行っただけじゃないよ、あんた」

そして声を顫わしてお内儀さんの普段のふ

しだらな行状を彼に教えてくれた。

老婆の話によると袋物屋の主人は肺病やみで、到底お内儀さんに太刀打ち出来る体ではないのだった。お内儀さんは職人と公然と情を通じている、ということだった。

「ほんとうに、何といういやらしいことかしらん、なあ」

老婆は彼に相づちを求めて、「ほんとうに何といういやらしいことかしらん」と繰返した。捨吉はうなずいたが、しかし返事は声にならなかった。お内儀さんの肌の手ざわりを後めたい思いで反芻していた。

その頃、同級生のHという男の紹介で数度悪所へ足を運んでいた捨吉には、老婆の言葉がひとしお耳に痛かった。捨吉は将来のことを考えて緊張した日々を送っていたのだが、Hに二度三度と執拗くすすめられると断り切ることが出来なかった。そこは普通のしもたやで、内密に淫をひさいでいたのである。

女は彼が辛苦粒々して溜めた金を無造作に巻き上げ、そして彼が意地汚なく何時迄も楽しもうとすると邪慳にその手を払いのけて、

「そんないひっこうせんといて」

シュッとマッチをすって、紫煙が彼の鼻を撫で、取りつく島もなかった。捨吉は盲の自

分がツクツクと情なく、此の世が砂のように味気なかった。そしてもうヤケクソな気持ちで女を買いに通うのだった。

或る日、老婆の家を訪ねると、若やいだ娘の聲が捨吉を迎えた。女中奉公しているという老婆の孫娘らしかった。

老婆は彼が訪ねたのを非常に喜んで、

「房子、丁度よかったじゃないか」

娘を省みてそういった。奉公先の老母が肩を凝らしているという。彼は房子に手をひかれてその家を訪れた。

娘に手をひかれて歩くことはカナリ晴れがましいことだった。房子の手はふくよかで絹手袋のようだった。彼女は初心らしく、力を入れるような、抜くような至極アイマイな握りようだった。彼はその微妙な力の強弱で、房子の愛情、乃至は同情を推しはかったりした。

房子の主人は住宅街の一隅のひっそりした構えであった。表門から玄関までの石畳のまわりの竹の植えこみがサヤサヤと鳴って、その家の閑雅な造りを知らせた。畳の手ざわりもキュッと締っていて新畳らしかった。

老母というのはひどく尊大な女であった。五十過ぎと思われたが、肉用鶏のようにブク

ブクと肥えていた。

揉みほぐすのにも一々注文をつけて、意の通りに従わないと肝癪を立てて金切声で叱りつけた。房子は台所ではらはらしているようだったが、しかしこれも修業だと辛抱した。肉用鶏老婦人はリュマチスだからと下肢は揉ませず、盛んにその山のような腰をもませた。

彼は自分を未熟な青年とアナどっていい気になって腰を揉ましている彼女が滑稽であったが、又同時に生理的な不快をも感じないわけにゆかなかった。

今に彼女が仰向けにひっくりかえって、

「今度は前——」

などといいはしないかと彼は恐れたが流石にそんなことはいわず、二時間近く彼に汗を絞らせると、充分丹能したように満足な声音で、

「お前さんはあんまり力はないが上手だよ」

といった。捨吉は恐縮したように膝をそろえて頭を掻いた。彼はその色婆さんのお気に召したのか、それから時々治療に行くようになった。

数回目の時に彼は尋ねられるままに身上をザツと物語った。

「ほう、するとお前さんは、××町で焼け出

されたのかい」

婆さんはキンキンした声で意外な、というように反問した。そうしてその時二階から下りて来たらしい娘に向って、

「この按摩さんは、××町に住んでいたんだと。お前は××町の倉橋という家を覚えているかえ」

娘はしばらく黙っていた。捨吉の顔をじっと見詰めている気配であった。

捨吉の胸は不思議に高鳴った。何故だかわからなかったが不思議に高まってきた。

「倉橋さん、覚えてるわ」

鈴を振ったような透る声だった。娘が畳に坐る気配がした。

「覚えてるわ、倉橋さん」

虚脱したような、夢のような声で繰り返した。

「小学校で一緒だったもの」

「……………」

あッと思わず洩れかけた声を捨吉はのみこんだ。

「おや、恵子と同じ小学校だったのかい」

老婦人の声。

疑いもなかった。恵子だ。波江恵子だ。瞬間、彼の胸は破れそうに動悸打った。羞

恥と歓喜が炎のように彼の頬を染めたが、次の瞬間、彼は絶望の奈落につき放されて深くうなだれた。

(何という惨めな自分なのだろう。花のような美貌に恐らく輝いているであろう恵子の前に、自分は何という醜い姿を見せているのだろう——)

「そう——倉橋さんは、目が見えなくなったの」

恵子は声を途切らせた。

「皆、不幸になるのねえ」

妙に沈んだ声だった。皆？皆とは一体誰と誰を指すというんだらう。突嗟にそんな疑いが頭をかすめたが、捨吉はうなだれて声をのんでいた。

捨吉は恵子の家を訪れるのが、ハカナイ楽しみとなった。

恵子は心なしか彼が訪れるのを待ちうけてくれるようだった。彼は恵子の身の上が尋ねたくって堪らなかった。それとなく遠廻しに房子にさぐりを入れると、矢張り彼女は結婚をしているのだった。



彼はただ彼女の声を聴くために、惨めな思いを忍んでその家に入居した。

色婆さん——房子の話によると彼女は恵子の母であるそうだったが——彼女の要求はこのごろ次第にアクドクなってきた。このような母親からどうして恵子のような娘が生まれてきたのかと捨吉には奇怪なことに思われた。

或日彼はとうとう恵子の夫と出会うことになった。

「旦那様をお先にしておくれ」

恵子の母はまるで下女のような言葉使いで捨吉に耳うちをした。彼は急な階段を上って二階の居間にはいった。

恵子と恵子の夫とが二人っきりで暮している部屋に違

なかった。盲になった自分がその微妙な女の匂の漂った居間に誘われて、恵子の夫のため、何というミジメなことだ、と捨吉は苦しうに顔を歪めた。

(やっぱり！)

捨吉は鉄槌でぶん殴られたような思いであった。たとい未婚であっても、だからというて彼には何事もなし得ぬことであらうけれど

「御療治させていただきます」

彼は蒲団のすそに廻って頭を下げた。不気味な沈黙が来た。

「何だ。お前か」

その声は霹靂のように捨吉の面前でサクレツした。——八原純造の声ではないか。

彼は果然として坐っていた。

しばらく経った。

「よい。ひきとってくれ」

不気嫌にいうと彼から面を外らせる八原の気配がした。

彼は蹠跟と、よろめく足を踏みしめ踏みしめ、階下におりてきた。そして急に力の抜けたようにヘナヘナと坐りこんでしまった。

恵子の夫が八原……。否、八原の二号が恵子であったとは……。否、恵子が八原の二号の中の一人であったとは——。

捨吉は愛欲の奇妙な繋がり情なかつた。

彼の大切な夢はメチャメチャに破壊されてしまったのだ。八原に翻弄される恵子と思うと、彼は身も世もあらぬ昏乱に突き落された。

捨吉は、その日のうちに八原の家を出て、房子の祖母の家の三畳に引移った。かねがね親切なその老婆の好意に縋ったのだ。

彼はもうHと一緒に女買いに行くようなこ

とはなかつた。彼は暮しのために一生懸命に働いた。

或る日、房子が彼を呼びに来た。若奥様——

恵子がお呼びだといった。

恵子の母は髪結いに行つて留守だった。

恵子は捨吉を居間に招じ入れピタリと唐紙を閉して、興奮した口早な調子で、

「倉橋さんは、きつと私を蔑むでしょうね」

蔑んでも構わないわ、ええ、私ってそんな女なんですもの——取乱したその口調には不思議に切迫したものが籠っていて、捨吉はうつむいたきり首をふった。

「あのひとが厭なことを、あんたに強いるのも知っているわ」

あのひととは恵子の母親かと思わず彼が首筋を赫らめると、

「ママなものですか。私のママは七年も前に亡くなつてゐるわ」

思いがけず烈しい恵子の口調であつた。

——恵子の父親が事業に失敗して脳溢血で死んだのが三年前。親類縁者を転々としていた恵子はやがて生きるのが厭になり疲れはてて自殺した。幸か不幸か早期に発見され、薬を吐かせて救つてくれた青年に操を捧げると、男は意外にも獣であつた。散々自由にさ

れた後、ブクブク肥えた肉用鶏のような婆さんに数万円で売りとばされた。肉用鶏の婆さんは有名なポン引きで、恵子を娘に仕立てると彼女を喰物にして二号生活を営ませ、自分はダニのようにくっついて甘い汁を吸うのだ、と聴けば哀しい恵子の物語であつた。

最近八原の事業が思わしくなく、肉用鶏は新たな旦那を物色し始めたと思ひは語り、捨吉が突っ込んで聴くと恵子は先日値ぶみされ、その上体まで試された口吻だった。

「ねえ、こんなに迄して生きて行かなくっちゃならないのかしら。何て哀しいことなんでしょう。何て情ないことなんでしょう」

恵子は熱い涙をハラハラと捨吉の手の上に濡して訴えた。

「もうしばらくすると、私何処か遠い所へ行つてしまわなければならないの。捨吉さん。もうあなたの顔を見ることが出来なくなるのだわ。好きだったわ、小学校の時から」

捨吉と恵子是不幸な身をお互いに慰めあつた。

二人のハカナイ夢は、騒々しくひきあけられた表戸の軋みによって中断された。

「た、たいへん」

転がりこんで来たのは、髪結いの店の小僧

であった。

「死、死んだ」

小僧は息せき切ってそれだけいうと、阿呆のようにキョトンとして玄關に突っ立っていた。奥様が店で土色になってひっくりかえった、というのだった。

かねがね脚気で用心していたそうだったが急に衝心したのである。数時間後、苦悶をその顔面に刻みつけた巨きな肉体は、数時間前捨吉と恵子とが初めて結んだ夢の床に安置された。

肉用鶏の婆さんの没後、意外にも恵子の住んでいた住居がスッカリ恵子の所有に帰していることが判明した。彼女は奸智をめぐらして恵子を肺結核に仕立て、八原から毎月の夥しい療養費を要求したのである。八原が尻こみすると俄かに居直って慰謝料を請求したのであった。八原は家を提供した。土建業の彼にとっては比較的腹の痛まぬ出費であったのだ、しかし更に現金五万円、彼女にユスられた。

こうして数十万の財産を恵子のために残して因業な婆さんは往生したのである。

恵子と捨吉はささやかな家を見つけて引越した。捨吉は按摩師の免許状をとる一方、大



△体験、告白、手記△

禪・義兄弟

江戸 禪 男

一本の禪を通じて三十才の自動車セールスマンと二十二才の大学生が義兄弟になった、あのめぐりあいは運命とも奇蹟ともつかない出来事のようなだ。

ほんの僅かなきっかけで結ばれ、共同生活に発展し、愛禪への誓いが義兄弟の契りを結ぶことになるうなどは、思ってもいなかった僕にとって、兄貴との生活は夢のような毎日としか呼びようがない。しかしそれは考えてみると不思議だった。ボクはかつて同性に惹かれたなどという経験が一度もなかったからだ。

自分で六尺禪を常用する習慣から、海辺でたまにみかける禪男には親しみのようなものは感じたことはあったが、それは数少ない同好者という意味での近親感でしかなか

ったし、それ以上に僕は自分の禪姿を誇示するほうが好きだった。それが、兄貴を知ってからの歳月は僕をすっかり変えてしまった。

今では兄貴のいない僕の存在は考えられないくらいなのだ、六尺禪と兄貴——。これが僕のすべてなのだ。禪で明け、禪でくれる一日の生活も、兄貴がいるからこそはりあいもあり、喜びも二重になる。ボディビルやレスリングで体をきたえるのも、禪一本の兄貴とやるから楽しいのだ。

自動車セールスの優秀な販売員として成績をあげている兄貴の収入のおかげで、二間つずきの高級アパートに住む理由は、ドアを閉めた時から完全に二人だけの世界が創れるからだ。といっても露出症の我々は

学へ進むための準備をしはじめた。将来は大きな指圧療院を建てる宿願に燃え始めた。恵子は煙草屋を開くため玄関を店舗向きに改装させ出した。

——数カ月経った或る日、恵子は捨吉の耳に口をつけて囁いた。

「あたし、赤ちゃんが生れるらしいわ」

「え！」

彼はドキッとした。

「ぼくたちの子供だろうか？」

「当り前よ。バカね」

「いや、若し、だよ。若しぼくたちの赤ん坊の目が澄んでパッチリひらいてたら、どんなに嬉しいだろうと思ったんだ」

「そうね」

恵子は、フッと胸をつかれたように捨吉の顔を見ているようだったが、急に物狂おしく彼の頭を抱えこんだ。彼は臉の上に恵子の熱い唇を感じた。

「大丈夫よ。きつと、きつと美しい澄んだ目の赤ちゃんだわ」

恵子の流す涙が生温かく捨吉の額を濡らした。彼はうんとうなずきながら、やっぱり涙を流していた。(終)

日曜や休日には、春さきから禪日光浴をやり、隣室の外国人夫婦から驚異の目でみはられたり、禪誇示のために、わざわざ銭湯に行くこともあるのだ。

共同生活の最初の日から、兄貴と僕は室内での生活はすべて禪一本で暮すことを実行している。服は外出の時だけという裸体主義なのだ。起きてからねるまで、食事も掃除も洗たくも、そして日常生活のすべてのことを僕も兄貴も禪一本でやっているがひどく新鮮で充実した毎日だ。

服を着ていては、とうてい味わえないような楽しさが室内にあふれているのだ。外から帰って玄関口で、靴を脱ぐのと同時にすっ裸になる時、僕はひどく開放された自由な人間に戻れるのだ。我々にはもう禪以外の衣裳は本当は不必要なのだ。

鍛えた皮膚には冬のきびしい寒さも真夏の暑さも同じ程度のものにしか感じないし毎夕食後の休憩のあとにやるレスリングとボディビルは、いよいよ身体を鍛錬してゆく。多分に兄貴の考案したアイデアをとり入れたレスリングは、時にはS・Mプレイに発洩してゆくが、いつも責められる僕にとっては、これも鍛錬のひとつなのだ。

そんな時、兄貴は酔ったような目をして苦痛と快感の境でのたうちまわっている僕を心よげに眺め、次々と新手の責めを僕の体の実験してゆくのだ。

プレイ用の禪は夏は水泳に愛用する赤禪である。赤禪の象徴する強烈な色彩は、そのまま我々のプレイの激しさの象徴でもある。兄貴が赤禪に締めかえた時、それは直ちにプレイ開始の合図である。

僕はイヤオウなしに禪を締めかえなければならぬのだ。どういう風の吹きまわしなのか、禪に浴衣をひっかけた兄貴が、夕食の後片づけをやっている僕の尻に鞭をとばす痛さにとびあがった時、裾をまくった兄貴の股間にひらめいた赤禪に僕は不意をつかれてドキッとしたことがあった。

こういう夜の兄貴は、ふだんのさっぱりした性格とはうって変った、もの凄い執拗な責め方で僕に悲鳴をあげさせるのだ。あぐらをかかされ、後手にいわかれて縄でギリギリと締めつけられる時、僕は倒錯の喜びに汗みどろとなって床にはいつくばり狂ったように、のたうちまわるのだ。

(未完)



〔試作室レポート〕

おむつカバーマニヤの

試作品第三号

△ゴムズロース▽

関根 彰

試作室レポートも、三十六年の十二月号にのったものから数えて、三ツ目になりますので、今回は、前から欲しいと思っていた、ゴムズロースを作ってみました。

ゴムズロースとは、その名の通り、ゴム布で作ったズロースで、その形、構造共に、普通のズロースと変わりありません。只、布地の代りにゴムを使った丈のものです。実際に製作し、使用してみると、仲々、頭の中で考えた様に簡単にはいきません。

第一に、その形ですが、普通ズロースと云われているものは、所謂ブルマー形のもので腰まわり、尻まわり、腿裾口等も非常にゆったりと作っており、腰と太股の所にゴムを入れて絞ってある訳です。所が、ゴムの薄い練生地丈で作りますと、だらだらしたものになってしまい、ズロース特有の、ふっくらした張りが出ないのです。たたりとたれ下った、だらしないものになってしまうので、あまりブルマー形にする訳にもいかず、ズロース

と云うよりも、むしろショーツ（パンティ）に近い形になってしまいました。

第二に股の所ですが、布の場合は、股のゴムを少々きつくしておいても、はいてから腿にゴムの跡がつく丈ですが、ゴムで作りますと、肌の滑りが悪く、うまくはけません。腿の裾口を片方ずつひろげ乍ら、上の方へ交互に引き上げる様になってしまいます。これでは不便なので、股の裾口に、ナイロントリコットをつけました。ナイロントリコットは肌

の滑りもよく、柔いので快適です。

第三に、腰の所にも、当然ゴムを入れる訳ですが、ゴム布を折り返して、中にゴム紐を入れた丈では弱いので、一吋巾のゴムテープを縫いつけ、更にはき良くする為に、脇を五吋程あけて、そこにチャックをつけました。はく時はチャックを下げてやりますと、楽にはけます。

以上の様な点に副って製作する訳ですが、普通のズロースの型紙を使わず、おむつカバーの型紙を使用します。その理由は、普通のズロースは、大抵、四枚はぎ位になっておりそれを縫い合せてあるのですから、縫う所が多くなるのと、肌に当る感触が悪くなるのを避ける為です。おむつカバーのものですと、両脇を縫う丈で済みますから、縫製も楽ですし、使用感も快適です。

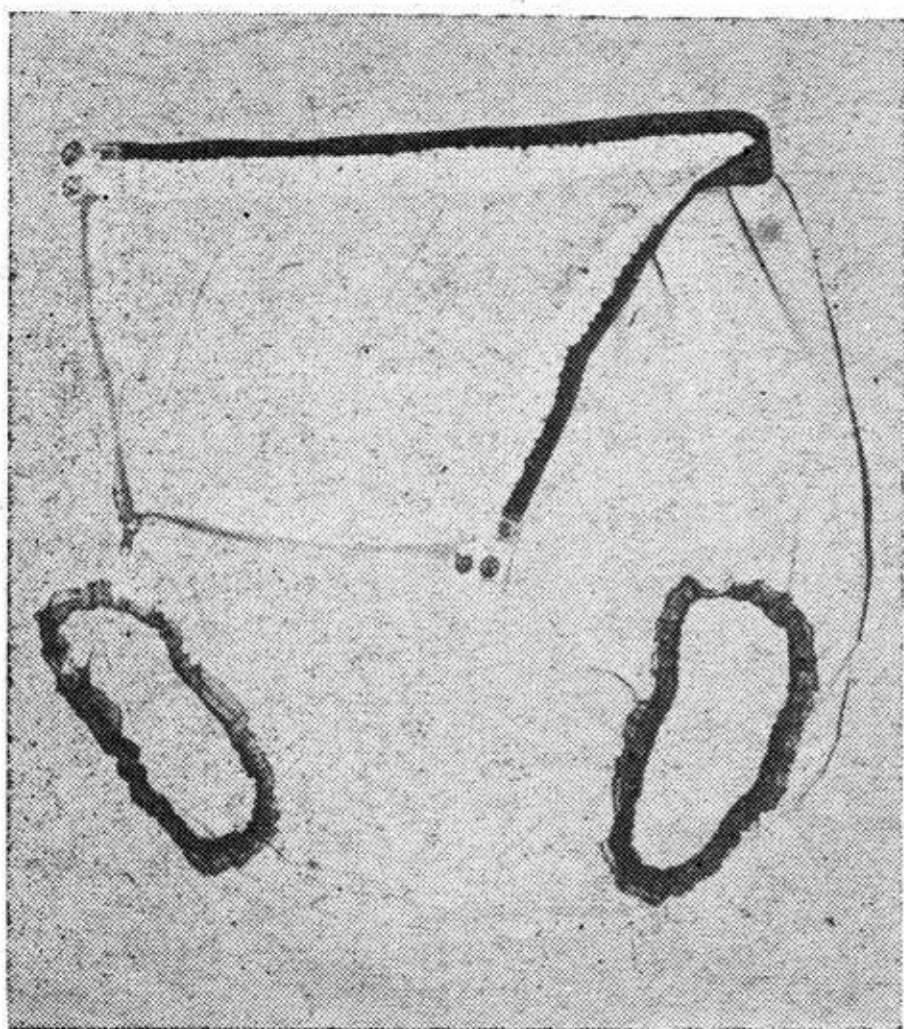
材料、ゴム布、○・一ミリ〜○・一五ミリ位のもの、一米〜一米半位。一吋巾のゴムテープ腰周囲分。ゴム紐(腿裾口用)一米二十位。トリコット又はナイロン等の薄布、(腿裾口用、巾一糎五耗位のもの一米半位、私は黒いナイロンのストッキングを用いました。)他に五吋位のチャック一本、バネホック二ヶ糸等。

加工、先ずゴム布の裁断ですが、これは、前回使ったおむつカバーの型紙を利用すれば簡単で、それに合せて裁断します。切りましたら、先ず両脇を縫いますが、片側にチャックをつける予定ですから、位置をきめて、先にチャックを縫いつけます。その時は、バイヤステープか何かで、裏打してやりませんと、ゴムが薄いので、意外に早く傷んでしまいます。

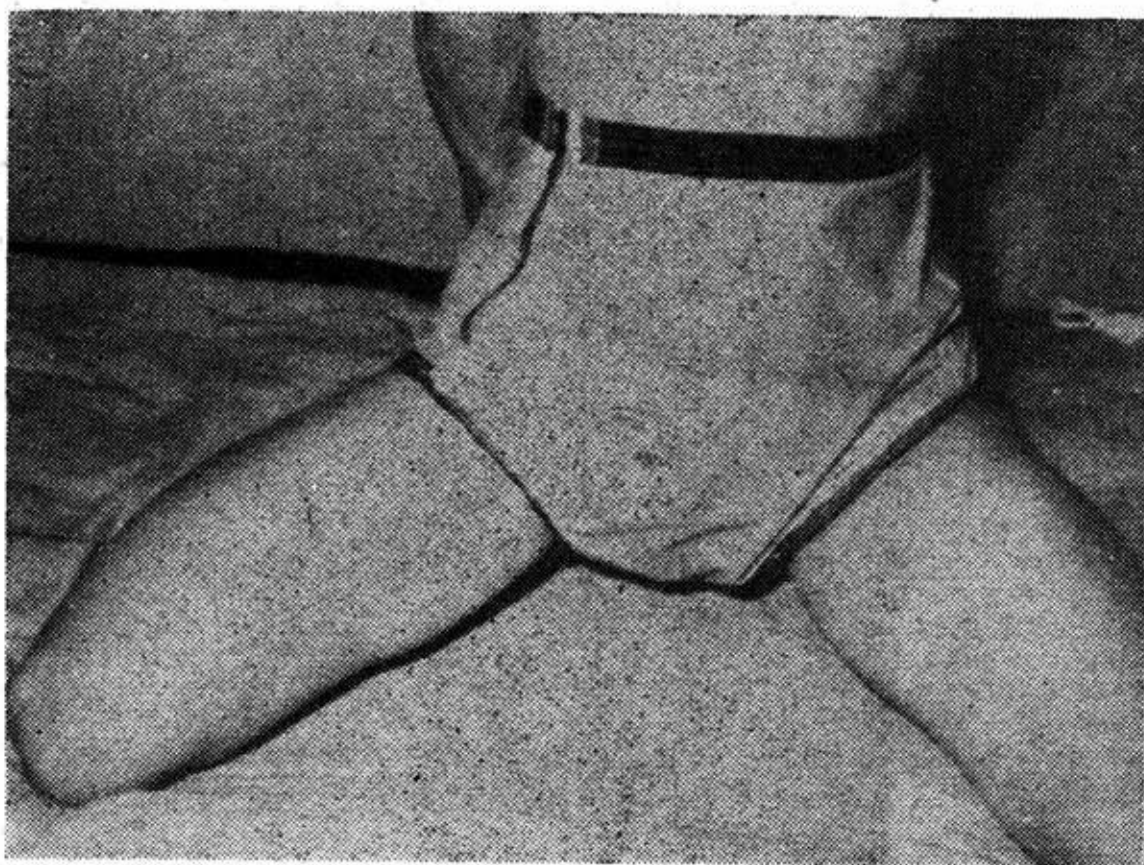
尚チャックをつけない方も、縫った上をバイヤステープで折えて、ミシンをかけてやりますと完全です。それから、腰周囲のゴムテープを縫いつけますが、これは、コルセット兼用おむつカバーの所でやった様に、ゴムテープを引張って、ゴム布と同じ長さにして置いて縫い付けるので、一寸難かしい所ですが、マチ針を一糎おき位に打つてやれば、それ程困難ではありません。これもバイヤステープで裏打してやります。その際、ミシンの糸は、あまり引

きを強くしてやりますと、伸び縮みしなくなるので、少しゆるい位にしてやる方が安全です。尚このゴムテープの両端には、カギホックか、バネホックを二ヶ位つけて、止める様にします。私は、おむつカバー等に使う、バネホックを用いました。それが終ると、股の所を縫う訳ですが、ゴムを内側又は外側に折り返して、その上に用意したナイロンかトリ

ゴムズロースのチャックを開いて内側を見せたところ



ゴムズロースを着用したところ



コットの薄布をかぶせてミシンをかけます。
この中にゴム紐が通るので、少し余裕
をみて縫います。

中にゴム紐を通せば、ゴムズロースの完成

となります。

さて、このゴムズロースを着用してみ
た感じですが、想像していた通り、非常
にむれます。これは元来、総ゴムのおむ
つカバーと同じもので、片方の脇が開
かない様になっている丈、余計に密閉さ
れた形だからです。三十分も着用してい
ますと、中が全く濡れた様になってしま
います。長時間着用するには、ゴムズロ
ースの下に汗取用の下ばきをはくか、お
むつをあてなければなりません。その意
味では、ズロース型のおむつカバーだと
も云えましょう。

通気性のない事と、ゴムの断熱性によ
って、ズロースの中がカツカツと熱く
なって来ると、私の心の中迄、火の様に
燃えて来る様です。

次にその肌に当る感触ですが、非常に
薄いゴムを使ったので、ヒタヒタと腰を
包むタッチは柔かく、とても素敵です。

又その作りだすヒダが素晴らしく、腰と
股の黒い縁取りと相俟って、視覚的にも満足
させて呉れます。

欠点としては、ゴムが薄いので、破れやす
く、不用意に引き上げたりすると、縫目から

破れてしまいます。もう一つの欠点は、脇に
つけたチャックで、アイディアとしては悪く
ないのですが、着用してみた感じはあまり面
白くありません。金具が肌に当ると、汗の
ために金具の色が変色して黒ずんで来ます。
出来ればナイロンフアスナーを使うか、又は
ベビー用のズロース型おむつカバーの様に、
脇に三角形のマチを入れて、ホックでとめ
て、チャックを全く止めてしまおうのも一つ
の方法だと思います。目下、更に快適なもの
にするために種々検討中です。

尚、この系統に属するものですが、種々な
ゴム(薄いスポンジ、パイルゴム、ウーリー
ゴム等)を使って、ゴムズロースを作ってみ
たいと思っています。就中、スポンジを使っ
て、体に密着するパンティを作り、キャミソ
ールブラジャーを同じもので作って着用させ
れば、保護衣を兼ねた責衣になり、サドの方
も、肌を傷つけないで充分貴める事が出来る
のではないのでしょうか。そんな夢を描き乍ら
拙稿試作室レポートを終わります。

×
×
×
×
×

Sプレイに利用できる

新しい女性の下着

三 条 卓 史

新しい女性の下着——と云っても、私の考案したものは普通の婦人が日常佩用しているそれではありません。普通の下着類は、例外なく布を主体としていますが、これは全然布以外の材料を用い、特定の人が限られた場合にのみ着用する特殊なものばかりです。次にその二、三を紹介してみましよう。

▼空罐のブラジャー

ジュース、ビール、魚貝、肉類など、さまざまな空缶を利用します。それらの缶を、ブ

リキ鉄で輪切りにし、両側面に穴を開けて、丁度水中眼鏡の様に繋ぎ合せます。鉄の切り口は却って不器用にジグザクに切った方が刺激が強くて効果的です。(図一)

極く幅の狭いものは、それを着用した上に、パットや市販のブラジャーを着けて、普通の仕事なら出来ます。幅の広い物や、底のついている物は、胸の形が違って来るので、一寸薄着での外出には向きません。だが、又別な意味では、強いてそれを着けたまま。「一寸煙草を買って来い」とか、何か用事を

こしらえて外出を命じることも興味がありましよう。それは、そのブラジャーを着用した女性が、何とかして胸の変った形を他人に覺られまいとして工夫する格好に興味が持たれるからです。

室内専用としては五号缶の上部だけを切り去って前と同じように紐を着けます。(図二)これを着用したまま廊下の拭掃除や、たらいでの洗濯をさせますと美しい構図が得られます。缶の底を叩けば、そのまま責道具となるからとても便利です。

▼王冠ベルト

ビールやサイダーの口についている王冠(金属の栓)を多数用意します。内側のキルクを取り去り、王冠の真中に鉤穴のように二個の穴をあけます。別にインサイドベルトを用意して、そのベルトに王冠を並べて糸で縫い付けます。この王冠は利用範囲が広く、このまま両端に紐を着ければ緊縛用の綱となり、(図三)ネグリジエやパンティの内部に取付ければ変った責めに利用できます。

王冠をブラジャーにするには針金を紡錘型にした物を二個作り、それに糸で繫ぎます。この場合王冠の一つ一つがくるくると廻りま

すから、背面へセロテープを貼って併列するようによします。(図四) この王冠ブラジャーで緊められた乳房の格好は亦面白いものです。

▼算盤ロープ

これは、俗に『問屋算盤』といわれている大型の算盤を用います。先ず算盤を壊して、玉をみんなバラバラにします。そして別に用意した適当な太さの綿ロープの中途に結び目を作り、反対の端から順々に玉を通して行きます。思う程の長さに玉が通ったら、その終りにも結び目を作って少し長目に綱を切りまします。長短それぞれに幾種類か作って置けば、これはマニアには、絶好の用具となりまします。

算盤玉でブラジャーを作るには、余り細くない針金を六十糎程切り、それを垂鈴型(図五)、のように曲げてから玉を両端の丸い部分だけに通し、真中は糸が極く細い針金でくるくる巻いて止めます。細い針金で巻いた上をハンダ付けすれば永久的なものとなりまします。その両端に紐を着ければ出来上りです。

▼牡蠣殻パンティ

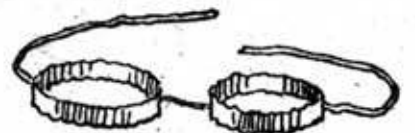
これは牡蠣の殻が手に入らなければ駄目で

すが瀬戸内の海岸地帯には何処でも山のように捨ててあるもので、知人でもあれば安価で入手できます。牡蠣には一定の形状はないが、中には藤壺などが附着したりしているものがあって変化に富んでいます。この貝の四隅に錐で穴をあけ、平ゴム紐を編むようにして縦横に通して行きます。初め大体の寸法を図り、三角形に並べて置いてからかがって行き、最後に二枚の三角形を端のゴム紐で緊ぎ合わせると、これは又風流なパンティが出来上ります。(図六)

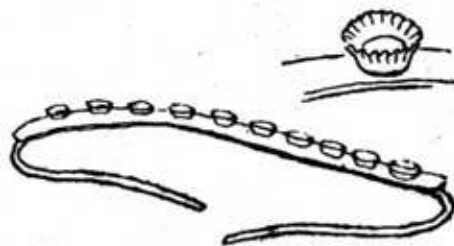
▼棕櫚の腰簍

腰簍といえは南洋土人の晴着かも知れないが、これも結構下着としての役目を果させることが出来ます。

荒物屋で棕櫚の葉を四、五枚買って来て、缺で適当な幅に切り、インサイドベルトに縫いつければ簡単にできます。これは腰簍の上からパンティを穿かせることにより、また、



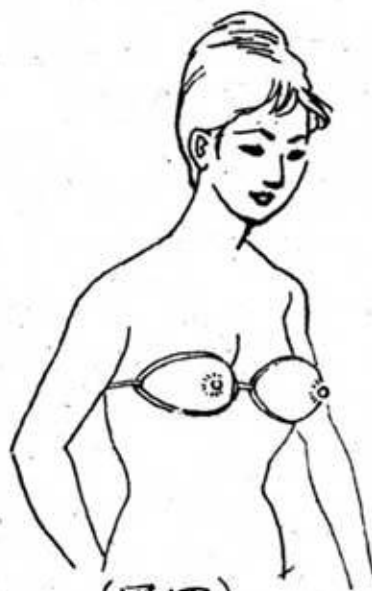
(図一)



(図三)



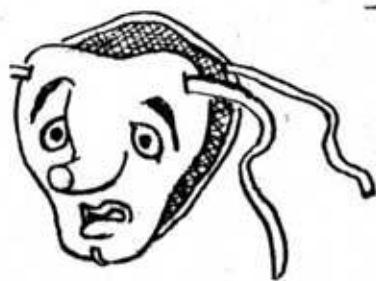
(図二)



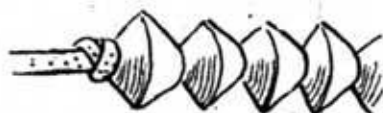
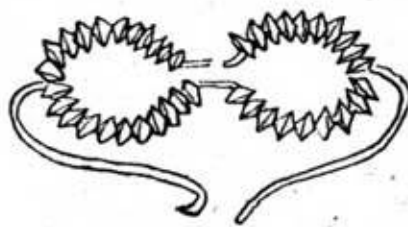
(図四)

反対に髭を上に向けて着用させ、屈伸や横捻転体操をさせることによって櫛り責めの用具としても転用できます。

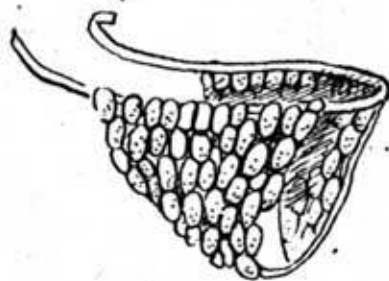
▼貝殻の腰簍



(図七)



(図五)



(図六)

浅利、はまぐり、かきなどの貝殻なら何でもよい。貝の上下に穴をあけ、縄のれんのように紐を通して吊り下げて腰に纏わせます。中心を長く、左右を次第に短かくして下肢の曲折点に略々合せるのもよい。これを前記の牡蛎のパンティの上から締めると、佩用者が

動くたびにカラカラと快音を発して興趣を添えるものです。

▼仮面パンティ

おもちゃ屋へ行くと、おかめやひょっとこや、天狗、般若などさまざまな仮面があります。それらの仮面の左右上端と下端とに紐をつけて（左右は平ゴムがよい）二面を繋ぎ合せると面白い物が出来あがる。（図七）殊に天狗仮面のパンティの上からタイトのスカートを穿かせると佩用者は一種変った自虐感を味わうことができましよう。

▼女 褌

最後に女褌について――。

時折女褌愛好者の声を聞きますが、私は六尺褌や越中褌のような男性用のものを、そのまま用いる事に余り興味を持ちません。次のものはいずれも女性専用、しかも特殊な傾向を持つか、それに理解のある者のみに佩用されるものです。

▼馬鈴褌

皮ベルトを二本用意し、T字型に繋ぐ。そしてベルトの要所に適當の大きさの鈴を十数個取付けて、その音色を聞くもので

す。

▼鋳打褌

犬の頸輪を数個買って来て適當な長さにT字型に繋ぐのですが、これは鋳を内側に向けて着用させるものです。首輪に取付けてある鎖止め用の金具は、そのまま責めの場合の首を繋ぐ拠点となるから妙です。

▼十字架褌

これは薄い真鍮板を十字型に切って作るもので、幅や長さは各自の趣好に従えばよろしい。下部と左右は彎曲させ、端に穴を穿って針金を通す。力士の褌のように、幅をうんと広くしておいて、歩行の変化を求めるのもよく、また十字の頂点を特に広く長くし、両の乳房を突き上げる位置まで伸ばしておくのも面白い。

以上は比較的手に入り易い材料を用いた新しい婦人の下着の考案について書きましたが、これらを種々組合せることにより、マニアにとっては手離し難い逸品を作り上げる事ができると信じます。対象者を持っておられる方は、一度これらを試用して、その結果を發表願えれば幸甚です。

〔奴隷国探検〕

サルジニア探訪記

(第二回)

阿 留 品 叉 怒

僕が、ベッドにされた奴隷女たちの苦しみも知らず、完全な熟睡から目醒めたのは十時すぎだった。

既に陽光は輝き、豪華な城のすみずみまでをまばゆく照し、調度のたぐいを輝やかせていた。

僕はあわて、ベッドからとび起きた。

すると金の鎖と枷をつけられた奴隷女が、洗顔の道具をささげて膝まづいているのが眼にとまった。

たずねるまでもなく、枷をつけていない人間は、その部屋で僕一人だから、それが僕の

ための道具であるのは明らかだった。

洗顔をすませ、待ち構えていた輿に乗って広間までゆくと、ナハール君はもう起きていて、鳥籠のように太い鎖で吊り下げられている檻の前に立ち、細いしなやかな棒で、中の奴隷女の鼻をくすぐっていた。

鎖で拘束され、その上小さい檻に押し込まれているものだから、奴隷女は身動きもできず、悲しげに鼻腔をひくひくうごめかし、わずかに頭をふるばかりである。

「やあ、お早よう。よくねむれたかい？」
僕の姿を認めたナハール君は、一時そのい

たずらを中断して云った。

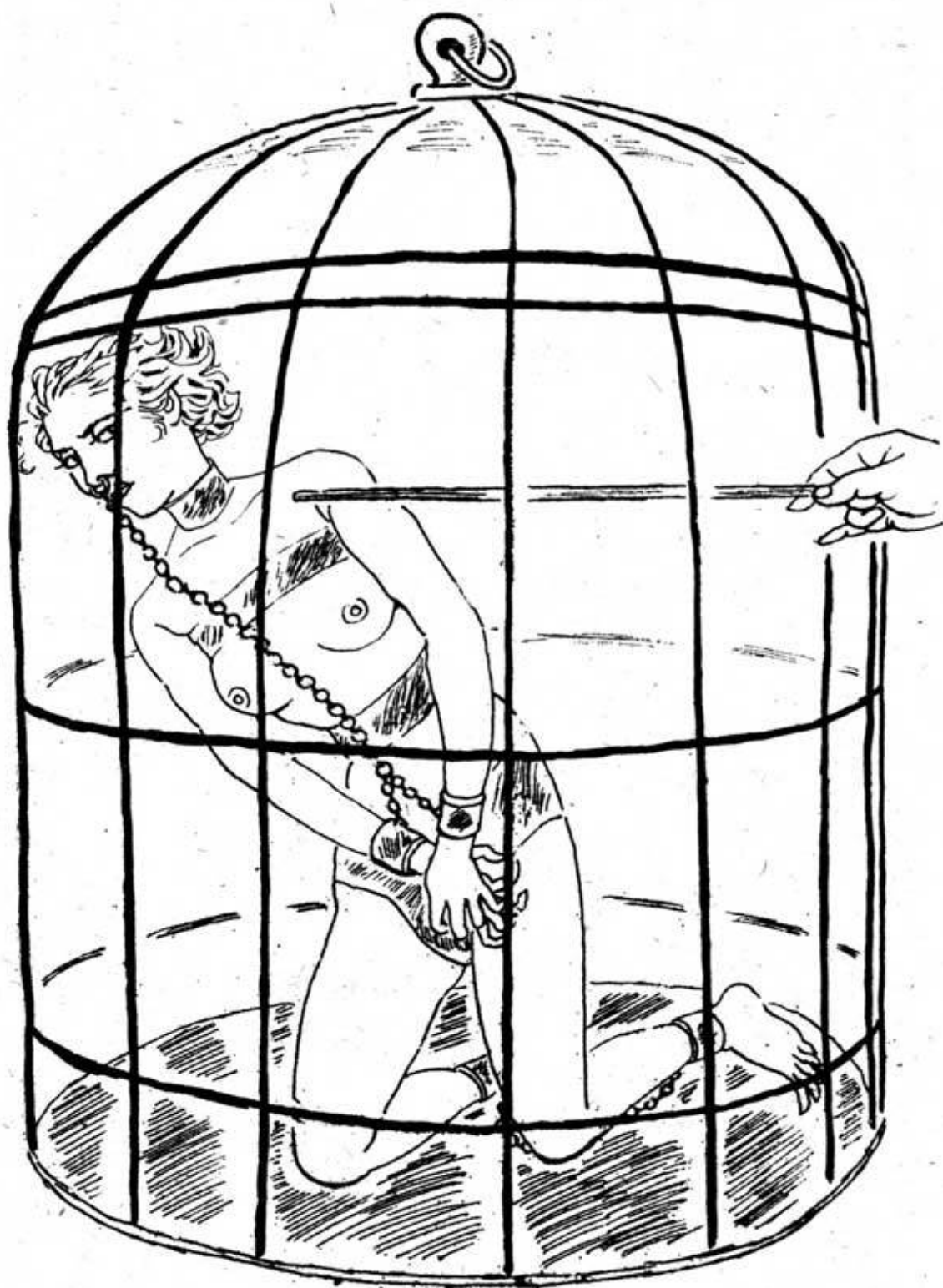
僕は熟睡の礼を云った。

ナハール君は再び檻に眼をやり、細い棒をさし入れながら、

「なかなか鼻の孔につつまむのは、むづかしいものだよ。」

といたずらっぽく云った。

その中に細い棒がうまく奴隷女の鼻孔にはいったものだから、奴隷女はしばらく顔をしかめて耐えていたものの、遂にたまらず、嵌口具の中でくさめをした。
「この遊戯は面白いよ。」



ナハール君は軽く笑いながら、僕にもやるかとたずねた。

僕は別段深い理由もなく辞退した。強いて云えば、奴隷女の穿かされているゴムのおしめカバーに排泄物が貯っているらしく、腰のあたりが少しふくらんでいるのが気になり、

可哀いそうになったといったところである。

しかしナハール君は、それを僕の無関心と判断し、更に強い刺戟を求めているのだと考えたらしかった。

「そうだね。ゆっくり朝食でもしたためながら、昨日のつづきの座興を楽しむことにする

か。」と云った。

僕たちは、昨日と同じような女体安楽椅子に腰を下ろし、テーブルの上に並べられる料理を口にしながら、多分昼食も兼用になるのではないかと、僕は時間と考えあわせて、すこし多い目お腹におさめた。事実その料理は朝食にしては贅沢すぎた。

「昨夜はベッドが動いてね」

ナハール君は果物を食べながら云った。

「僕はあまりよくねむれなかったんだよ。ずいぶん、きびしく訓練してあるはずなんだけど、一匹補充したのが、そいつが動いたのだよ。君の方はそんなことはなかったかい？」

僕は、僕のためにあたらしく補充を余儀なくさせたことを詫び、全然動かなかったと答えた。

「そう、それはよかった。君のためにも、ベッドのためにもね」

ナハール君は鷹揚にうなずいた。

「僕の方のベッドはそのためちよつといためつけてやらなきゃならないんだよ。もっとも一度動いた奴隷は二度とベッドには使ってやらないのだけど、他の者への見せしめのためにも、それは必要なんだよ。昨日云ったように、他にもたくさんいるんだけど、ぼつぼつ

見てもらうことにするよ。いくらきびしく罰しても、奴隷というのは次々といろんな失策をやらかすものなんだ。」

ナハール君は金の枷と鎖をつけられた女人犬に食物を吐きだしてやりながら云いつづけた。

「ベッドを早速処罰するか、それともそいつを後回しにして拘置所につないでおき、予定通り、反抗奴隷や器物破損奴隷などを処罰するか、どっちにしたら良いだろうね。あまり僕の勝手な真似をするのは、遠来の客である君を遇する適切な方法ではないからね」

僕はその好意を感謝し、どちらを先にしてもらっても構わない、と答えた。

「ベッドの処罰には時間がかかるんだよ。だから訊ねたわけなんだけど、まあその間に、君の拘置所でも見物してもらおうとしようか。どんな風にして奴隷が閉じこめられているかを見るのも、まんざら面白くないわけでもないだろう。断っておくけど、これは奴隷矯正所と違ってあくまで拘置所なんだから、その点間違わないようにしてくれ給え。矯正所の方は、もう少し奴隷の取り扱いというものに慣れてもらわないと見てもらうわけにはゆかないんだよ。君なら大丈夫だと思うけど、人

によっては気分が悪くなる人もあるんでね。それではそろそろはじめようか」

ナハール君の合図と共に、黒の店服を着た女監督が、ベッドの掟を犯して動いた女奴隷の首枷の鎖を引いてあらわれた。

そして、その女奴隷はナハール君の前に、他の奴隷と同じように鎖を鳴らして膝まづき、「御主人様のベッドという名誉あるお仕事をお与え下さったもかかわらず、わたしのはしたなさから身動きしてしまい、御安眠をさまたげ申し訳ございません。どうぞよろしく御教育下さいませ」

と蒼い顔をして云った。

ナハール君は女監督に眼で合図した。

早速女奴隷にはゴムのパンティが穿かされた。そして後ろ手に枷で固定され、額と顎と後頭部をおさえる顔枷がつけられた。そして運び込まれた器具の台上に両足首を少し開いて枷で固定された。

器具というのは滑車だった。そして、そこから延びる鎖が、顔枷の上部についている金具と連結された。

女監督は冷酷に滑車を回しはじめた。

鎖は引かれ、女奴隷はのけぞるような恰好を次第に強いられた。滑車は未だ回しつづ

られている。鎖はぴんと張り、女奴隷の頭を尻に接近させてゆく。

それでも滑車は回しつづけられる。完全に後頭部は尻にくついった。

「うーん」

女奴隷の口から、その時はじめておしこしたような、かすかなうめきが洩れた。

「こんなことでなんだい」

女監督は女奴隷の太股に鞭を与えた。

「そんなことだから大切な役目をつとめられないんだよ。」

歯をくいしばった女奴隷の額は油汗で光っていた。

「監督は熟練していて、適度を心得ているんだよ」

ナハール君は面白そうに、その様子を見ながら僕に云った。

「あまり無茶をすると、気絶するか、骨を折るようなことがあるんでね。あの様子なら未だ大丈夫だろうね」

滑車は未だ回された。

女奴隷の頭は完全にゴムのパンティにくついった。

腹は、はち切れそうに張り、ちょっとした傷でもあれば、そこからビリビリとはちさけ

そうだった。

滑車はそのまま固定された。

「ああしてしばらく置いておくんだよ」

ナハール君は、おどろきみつめている僕にほほ笑みかけながら云った。

「その間に拘置所を君に見物してもらおう。案内は執事がやってくれるから、なんでも思いついたことは、そいつに云いつけてくれたまえ。」

執事というのは、僕がこの城で見た唯一人の男性だった。しかし老人であり、しかも礼服の下から首枷がのぞいているので、それも奴隷であることは明らかだった。

「この男は去勢してあるんだよ」

ナハール君は、たくさんの女奴隷にかこまれて暮す老人の残酷な運命を説明した。

「忠実な男でね、もう十年ばかりも、この仕事を大過なく勤めているんだよ」

ナハール君の前に一度膝まづき、それから後は不動の姿勢を保っている執事を僕はちらっと見た。

「仕事に熱心なのは当然だけどね。奴隷とはいえ裸の女を毎日見ていられるのだし、仕事もこいつが以前やっていたものと較べたら遊んでいるようなものだからね。誰だって逆も

どりはしたくないよね」

それからナハール君は執事に女人馬の用意をするよう命令した。

かしこまって引き下った執事は、やがてその女人馬なるものを曳いてあらわれた。

それは馬具のようなものをつけられた、四つん這いになった女奴隷だった。

太い鉄の棒が、這っている身体の首枷のところから足枷のところまでわたされ、それに鎖で枷が連結されている。首枷と足枷の他に、手枷と腰枷と胸枷がつけられており、起ち上ることができぬよう尻のところには針のついた細い棒がつけられ、口にはくつわがはめられている。

「すこしのろいのが欠点だけど」

とナハール君は僕に云った。

「拘置所を見物するには早く歩かせる必要はないからね。それでも早く歩かせたい時は、尻を鞭で打てば、相当な速度だってだせるんだよ。これは罪のつぐないをしている奴隷なんだから遠慮なく鞭打てば良いのだよ。それほど罪でなかったんだけど、矯正所へ送られなかったのを感謝しているくらいなんだからね。一緒に君とゆけないのが残念だが、僕にもすこし仕事が残っているんだよ。なあに

大したものじゃないよ。君が拘置所の見物を終って帰ってくる頃には、僕の仕事もすんでいるよ。その頃には反抗奴隷の懲罰をはじめても良い頃だね。さあ遠慮なく乗り給え。」

僕はためらいながらも、女人馬に乗った。そして鐙に足をかけ、くつわの鎖を手を持った。馬具の位置が割と高く、しっかり奴隷の腰枷と胸枷につけられているので、ぐらつくようなこともなく、乗心地は悪くなかった。

執事は僕に乗馬用の小さい鞭を、うやうやしくさしだした。そして女人馬に歩けと命令した。

相当な訓練が施してあるらしく、女人馬になっている奴隷は、重い馬具や鎖や鉄の棒に加うるに、僕の体重をまで背に受けながら、割としっかりした歩調で這いはじめた。

もちろん大体想像はできるけど、しかし結局は僕の知ることのできない苦痛と努力がそれには秘められているのであろう。そしてよりおそろしい刑罰をおそれる心が、女人馬の手足をしっかり支えているのであろう。

僕は女人馬に同情しながら、ナハール君の不興をおそれ、馬具に尻を落着けてしまった。

広間を出てしばらくゆくと、鉄の重々しい

扉があった。

執事はそれにとりつけられてある共鳴器をならした。

小さい覗き穴があき、やがてナハール君の命令がゆきとどいているのである。扉はゆっくり開けられた。

「拘置所でございます」

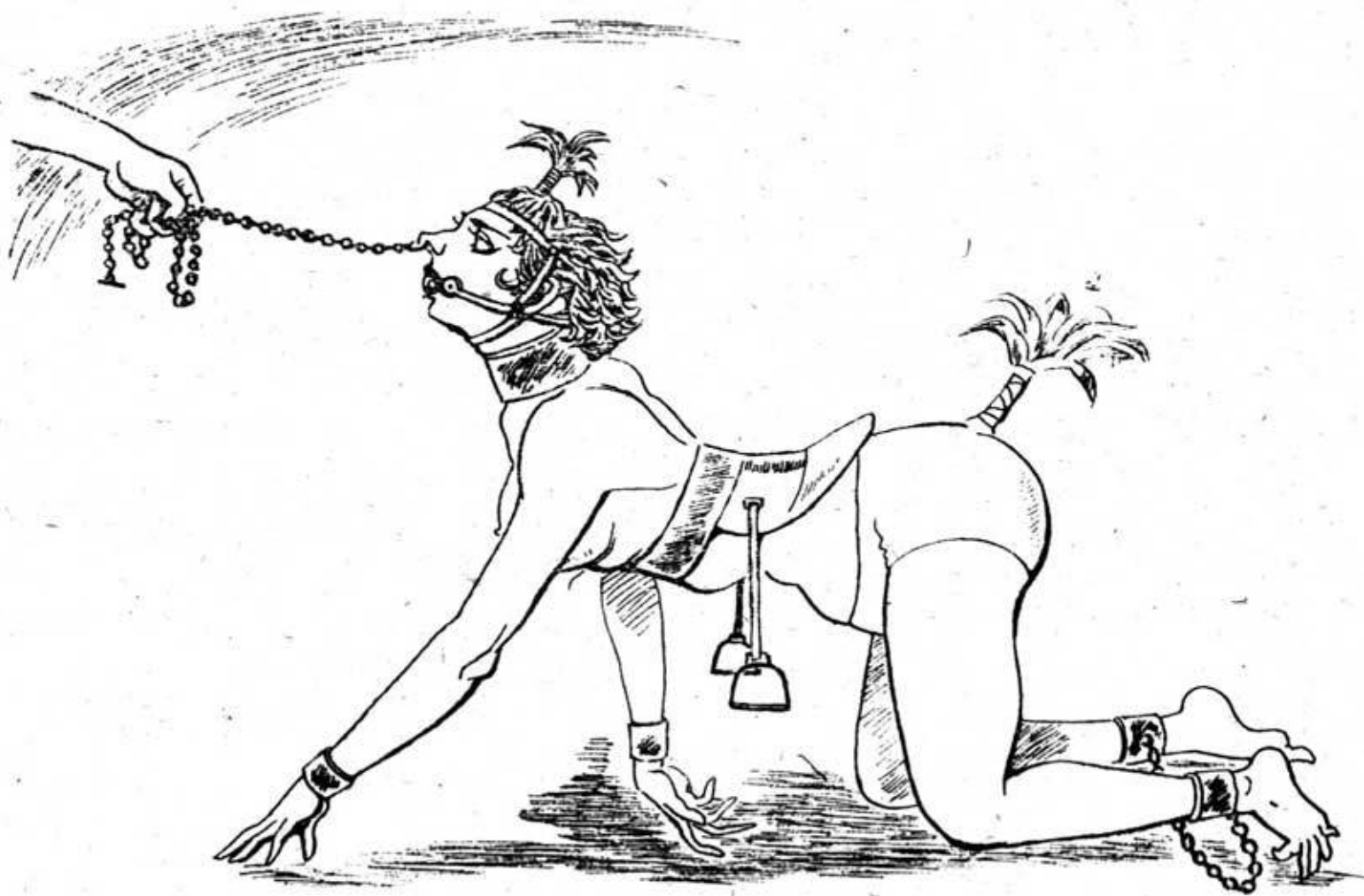
執事は僕に丁寧云った。

それは鞭を手に持った洋服の女監督たちのいるコンクリートで固められた殺風景な部屋だった。

そしてその間を通った向い側の壁に頑丈そうな鉄格子がとりつけられており、更にその中の薄暗い廊下と、両側にある部屋についている鉄格子をのぞかせていた。

僕は女人馬が次第に苦しうにあえぎはじめているのに気づいて降りようとした。しかしすぐ執事におしとどめられた。

「どうかそのままお乗りになっ
て下さいませ。馬ばかりでなく、わたし
めも御主人の御叱責をうけねばなりま
せん、どうぞお願い申し上げます。こ
ういうことにかけては、それはそれは



きびしい御主人様でいらっしゃいますので」

僕はナハール君が見ていなければ良いではないか、と云いかけたが、女監督たちもいることであり、そのままうなづいて乗りつづけることにした。

女監督の中の一人が鉄格子についているくぐり戸を開けた。それは女人馬に乗っている僕にはすこし小さかったので、僕は中へ入る時、ちょっと身をかめねばならなかった。

廊下の最初にある鉄格子は、小さな罪なるものを犯した十数人の女奴隷が、首枷の鎖を壁に固定されうずくまっていた。

しかしかの女たちは、女人馬に乗っている僕を見ると、あわてて鎖を鳴らして居ずまいを直し、おそれおののくものようにひれ伏した。

鉄格子が開けられ、僕は導かれるままに、女人馬に乗って中へ入った。

「これから餌をやる時間でございますが、ごらんにいれて差し支えございませんでしょうか」

女監督の一人が僕に云った。僕は黙

ってうなづいた。

奴隷たちは首枷の鎖を外された。しかし部屋の際に置かれた、どろどろした薄黒いもののはいつている餌箱へまで行くあいだ、かの女たちは、いざるような奇妙な歩き方をした。

いぶかりからよく見ると、かの女たちは手首と足首の枷を短い鎖で連結されているのである。腰を伸ばしてまっすぐ歩けないのはもちろん、手をさえ使うことはできないだ。

やがてかの女たちは、腰を窮屈そうに曲げ手足と一緒に動かさねば歩けない不自然な姿勢のまま、やっと餌箱までいざり寄った。

突然、鞭と甲高い悲鳴が部屋中に響き渡った。

「誰がなめろと云った。許しがあるまで首をつつこんではいけないと、あれほど云っておいたじゃないか、懲戒だよ。」

女監督は規則違反を犯した一人の女奴隷の首枷をひつつかみ、苦しうにあえいでいるのも構わず引きずって列外へつれ出した。そして左右の足枷を鍵一つで固定し、嵌口具をかましてしまった。

他の女奴隷たちは、空腹に生唾をのみ込みながら、女監督の懲戒をおそれ、神妙に餌

箱の前に、おあづけをくらった犬のように座っていた。

女監督は意地悪く、とるにも足らぬ注意を奴隷たちに聞かせ、じらすようになかなか食えとは云わなかった。

女奴隷たちの頭は物欲しげにゆらぎ、中にはだらしなく涎をたらす者すらいた。

僕はそれを見て、かの女たちにあたえられている飢への責苦のきびしさを想像した。

「なめてよし」

女監督が云うや否や、奴隷たちは手を使えぬ不自由な姿勢で餌箱に首をつつ込み、ぴちやぴちや音をさせながら、顔の汚れるのもかまわず歯と唇で、得体の知れないどすくろい液体をなめはじめた。

「やめー」

その間、わずか一分前後だった。

女奴隷たちは残り惜しげな表情で顔を上げた。

またしても鞭と悲鳴がした。

「いじぎたないよ、おまえは」

頭を上げるのが遅れた女奴隷が、今度は二人首枷をつかんで引きづり出され、足枷を鍵一つで固定され嵌口具をかまされてしまった。

「さあ、元に戻って」

女奴隷たちは、おどろくほど従順にいざりながら定められた場所へ戻り、壁に固定された鎖を首枷に連結されてしまった。そしてかの女たちは、懲戒を受けずにすんだ幸運をよろこぶかのように、唇の周辺についた液体を唇でなめていた。

部屋の片隅に残された三人の女奴隷は、恐怖に顫えながら、許しを乞う哀願の眼差しを女監督に送っていたが、女監督はそんなことなどぞ知らぬげに、僕の方を向き、

「いかが処置いたしましたでしょうか？」と訊ねた。

僕は投げだされた荷物のように転がされている三人の女奴隷の、恐怖と哀願の表情に憐憫を覚えて、許してやれ、と云おうとしたが、そんな権限はおそらくないだろうし、女監督としても聞きいれる事柄でないだろうと考え、「任す」と一言いった。

女監督は一礼し、壁にかかっている鞭から一つを選んで手に握りしめた。それには長くコードがついており、その端はプラグに差し込まれていた。

「電気棒で懲戒いたします」

電気棒という言葉と共に、投げだされた女

奴隷の表情には恐怖が走り、つながれた他の女奴隷の表情には、自分でなくてよかったという安堵が走ったことから、僕はその棒の威力を憶測することができた。

女監督は、女奴隷の一人を引きずり、部屋の中央へひきすえた。

女監督の手が動き、棒が女奴隷の皮膚に触れた。

瞬間、嵌口具があるので悲鳴こそなかったが、両手両足を拘束されているはずの女奴隷の身体がけいれん的にとび上った。そしてどさりとコンクリートの床に落ちると、そのまま動かなくなった。

他の女奴隷にたいする懲戒も同様にして行われた。

女監督は死んだもののように、ぐったりしている女奴隷を靴で蹴ってひざまづかせ、足枷の鍵を外し、鎖のところへ戻るよう命令した。

三人の女奴隷は、苦痛に顔をしかめ、精一杯の努力をしながら元の位置へ戻り、壁に鎖で固定された。

食欲のわずかな時間が、何時与えられるかわからぬ餌から、かの女たちを遠ざけてしまったのは明らかだった。

「さあ仕事だよ。楽をさせちゃおかないよ」女監督は鞭を鳴らして云い、女奴隷たちの手と足をつないでいる鎖を外し、手と手、足と足を鎖で連結した。

これらの仕事は、十数人も女奴隷たちがいるのにまたたく間に行なわれた。それからして、女監督の熟練のほどが想像できた。

女監督はビニール・フィルムと小さい鉄を女奴隷たちの前に並べた。そしてそれで、やがてかの女たちが着るであろう水着をつくるよう命令した。

型紙が示され、女奴隷たちは両手枷の不由な姿勢で、熱心に鉄を動かしはじめた。

僕はやがてそこを出て、隣の部屋へ行った。

「いさかいをした奴隷でございます」

二人の女奴隷が部屋の中央の台の上に、互いに背を向け、手枷と足枷を一つにまとめて拘束され、うずくまっていた。しかも二人の胴のところには、太い、丸い鉄の棒がまわされていた。枷をとらぬ限り、かの女が棒から逃れて互いに離れることは不可能だった。のみならず、その腰にはゴムのパンティが穿かされていた。

「このものたちは、こうして反省しておる

のであります。餌も稀にしか与えられず、排泄も穿いているゴム・パンティの中にして、二度とふたたびいさかいなどせぬようになるまで放置されるのであります」

執事は女人馬に乗る僕に説明した。

「奴隷同志がいさかいをおこすなどというのは僭越なことでございます。奴隷が奴隷の身体を打ったり、痛めたりすることのできるのは、御主人様のお許しがあつた時に限るのであります。お許しもなくいさかいをおこすというのは、奴隷の身分をよくわきまえぬふとどきものの仕業なのでございます」

執事は女監督に命じて壁のスイッチをひねらせた。

「しばらくすれば台は熱せられて参ります。」

事実、台上に固定された二人の女奴隷は次第に上昇する熱から逃れようとあがきはじめた。しかし二人の胴をめぐる鉄の棒が、互いの勝手な行動をさまたげていた。

一方が一方を犠牲にして熱から逃れることは不可能だった。

交互に足を上げ下げしていた女奴隷は、やがて跳びはねはじめた。最初は互い違いに、そしてそれゆえに互いの体重で跳躍をさまたげるといふぎごちなさで、しかしすこしづつ

かの女たちは共同しはじめた。一緒にとんでいるほうが、わずかにしろ長く空間にとどまっていることができ、台の熱から逃れる時間が長びくのである。

スイッチは切られ、女奴隷たちの跳躍はすこしづつおだやかになってきた。

僕は女人馬にまたがったまま、次の部屋へ案内された。

「器物破損の奴隷でございます。」

そこにつながれている三人の奴隷は重量感のある鉄の手袋をはめられ、更にその手首のところに首枷につなぎとめられていた。

「手が犯した罪の罰は、手が受けねばなりません」

執事は壁に吊られるように鎖で固定されているかの女たちの前に立って僕に説明した。

「この手袋に入れられると、指を伸ばすことも曲げることもできず、鈍角の針に、いつもいじめられていなければならぬのでございます。外してやっても、二三日は全然指が動かず、その後動くようになって、力がこもらぬようになるのであります。そのため鉄の手袋をはめられた奴隷は、負い革で荷物をかがせるとか、あるいは今お乗りになっている這い馬と違った、立ち馬か、それとも三人女

馬の先頭にしか使えないのでございます」

僕はその立ち馬と三人女馬というのは、どんなものかと訊ねた。しかし執事は、それはやがて御主人が直々ご覧にいれるご予定でいらっしゃると思います、と答えた。

僕は次の部屋へ行った。

そのコンクリートの部屋には、十個ばかりの、いかめしい鉄の箱が置かれていた。高さは僕の胸のあたり、横、奥行きともに僕の肩中より少し大きいという程度のものである。

「反抗奴隷の部屋でございます」

執事は女監督に命じて、鉄の箱の覗き蓋を開けさせた。

そこには更に格子戸がはまっており、中からのつぺりした鉄の面に鼻と口のところだけが小さく開けられた嵌口具が、いや嵌口具をはめられた奴隷の顔がのぞいていた。

「反抗は奴隷にとって最も重い罪でございます。いいつけに反いたり、御主人をないがしろにしたような奴隷は、こうして鉄の箱の中で、立つことも、かがむこともできず、腰を折った不自然な姿勢で、しかも日の光を二重に遮られて幾日もすごさせられるのでございます」

執事は鉄の箱の一つを開けさせた。

中に首枷、腰枷、手枷、足枷、膝枷などを太い重々しい鎖で連結された女奴隷が、足首までおおうだぶだぶのゴムのズボンをはきつけられ、中腰の姿勢で入れられていた。

その様子からして奴隷が喋ることはおろか、身体や手足をすこしでも動かすことができないことが分った。

眼をおおっている、顔枷の一部が開けられた。中からまぶしそうに、しばたき細められた奴隷の眼がのぞいた。

しかし直ぐ顔枷の眼は蓋によってさえぎられ、更に箱の蓋も閉じられた。

「この中に入って幾日かをすごしますと、奴隷は、おのれの身分を知り、反抗のおそろしさを身に滲みて覚るようになるのでございます。ここに入れられる奴隷は、誘拐によって連れてこられたものが多く、昔の楽だった時の記憶をぬぐい切れず、誇りや自尊心を捨てきることのできなかつたものが多いのでございます。しかし鉄の箱は、それらのくだらないものをすっかり拭い去り、おし流してくれるのでございます。この後まだ御主人による懲戒があり、更に矯正所へ送って心根をすっかりため直すのでございますが、鉄の箱だけで、大抵のものの心は九分九厘奴隷としての

心に直るのであります。これを経験したものは、どんなに年月が経っても、その恐怖に身顫いがするそうでございます。そしてその夢をいつまでも見つけ、うなされることがあるそうでございます。息苦しい真つ暗闇の中で、音も聞こえず、物も云えず、排泄物はゴムのズボンにたれ流し、周囲を冷たい鉄でかこまれ、立ち上ることも、横になることもできず、おろかしい恰好で幾日も送ったものでなければ、その恐怖は想像できぬことでありましょう。全く御主人様は巧みなものを考えたものでございます」

僕は執事の巧みなという言葉を残酷なという言葉に置きかえたい誘惑を感じた。事実執事もそう云いたかったのであろう。しかし僕も、なぜともないある漠然とした不安と恐怖を感じて口をつぐんでしまった。

「せめて歌でもうたえたら気も晴れましょうが、それらはすべて心の中でしか許されておりません。不憫なやつでございますが、反抗などという大それた罪を犯した罰としてこれもやむをえますまい。この鉄の箱と矯正所があるゆえに、奴隷は御主人様のどのような無理な御命令にも従順にしたがうのでございます。」

或る クリスタアブニスト の空想

久利須照雄

これはあくまでも空想である。私という一個人の頭から考え出された空想であって、何ら現実の裏付けというものを持っていない。しかし、これは『浣腸』に憑かれた一人の男の頭の中に描き出されたイメージであって、その点に於て、何らかの参考になれば幸いである。重ねてお断りしておくが、これは、あくまで私の空想である。

悩ましい女性の後姿が、私の目の前を歩いてゆく。ハイヒールの白いパンプスの細い踵が雨あがりの輝く歩道の上を、こつこつと叩いてゆく。

その音につれて、きゅっと引き締ったり流れる様な滑らかな線を跳らせる肉色のフルファッションのナイロンスーツキングに包まれた脚の輝き。薄い白地のウールのタ

イトスカートの中に伸びこんでゆく脚。

私の目はスカートの中に次第に豊かさを増してゆく女の太腿の線の動きを苦しいまでの憧れで追いつがる。その太腿の中ほどにストッキングの上縁はゆるい弧を画いてガーターに抑えられ、硬く形の整ったコルセットに吊られて居るのだ。

私は目をこらして二米の前に揺れてゆくスカートのヒップを見つめる。腰が歩みにつれて左右に振れる瞬間のスカートの滑らかな表面に、ガーターの吊緒の線が浮彫りの様にチラリと浮かぶからだだった。

道が登りになってゆく。坂を登る女の腰の魅力を讃えよう。その時のヒップの量感には素晴らしい。時にはあの悩ましいヒップの窪みさえもスカートの上に微かな凹みとして覗かれる。私の掌は汗ばみ、指は硬ばる

もつとも一度この箱に入れられた限り、御主人様のお側近く仕えることは、決して許されることとごさいません。水汲みとか発電とか、あるいは野山を走る下の女人馬などに使われるのが関の山でございます。今お乗りになつていられる女人馬は、それらに較べれば上の奴隷として名誉な、そして楽な仕事なのでございます」

僕は苦しうにしはじめている女人馬に、ますます強い同情を覚えたものの、降りることもかなわず、乗りつづけたまま、その部屋を出た。

そして執事と共にナハール君のいる広間へ引き揚げはじめた。

鎖や、鞭や、悲鳴の音が、そんな僕の耳に時々聞こえたりしていたが、鉄の扉を通り、それがぴたり背後で閉じられるに及んで、もう何も聞こえなくなった。

そうして僕は女人馬の鳴らす鎖の音を聞ながら、ちょっとした物思いにふけりつつ、広間へますます近づいていった。(未完)

のを感じる。何故ならば、私は今にも飛びかかつて其の量感のある弾力的な触感を味うために、自分の右手を伸したいという強烈な誘惑と必死に戦わなければならないからだ。私の理性は辛うじて、その衝動を抑えている。

そして、私の見果てぬ夢は空想の世界の中へ溶けこんでゆくのだ。若し、この女性がヒップまで縦に切れたファスナーで止めて居る様なスカートをはいっていたなら、私の空想はもっと縦横に馳せとぶだろう。

やがて彼女は私の追尾も知らないで人通りの少い小径にさしかかるのだ。私は公衆電話で仲間へ通知する。彼女の行く方向、仲間の二名が車をもって待つて居るべき場所を指示する。それが終ると私は昂奮とスリルにはやる心臓を押え、少し離れた彼女を追ってゆくのだった。

所定の場所に来た。仲間の自動車が見える。車の扉が開いて其の右側の道の中央に仲間が知らぬ顔で立って話をしているふりを装っている。私は彼等とは目で合図をする。彼女が車の傍に来た。二人の男はい

きなり彼女を車へ押し込む。一人が口を抑え彼女をおむけに倒れる。まくれたスカートの中に白い脚が二本跳った。

私も乗り込む。車は疾走する。私は手拭いで彼女に猿ぐつわをかましてしまった。恐怖に硬くなった彼女の顔に、サット怒りと羞恥のかけが射す。しかし彼女に何が出るだろう。彼女の連れて来られたのは、郊外の一軒家、周囲は深い木立と広い庭とに囲れた土蔵造りの薄暗い一室。

電光は煌々と輝いている。中央の椅子に彼女を縛る。私達はその前に座って少しく着乱れたブラウスやスカートの下の豊満な肉体を私はそばに寄ってスカートをめくった。ガーターが見え、白い腿とパンティの一部が見える。彼女は恨みと羞恥と憤怒のために目は濡れて輝き、自由のきかない肩と腰と両腿をすり合せて必死にもがく。

私達は彼女の苦痛と屈辱を出来るだけ長くしていた。何もあわててゐることはない。ゆっくりと時間をかけて、私の空想は彼女をいたぶり弄ぶのである。

長篇S M小説

宇宙のどこかで

【或る無期徒刑囚の告白から】

佐 治 麻 造

浄化槽地獄

或る朝、奴隷頭の女奴隷1号に、庭の片隅にある浄化槽の所に連れて行かれました。アパートの各水洗便所から流れ出るものは、此の浄化槽を経由して下水に流れ去ります。

「十一号。いいかい。昨夜、お客様がね、大切な高価な指環を落して流しておしまいになったんだよ。此の中に入って探してごらん。途中のパイプのどこかに引掛ってるかも知れないけど、流れて来たとすれば、一番最初の浄化槽の底に沈んでるに相違ないからね。云々とくけど、探し出す迄は、出してやらないよ。寝るのも此の中で寝るのさ。フッフフ分ったかい？」

私の首環と革褌を外して取り上げた彼女は、一番手前のマンホ

ールの鉄蓋を開く様に私に命じました。力任せにこじあけますと、何とも云えない悪臭が立ち昇り、私はへたり込んで哀訴しました。

「そ、そんな。別に中に入って探さなくとも何とか他に方法が……」
「何だって？ マダムのおいいつけだよ。落したお客様は、いつも奴隷車で見えになる上客の御婦人なんだよ。愚図々々しないでさっさとお入り。どうせ、させられることじゃないの。それ共、マダムのお云いつけの仕事が嫌だと云うの？ 馬鹿だね。ほんとに。そら!!」
彼女は脚を挙げて、震える私の体を、造作もなくマンホールの中に蹴り落しました。

「アッ、入ります入ります」

辛うじてマンホールの縁に手をかけてぶら下った私の膝から下は、ドロリとした液体の中に浸りました。思わず脚を締めようとし



た途端、サンダルで手の指を踏まれてこじられ、私は堪えかねて、真暗な液体の中にズボンと足から落ちてしまいました。

「そんなに深くはないだろう。ウン。お臍の辺り迄しかないのね。じゃ、しっかりお探し。」

茫然と立ちすくむ私の頭上で、マンホールの蓋が僅かばかりの間隙を残して無情に閉じられてしまい、私は暗闇の中に独り残されました。たとえ様もない悪臭と息苦しさに私はむせ返り、奴隷の身の悲哀をつくづくと感じて泣きました。落ちる時はねた飛沫が顔に掛

って居て痒いのですが、両手も液体に浸ってしまっ居ますから、どうすることも出来ません。

暫く立ちつくして居た私は諦めて、底の方を足先でまさぐり乍らドロドロの液体の中を、そろそろと歩き出しました。漸く馴れて来た眼に映った第一浄化槽の大きさは二米に四米位、底からマンホールの中蓋迄は二米半位でした。半固体になった沈澱物は足裏で気味悪く広がってつぶれ、時々固い物が足に触れます。これと思う物を足指でつかみ取って手に移して見ては失望しました。思いも寄らない物があるのには驚きましたが、一番がっかりさせるのはボタンの類でした。夢中になって、やみくもに動き回って居ますと、突然水の音と共に頭上から汚水を

したたか浴びて息が詰りました。丁度、流入孔の真下に居たのです。情けなくなつてヌルヌルの壁を叩いて泣きましたが、誰に訴える術とてなく、再び滑る足を踏みしめ踏みしめて探し出そうと必死に動き回りました。気が付いて見ると、頭の上に載った半固体物が、グニヤリと頬に垂れ落ちて来て、汚れた手で夢中になつて払いのけました。臭いには麻痺してしまいました。が、激んだガスを含んだ空気の息苦しさに大きく喘いで頭上のマンホールの蓋を仰ぎましたが、如何にしても手が届かず、ここから這い上ることは不可能です。隙間から青空が僅かに見えて、悲しくて涙がこぼれました。頭上から浴びた汚水が眼にしみて来ますし、さりとて手は汚れて居ますし、情けなくなつて思わず大声で喚きましたが、暗いコンクリートの箱の中でがん

がん響くだけで、誰も来てはくれません。どの位経ったか、疲れ果てて脚も棒のようになった私は、壁に体をもたせて休もうとしました。その途端に足がズルズルと滑り、ヌルヌルの壁に沿って汚泥の中にすっぽりと沈み込んでしまいました。必死にもがいて立ち直りましたが、鼻や口には、えも云われぬ汚物が侵入してしまい、眼をあける事も出来ないで、壁に顔を押し当てたまま胸を詰らせて、ゲーゲーと喘ぎます。突然、マンホールが開いて奴隷頭の声が降って来ました。

「未だ見付からないの？サボってちゃ駄目じゃないか。あら、頭からかぶってしまったのね。フフフ、だからしてるからだよ。見付かる迄出してやらないからね。アア臭いわねえ。全部閉めると息が出来なくなるかしら？ま、少しだけ隙間を作っというてやるわ。一時間毎に来て見てやるからね。」

マンホールは再び殆んど閉され、彼女は唾を吐き乍ら立ち去りました。

覚悟を決めた私は、隅の方から順序を立てて探し初めました。どうしても見付きません。

「未だないのかい？ 性根を入れてお探しよ。」

二回三回と繰返して探しに探しました。疲れ切った体は再び三度汚泥の中に倒れ、遂には汚水をしたたか呑んでしまった私は、余りのみじめさに気も狂いそうになって、暗い浄化槽の真中に立ってオイオイと哭いてしまいました。

「もう夕方だよ。駄目ねえ、お前は。」

汚濁した酸素不足の空気を吸って、汚泥を掻き分け続けた私は、空腹と渴きをも加って、ぶっ倒れてしまいそうでした。ヌルヌルし

た両手で口の辺りにべっとりと付いた物を拭い乍ら、しみる眼で見上げて哀願しました。

「こんなに探してもないのでございます。パイプの途中で引掛つてにちがいありません。……もう勘弁して下さいまし。」

「駄目々々。見付ける迄探させると云うマダムのお云いつけだよ。もう一辺念入りに探して下さいまし。」

「お、お慈悲です。何か食べさせて下さいまし。せめて……水でも一口……」

「フフフ、飲む物も食べ物も周りに沢山あるじゃないの。御立派な奥様や御嬢様の御体から出たものだよ。お前にゃ勿体ない位だわ。フフフフ、じゃ、あともう一回だけ来るよ。もうお客様もそろそろお見えの頃だし、それでなかったら、明日の朝迄はとくからね。一生懸命お探しよ。ない筈はないんだから。」

全く死んだ方がましだと迄思いました。が、如何ともする事は叶わず、歯を喰いしばって何度目かの搜索を初めました。もはや立って居れませんので、首迄汚泥に漬り、膝で歩いてまさぐります。時々頭上の流人孔から注ぐ汚水を頭からかぶっても、もはや気にもなりません。むしろ、さらりとした新しい水ですから、それを頭から浴びるのが待ち遠しい程になってしまいました。

「見付かったかい？」

開かれたマンホールの孔から仰ぐ空には、星がきらめいて居ました。死物狂いで哀願する私の頭上で、鉄蓋は無情な音と共に閉められてしまいました。こんなに探しても見付からないのだから、所詮無駄だと、半ばやけくそになって、汚泥に身を漬けて浮び長いこと休憩しました。もうちょっと浅いと尻がつけれるのと思ひ乍ら、

ウトウトとした途端、眼の下迄汚水の中に沈んでしまつて、むせ返つて苦しみました。全身はもう冷え切つてしまい、腿の辺りから下は痺れた様です。突然、恐怖が激しく襲いました。

「若し、見付からないで、いつ迄もこんなにして放つとかれたら……」

夢中になつて立ち上り、汚泥をビチャビチャとはね返し乍ら探し回り初めました。諦めては、汚泥に身を沈め、そして恐怖に駆られて矢も盾も堪らず、やみくもに動き回つては絶望して汚泥に身を委ねるのを何度となく繰返した私は、暗黒の中で壁を叩いてマダムやあの若夫人のことが本当に恨めしくなつて来ました。

流入孔からガボガボと水洗の水が流れ落ちて来ました。渴きに堪え兼ねた私は、とうとう其の水を口に受けて飲んでしまいました。そして、みじめな思いに慟哭し乍ら頭上の流入孔のふちに両手を掛けて身を震わせました。其の途端でした。小さな凹みの中にある何か固い物に指先が触れたのです。夢中で手に取つてまさぐつて見ますと、紛れもなく指環でした。暗黒の中で、心なしかピカリと光つた様でした。嬉しくて嬉しくて指環を握りしめて声をあげて泣き出しました。そうなると今何時頃かと朝が待遠しく、さんざん迷つた末、自分の指に嵌めて、しっかりとその手を握りしめ、汚泥の中に身を沈めて、ホッと安堵の吐息を洩らして朝を待ち焦れました。

「あつたかい？」

「ハ、ハイッ、ございました。」

「それごらん。さあ、昇つておいで」

奴隷頭は、古縄を垂らして呉れました。青い空を仰いで無我夢中で、疲れ果てた身に鞭打つてよじ上ります。体が汚水から離れたと

思つた途端、古縄はプツリと切れて、私はドブリと汚泥の中に沈み込んでしまいました。

「あら、気をつけないと、はね返るじゃないの。重い図体をして、ほんとに仕様がないわね。ええと、何かないかしら？」

今度は長い竹竿が突込まれ、私は漸くマンホールの外に体を出しました。吸いこむ空気のおいしかったこと。陽は大分高く昇つて居ました。

「そこで、ちょっとお待ち。ああ、何と臭いこと。あ、お前、丁度いいとこに来たわね。ホースで水をかけておやりよ。」

通りかかった女奴隷3号が呼び止められ、マンホールから半ば身を乗り出したままの私の体にザーザーと水を浴びせてくれました。3号は眉をひそめて、私に同情し乍ら念入りに洗つてくれ、私は甦つた様になりました。

「それで一応いいよ。早く蓋をおしよ。3号、お前、お湯を沸しておやり。あとで溝の所で、よく体を洗わせてやるから。さ、指環は？」

そこへ、マダムもガウン姿で眼をこすりこすりやつて来ました。

「あら、お前、自分の指に嵌めてたの？生意気ねえ。」

マダムの黒い眼がキラリと光り、私は飛んでもない事をしたと震え上りました。

「お前みたいな汚らわしい者が嵌めてた指環を、あの若奥様に嵌めさせるつもりなの？馬鹿だね。奥様にそう申上げるからね、お赦し下さればいいけどねえ……」

死ぬ思いで漸く見付けた末、一言のねぎらいの言葉すらなく、それ所か懲罰を受けねばならないかと思ひますと、流石に腹が立ちま

した。ボロ切れの様に地上に打倒れて喘ぐ私を残して、指環をつまんだ奴隷頭とマダムは家の中に消え、やがて3号が運んでくれたお湯と石鹸で私は全身を心ゆく迄洗いました。

「辛かったでしょ。私、昨夜は眠れなかったわ。あなたが可哀想で可哀想で……」

3号にやさしく慰められ、熱い涙がとめどなく溢れて来て仕方ありませんでした。

「まだ何だか臭いわね。暫く家の中には入れないでおこうよ。」

与えられた食事を食った後、私は立木を両手両脚で抱いた恰好で手錠足錠をはめられて、放置されました。アパートの男達の中で暇な連中が出て来てからかいました。夜になってもそのまま、やがて指環の持主の若夫人がマダムと一緒に現われました。夜目にも純白なドレスを着て、腰の辺りが飾り帯で小気味よく締って居ます。

「丸一日もかかったそうじゃないの。まあ、それはいいとして、自分の指にはめてたんだって？ え、何とか返事をおし!!」

「お、奥様。私が悪うございました。お赦し下さいまし。」

「フン、悪いと云う事は知ってるんだね。ちょっと立ってごらん。」
両手両足で樹に抱きついたぶざまな恰好で漸く立ち上ってワナワナ震えました。鋼線入りの革鞭が、夜の庭の空気を切ってビシビシと背に尻に腿り打ち下ろされ、私は食いしばった歯の間から悲鳴を洩らしてお赦しを哀願しました。

「体を動かすと臭うじゃないの。じっと出来ないの？ フン、此の手にはめてたんだね。」

樹を抱いて手錠で繋がれて居る両手の甲や指にも鞭が鋭く飛び、私は身をよじって呻きました。

「手の爪を全部はがしてやる所だけど、特に勘弁してやるわ。私の奴隷じゃないしね。」

「けど、若奥様ッたら、鞭の使い方、とてもお上手ですこと……」
婦人が啣えたシガレットにマッチをすり乍らマダムがお世辞を云いました。

「お前、少しは分っただろうね？ 若奥様はとてもお立派だったのよ。馬鹿な奴隷なこと。」

「ハ、ハイ。若奥様。御鞭ありがとうございます。ありがとうございました。」

私は樹に抱きついて、全身に残る痛烈な痛みを脂汗流して堪え乍ら、歯ぎしりして御礼を云いました。

「私の様な者に、指環を探させて頂きまして、ほんとにありがとうございます。」

「ホホホホ、ほんとに其の心持ならいいのよ。マダム、今夜も泊るわよ。」

「あら、ほんと？ ありがとうございます。あの子もさぞ喜ぶでしょうねえ。」

「だって、うちの人ッたらね、此頃凄く嫉妬のよ。うるさいったらありゃしないわ。」

立ち去る若夫人とマダムを恨めしく見送った私は、ズルズルと尻を地面に落して、声を忍んで呻き泣きました。

獬 犬 代 り

それから四、五日間は家の中に入れて貰えず、外の仕事ばかりで、暇さえあれば皮がすりむける程、体を洗わせられました。若



夫人に頂いた鞭痕が、体をこする度に飛び上る程痛く、つくづくと口惜しく思いました。私の所有者の奥様もお見えになりましたが、話を聞いて面白そうに笑い、抗議を申入れる所か、樹に繋がれて居る私に更に鞭を当ててしまふのですから、全くなかりしてしまいました。

漸く家の中に入れて貰える様になって、二、三日経った或る明け方、突然叩き起されて曳き出されました。檻の中から3号が不安そうな顔で見送って居ました。

「十一号。今日はね、鉄砲打ちのお供をさせるからね。鳥を射ちに行くの。猟犬代りにしてやるわ。」

例の若夫人とマダムが狩猟服に身を固めて、眼を輝かせて居ました。二人共薄茶色の「乗馬ズボン」の様なものの上に黒い革長靴をはき、若夫人は真赤な上衣を、マダムは黄色の上衣を着て、前庇のある黒い帽子を豊かな髪の上にかむって居ます。

「どうせ外してやるんだから足錠はいいけど、腰まわりをきびしくしといた方がいいわ。鉄の腰枷ないの？」

若夫人が銃の遊底をガチャガチャいじり乍ら云いました。奴隷頭の手で、久し振りに鉄の腰枷をはめ込まれ、鎖鐐を締め上げられ、首環も鋼鉄の首環にはめ替えられました。

「手錠も、此の方がいいわ。」

若夫人は、腰の弾帯につけた革サックから、キラリと光る第一種手錠を取出し、差出した私の両手に激しい音を立てて手荒くはめ、銃の先で私の額を小突きました。

「おいで」

若夫人は珍らしく自動車を自分で運転して来たらしく、私は後部

の物入れの中に入れられてボタンと蓋を閉じられてしまいました。車は暁暗をついて走り出し、私は無理に折曲げた体に食い込む鉄の腰枷の苦痛に呻きました。

二時間ばかり走ったでしょうか、或る山の中腹で降ろされた時には、夜はすっかり明け渡って、澄んだ朝の青空を吹き過ぎる初冬の風が、樹々をざわめかせて居ります。

「ここから上は車じゃ無理なのよ。けど解禁になったばかりだと云うのに、他の人達、全然見当らないじゃないの。」

「ね、どこに居るの？鳥なんか一羽も居ないじゃないの。」

「あら、もっと上の方を、ずっと奥へ入らなきゃ駄目よ。この辺には、せいぜい小鳥しか居ないわ。けど、マダム。あなた初めてですよ。クレールを射つ様な訳には行かなくてよ。ホホホ」

若夫人はベテランらしい様でしたが、マダムは実際の狩猟は初めての様子でした。荷物を担がされた私は、車を後にしてお二人の跡をついて奥山の方へ上ります。初冬の山の中は、裸では薄寒く、鉄の首環、腰枷や鎖の輝が冷たくてガタガタ震える程でしたが、荷物を担いで山道をよじ上って居る中、次第に体が温かくなりました。

「やっぱり、山の中は少し寒いですわね。息が白く見えるなんて久しぶりですよ。」

「しっ。居た居た。あそこの木の枝に並んで止ってるわ。あなた先に射ちなさいよ。」

何と云う鳥か知りませんが、中位の大きさの鳥が十数羽、百米程向うの木に止って居ました。マダムの銃が轟然と火を吹き、銃声が響く中を、鳥達は一斉に飛び立ちます。途端、今度は若夫人の銃が鳴って二、三羽が真逆様に落ちました。

「マダム。あなたのは命中弾なしよ。ホホホ。さあ、行って拾って。荷物はその下に下ろして。網が入ってるだろ。それを持って行くのよ」

若夫人は、私の手錠を外して呉れて、革のサックに納い、煙草に火をつけて私を追い立てました。探し回って二羽の鳥を網に入れて持ち帰りますと。

「もう一羽ある筈よ。よく探しておいで」

と、革の長靴で私の頭を蹴飛ばして叱りつけました。木立ちの間や、繁みの中を懸命に探し回って居ますと、体中に引掻き傷が出来てしまいました。下枝に引っ掛けて居た血に染んだ鳥は、未だ死に切って居ないでビクビク動いて居りました。

「向うの尾根に出て見ましょうよ」

荷物を背に獲物袋を腰につけた私の鼻環に、長い革紐の先をカチリとつけて、若夫人は銃を担ぎ直しました。獲物がヒラヒラと落ちる度に、鼻環の革紐を外された私は腰を蹴られて一散に走り出さねばなりません。婦人達は猶犬同様に考えて居るらしいのですが、犬の様な鼻を持たない私は、なかなか探し出すことが出来ないで、本当に悲しくなりました。

やがて御婦人達は、私に獲物の鳥を焼かせ、水を汲んで来させて敷物の上で朝食に舌つづみを打ちましたが、勿論私には一口も与えては呉れず、唾を呑み乍ら傍で命じられた不動の姿勢をとって立ちつくす私のお腹はグーグーと鳴りました。再び獲物を追って山の中を歩き回るうち陽は高く昇りました。

「今日はいやにしけなのね。ええと、さっき二羽喰べたから、八羽しか獲ってないのね。全然少いわ。それに此の薄ノロが二、三羽探

し損ねるし：—

若夫人は私の鼻紐を乱暴に引張って不機嫌でした。

「こんなに陽が昇ってしまうと、もう駄目なのよ。ぼつぼつ帰ろうかしら」

「あ、若奥様。飛んで来ましたよ。ほら」

青空を横切って、はばたいて飛び去る七、八羽に銃声が轟きました。マダムはとうとう照準しかねた様でしたが、若夫人の散弾は一羽を止めました。

「こんな距離で、たったの一羽なんて、腕が落ちたわねえ」

「あら、銃が調子悪いのじゃございません？」

「そうかも知れないわ。そら、行っというで」

走り出した途端、若夫人の長靴で尻を蹴飛ばされ、私はよろめいて倒れました。懸命に探し回りましたが、見付かりません。若夫人の口笛を遠くで聞いて気ばかり焦立って、体中をすりむいて這い回りましたが駄目でした。

「ないのかい？」

しおしおと御足許にうずくまった私に、若夫人の罵声が浴びせられました。

「ほんとに仕様がないわね。私が苦心して射ち落した獲物なんだよ。いくら謝まったって駄目だわ。もういいから、向うの樹の根元にお行き。むしやくしやするから射ち殺してやるよ」

驚愕した私は訳の分らぬ声をあげ全身蒼白になって震えました。

「お前の所有者は私じゃないって云うの？ ホホホホ、お金さえ出せば済むことよ。流れ弾が当たった事にすれば、それで一切お終いだわ。さ、お行き!!」

マダムの困った様な顔がチラと見えたが、若夫人はお構いなく、革長靴で私を蹴り立てました。未だ温い銃口で尻をこじ上げられた私は腰を抜かしてとうとう失禁してしまいました。それでも、長年に亘って絶対服従を叩き込まれた手足は勝手に地面を這って、二十米ばかり離れた大木の根元に私は倒れ伏して、手足を縮め、全身をわななかせて泣き叫んだのでした。

「なかなか、えらいじゃないの。そこでいいわ」

若夫人がゆっくりと銃を立ち射ちに構え、こちらを向いた銃口がチラと見えますと、私はもはや恐怖に堪え切れなくなって、云うことを聞かない四肢で地面を掻き立て、声を限りと絶叫して助けを求めました。長い長い時間が経って、とうに眼も見えなくなり、気が遠くなった途端、轟然と銃声が鳴って、私の心臓はギュッと縮み上がり、眼前が昏んでしまいました。頭上の幹や枝に鋭く散弾が食い込む音が微かに聞え、こんな恰好でとうとう殺されてしまうのかと、体に散りかかる木の葉を感じ乍ら気を失ってしまったのでした。内股に押し付けられた銃身の熱さに、すぐ気がつきました。

「ホホホホ。恐ろしかった？ 少しはスツとしたわ」

やはり脅かしだったのか、と若夫人の革長靴の先で頭を小突かれ乍ら、ホーツと安堵の吐息を洩らしました。

「さ、帰るのよ。あら、腰が抜けたの？ それに何だか臭いと思ったら洩らしちゃってるのね。そんなに恐かったの？ ホホホホ」

若夫人はさも面白そうに笑うのでした。

「鞭当てたらシャンとするんだけど、持って来なかったのね。ともかく体を洗っというで」

少し離れた小川迄這って行て、鎖帷子を身につけたままで洗い終え

た頃には、漸く気も鎮まって、抜けた腰も立ちました。

「何をグズグズしてたの？馬鹿!!」

若夫人は、腰の革サックから取出した手錠をカチャカチャ云わせ、焦れったそうに待って居ました。

「申訳ございません」

荷物を背負い獲物袋を腰に吊った私は、鉄の腰枷の位置を少し直してから跪まずいて両手を揃えて差出しました。

秘密ショーの検挙

此の奇妙なアパートに連れて来られてから一年半程も経ったでしょう。或る夜、私が3号を相手に例のショーを演じて居りますと其の最中に取締当局の手が入ったのでした。好きな3号が相手ですから、つい夢中になって居た私は、荒々しく腰を蹴り飛ばされて、ハッと気がつきました。きびしい顔をした黒いスーツの婦人が指図して、男女七名の係官達の手によって、サロンに居た連中は既に検束され、アパートの各室を搜索して回る刑事達が、一組宛の男女を引立ててサロンに連れて来ます。お客は婦人ばかりで丁度十名、その中にはあの若夫人と、そして私の所有者である奥様も混って居ました。マダムとマネージャーは真先に後手錠を嵌められて壁に向って立たされ、アパートの男達も容赦なく両腕を後にねじ上げられて少しでも抗うと激しく平手打ち等を食って身もだえして居ます。サロンに居た連中はいいのですが、お客と一緒に室に引取って居た三人の男は、衣服を整える事も許されず、裸に近い姿のまま検束されて居ました。お客の婦人達は、衣服を整える事を許されましたが皆、血の気の引いた顔を引きつらせて、流石に茫然として固まって

居ます。

手垢のついた捕縄で後手錠を珠数繋ぎにされて、十二人の男とマダムとマネージャーは追い立てられて出て行きました。

「あ、ちよっと待って。お店の始末をさせといてよ。このままじゃ心配だわ。お願い。」

身をもんで哀願するマダムの頬に婦人刑事の平手打ちが鳴り、マダムはク、ク、クッと嚙り上げました。

「次はあなた方ね。ちよっと、手錠もう三つ持って来てよ。」

黒いスーツの婦人刑事は、身を寄せ合っておののく十人の婦人客を冷やかに見やうて、テーブルの上においた二個の手錠の一つを取上げました。

「所持品は全部持ちましたね？さ、二人宛こっちへおいでなさい。あんたと、あんた。こっちへ来て。」

唇を震わせ、或いは嗚咽してハンカチで眼を押えて、口々にお眼こぼしを哀訴する婦人達は、容赦なく肘を掴まれて引き摺り出され、二人宛片手と片手を手錠で繋ぎ合わされました。

「こ、こんな。私どこへでも行きますわ。私を縛ったりして。私の父は誰だと思ってるの？」

例の若夫人は、自分の右手首にバシッと鳴って喰い込んだ鋼鉄の環を見て、顔をしかめ体を震わせて叫びました。

「フッフ、何云ってるのさ。現行犯じゃないの。」

ピシリと頬を打たれた若夫人はヒーツと身を揉んで口惜しがりました。隅にうずくまって、3号と手を握り合って眺めて居た私は胸がスツと致しました。手錠の片方の環は、私の奥様の左手にバシッと鳴り、奥様はヒクツと息を呑んでうなだれました。私がひどい仕

打ちを受けても全然かばっては呉れませんでしたし、今は3号と云うもののある私は却って小気味よく思ったことでした。

十人の婦人客達も引立てられて出て行き、アパートの家宅搜索が初まりました。

「奴隷は全部で六個ね。」

「外に奴隷車に繋がれたのが二匹居ますよ。」

「一まとめにして檻に入れときましよう。処理は明日よ。檻はどこかしら」

檻は八人の奴隷を押込めると身動きできない位でしたが、係官達は鼻唄を歌い乍ら檻の錠をおろして立ち去ってしまいました。

「私達、明日からどうなるの？」

車を曳いて来た二人の奴隷は夫婦者であつたらしく、鎖錠をガチャガチャ鳴らして抱き合つたりして居ました。その二人はまあいいとして、私も所有者の奥様が検束されて行きましたし、六人の奴隷達は暗闇の中で心細くなつてしまいました。翌日、1号奴隷は参考物件として警察に連れて行かれ、車曳きの二人は引取りの女中の手に渡され、そして私達五人は珠数繋ぎに連鎖されて、郊外の住宅街から町までの遠い道を歩かされました。自転車に跨つた若い娘さんが、後になつたり先になつたりして私達を監視しました。昨夜から飲まず食わずの私達は、飢と渇きで眼も昏みそうです。重い連鎖をジャラつかせて、どんより曇つた空から時々射す薄陽を浴び乍らトボトボと歩いて居ますと、野良犬になつた様な心持を泌々と感じました。漸く町の奴隷管理所の門を喘いで潜つた時には、やっと餌にありつけると思つてホッと致しました。所有者が当分娑婆に出て来る見込のない4匹の女奴隷達は、直ちに、保管奴隷としての処置を

受けましたが、私一人だけはのけ者にされ、正規の鎖錠をも施しては貰えないで、捕縄を掛けられたまま檻の片隅に転がされて放置されました。食事も保管奴隷達の餌の残りを与えられたり与えられなかったりで、労役も課されず鞭さえも当てられる事なく、全く無視された日夜は、全くみじめなものでした。

温泉旅館の奴隷

五、六日の間、心細い日を送りました。やって来た奥様は少し照れ臭そうでした。連れ帰られた奥様のお店は賑かな通りの露路にある小さな酒場でした。

「アア、ひどい目に遭つたわ。始末書で済んだけど、二日ばかり留置されたの。手錠を両手に嵌められて曳き出されてさ、立つたままでコテンコテンに絞られたわ。少しでも口答えしようものなら、頬ぺたをピシピシ撲られてしまうのよ。縛られて撲られ放題に撲られるのはみじめなものねえ。よく判つたわ。それに硬い手錠は物凄く締めつけるし。」

奥様の両手首には手錠が喰い込んだ跡がついて居て、外で白手袋を嵌めて居た訳が分りました。

「此の通り、お店小さいのよ。二階に私と女の子が一人住んでるの。とてもお前を置く所なんかないわ。それでね、とうとうお前を売ることにしたの。お馴染さんの二号さんが温泉で旅館してるのよ。おとなしい男奴隷が一匹欲しいんだって。今日午後お見えになる筈よ。連れてつてお貰い。」

ずい分ひどい目に会わされた奥様ですが、売り飛ばされるとなると少し悲しくなりました。

突然、あの3号の事が思い出されました。もう会えることはないのだと考えますと、切なくて涙がポロポロこぼれました。腰枷の前で押えられた手錠の上に身を屈め、指先で涙をこすって居ますと、感違いした奥様は

「私の許を離れるのが、そんなに辛いのか？　けど仕方がないじゃないの。奴隷なんだから。ウン。手錠外して上げようね。」

鍵を取出した奥様は、床に正座した私の眼前に上体を屈め、その襟元から媚めかしい匂いが流れて来ました。

「もう手錠は懲り懲りだわ。新しい御主人様がやさしい方だといいわねえ。」

奥様は私を哀れんで、何かと残り物等を食べさせてくれました。

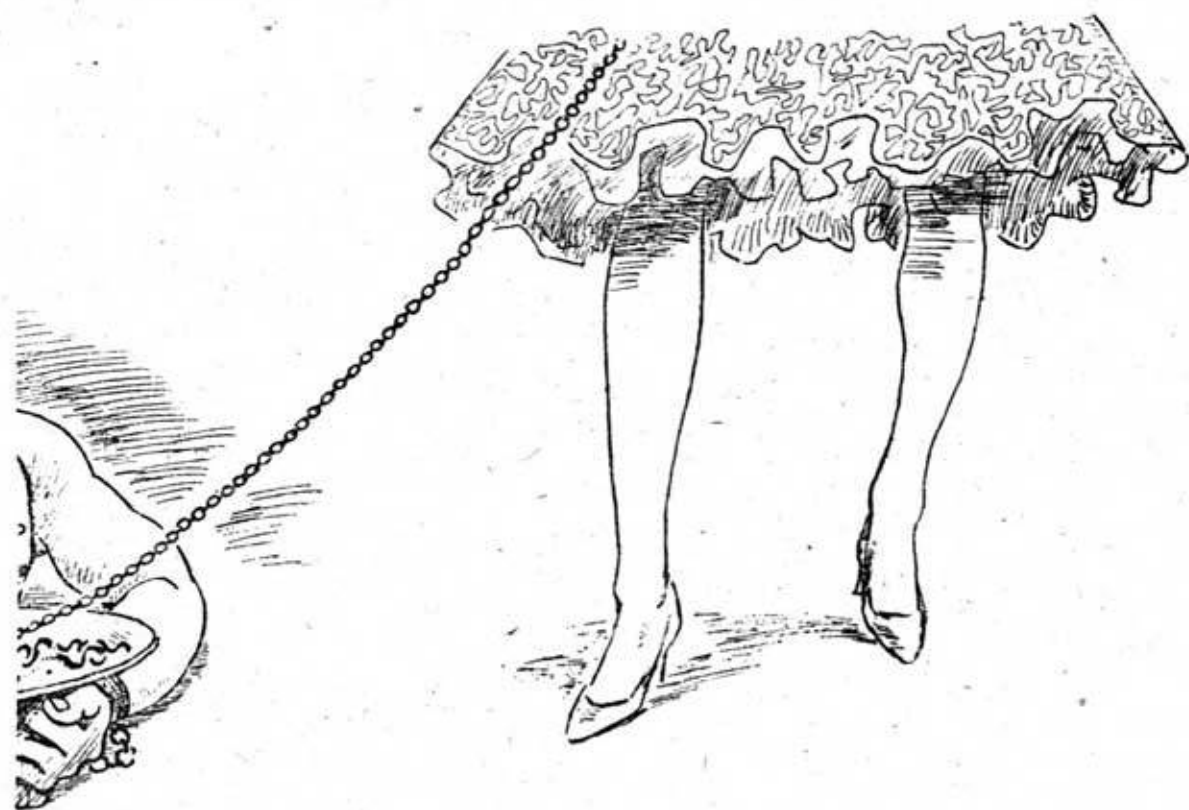
どこからか帰って来た若い女の子が

「アラ、これ？　売っちゃうの、マダム？　勿体ないわねえ。お店、もう少し広ければいいのに。」

と、私の腕や胸の辺りを指で弾き乍ら云いました。

「仕方ないのよ。これを買ったお金で少しお店も改造したりしたいの。うまく行かないわねえ、ホホホホ。」

午後おそく現われた婦人を一目見て、私は危く声をあげる所でした。嘗て私が懲役



囚から奴隷にして頂いて、先妻の珠枝様の所から売られて行った酒場で『白樺』と云う名で勤めて居たあのやさしい女給さんでした。すっかり貫碌がついて渋い和服の着こなしも粹に私を見下ろしましたが、私が嘗ての酒場の奴隷『ギロ』である事は気付かない様子でした。

「あら、いらっしやい。旦那様は御一緒にやありませんの？」

「お久し振りね。私一人なの。私さえ気に入ればいいんですって。」

「そうですか。お忙しいお方ですものね。けど、こんな小さな店をよく御ひいきにして頂いて、ほんとに有難く思ってるんですよ。あの、これですけど……。ちょっと立ってごらん。あ、手を出して……」

手錠を又ぞろ嵌められて、足の鎖をジャラジャラ云わせて立ち上った私を婦人は憐れみのこもったまなざしで眺めました。

「体はいいわね。けど、おとなしい？　おとなしくなきゃ嫌よ。うちの人の話によると、人殺しをして終身懲役だったそうじゃない？　大丈夫かしら。」

むやみに口を利くことは許されない身ですから、私はじっと立って居ましたが、叶うことなら婦人の足許に身を投げ出して服従を誓いたい程の気持でした。

「あ、これ権利書ですの。奴隷歴も書いてあるでしょ。教養はあった男の様ですの。おとなしい事は請け合いますわ。」

権利書に眼を通して居た婦人は忽ち声をあげました。

「ああ。あの時の!!何てったっけ?そうそう、ギロちゃんなのね。思い出したわ。そうなの!!じゃ大丈夫だわ。」

「あら、御存知だったんですの?そうですか。世間は広い様で狭いものですわねえ。」奥様も感心し、そして安心しました。

「おとなしく勤めさせて頂くんだよ。え?」

「ハイッ。それは……もう……。」

私は手錠を鳴らして両手を合わせて、床にひれ伏しました。

「譲って頂くわ。」

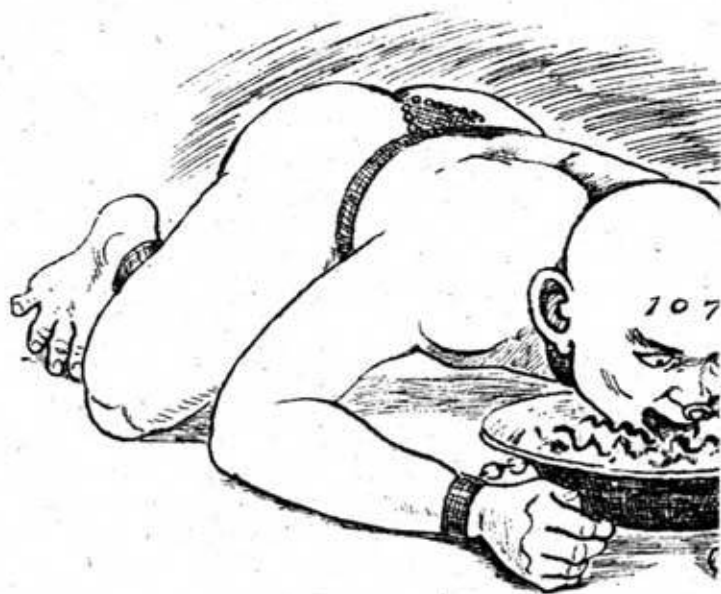
「そうですか。あの、お代金の方はこちらの申上げたのでよろしゅうございますか?」

「いいわ。旦那様にそう云っとくから。」

「ありがとうございます。御蔭様で何かと助かりますわ。何せ、此頃は商売もやり難うございましてねえ。あなた様なんか、旦那様がしつかりなさって居られるからいいですわ。お羨ましいですわ。」

マダムのお世辞には少しは実感がこもって居る様に思えました。

「手続はお願いしますわ。ここに署名しとけばいいのね。さ、ギロちゃん、これでお前は私の物よ。連れてって上げる。」



「あ、それから、特に詠えて作ったいいろいろの奴隷用具があるんですけど、あとでお届け致しますわ。」

「あら、私ね、むごたらしく縛ったり錠をかけたりますのは嫌なの。今嵌めてあるので沢山よ。錠を下さいな。」

「ハイ。じゃこれとこれ。あとの道具はこちらで処分させて頂いていいのですね。」

出されたお茶を啜んだ新しい御主人様は立上って私を促しました。

「いろいろと御世話になりました。ありがとうございました。」

「暇とお金が出来たら、近くだから会いに行って上げるよ。温泉なんだしね。じゃおとなしくおしよ。」

首環も嵌口具もなく、革の腰枷に革褌、両足首を繋ぐ五十センチ程の鎖は腰枷に吊鎖で吊って、U字環手錠の両手を自由に上下に振り乍ら、私は奥様の跡を慕って懸命に歩きました。鎖の音に奥様は振り返って

「もう少し離れてついておいで。そんな恰好のお前と一緒に歩いてると、何だか私の方が恥かしくなって来るわ。」

「ハ、ハイ」

少し離れて、ガチャガチャと歩いて居ますと、店先で遊んで居た二、三人の子供が手に手に石を握って投げつけて来ました。バラバラと飛んで来る石を避け損って、かなり大きなのが胸にしたたか当り、思わず声を挙げて両手で頭を抱えました。

「駄目だよ。他人様の奴隷を傷めちゃ……」

店の奥の方から若い母親の叱る声が聞え、私の奥様はちよつと振り返って眉をひそめただけでした。暫く行くと今度は婦人警官にかまりました。

「おや、お前独りなの？ どこへ行くの？」

婦人警官は警棒で私の体を小突き回してジロジロと調べました。

「あの、御主人様は、あそこに……」

「ああ、そう。」

戻って来た奥様に婦人警官は注意しました。

「あなたですね。こんな町の中を連れて行く時には充分に監視して下さいよ。」

「ハイ。済みません。」

少し行って奥様はタクシーを拾いました。

「近くだから歩いて行こうと思ったけど……。運転手さん、駅迄やって頂戴。大丈夫よ、此の奴隷の体はあまり汚れて居ないから。」

座席の前の床にうずくまった私は小さくなって御詫びしました。

「申し訳ございません。鼻に縄でもつけて引張って下さればいいんですのに。」

「フッフ、気にしなくてもいいのよ。」

柔い手で軽く肩の辺りを叩かれた私は、全身がビクリと震えて熱くなってしまうました。和服の裾が、うなだれた私の頭に触らない様に手で押え乍ら奥様は中年の運転手に話し掛けました。

「此の頃、少しタクシーが増えた様ね。気のせいかしら。」

「ああ、先月から全国的に少し増えましたよ。もう少し多くないと困る時もあるんですがね。」

「新車も少し値上げになったんじゃないって？」

「そうなんですよ。何しろ政府の専売ですからねえ。車は高くなるわ、走賃は据え置きだわ、全く堪りませんや。」

「昔は民間で作って居たんでしょ」

「そうですね。専売になったのは、確か泰平洋戦争が済んで十年位してからだから、もうかれこれ四十年になります。デザインだって外車に較べりゃ十年は遅れてますし作る数が少ないんだから……。あ、畜生、クライセラーだな、気持よく追い抜いて行きやがる。」

しかし奥さん、民営の外国じゃ、車が多過ぎて毎日死人が出るし、歩いた方が早い時が多いそうですぜ。」

「まあ、お上のなさることに間違いはないと思うわ。あら、あれ何なの？」

信号で停った車の右前方、交叉点の中心部に置かれた高い台の上に、一人の男が禪一本でうなだれて立って居るのが、運転席の背越しに見えました。こちらに背中を向けて居ますが、若い男の様でした。後手に嵌められた手錠が西陽にキラリと光り、腰には黒光りした鎖が固く巻きつけられて、台の四隅に四本の鎖で留められて居ます。

「交通違反でさ。ごそつと罰金を喰った上、あんな目に遭わされちゃ堪りませんぜ。」

「あ、台に書いてあるわね。信号無視常習犯なのね。身もだえしてるわ、可哀想に。近頃は罰金だけじゃ済まなくなったのね。」

「そうなんですよ。ああして半日も立たされちゃこたえますよ。ええと、中央口でいいですね。」

降り立った奥様は私の肘の辺りを撫んで駅の中へ入りました。

「あら、縄を売ってるわ。仕方ないから縄をつけるわよ。」

売店で、荷造縄を一束買った奥様は、私の鼻環に結びました。

「ありがとうございます。」

跪まずいて鼻縄をつけて頂いた私は両手を合わせて御礼を申し上げました。そして時間待ちの間、あちこちと私を曳いて買物をなさった奥様に連れられて、包を手錠の両手に持たされてホームに上がりました。

旅館「白樺荘」

汽車で一時間足らずの所にある有名な温泉町に、奥様の経営なさる旅館「白樺荘」がありました。駅前広場から略々直角をなして二条の商店街が山手に向って延びて居ります。奥様は左の方の通りを私の鼻縄を持って急ぎ気味に歩きました。

「少し遠いのよ。川を越えてから大分あるわ。ごく小さい家なの。けど静かなのが取柄ね。おとなしく働いて頂戴よ。」

「ハイ。それはもう……」

商店街の尽きる辺りに大きな川があつて立派な橋がかかつて居ます。水は、白い川原を両側に広く残して中央部を浅く流れて居ました。今日、奥様に売渡される前に恵んで頂いた飲物のせいか、生理的要求に汽車の中から悩まされて居た私は、水の流れを見た途端、身震いがして来て辛抱堪らなくなっていました。

「お慈悲でございます。あの用を足させて下さいまし。」

「我慢できないの？」

橋の袂で地面に額をすりつけて哀願する私に、奥様は少し困りました。

「じゃ川原で見えない様に済ませておいて。おや、どうしたの？」

早くお行き。」

「ハ、ハイ。あの……。禪の錠を外して頂かないと……」

「あ、そうか。ホホホ。錠どこへやったかしら。」

大分手間取ってから与えられた錠を押載いて転ぶ様にして川原に下りました。禪の錠は後にありますから、手錠を嵌められたままで鍵穴を探るのは一苦心です。固く締められた革禪や腰枷に指をかけて揺ぶり、自分の尻尾を追ってグルグル回る犬の様にキリキリ舞いして身をよじりもだえ、脂汗を流して地団太を踏んで錠を差込もうとしましたが、どうしても入りません。身を動かす度に制止できなくなりそうです。歯を喰いしばって無我夢中で土手を這い上り、奥様の足許に身を投げ出しました。

「お、お願いです。外して下さいまし。お慈悲です。自分ではどうしても外せないの……ウ……ウ……」

「あら、手錠嵌めてあったのね。ごめんごめん。」

奥様は、私の差出す錠を受取り、裾を押えてしゃがみました。

「ああら、此の錠は合わないわ。じゃこっちの錠はどうかしら。」

柔かい指先が私の腰の辺りに触れ、カチリと錠が外れました。はね起きてき川原に滑り落ちた私は徐々に泌み昇って来る解放感に大きく喘いで身震いをしました。

「ありがとうございます。錠をお調べ下さいまし。」

平伏したまま体を回して、奥様の方に尻を突き出した私の耳に初めて川の水音が聞えて来ました。

「あら、自分で嵌めたの？ 感心ね。さ、おいで。もう鼻縄はいいわね。」

川向うの山に陽が沈んで夕焼が赤く、橋の向う側にひろがる緑の色も濃くなって来て居ました。橋の半ばで足を止めた奥様は私の方を振向いて

「あれを御覧よ。」

指さされる川下二百米位の川原の水際に二、三十人の人間が動いて居ました。水から上って来た裸の男達が、川原で煉瓦色の短い股引をはき上衣の襟を合わせ、そして紺の制服姿の人の前で両手を揃えた後、片端から互に鎖で繋ぎ合わされて居る有様が夕暮の光の中で微かに見えます。

「ずっと川上の方に監獄、じゃなかった、刑務所があるのよ。あれはその囚人達で十日程前から、ずっと川底を浚う労役をやらされてるわ。可哀想なものね。あ、鞭で打たれてる……」

奥様は美しい眉をひそめて私を促しました。

旅館『白樺荘』は橋を渡ってから大分歩いた所の山陰にひっそりと木立に包まれて建って居ました。勝手口から回った内庭で

「ちょっと、そこに坐っておいで」

出迎えた小女が

「お帰りなさいまし。あら、とうとうお買いになったのですね。これ？」

「そうよ。何か残り物でも食べさせておやり。」

とっぴり暮れた庭に正坐して居ますと、縁側越しに奥様の居間の灯が明るくなり、そして衣ずれの音がしました。先刻の小娘が残り物の入った古洗面器を持って出て来て膝の前において呉れました。

「お喰べ」

「はい、ありがとうございます。」

古洗面器の中は、お客の喰べ残りなのでしょう、奴隷の私には勿体ない様な物がどっさり入って居ます。内庭にも洒落た照明が灯って、やがて着替えを済ませた奥様が縁先に出て来られました。

「おや、欲しくないの？ 何故喰べないのよ。嵌口具も嵌めてないし手も使えるだろ。」

「あの、御主人様のお許しがないのに、こんな……勿体ない物を口にした等、とても……」

「ホホホ、そうお。じゃいいからお喰べ。あ、芳ちゃん、水を持て来ておやりよ。」

舌もとろける様な思いでガツガツとむさぼり、夢中で水を飲んで有難さに涙をこぼしました。何年振りかでおいしいものを鰯服喰べ終えた私は、手の甲で口を拭い乍ら、奥様達の話声に初めて気がつきました。女中らしい年かきの婦人と話し合って居られます。

「じゃ、やっぱりそうしましょうか。要る物は明日すぐに買ってね。」

「ええ、承知致しました。けど、割合におとなしそうな奴隷ですわね。あ、名前をつけなきゃ。それとも番号になさいます？」

「一人しか居ないのに番号はどうかと思うわ。そうねえ、呼び易いのがいいわね。三太というのはどう？」

「何でもよろしいですわ。じゃそう決めましょう。」

「じゃ三太。お前、今日はこのままおやすみ。明日から働いて貰うわ。では、おすみさん、連れてってやって。」

台所では三、四人の板前や女中さん達が忙しそうに立働いて居り、料理やお酒を運ぶお座敷着の女中達が入り出して居ました。土間の片隅を通り抜けて、台所に続く物置部屋に連れて行かれる私の

鎖の音に気付いた皆様に対して、私は額を土間にすりつけてひれ伏しました。明日から、此の人達に顎でこき使われるのです。

「あれなのね。中々神妙なものじゃない？」

「フン」

白い上張りを着た板前の男は、煮物の味を見ながら鼻で笑いしました。

「此の柱の周りを片付けるのよ。」

おすみさんの命令のままに、炭俵や酒瓶の箱等を片付けますと、隅の柱の周り二米四方形の板張りの床の空間ができました。

「手錠のままで結構働けるものね。けどお前を繋ぐには、お誂え向きに此の柱が離れて立ててあるわ。ええと、どうして繋いだらいいかしら」

「足錠の片方を一応外して両足で柱を挟む様にして、嵌めて頂いたら……」

私が口を出しますと

「お黙り。生意気な事したり云ったりするとひどいわよ」

と庭下駄で頭を蹴られてしまいました。古い錆びた一米足らずの鎖と一ヶの南京錠を持って先刻の小娘が顔を出しました。

「おねえさん。これ。要るだろうと思って探して来たの。」

「あら、よく気が利くわね。あ、死んだ犬の鎖なのね。芳ちゃんは知らないだろう、とても大きな強い犬だったのよ。さ、えーと、三太だったっけ。足を出してごらん。」

私の両足を繋ぐ鎖に、その古い犬の鎖を潜らせ柱に回して南京錠をカチリと鳴らして

「横になってもいいよ」

薄暗い電灯をパチンと消して彼女は立ち去りました。

「ありがとうございました。」

「フフフ、鎖つけられてお礼を云ってるわ。けど手を自由にしてやらないの？」

「いいのよ。芳ちゃん。奴隷なんだから。」

床の板に背をつけて仰臥させて頂く事が出来た私は、たてつけの悪い戸の隙間から洩れる光と忙しそうな気配と料理の匂いを感じ乍ら、大きな吐息をついて眼をつぶりました。

「あの奥様なら、たとえ雇い人の方の中に意地悪いのが居ても、今迄よりは、ましな日々を勤めさせて頂けるに違いない。」

私は美しい奥様の面影を臉に浮べて、ウトウトと寝入ってしまったのでした。

奴隷用具商

ふと眼を覚まして激しい便意を感じました。静まり返った家の中で微かに何かの物音が聞えます。窓のない物置部屋にも隙間から光が射し込んで、朝になって居ることは判りました。永年の囚われの身の習慣で、施されて居る鎖錠の拘束程度を反射的に感じ取った後、もぞもぞと身動きをします。便意は双方共、益々激しくなってきましたが、如何ともする事は出来ず、唯じっと耐え忍んで何等かの御処置の程をひたすら待ちました。台所にも立働く気配がして突然戸がガタピシと軋んで開きました。

「あら、何かと思ったわ。昨日の奴隷なのね。ああ、吃驚した。」
エブロン姿の中年の婦人が、何か探しに入ってきて来て軽い叫声をあげました。

「少し片付けたのね。ええと、どこに行つたのかしら？ あ、あつたあつた。どっこいしょ。」

婦人はゴムホースの束を持ち上げました。

「いつ迄寝てるのさ。奴隷の分際で……」

いきなり胸にゴムホースが飛んで来て、思わず洩らしそうになつた私は脂汗を浮べて堪えました。私が悪かつたのです。足の鎖を鳴らして起上り正坐合掌してうなだれました。

「黙って居ないで朝の挨拶位したらどう？ 口が利けないのかい？」

今度は腿にホースがぶんと当たります。

「ウツ、ヒーツ。人間様並みの挨拶が出来る身ではございません。

何卒お慈悲を……」

「フフフそうかい。けど奥様は寝坊だねえ。早く使わなきゃ、損なのに。」

半ば開いた戸の向うから男の声が聞えました。

「おーい。お春さん、そこに酒があるだろう。一本持って来てくれないよ。」

「お酒だって？ 朝っぱらから、呑むお客があるのかえ？」

「そりゃあるわさ。」

「ここにゃ空箱や空瓶ばかりだよ。私はガラクタ置場に居るんだよ。」

「分ってるよ。昨日こっちに入り切れなくて残つた五、六本をそこにおいてあるんだ。早いと頼むぜ。風呂へ持って来いってさ。」

「ハイハイ。あ、これね。」

ゴムホースで撲られた腿を手錠の両手で撫で乍ら、畜生!!と思ひました。

それから二時間も経って、どうにも辛棒出来なくなつた私が、台所の人達に声を掛けてお慈悲を願ひ上げようと決心した時、奥様のお声が聞えて来ました。

「おはようさん。お客様は皆お起きになつたの？ 私、昨日疲れちゃつて。今朝は五組ね。いい日和で気持ちいいわ。」

柔かな声が近付いて来て、戸が開きました。

「今日もお慈悲をお願い申し上げます。」

「ホホホ、そんなこと云わなくてもいいのよ。這いつくばって居ないで出ておいで。」

「ハ、ハイ、あの……」

「あら、柱に繋いであるのね。こんな鎖どこにあつたのかしら？」

お芳ちゃんが顔を出して、得意そうに

「私が見付けて来ましたのよ。犬の鎖なんです。」

「ホホホ、そりゃいいけど、鍵は？」

「あの、おすみ姐さんが……」

「おすみさんは昨夜、おそ番で未だ寝てるんだろ。ちょっと行つていでよ。」

鍵を待つ間も体を震わせて堪え忍んで居る私の姿に奥様は

「どうしたの？ 額に汗を浮べて。」

「ハイ、あの、昨夕、分に過ぎた物や水を腹一杯頂いたものでございますから……もう……」

「あら、又なの？ 気がつかかなかつたわ。もうちょっと我慢おし。」

漸く鍵が来て柱から解かれました。

「お芳ちゃん。この……えーと、三太をね、ちょっと裏の林の中に連れてって用を足させておやり。えーと、どっちが樺の鍵だったか

しら。」

「二つ共貸して下さいな。」

小娘は、今解いた犬の鎖を今度は私の鼻環につけました。重い南京錠が鼻の先におら下ります。

「さ、おいで」

「あら、芳ちゃんてば。そんな事しなくても乱暴しやしないわ。仕様のない子ねえ。」

裏木戸から続くまばらな林の中に曳いて来られた私は、思わずしやがみ込んで身を震わせましたが、小娘は鍵を指先に持ったまま、口をとがらせて

「駄目々々。末だだよ。さっさとおいで」

と鼻の鎖をグイグイと引張りました。

「こちらでいいわ。さ、穴を掘るのよ。犬や猫でもそうするだろ。」呻き乍ら手錠の素手で地面の土を掘る私を見下して小娘は愉快そうに笑い、そして鼻の鎖をブンブン振回して私を悩ませました。

さんざん勿体をつけて焦らされ、泣声を立てて哀願した末、漸くの事で鞭を解いて頂けた私は、穴の上にしゃがんで太い吐息を洩らしました。彼女は、私の恰好をジロジロと見下して居ましたが、それでも袂から紙を出して一枚恵んで呉れました。

「お前はもう、恥かしいとも思わないらしいのねえ。犬みたいなものね。」

私とて、やはり恥かしく情けないのですが、仕方ありません。不自由な両手で革鞭を腰の後の錠に嵌めて締めようと身をよじって居ますと、其の恰好が面白いとて、再び小娘は声高く笑いました。「おやめ。私が締め込んでやるわ。」

いきなり鼻頭を下方に引張られ、悲鳴をあげて倒れた私の尻の後に回った彼女は

「あら、凄い股ずれの痕だこと。痛かっただろうねえ、こんな固い革じゃ。何だか汚いわねえ。」

股革の先の金具を握った彼女は、片手で腰枷を下方へ引寄せ乍らグイグイと締めつけて錠孔にカチリと嵌めました。厚い革の前袋に続いた経二センチばかりの革袋の後ろ紐が嫌と云う程股間を締めつけ、腰枷は腰骨の上から痛い程に喰い込みます。

「気がつかなかったけど、足の鎖を汚さない様に上手に済ませるものねえ。早く土を埋めるんだよ。間拔けな男ね。さ、立って、キリキリ歩いたらどう？」

さんざんからかわれ、罵しられて再び内庭に連れて来られ、残り物と水をあてがわれて永いこと放っておかれました。お客用の庭とは、深い生垣で区切られた内庭は人気もなく、暑い程の陽差しを一杯に浴びて、私は手入れの行届いた芝生に正坐したままともすればウトウトと居眠りしそうでした。

塀の外で鳴ったピシリッと言う鞭音に、ビクッとして居ずまいを直しました。続いて鎖錠を施す音がして、私は奴隸車が停ったのだと知りました。やがて荷物を重そうに持った背の高い婦人がお芳ちゃんに案内されて内庭に現われました。

「まあ、綺麗なお庭だこと。ハイヒールのままで入っていいんですの？」

「どうぞ、どうぞ」

うなだれて正坐した私の眼に、スラリとした婦人の脚と、赤い鼻緒の喰い込んだ白い素足が見えました。

「こんな芝生の上に坐らせといて、いいんですの？」

「アラ、本当。これ、そこをお退き。此の石の上に坐んなさい。」

命じられるままに、ごつごつした庭石の上に坐った時、障子が開いて奥様が現われました。

「御苦労様ですわねえ。突然に急なことを頼んで。それですの。」

「こちらは商売ですから。御申付けの物は見繕って持って参りましたの。」

奴隷用具商の婦人は持参の荷物を開きます。

「三太。云々とくけどね、私はお前をむごい目に会わせるつもりはないのよ。出来るだけは楽にさせて上げたいわ。だから枷や鎖は殆んど使わないつもり。けどねえ、うちは殆んど女手ばかりだし、お客様の半分は女だし、お前を信用しない訳じゃないけど、万一のことも考えとかなくちゃね。だから可哀想だけど、錠だけはきびしく嵌めとくわよ。それと鼻環も外してやる訳には行かないからね。じゃお芳ちゃん、これで手錠や何かを全部外しておやり。」

手錠、足錠、革褌、そして腰枷が外され、私は奴隷用具商の婦人に顎をしゃくられて立ち上り、じっと立ちすくみました。婦人は私の前側をジロジロと見て

「この錠も中々新式ですわ。けど、こっちの方は」

と箱からキラリと光る物をつまみ出して

「輸入品ですよ。最新式で、どんな形状サイズでもきっかり嵌められますし、絶対に外れたり脱けたりしませんの。」

又錠の嵌替えかと、私は情けなくなつて、鼻を嚙り上げました。

「奥様、今嵌めてある錠の鍵を下さいな。」

「それがねえ。貰つて来るのを忘れたらしいのよ。さっきの鍵だけ

しか受取らなかったわ。二個共合いそうもないわねえ。」

「アラ、左様ですか。御心配は要りませんわ。じゃ」

婦人はポケットから鍵束を取り出し、私の前に身を屈めて暫く見て居ましたが、二、三個試みた後、錠は環を開きました。

「それから奥様。矢張り最新の製品でございますけど、とても良い除毛剤を持って居りますのよ。今迄の除毛剤と違ひまして、これで除毛致しますと、毛根の機能が二、三年はストップ致しますから、手がかからなくて汚れも少くなりますし。唯、お断わりしておきますけど、中和剤はございませんので、一旦用いますと、薬の効果が失われる迄は毛を生えさせることは出来ませんの。しかし、此の奴隷なんか、未だ相当刑期が残ってるんでしょう？ お使いになったら、如何でしょうか。」

「そらねえ。けど、刑が済んで後々迄も障害が残ったりすると可哀想なものね。」

体中に毛が一本もない、つるつるの哀れな自分の姿を想像して悲しくなつて居た私は、奥様の哀れみ深い言葉を聞いて嬉しくて涙ぐんでしまいました。

「その様な御心配は御無用ですわ。ずい分とお情深いんですのねえ。その様な後遺障害があれば、発売を許可されは致しませんわ。」婦人は言葉巧みに、其の高価な奴隷用除毛剤をすすめました。

「そうねえ。じゃ、使つて見ましょうか。考えて見れば、毛なんか生えて来ない方が、本人も楽かも知れないわね。」

奥様に云われれば致方がありません。私は奴隷商の婦人の指示のまま、其の粘い液体を掌で頭にすり込みました。

薬が効いて来る間、私は風に吹かれてじっと立ちすくみ、ひりひ

りする刺戟に齒を喰いしばりました。奥様方は、私を放っておいて縁先で、お茶を飲み乍ら話して居ました。

「もう、そろそろいいでしょうね。」

お芳ちゃんが持ってきた紙の上に身を屈め、命じられるままに両手で頭をこすりますと、二センチ程伸びて居た髪がずると全部脱けて落ちました。

「近頃でも未だ昔みたいに髭が生えて来る男が、たまにはあるんですのよ。髭には此の薬も、どう云うものか余り利きませんの。これは髭なんかない様ですね。これ毛をこすり落したら、もう一回よくすり込んで」

再び薬を塗り終えますと、丁度一瓶が空になりました。風で散った毛を一本々々丹念に拾わされた後、庭の片隅の井戸端で全身を洗いました。

「これがお前のよ。」

と、古タオル一枚を与えられ、体を拭い終ると、一足の古草履を投げ与えられました。

「さ、ここに立って。少し脚をひろげて」

奴隷用具商の婦人は、例の輸入品の錠を手に私の前にしゃがみましました。

「どう云う風になってるの？」

奥様を初め、お芳ちゃんや、つい先刻姿を見せて、おすみさんも私の前に集まって眼をキラキラさせました。

「鍵さえあれば外するのは簡単ですし、嵌めるのは、なお簡単ですよ。これ、じっとして。仕様がないわねえ。グッと息を詰めてごらん。それでも利目がなければ鞭を当てなきゃ仕方ないわね。」

「おとなしくしてれば、月に二、三回は外して上げるからね。我慢しなさい。」

奥様の頬も何だか血の色が濃くなって居る様に思えました。

「次はこれですね。此のサイズでいいと思いますわ。さ、これをはいて」

革製の短い股引の様なものはかされます。やや薄手の革で作られ、腿の三分の二位の長さでした。股間に当る部分は内側一面に、しなやかな金属網を挟んで、透明なつるつるの樹脂膜が貼着けてあり、又太腿を包む部分の先端部には左右それぞれに鉄環が堅固に取付けてあります。そして、腿と鉄環との間是指一本を辛うじて差込める位でした。前にも後にも開口部等は勿論ありませんし、腰の部分には鉄鎖がグルリと取付けてあって錠で締めつける様になって居ます。

「丁度いい様ですわ。さ、後ろ向いて」

腰の鎖がグイと締めつけられて、後ちで錠の音がしました。

「これだけ念入りにしておけば、安心ですわねえ。奥様。」

おすみさんが、革猿又の上から私の尻をピタピタ打ち乍ら云いました。

「これを着てごらん」

奥様の手から投げ与えられた古い洗いざらしの印ばんてんを思わず押戴いて手を通しますと、久し振りの衣類に包まれた上半身が異様に擦ったい感じでした。

「ええと、手錠に足錠、嵌口具と。極く普通の物を揃えさせて頂きましたわ。お要り用でないとおっしゃってましたけど、鞭を一本サ―ビス致します。それから時間錠も持って参りましたけど、どこ

に、お繋ぎになるんでしょうか。」

「あ、じゃちょっと見て頂いたら？ おすみさん御案内してよ。」

奥様とおすみさんが婦人と一緒に立去った後、お芳ちゃんは手錠を取り上げました。

「三太。ちよっと手を出してごらん。あら、思ったより重いのね。えーと、こうか」

差出した右手首に環の一つが押し当てられぐっと押されますと、シャツと音がして、環の半分がグルリと回ってガチツと錠に喰い込みました。

「訳ないじゃないの。ホラ、そっちの手もお貸し!!」

私の両手に手錠を嵌めたお芳ちゃんは、革鞭を握って

「さ、ちゃんと坐って!! いう事をきかないと鞭でぶつわよ。」

と口をとがらせて云いました。

「いいかい。子供だと思って馬鹿にすると承知しないよ。私は奥様の親類なんだから。此のお店を継ぐ様になるかも知れないんだよ。分ったか？」

「ハイ。よく分りました。此の通りでございます。」

私は手錠の両手を合せて、額を地面にすりつけて、漸く赦して頂きました。

「あら、何してるの？」

奥様達が立ち戻って来ました。

「フ、フ、フ、ちよっと。でも鞭でぶつては居ませんわ。」

「そう。余り苛めちゃ駄目よ。じゃね、お芳ちゃん、三太を皆にひき合わせてやってよ。それからおすみさん、用をいいつけておやり。あら、手錠なんか外してやって頂戴な。」

足首の鉄枷には慣れて居りますが、腿に鉄環を嵌められた事は余りありませんでしたので、お芳ちゃんに促がされて立ち上った時には脚が痺れてよろよろとしてしまいました。(未完)

斯道愛好家に贈る

定価 一〇〇〇円

悦虐写真集決定版

B4判百枚一組プロマイド (略号「プロ」)

◆本誌モデル嬢の中、最近活躍しました左記の諸嬢の中の緊縛姿態の最も優秀なものばかり百態を集録いたしました。全く素晴らしい緊縛姿態集の圧巻であります。

出演モデル嬢

絹川文代、桜井葉子、愛川悦子、梨花悠紀子、平野笑子、大塚啓子、須川令子、東浦ひかる、加茂良子、花本京子、四方清美、若原明子、竹野ひろ子、熱海容子、花坂道子、田中芳代、田原美佐子、岩井知子、前本妙子、大井小夜子の諸嬢。

◆本写真集は一切書店売りはいたしません故、何卒直接天星社

宛お申込み下さい。

◆これは、永年女体緊縛ポーズを手掛けてきました本誌が、自信を以て作成し、自信を以て提供できる写真ばかりです。コレクション・マニヤの方はきっとお気に召すと存じます。最初、印刷物にするつもりでしたが、途中で急に予定を変更して、一々コピーをとる方式に変えましたため、量産できないウラミはありますが、直接感光紙に焼付けたものですから、稀少価値は凄く増す筈です。貴重な資料として是非お求めの上、末永くお手元で御愛玩下さるようお願いいたします。

ホワイト・スレイプの運命

泉 辰 之 助

競^{せり}売^{うり}台^{だい}の女^{おんな}

サボテンと砂漠と土で出来た民家、そして
真赤な太陽の照るここメキシコ、どうして妾
はこんな処へ来て了ったのか。

新婚間もない夫フィリップは少しでも豊か
な生活を妾達に与えようとして、義妹のエラ
と三人、カルホルニアから国境を越えて、鉦
山技師として赴任して来たのだ。

毎日毎日、雨のない、太陽ばかり照り輝く
単調さ、故郷のことも話し尽くされて、ただ
赤黒く薄汚れている土人鉦夫の顔、顔、顔ば

かり見て暮すより仕方なかった。到着した其
の日から、もう契約の三年が早く経ってくれ
ればよいと思った。ただ時々、馬を駆けらし
ては此の無聊をわずかに慰めていた。乗馬服
をピタリと着けて砂漠のような天地を疾駆す
る爽快さ、しかも白人の若い婦人姿は、丁度
天使の様に土人達の眼には見えたのかも知
れない。彼等はただ妾達の飛ぶ姿をポカンと
口を開けたまま見送るのが常であった。

然し、妾の人生が大きく揺れて、真逆さま
に地獄の底へ転げ込んで行った門出もエラと
一緒に二頭の愛馬を駆けさせていた日であっ

た。

事務所から余り遠くへ来て了った妾達は、
馬首を返えそうとしている時、突然、十数頭
の土人に囲まれて了っていた。それでも、出
来れば逃れようとして馬を立て直していた瞬
間、革の投げ縄がビュツと飛んで来て、アッ
と云う間もなく、手綱を握っている腕の上か
ら胸へピチツと巻き付いて了った。エラはと
見ると彼女も既に投げ縄に縛り上げられて、
身動き一つ出来ない様子であった。頭目らし
いのが合図すると計画していたのか、妾とエ
ラを一人ツツ自分達の鞍の上へ横ざまに抱き



上げると、まるで凱旋將軍が戦利品を運ぶ様に意気ようようと彼等の砦へ馬を飛ばせて行った。

そこは名ばかりの部落、土塀をめぐらせている中に、ガヤガヤと土人達が罵しり騒いで

けさせ、開けさせて一軒の家の前に着いた。妾もエラも革の細引きでギッチリと縛られたまま、引きづられる様に、その中へ引込まれた。

外のまぶしい明るさから、急には薄暗い屋

いる処であつたが若い白人の女が、二人まで生獲られて来たのを見て、彼等はワアワアと歓声を上げて妾達をとり囲んで了つた。

「どけ、どけ」と頭目が鞭を振り振り路を開

内はよく見らなかったが、漸く眼が馴れて来ると、丁度動物園のライオンや虎のいる檻、鉄の棒のはめ込まれている檻の中に、二人別々に入れられているではないか。

「いくら騒いで見ても駄目だぞ。おい、革紐を解いてやれ」

妾はやつと手が自由になったが、シビレて了つていて感覚もない。

「サア、ここへサインするのだ、お前達の身代金を持って来るようにな。だが、明日の夕方迄に持って来ない様なら、俺達が散々可愛がってから、奴隷市へ売りに出すんだから覚悟しているよ、白人の女は値が高いからな、アハハ………」

頭目のペドロは妾達の悲しみも何処吹く風と哄笑するのであった。

この身代金請求の書切れは妾達の愛馬にくくりつけられ、一鞭くれると、馬は鉦山事務所目指して飛び帰って行った。無事夫が読んてくれる様、そして一分でも早く妾達を救出しに来てくれる様、涙の瞳がいつまでも馬の行方を追っていた。

二

夜になると急に冷え込んで来た。ピツタリ

身についた乗馬服と長靴のまま、僅かに投げ込んで行った毛布があるばかり、ドアの外には、張り番がついている様子である。逃れようにも一寸の隙さえない。まだ手足が自由であるのが、せめてもの事であった。エラはもう諦めたのか、それとも精魂尽き果てて了ったのか、グッタリと毛布にくるまっていた。檻の隅にホロー引きの便器が一つ、白く見える。若い女の妾が、どこからでも見ようとするれば覗き見される中で、用をたす事さえ落着いて出来ない。毛布を引っかぶって、僅かに夜を明かすだけが漸くの事であった。

パンと水と少しばかりの肉片の朝食、顔を洗いたくても、水さえ充分ではないらしい。

ペドロが数人の部下と共に入って来た。

「別びん、起きたか」

妾は思わずチツとして彼等を睨みつけてやった。

「腹がへるぞ、だまって食って置け、こころで肉が食えるなんぜ贅沢だが、夕方迄はお客様だからな、アハハ……」

素晴らしく大きな体をゆさぶって高笑いする傲慢さ、妾はこの鉄棒さえなかったら、彼に咬み付いてやりたかった。

エラはぼんやり、起き上ろうともせず、横

になったままだ。

「おい、よく聞いとけよ、身代金を持って来ても、一人は帰えしてやるが、一人はここに残るんだ、そして、俺様の奴隷になるんだぞ。だが子分達には指一本触れさしやしねえから安心しな」

何んと云う無礼さ、白人婦人に対する恥しらずのこんな暴言が、もしアメリカで云われ様ものなら、速座に民衆のリンチに会ってうのが当然なのに。妾は齒ぎしりして口惜しがった。

いつ夫が来てくれるか、その一日の長かったこと。

「出る」

ああ、とうとう夫が来てくれた。妾は急にソワソワして、其の時初めて昨日から化粧さえ一つしない自分に気が付いた。夫に会いたい、然しこんな汚たない姿ではと、女らしい羞恥が妾の全身を包んで、鉄棒の檻の中から外に出て行くのさえためらわれた。

夫はただ一人でこの砦へ乗り込んで来ていた、キツと結んだ口許、ああ頼もしい。妾は早く夫の腕の中へ身を投げかけて、グッと抱き締めて貰いたい。

然し、ペドロとその子分達は容易にエラと

妾を夫の傍に近付けない様、其の間に立ちふさがっている。

「あわてるな、二人の中の一人は今帰してやる」

ああ、そうだった。今朝ペドロが妾達に云った言葉が急によみ返って来た、たとえ身代金を持って来ても、一人しか助からないのだ。妾は急に体の中の血が止まって死んで立っていられないくらい力がなくなった。

「一人は金髪、一人はブルネット、おい、トランプを持って来い」

エラは金髪、妾はブルネットだ。

「よし、ハートとクラブの札が一枚づつある、いいか、どっちか一枚だけ抽け、残った札がハートなら、そっちの女が残れ、クラブなら、こっちの女が残るんだ」

妾の心臓の血は逆流した、今、夫に会っていないながら、一言も言葉を交わす事さえ許されない、しかもトランプの残った札の色で、女の運命が決つて了うなんて、妾はどうすればよいのであろう。

子分達から銃をつき付けられている夫は反抗のし様もない。彼は無言のまま、トランプの一枚をとり上げざるを得ないのだ。

彼の手先は震えていた。運命の瞬間、妾は

目を閉じ、ひたすら神を念じるより外はなかった。

この目を開けたくない、恐ろしい現実を見る事は、とても出来ない。

夫とエラと妾をとり囲んだ数十人の土人達もシーンと静まり返って、その瞬間の如何に長く感じられた事か。

ああ決った、決って決った。

残った札はクラブであつた。

ブルネット。

ブルネットの女、妾が残らねばならないのだ。

三

悪夢の様な其の時、今思い出そうとしても妾には、どうして思い出す事が出来ようか。

いつ夫やエラが居なくなったのかさえ憶えてはいない。ましてあの漂々しい、男らしい夫の姿など、夢のさめた今日、すっかり遠い過去の中に消え去って了っている。

それよりも其の後で起きた恐しい現実、ゾツとする生々しい淫虐の数々、ああ妾はどうして、ここメキシコなどへ来ていたのであるうか。妾はもうカルホルニアの、あの明るい空の下へは帰る事すら出来ないのだ。

ペドロはアハハと大きくいつもの高笑いをすると、妾の手を矢庭につかんで、彼の小屋の方へ妾を引立てて行った。

ハッと我に返った妾は、なんで大人しく彼に従うものか、然しいくら腕いても、暴れても彼の熊の様な手のひらは妾の細腕をぐいぐい引きづって、遂に小屋のドアが妾の後でドンと音を立てて閉って了つたのであつた。

エラと違って昨日から反抗し続けて来た妾という女にペドロは却って興味をそそられていたらしい。こちらの土人女だったら、一も二もなく頭目の愛撫に喜んで体を捧げたであろう。

彼は妾をドンとそこに投げ出す様にした。

妾は思わずよろよろとしてベッドの端にブツかった。

「いつまで、そんな服装をしているのだ、早く靴をぬげ」

妾は彼をにらんだまま、動こうともしなかった。

「まだ分らないのか」

と彼は妾の長靴を、ぬがそうとかかって来た。妾は無茶苦茶に彼の顔といわず胸といわず叩いて暴れ出したが、彼はアハハと笑い乍ら、やんちゃな子供をあやなす様にベッドの

端に片足かけると乗馬靴をスポリと抜きとった。

「どうだ、こっちもだ」

と更に彼は面白そうに襲いかかって来た。

「悪戯嬢ちゃん、困らせるなよ」

丁度猛獣が可愛い小鳥の餌を弄び楽しむ様にこんどは乗馬服に手をかけた。

「何をするの」と烈しく叫んだが、其んなことは却って彼の悪魔に油を注いだ様なものであつた。頭目ペドロには彼の嗜虐の慾望の赴くまま、そこには昼も夜もなかった。

「アハハ、いい躰をしているな、うんと暴れろ、今にたんと可愛がってやるから」

ア、妾の下着のボタンまで引きちぎつて了つた。半ば真白い乳房が現われて来ると、彼ペドロは舌なめずりする様に太い腕を妾の背に廻わし接吻しようとする。

妾は脚をバタつかせ、必死に抵抗したが、なんで力が及ぼうか、ハアハア息ばかり烈しくなつて口はかわき切っていた。

「サアサア、大人しくするんだ」

と更に彼は妾を其の腕の中へ抱へ込んで了つた。

「いつまでも、そうして暴れている」と叫ぶなり、妾の下着の襟に手をかけビリビリと引

裂いた。

もう妾の上半身を覆うものは何もなくなくなつて行つた。何処に持っていたのか革鞭がピューというなりを生じて飛んで来た瞬間、妾の真白い肌には灼熱の炎が走った。

アッ、妾はそこにブツ倒れた。

「此れでもまだ分らんか」

と彼は怒鳴り続け乍ら、第二第三の革鞭を妾の背といわず腰といわず、情け容赦もなく飛ばして来た。

妾はもう助からない、妾は完全に彼の奴隷にされる。メキシコ土人のホワイトスレーブに随落して了うのだ。

四

土で出来た小屋の窓からボンヤリ外を眺めていた。

ガラガラと真昼の太陽のかがやく下で子分達がガヤガヤさわいでいる、鬨鶏で僅かばかりの小銭をかけて勝負を争っているのだ。もうい昼、そして又恐しい夜が来る。激しい鞭とあくなき嗜虐の夜が……。

突然、砂漠の彼方に砂けむりが上って、段々大きく、近づいて来る。又ペドロ達が何か悪い事をして分捕品を担いで来るのだらう。

街から食料品や金や、そして女達を、さんざん弄んだ上で奴隷市へ送られて行く女達を。

子分共の騒ぎが一層大きくなった。

妾は思はず目を見張った。

ペドロの鞍の上には白い花嫁衣裳を着た、

若い女が失神したまま横だきに抱えられているではないか、街の教会で今式を挙げていたばかりの花嫁が引きさらわれて来たのだ。何んて事だらう。彼は得意満面の笑みをたたえて子分達に片手を上げながら、此れ見よとばかりの態度である。

彼は花嫁を鞍から下ろすと、軽る軽ると抱き上げ、一步一步この砦の中央の、一段と高い小屋に入つて行つた。いつも捕えられて来た女達は、頭目ペドロの最初の鞭をその小屋で受け、其の後は子分達に分け与えられる習慣になつていた。

「野郎ども、静かにするんだ」

ペドロの一声に、さしもの騒音もピタリと止つた。

漸くドアから現われた彼ペドロは一声怒鳴ると、それでも服の乱れをつくり乍らニヤニヤと階段の上に突立つた。其を見た子分達は我れ知らずワアワアと歓声を上げた。彼の手には、今閉め切つたばかりのドアの鍵が高

く揚げられているではないか。そのドアの中には、此からもっと恐しい辱しめが待ちかまえているとも知らず、さらわれて来た花嫁が生きた屍を横えている事であらう。

「誰だ、倅せものは」

と彼は叫ぶなり、子分達の真中へ片手で高く上げていたドアの鍵を投げた。ワアワアと戦場の様な野獣共の死闘、妾は耳をおさえ、目をつむって、どっと小窓の端に倒れかかつて了つた。……

其の時から、どのくらいの歳月が流れて行つたらう。

今日も頭目ペドロが其の小屋のドアの処、又さらわれて来た幾人目の犠牲者を両手で捧げながら、ベッドに近付こうとして屋内に足を一步踏み込んだ瞬間、花嫁姿のまま永遠に生ける屍と化したマートル、あの女はマートルといった、彼女の刃に彼ペドロの巾広い背の真只中をグサッと突き差されて、朱にそまつてブツ倒れて了つた。

マートルは自分と同じ様に花嫁衣裳のまま彼の淫虐の犠牲にされて了うであらう今日の花嫁の惨たらしさに、眠っていた女の復讐心が目覚めたのか、いつもは洗濯女として、水くみ女として、この砦のどこか片隅で、黙々

として一日一日を送っていたのだが、彼女の憎悪は流石のペドロも両手を高く上げたまま、女の執念の前に大木の切り倒されるが如く倒れて行った。

妾はこれを見て我れ知らず走り出していった。自分でも分らない、この獣中の女達から恐れられ、蛇蝎の如く憎まれていた頭目ペドロの死体にすがり付いていた。

五

頭目ペドロの死はこの小さな部落にも大きな革命がもたらされた。副頭目サンチョがペドロに代って頭目の地位についた。子分達の歡心を買うために、新しい頭目はペドロの所有物を子分達全部の自由に委した。彼等は銘々思い思いに好きなものをペドロの私室から歡声を上げ乍ら持ち出して行った。

なんで妾というペドロの専有物である奴隷を見逃してくれよう。子分達は妾も他の女達が受けたと同様の恥辱を受けると、ひしめき騒ぎ立って来た。

サンチョと小頭格の子分二人がペドロの部屋にいる妾の所へもやって来た。

「子分達がこう騒ぎ出したからには、どうしても助けて置く訳に行かぬえ。これ以上騒ぎ

が大きくなつては、どう押える事も出来ねえ、姐御、観念して彼奴等にも面白い目を見せてやっておくんさい」

妾はとうとう来るべきものが来たとジッと齒をくいしばって、サンチョ達をにらみ返しているばかり、一言も口をきかなかった。

「嫌ですか。だが、もう仕様がねえ、まさかお前さんの方から、あの小屋へ行き度くもないんでしょから」

子分の一人は矢庭に妾に飛びかかって来て、妾の両手をねじ上げ、隠し持って来た革紐をとり出すと妾の手首にからませるが早いか妾の乳房の上から二重三重に廻わし、更にグツとめ上げて了った。妾はどうにでも成る様になれといった態度をとるより外はなかった。

「大人しく歩くんだ」と、ドンと妾の背を突いた。

ドンと突かれた妾はガラガラと幾百もの獣欲にぬらめく子分達の眼と眼との間を押され押されて、あの忌むらしい小屋の方へ歩まざるを得なかった。たった二三段の階段を上り初めた時、妾はこのまま殺して貰いたかった。いっそ銃殺でもいい、なぶり殺しでもいい、夫のことよりも、あのペドロの、暴君の様に

妾を毎日責め虐め、あげくの果て自分の意のまま鞭さえ振るってホワイトスレブの妾をさんざん弄ぶペドロの外、不思議にも、この男の誰にも抱かれたくはなかった。

アアもう駄目だ。ワアワアと小獣のほえる様な子分達の歡声すら妾の耳には入って来なかった。誰がああ鍵を最初に握るのか、誰が最初に妾の軀を抱くのか、誰が妾の真白い肌に唇を押しつけるのか。

「待て」

妾がドアの中に消え様とする瞬間、其れはサンチョの叫び声であった。

「野郎ども、俺のいう事をよく聞け。この女を皆んなで可愛がりたかって、此は生きものだ。とても皆んなが満足する前に死んで了うだろう。一つ俺にいい考がある。この女をこれから競り売りするのだ。そして其の金全部を手前達で分け合うのだ。そして最初の男が飽きたら又競り売りに出すのだ。これこそ皆んなで長く楽しむというものだぞ」

六

妾は一難去ってホッとしたと思ったら、ゾツとする様な言葉が吐き出されていた。

子分達はどうせ自分まで一人残らず楽しみ

るとは考えられない矢先、サンチョのこの発言に帽子を高く飛ばして賛成して了った。愈々前庭の中央に急ごしらえの競売台が作られた。其はどこからも見える様に一米以上もあるものであった。妾は自分というものが無くなってしまった様にグッタリと子分の一人に支えられていた。

子分達はその台の周囲に群がって来て、ワイワイ勝手な事を云い合っている。フランス革命の時のギロチンにかけられる貴婦人の様に、目の前は真黒い運命のベールがすっかり包んで了っていた。妾はとうとう競売台の上に革鞭で押し上げられた。

「革紐をとけ」

サンチョの声と共に妾のいましめの革紐は解かれた。

「サアいいか、皆んなよく見るんだ、こんな白人の女はめったに拝めないぞ」

競り売り人となった小頭の一人が妾に近付くと、妾の上衣を引きはぎにかかった。疲れ

切った妾でも反射的に身を庇うとしたが何んの抵抗が出来よう。真昼の太陽は何んの容赦もなく哀れな真白い奴隷の肌を衆人環視のただ中に照し出して行った。

妾の乳房の上の僅かな下着さえ取り去られると、「ワアワア」という一としきりの歓声が上った。土人達の眼にさらされる白人の女、妾はその時の事を思い出してもゾツとする。

「スカートも取るんだ」

真裸な妾を覆うているものは僅かに許されている腰に残されたたった一枚の小布れだけとなった。

「サア、手を上げな」

子分の一人は妾の両手を両方からつかむと無理に高く引き上げた。アア二つの丸い丘がユラユラとゆれる。

「どうだ、この真白い背中」



今度は後ろを向かされ、前を向かされ、四方八方から眺め尽してう様に競売人は妾の裸をあます処なく土人達の貪婪な眼にさらして行った。

「いくらだ、ウンと奮発しろ」

野卑な競り人の言葉は子分達の慾情と妄想をいやが上にあふり立てる。

「鞭でブンなぐれ」

誰かが群衆の中から叫び出した。

今まで競り売りの興味だけであつた子分達は血にうえた野獣の群に化して

「鞭打ちしろ、鞭打ちしろ」

と到る処で叫び始めた。

七

この狂乱を押える方法はない。

【読者体験記】

「お仕置 コルセット」

林

靖

彦

先の革紐が再び妾の両手首をしっかりと縛り上げると、台の上に延びて来ている大木の枝にくくり付けられてしまった。

ピシリ、第一の鞭は背に飛んで来た。

「ワア」という叫声。

白人の女の肌に無残にも赤黒い鞭の跡が幾条にも焼きついて行くのを、手をたたいて喜ぶ子分達、妾は早く死んでしまいたいと願わずにはいられなかった。

「ヒップも打て」

「今度は股だ」

勝手な叫声が乱れ飛び出して来た。

「やい、俺がこの女を買った」

サンチョは、ずしりと重い革袋を彼の頭の上に振り乍ら叫んだ。

そんなことで此の悦虐の狂宴が収まる筈が

ない。妾を打ち続けていた子分の鞭をひったくったサンチョは、子分達の方へ鞭を振り下ろした。

其の瞬間、流石に彼等は競売台から潮の退く様に一寸遠のいた。その隙に妾の手首を縛っていた革紐を枝から外すすとサンチョは死んだ様な妾の軀をシッカリかばう様に抱えた。「分らねえか野郎共、少くなけりゃ、サアもう一袋だ」

と彼は子分達の中へ丁度鍵を投げてやる様に放うりなげた。ワアワア歓声を上げながら子分達は二つの袋から飛び散った金を奪い合いながら、だんだん退いて行った。

ペドロ、サンチョ、そして又いつ次の頭目の私有物に妾はされる事であろう、到底救援の手の届かない、この無法地帯で。(終)

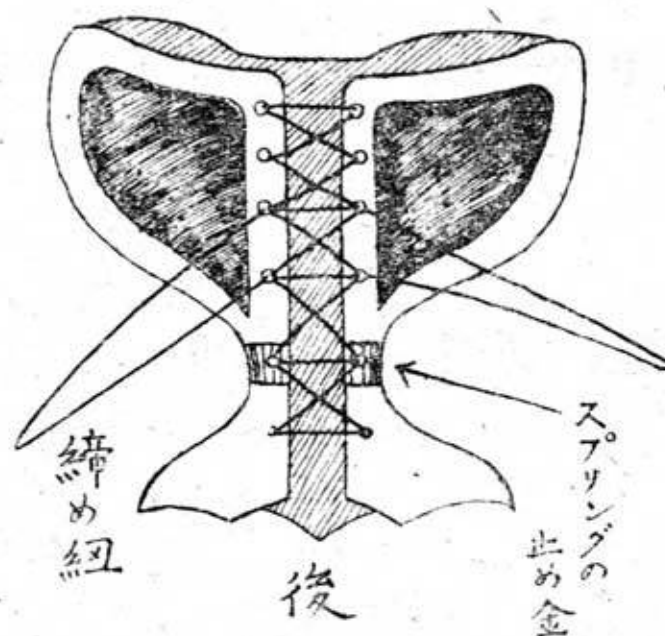
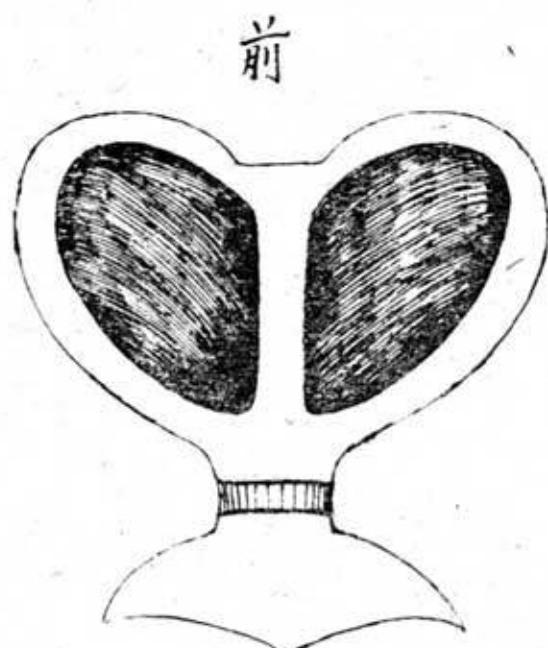
これは昨年末より叔母によって私が体験しているものですが、その素晴らしいことは、味ったものでないと到底分りません。

それは『コルセット責め』とも言ふべきものです。

コルセットと申しましても、普通の洋品店に売っている様なあんな簡単な品物ではありません。一種の拷問具です。まず、その構造

から申しますと、図の様なものです。外側は羊の薄い皮で造ってあり内側には丈夫なナイロンの布が張ってあります。ウエストにあたる細いところが問題なのです。そのウエストのところは、内側のナイロンと外側の皮との間に強力なスプリング式のバネによって伸び縮みする鋼鉄の細い帯が入っているのです。そしてこのコルセットを胴にはめ、紐をキッチリ締めた後、真後についているそのバネの止め金はずしますと、その鋼鉄の帯が、バネにより、キュッと肌の中にくいこんでくるのです。

私は過去六年間の間に叔母によって完全に



〔お仕置用コルセット略図〕

女性化された上、様々のコルセットをはめさせられて訓練されてきましたが、はじめてこのコルセットを試験的にはめられた時には、さすがの私も消え入る様な悲鳴をあげてしまいました。

その時の歓喜を伴った苦痛というものは、もう例え様がありません。コルセットをはめたもののみが知る、しびれる様な恍惚感が全身を走ります。

昨夜、例のコルセットのお仕置がすんだばかりの私は、ゆっくりベッドの中でやすんで今起きたばかりのところですが、昨夜の模様を皆様にお知らせしたいと早速ペンをとりま

した。以下述べますことは昨夜のことです。

はじめに書きました拷問用のコルセットが出来上りますと、叔母は毎土曜日の夜を私のお仕置の日にきめました。

そして、その日になると、店も半日で休み店員も早く帰してしまいました。準備が出来ますと、夜になるのを待ちかねて愈々お仕置が始まります。叔母はコルセット責めにかけては天才とも云うべき人で、次から次へと新しいことを考え出すのです。

さて昨夜も、いつもの様に店の奥にある叔母の寝台のドアに鍵をかけ、カーテンを下して二人だけで愈々開始されました。例のように私を裸にすると、拷問用のコルセットをはめさせられます。

叔母も勿論、コルセット姿になり、私の後に廻ると片膝をあげ私の背を押え両手でコルセットの紐を力いっぱい締めつけます。これだけでも、とても苦しいのですが、私はぐっとかましました。次いで叔母は愈々バネの止め金を外しました。鋼鉄の帯が、強力なバネでみるみるうちに胴の肌にくいこんできます。そして数分後には人間の肉体として、これ以上締らない限度までにキッチリしまった

胴は、私自身もはじめて経験する細さであり叔母は早速、メージャーで測りますと、なんと僅か十三吋しかないではありませんか、この前は14吋2分でした。両手で廻すと余ってしまうのです。

「ホ、ホ、ホ、今夜は大分調子がいいわね」

叔母の顔に満足そうな笑みが浮びます。

叔母は6吋のハイヒールをはかせ、コルセットの紐を結ばないで長く伸ばしたまま、しっかりと握り乍ら、私を大きな三面鏡の前につれてゆきました。

そこにうつった私の姿——まあ、なんという素晴らしさでしょう!!

胸はいつもの二倍程も盛り上り腰から尻にかけては後にぐっとふくらんでいます。そしてその二つをつなぐ胴体は文字通りの胡蝶胴です。私は苦しさも忘れ、思わず歓喜の叫びをあげてしまいました。途端に今迄口の中にいっぱいたまっていた蜜の様な唾液が一度にどっと溢れ落ちて、ムッチリ盛り上った胸をねばっこく濡らします。

ここで一寸唾液について申しますが、コルセットをきつくおはめになった方は経験されたことと思いますけれど、コルセットをきつくはめた時に限り、普通と違った特有な唾液

が出るのです。それはまるで蜜の様にねばっこく、強い香りを持ってあります。そして、きつく締めれば締める程、口の中に湧き上ってくるのです。叔母はこのつばきをたくさん出すことを要求するのです。少しでも私の唾液の出し方が少ないと非常におこります。

そして今夜は、この唾液で私の全身がすっかり濡れるまで、お仕置を許さないと命令されているのです。

さて叔母は今私の口から今夜始めて唾液が溢れるのを見ると急に興奮してしまつたらしく、いきなり私の両腕を高く持ち上げると天井の環を通して垂れ下げた綱の一端を両腕に結びつけました。そして他の片端を引っ張ったのです。私の体は次第に床から離れ、やがて六尺程の高さの空中に吊り下げられてしまいました。そして縄尻の一端をマドの取めがねに結びつけました。腕がキリキリと痛んできりません。その様子を暫らく見上げていた叔母は

「さあ、おつばきの方はどうおしだい」

そう言うと、先程からにぎつたままのコルセットの紐をいきなり下から引っ張りました。腰の肉が、キュッキュッと音を立てて締まります。私は思わず「ヒーッ」と悲鳴をあげ

てしまいました。

「叔母様、かんにん、許してえ——」

そう叫びましたが、叔母は承知しません。紐を引っ張るたびに、くびれた私の胴がくねくねと廻ります。

やがて再び、私の真紅の唇と白い歯の間から、ねばっこい唾液が糸を引いてこぼれ落ち胸から腰を伝って、叔母の顔にたれました。

「サア、もっともっと、お出し、今夜は今迄の様なことでは許しませんよ」

叔母は下からそう言うと、コルセットの紐を右に左に引っ張ってゆさぶります。私は一生懸命つばきを出そうとしますが、どうしたことかと思う様に出てきません。もれるのは「ヒー、ヒー」と言う悲鳴ばかりです。

「どうしたのだい、まだ締め方がたりないよ、うね」

そう言うと、傍の椅子の上にあがり、コルセットの紐を短かく持っていきなり椅子の上から飛び降りたのです。なんてたまりましよう。とたんに私の胴はくの字型にくびれ、

「キヤッ—ア—」とさける様な絶叫をあげてしまいました。口からはどうとねばっこい唾液が溢れ落ち、みるみるうちに肩から胸をベツとり濡らしてゆきます。もう恥かしさもない

にもありません。

私は首を左右にふり動かし、盛り上った胸と腰を夢中でくねらせ、太ももをバタつかせます。苦しみも、痛みも感じなくなってきました。唯もう、うっとりとする恍惚感で全身がしびれるばかりです。

「叔母様!!もう私、どうなっても構わなくてよ、もっともときつく締めてちょうだい」

私は思わずそう叫びました。叔母も狂気のように締めつけています。先程までいくらかも出なかった唾液が、どうしたとか、口いっぱいに溢れてどうすることも出来ません。口を大きく開け、首を激しく振る度に、あたり一面に糸を引いて飛びちります。縛りつけられた腕をのこして後は全身、つばきの為にべっとりしてきました。そして叔母が何度目かに椅子から飛び降りて、コルセットを締めつけた時、くびれた胴が「ギュッ」と奇妙な音を立てたかと思うと、私はそのまま気が遠くなって何も分らなくなってしまいました。

気が付いてみると、私はベッドの上に静かに寝かされています。叔母がそっと顔をのぞきこんでいます。

「ああ、気がついて。御免なさい、苦しかっ

たでしょう」

「ううん、構わないわ、叔母様。私嬉しいのもっともっと、私の胴がちぎれるまで、お仕置してちょうだい、お願い」

「ええ、ええ、してあげますよ」

そう言うのと、叔母はニッコリ安心した様に笑いました。

以上が昨夜のコルセット責めの模様でございます。深夜密室の中で、口からいっぱい唾液をたらし乍ら、コルセット責めの歓喜に酔う叔母と私の姿——それは世にも妖しき魅力に満ちた光景ではありませんか。

今日はまだ歩きますとフラフラしますし、

腕も思う様に動きませんから、字もうまく書けませんので、読みにくいことと存じますが御許し下さいませ。

私があまり度々外へ出かけることを叔母が喜びませんので、外で人と交際致しませんから、友人もあまりありません。昔の友達は皆男の人ですから、いやなのです。現在名前はまだ男の時のままですけれど（戸籍上面倒なので）実際は女になってしまったのですから女性の友人がほしくてなりません。それで、本誌を通じて、女の方のお友達を得たいと想っております。どうぞ、お手紙を下さいませ。

（林靖彦）

☆賞金☆

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千円	若干篇
佳作	一篇に付	二千円	若干篇

☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたものの

懸賞（告白と手記と体験）原稿募集

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従って必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限りまゝ。

二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくきめませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

無^む垢^くの悪^{あく}魔^ま

小^し 竹^の 紀^{のり} 夫^お

三隻の砂利採取船が頭の芯に響くような騒音を立てて川底の砂利を掬い上げていた。

黄色く濁った流れは土砂で盛り上った河床の襞の間を蛇のようにうねりながら再び一つの流れに合して行く。

ここは溪谷から出た川が、山裾の傾斜面を突っ走って次第に角度をゆるめ、やがて平野の断層に沿って大きく屈曲する地点に当たっていた。

ほんの昨日までこの辺り一帯は基石のように綺麗な石で敷き詰められ水晶を溶かしたような水が、いつもさらさらと快いせせらぎを奏でている広々とした美しい浅瀬であった。岸はしたたるような緑に覆われ河原の石ころの間には、撫子や月見草やあざみの花などが咲き競っていた。

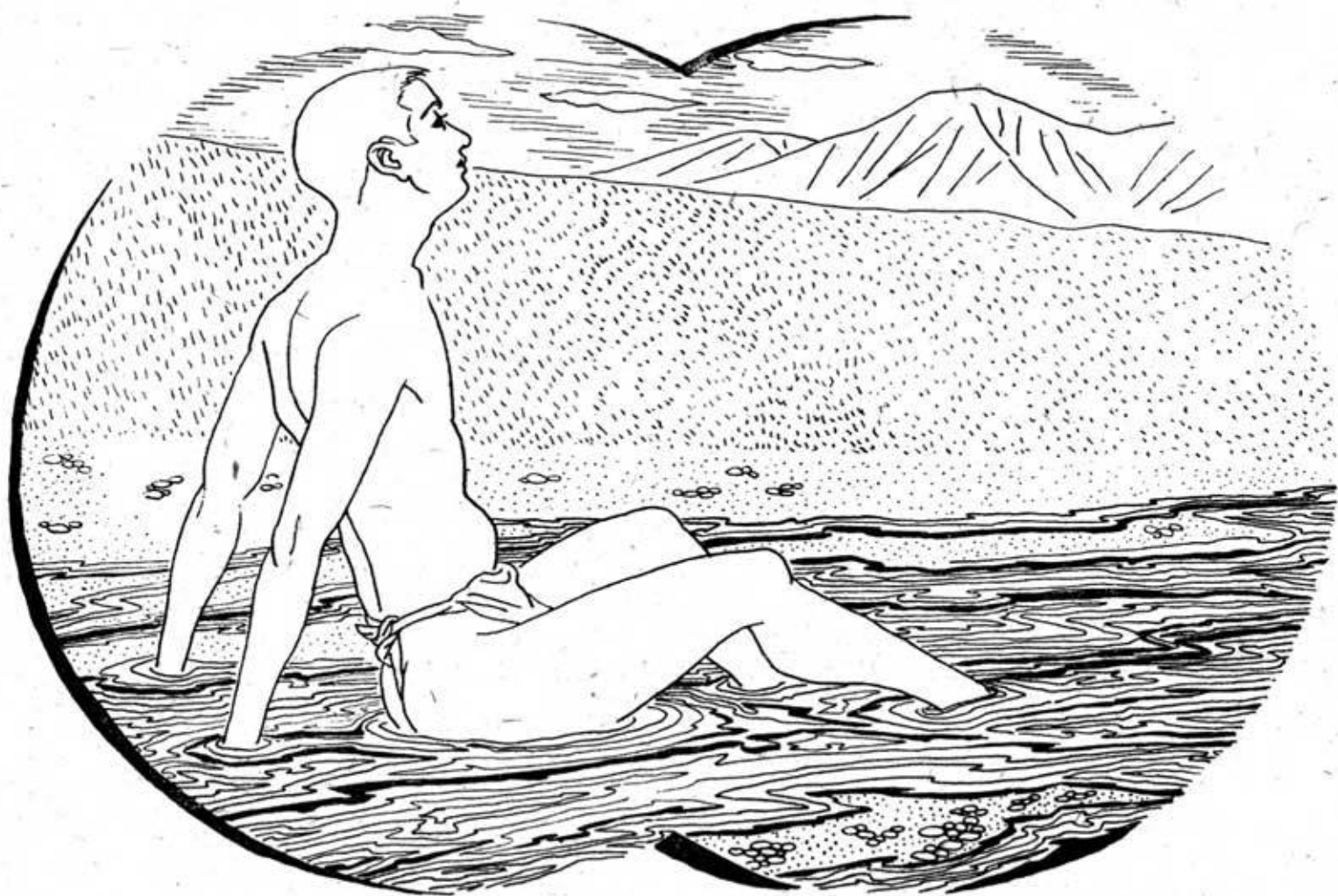
海に面した平野を屏風のように囲む三つの山脈は、遠く近くいずれも女性的な弧線で青空を区切り、その上を白い綿雲が眠気を誘うようなのだかさでふわりふわりと流れていた。川の面は鏡のようにその紺青と純白を映してさざ波のリズムを添え、夜は月と星の雫を漆黒の淵の底に沈めて秘めやかに静まり返っていた。

川は山から夏の匂いを運んでくる。流れは弾みを帯び瀬を渡る鮎は金箔の短冊が風に舞うようにキラリと閃めいて銀のしぶきを跳ねる。水はひんやりした中に、ほのかな温かさを湛え季節の体温を感じさせる。

五月の太陽がさんさんと照り輝く日には、もう待ち切れなくなった河童達が、未だ陽灼けせぬ艶やかな桜色の裸をピチピチ躍らせながら歓声をあげて浅瀬に突貫する。

しかし六月の陰鬱な梅雨は清らかな流れを黄色く濁らせ、川は不機嫌な表情で彼等を近付けようとはしない。

今年のこの地方は春から異常に陰湿で不吉な予感のする気候であった。梅雨は例年より一ト月も早く訪れたかに思われ、何日晴れるともない鉛色の低く垂れ込めた空からは止め度もなく霖雨が降りつづいた。たまさかの雲の切れ間に仰ぐ初夏の瑞々しい青空を人々は恋人のように待ち焦れた。刈り取った麦は雨を吸って発芽し折角脱穀をすました麦も乾きが足らずに腐敗しはじめた。田植になくてもならぬ雨も過ぎては只呪わしい許りであった。やがて七月の半ばを過ぎ降りに降った梅雨もいい加減この辺で上るであろうと一日千秋の思いで待ち侘びる人々の心を嘲笑するかのように或る日、夜半から未明にかけて大雷鳴を伴った集中豪雨が、この世の終りさながら



に天地を閉ざして山岳地方一帯を襲った。水に飽和した山々は忽ち奔流を吹き出す魔物と化し、大山崩れは至る所で千古の巨木や岩石を手玉を取るように中空に跳ね上げながら、煮え沸る増埒の如き水勢狂う谷間へ雪崩れ落ちた。一瀉千里の鉄砲水は狭い溪谷にひしめく人間社会を一瞬洗い流し轟々と吠え猛りつつ下流目指して殺到した。見る見る川下の水位は脹れ上り川を埋める流木と共に忽ち堤防を乗り越え田植が済んだばかりの青田の連なる平野を刷くように消し去りつつ町や村々に襲い掛った。平野地方は昨夜来さした大雨も降らず、この大災害を夢想だにしなかった人々の耳にはサイレンも半鐘も鳴り響かなかった為、寝耳に水をその儘に不意を衝かれて忽ち阿鼻叫喚の地獄を現出した。

洪水は家の軒の巴瓦ひたひたまで昇りつめてから徐々に引きはじめた。恐怖の一昼夜が過ぎて嘘のように路面が顔を表した時、成る程大水の跡のようだと云う譬はよく言ったものだと言ひ人々は顔見合せて溜息を吐いた。

洪水は地上に建てる凡てのものの上に

定規で引いたような死の標高線を書き残して行った。その線を掻き登ることの出来なかった人や動物は皆溺れ死んだ。夥しい死体が海へ連れ去られ鮮魚の饗宴に供された。川筋に住んでいた人々が最も多く痛ましい犠牲になった。

克二は再び川を訪れた。

岸に横たわる無数の流木の一つに腰を下して殺風景な砂利採取船の騒音を聞いていると永遠に還らぬ川の思い出が切なく胸に甦ってくるのだった。

小学校の時から毎年夏休みになると彼は父の故郷である、この土地の実家へ欠かさず遊びに来る慣わしであった。家を継いだ家長の伯父は百姓の癖に子供がなく妻と共々彼を我が子同様に慈しんだ。三男である彼を心から貰いたがっていたが、都会の商家の息子を今更片田舎の百姓の子にすることは困難で抛るなく他家から養子を迎えて近く又嫁を貰う準備をしていたが、克二に対する愛情は少しも薄らぐことはなかった。

今度の大洪水には何処とも惨じめな災害を受けた中に彼の家は地利的な条件が幸いして何の被害もなく済んだ。この川の洪水は偶発的なものではなく周期的なものであることは歴史が物語っていた。二度あることは三度あると信じた篤農の祖父が子孫の為に水禍の家を捨てて新たに地利を卜して建てたのが現在の家であった。断層の上に篠竹の生垣に囲まれて建っている昔作りの頑丈なその家は荒廃を眼下に涼しい顔を誇っていた。田も畑も溢水方向とは逆の山添いに在ったので作物についても心配はなかった。お蔭でその夏も克二は何らの懸念なしに毎年の慣わしに従うことができた。

未だ寸断されたままの鉄道は復旧の見込もなく彼は苦手の船酔いを忍んで終着駅の港から小さなポンポン船を頼る外途はなかった。一里近くも離れた船着場からバスも通わぬ荒れ果てた砂埃の道を重いポストンバッグを持ちあぐみなながら汗しずくになって昨日の夕方やっと伯父の家に辿りついた彼は、ぐったり疲れ切った身体を他所に矢も盾も堪らぬ思いで一途に川へ想いを馳せていた。

川はどのように変貌を遂げたであろうか。美しい観音河原の浅瀬は未だ去年の礫を止めているであろうか。否その事よりも彼にとっでは過ぐる一年の間、来る日も来る日も夢に見幻に描いた切ない思い出の故にこそ、川に心惹かれるのであった。すると音もなく緞帳が上がったばかりで蜃気楼のように消え去った未知のドラマがその背景をなす川への果しない郷愁を掻き立てるのだった。今からでも、すぐに駆けて行ってみたい衝動を辛くも押し静めながら、その夜をまんじりともせず明かした彼は東雲の薄明りが蚊帳をほのかに染める頃になって漸く泥のような深い眠りに陥ちた。

汗ばむ暑気に眠りから覚めると、みんな蟬が姦しく鳴きしきり時計は正午近くを指していた。昼餉のあと四方山ばなしの末に家人が午睡に入ってしまうのを待ち構えたように、彼はそっと家を出て川へ向った。切ないまでに波打つ胸を押えながら勝手知った径を何かしら祈りたいような気持で足早やに急ぐ程なく、無惨に崩れ去った堤防の決壊箇所から川は昨日と似ても似つかぬ変り果てた姿を現わし始めた。もどかしさに駆け上った堤防の上で「ああ」と思わず驚きと失望の嘆声を洩らした彼は、しばらく呆然とその場に立ち尽していた。

彼が真っ先に視線を投げかけた一点、そこには求めるものの影も

なかった。

こんもりした樹立ちが点在し緑の草と灌木の繁みに覆われた絵のような内堤の上に遠目にもくっきりと望まれた観音堂の小さな赤い鳥居はかき消すようになっていた。その前をたらたらと川原の方へ降りたところにたった一軒ポツンと建っていた渡し守の住む小屋の萱葺きの屋根もすでに見えなくなっていた。堤も川原も見渡す限り赭茶けた泥土に覆われ眼に和やかな緑の景色はいずこかへ消え失せていた。彼は全てが失われたのを感じた。彼の郷愁を一層牧歌的に美しく彩った思い出が、もはや再び現実に見えてくることのないうのを悟った。絶えざる回想が、それを昨日のことのようにみずみずしく思わせるのに、現実の姿は、それを遠い昔に押しやってしまふのだった。

機械の騒音も彼の耳には、別世界のもののように空ろな響きを伝えるに過ぎなかった。彼の魂は肉体を離れて去年の夏の川をさまよい歩いていった。

.....

午後の四時近くになると、いつも川原はひっそり静まり返ってしまふのだった。

今の今まで元気にはしゃいでいた子供達の姿が、ほんの僅かの間にまるで嘘のように見えなくなると浅瀬のせせらぎが俄に音を高めて聞こえて来るのだった。土用の太陽はしかしまだ眩くような日射しを投げかけている。

克二が川へ行くのは何日もその頃だった。外堤を降りて戦時中に拓いた芋畑や時々足許から骨大將が這い出す叢の間を縫って蒸せ返

るような草いきれのただよう小径をたどって行くと、石ころばかりの川原へ出る。そこは一面にめらめらと陽炎が燃え立ち素足ではとても歩けない熱さである。大きな石を避けて飛び飛びに彼は浅瀬の水際にたどりつく。そして足場のよい場所を選んでランニングシャツと短ズボンを脱ぎ猿又を脱ぎ、その上に麦藁帽子を被せて石の重しを置く。それから腹から胸へキリキリと巻きつけた晒木綿の長い腹巻を解き全裸になると清々しい気持ちで大股を開き誰憚るところもなく悠々と放尿の快よさを楽しむのだった。この素晴らしい解放感、彼を此処に惹きつける一つの魅力でさえあった。それから今解いたばかりの長い晒木綿を取り上げると今度はそれを褌にして女性的なまでに豊かな腰部のむっちりしたし、肉むらに食い込むばかりかっちりと締め込むのだった。

褌を締め終ると克二は何時も自分の肉体の健やかな小麦色と、それを一層引き立てるような褌の白さとの対照の美しさに惚れ惚れと見入るのであった。それから誇りに充ちた足取りで静かに清澄な浅瀬に足を踏み入れて行く。斯う見ると彼は一かど達者な泳ぎ手のようであるが、その実全くの金槌なのであった。

海にも川にも恵まれたこの田舎では男女共大抵小学校を出る頃までには一ト通り泳げるようになっていたのであるが、都育ちで海にも川にも縁のなかった彼は生来の内気も手伝って折角与えられた水練のチャンスさえ悉く自ら避け通して来た。

例えば小学校に於ては全校皆泳を目標に夏休みには一年生中での水泳不能者を義務的に校内プールで水練を受けさせる定めであったが、それすら彼は仮病を使ってサボリ続けたのである。更に二年生になっても前年水泳試験にパス出来なかった者は一年生に混んでも

う一度練習をやり直す筈になっていたが、これも内攻性の劣等感に支配されてうやむやの内に胡魔化してしまうことに成功した。三年生になれば既にその制約はなく、斯くして彼はとうとう中学校時代を通じ依然金槌を押し通したのだった。

高等学校でもスポーツのクラブ活動は避けて音楽部を志した。

その癖、夏がくると何時も人並に泳ぎが出来たらと云う強い羨望に駆られながら、もはや今となっては如何とも栓術なしと空しく一人決めに諦めて、同輩達が精神的にも肉体的にもすくすくと男性としての自信を身につけてゆく様を眺めては、余りにも女性的な自分の優柔不断さに、堪らない焦燥と卑屈を感じずには居られないのだった。

特に筋骨の發育した若者が赤銅色の肉体に六尺褌を凛々しく締め込んだ水泳姿は彼にとって限りない憧憬的であった。それは自分が遂に持ち得なかった男性の逞しさ、美しさだと思つと一層切実な執着が湧き起ってくるのをどうすることも出来なかった。

あの清潔で力強い不可思議な魅力を持つ一条の白い帯を自分の股間に食い入るほど強く締め込むことだけで、彼の魂に男性としての自信が甦り肉体には青春の誇りが充ち人生観すら一変するのではないかとさえ思われるのだった。

一時の恥を忍び中学校時代に何故水泳をマスターして置かなかったのかと思うと彼は尽きぬ悔恨の臍を噛んだ。しかし決心さえ固めれば、たった今でも解決できる問題ではないか、要は意志の強弱に懸っているのだ。この儘では様々に変形して一生自分に付纏う劣等意識を、この辺ですっぱり切り離してしまう為には何としても青春のシムボルとも云うべき水泳を征服しなければならぬと思うと矢

も盾も堪らなくなるのだった。

その決心を自分自身の胸に誓うために彼は夏休みには、まだ一ヶ月も間があるというのに思い切つて六尺褌を苦心して手に入れた。しかしそれ迄には何遍布地屋の前を往きつ戻りつしたことだろう。

第一どんな布地を買えばよいかも分らないし、切売りして貰うにしても六尺褌にするとは、どうしても言えそうもない。こんな馬鹿氣た事にさえ拘る自分の意久地なさ加減がいっそ情なく、これで性格改造も笑わせると何度も心に鞭打ちながらさていざとなると何時も布地屋の前で足が立ちすくんでしまうのだった。

ところが或る日、ふと布地屋の前を通りかかると、折から四五人連れの土工風の若者達がドヤドヤと店内へ入って行ったかと思うと中の一人がいきなりぶっきら棒に

「おっさん、六尺褌の上等、二本程切ってくれ」

と大きな声で憚る気色もなく言つて除けるのを見かけた。彼は思わずフラフラと彼等の後からその店へ入って行った。他の連中もそれぞれ一本二本とめいめい自分達の分を切らせて包ませていた。親爺はホクホク顔でしきりに愛嬌を振り撒きながら代金を受取つて先客を送り出すと先刻から黙って待っていた彼の方に向き直つて

「お待たせいたしました」

と頭を下げた。

「僕にも同じ奴を一本頼みます」

と云つてから聞かれもせぬのに

「水泳に行くんです」

とつけ加えて流石に彼はカッと頬に血が上るのを感じて目を外らした。

こうして彼は偶然の助けを借りて首尾よく目的物を手に入れると躍る胸を押えながら書斎へ帰って来た。長い間憧れの的であった禪の目にしみ入るような白さと得も云えぬ清潔な肌触りに彼は思わずその布に頬ずりした。

その直截的な魅力は何と生氣に充ち、発渾とした青春美に適わしいものだったろう。その一条の白布が齎らす連想の如何に切なく甘美だったことよ。

彼はそれから毎夜に青蚊帳の中で、生れて初めて締め込んだ六尺禪の楽しさ悩ましさを満喫しながら、果しない幻想の虜になるのだった。

やがて夏休みが訪れた。

今年も彼はボストンバッグ片手に父の故郷の駅に降り立った。青い海は双手を拡げて彼を迎え入れたが、又しても彼の胸の中では塞ぎの虫が頭を拾い始めた。彼のような年長者は水練学校の生徒中には一人も居なかったのだ。彼は突き抜け難い壁が行く手に立ち塞がったのを感じた。そして即座に自分の決意に終止符を打った。

「やっぱり俺は駄目な男だ。一生泳げないように出来ている人間なんだ」

捨鉢な自嘲に倦んだ彼は、もはや無駄な努力を繰返すことを断念せざるを得なかった。

或る夕方。夕風の蒸風呂のような暑さの中で午睡から覚めた克二は吹き出る汗を井戸端でさっぱり落して、そのままフラリと家を出た。何処と云って当てもなく自然に足は川の方角に進んで行った。町を出て稲田の道に出ると暑さは同じでも広々と視野が展けてホッ

とする思いがした。五五町歩いて堤防に出ると更に空気はすがすがしく匂い、川の流れが自分を招くように思われた。惹き寄せられるように川原へ降りて水際に立って見ると、辺りは物静かで彼の外には人影もなかった。対岸は小高い崖になっていて、その下の辺りは水が黒ずんで波も立たず深い淵になっているらしかった。彼は先刻から感じていた尿意が俄にさし迫って来たのを覚えたので、すれすれの汀に立つと澄み切った流れに向ってズボンのボタンを外した。爽やかな釈放感に彼は且って感じたことのない不思議な魅力を覚えた。見渡す限りの視野の中には依然として一点の人影もなかった。漸くたそがれ初めた西の空は見事なオレンジ色の夕焼けが烈日のフイナールを奏でていた。流れは静かに絶え間なく悠久を運んでいた。香ぐわしい夏の川の息吹きがたった一人の彼を柔らかに抱擁するようだった。彼はふと何故ともない露出欲に駆られて用を足したあとともその儘の姿勢でじっと立ち尽していた。妖しい快感が全身に漲って来た。何者の視線も感じなかった。それなのに何かもっと大きなはつきりしたものに、まじまじと見つめられているような意識に誘われて次第に彼は妖しい欲情の昂まりを感じた。命じられたように彼は汗ばんだシャツとトレーニングパンツを脱ぎ捨て、更にその下のものも剥いでアダム姿になると、ひやりとする流れに足を踏み入れた。云い知れぬ快よさが足の裏から身体の間々に走った。ザブザブと思い切って脛までの深さに進むと彼は静かに流れの中に下半身を沈めた。はっとするような一瞬の戦慄が過ぎると肌を触れ合うようななめらかな温味がじんわりと伝ってきた。それからゆっくり水の中で両足を伸ばし両腕を後ろに支えて流れの方向に従って仰向けに横たわった。水は肩で分れてシューシューと微かな音を立

て腹の上で再び一つになって流れ去って行った。尻の下を小石がくすぐるように転がるのが快よかった。小ハゼが時々微かにコツコツと脚をつつくのは水に揺らぐ毛を餌とでも見違えたのであろうかと思ふとユーモラスな微笑が浮んでくる。水晶のような水を透かして彼は伸びやかに横たわった自身の姿態を惚れ惚れと打ち眺めた。それは我がものとも思えぬ美しさに輝いていた。

「川の女神よ」と彼は囁いた。

「あなたは僕に恋しているのですか。僕の官能をこんなに昂ぶらせ飽くことなく愛撫をつづけているあなたよ。さあ僕の身体をお好きなようにして下さい。」

大自然の懷に抱かれるという形容は克二にとって不思議な肉感を伴っていた。彼はそのときから川と恋に陥ちた。そしてそれから毎日、幼い河童達が遊び疲れて帰ってしまったあとの淋しい川原へ何物かに誘われるように漂然と姿を現わすようになった。

めらめらと陽炎の燃える焼け石の上で身に纏う一切のものをなぐり捨て、日増しに健やかな小麦色に灼けてゆく肉体に川の女神の花婿としての晴れの衣裳である純白の下帯を締め込む時、彼の心は例えようのない歓びにときめくのだった。

瀬の底の石は宝石のように輝いていた。そこが彼と川の女神との睦みを交す豪華な衾であった。闇と秘密の厚いヴェールはここにはなかった。無窮の青空を天蓋にし、碧の山々を屏風にした大自然の閨房には生命のはじめに通じる歓びが充ちていた。その只中に横たわる自分の姿の神々しいまでの美しさに彼は酔った。そして太古への郷愁と讃仰を即興詩に吟んだ。

傍らの水面で鮎が跳ね、晴れ渡った夏空高く鳶が悠々と舞ってい

た。女神の飽くことを知らぬ愛撫は彼をいつまでも恍惚の境に引きとどめ一切の雑念を去って時の経つのを忘れしめるのだった。

観音川原に沿った内堤の上の小さな木立ちに囲まれてささやかな祠が建っていた。これが川原の名の謂れである観音堂であった。

昔、信心深い渡し守が、この川原に流れ着いた木彫の観音像を拾い上げて自ら勧進して建てたものと謂われるが、場所が場所だけに詣でる人もなく水遊びに来た子供達が行き帰りに道草を食う場所になつていたが、川の方位や渡し場の位置を説明するのには恰好の目印であった。殊にその小さな赤い鳥居は一際目立って遠い外堤の上からもよく望まれた。

その祠の前をたらたらと川原へ降ると土手際に渡し守の住む萱葺きの粗末な堀立小屋が忘れられたように一軒ポツンと建っていた。小屋の周囲には石ころだらけの土地を少し許り拓いて畑にし芋や南瓜や茄子が作ってあった。

この小屋にはもう六十に手の届くと見える渡し守の老人と十五六才位のその娘とが二人だけの佗住屋をしていた。夜ともなれば絶えて人の気配もない暗い川原の真中にポツツリとランプの灯が点っているのを初めての人が見たら恐らく狐火とも見まちがうことであろう。そこから二町程上流には橋が架かって居り、この渡しを利用するものは自転車に乗れない年寄子供か鮎釣りの人々位に限られ客があれば一人でも二人でも舟を出す有料渡しであったが、もとより僅かな渡し賃位では親子二人の生活は立たぬので、老人の仕事は主に鮎や小魚を獲って町に売りに行くことだった。渡し舟は鮎を用いず岸から岸へ渡した針金を手繰って往来する軽い舟であったから主に

娘がこれを操っていた。

何でも老人は昔この界隈の百姓であつたが若い頃一粒種のいたいたけな息子をこの川で死なせ、その悲しみに妻も気が狂つて同じようにこの川へ身を投げて死に、打ち続く不幸にすっかり世の中が厭になつて家も田畑も売り払い身一つになつて妻子の魂の沈むこの川の渡し守になつたと云う話であつた。

娘というのも実の子ではなく、この子も又人生の悲しい受難者の一人であつた。彼女はこの川の上流の山奥で炭焼きを業とする一家の實の兄妹の間で忌わしい肉親相姦の因果を受けて生れた哀れな子供だつた。生みの親にも疎んぜられ世間の眼からは惡魔の申し子のように見られながら暗い悲しい運命に苛なまれているこの子供の事を或る筏師の口から伝え聞いた老人は我が妻子の薄命を思うにつけ他人事ならぬ不愍さに駭られその筏師に乞うて自ら進んで、その子を貰い受け我が子として育てる決心をしたのだつた。

筏師はやがて自ら操る筏に乗せてその子と共に川を下つて来た。

颱風シーズンが近付き外洋に面したこの平野は沖からの風に乗つて海鳴りの音が山麓のあたりまで聞こえて来た。白昼の苦熱は容易に衰える気色もなかったが空には乱れ雲が多くなつて来た。山はもう秋の兆しを見せ始めたのか川の水にも肌に馴染まぬ冷たさを感じられて来た。彼はひろびろとした明るい青空を遮る厚い灰色の雲を憎んだ。空が陰ると水は冷たくよそよそしい表情になつた。

その日も克二は親音川原に姿を現わしたが空の半ばを覆う層雲が時々長い間太陽の姿を隠し視界が何となく鬱陶しくなるので晴れやかな気分になる事ができなかった。それに気のせいか身体さえ気懈く思われ川に入る気持になれなかったので、水際の石に腰を下した

儘遠い山の上空を覆っている黒い多立雲をぼんやり眺めていた。耳を澄すとその方向に遠雷が轟いていた。間もなくこちらへやってくるぞと思うと彼は水浴を断念して物憂げに立ち上ると汀伝いにぶらぶら下流に向つて歩を運んで行つた。小舟の纜つてある渡し場の附近から何となく觀音堂へ行つて見ようと氣を変えて堀立小屋の方へ近付いて行きながらフト見るとその小屋の窓から誰かがこちらを眺めているらしいのに氣がついた。更に眼を凝らすとそれは若い女らしくしかも双眼鏡を両手に明かに彼の方をじつと覗いているらしい様子だつた。ハツとすると共に何故そんな事をしているのか審かしく思いながらも、今更どうする訳にも行かず、出来るだけ素知らぬ顔をして通り過ぎようとした時であつた。娘は突然双眼鏡を眼から離すと今度は真正面から彼を見つめてニツと笑つた。十五六ぐらいの美しい少女だつた。そして矢庭に

「今日はどうして水浴びはしなかったの？」

と問いかけて来た。

あまり突然だつたので彼はすっかり度を失つて、どのように応じていいのか戸惑ひしてしまつた。

「私ね」

少女は手に持った双眼鏡の上に眼を落しながら

「毎日、これであんたの水浴びしているところを見ていたのよ」

と云つた。余りに意外な言葉に彼はすっかり狼狽して眼の持つて行き所がなかった。

「馬鹿だな君は……」

照れ隠しにそう云うと足許の石ころを蹴つて後を胡魔化するのがやつとだつた。

「堪忍してね。でも私、とても不思議に思っていることがあるのよ。それを聞いてもあなたは怒らないかしら？」

少女は一寸上眼使いに彼の顔を覗くようにしながら云った。彼は黙っているより仕方がないと思った。相手の沈黙を善意にとったのか彼女は一寸ためらい勝ちに云った。

「それはね、あなたが何時も水浴びをするときちゃんと禪まで締めるのに、その癖一寸も泳がうとしないことなの。何時も浅瀬に寝そべってばかり居るわけが私にはどうしても分らないのよ。私、本当にあなたが泳いでいる姿を一ぺんも見ただことないわ」

少女は真顔で彼の返事を待っているようだった。しかし彼がいつまでも眼を外らした儘黙り込んでいるのを見ると焦らした風で「何故なの？」

とたたみかけた、それでも彼が依怙地に返事しないので今度は先廻りして

「泳げないの？」と訊ねた。

そうあけすけに云われると彼も少しムツとした面持で

「そんなこと、一体君に何の関係があるんだい、どうだっていい事じゃないか」

と言いつ返しざるを得なかった。

「怒ったの？ 本当にごめんね、でも、私あなたが毎日同じ場所でも何時も変なことばかりしているのが気になって仕方がなかったのよ。時々私、顔が赤くなるようなこともあったわ、でも何故かしら毎日覗いて見ずには居られないような気がしたのよ」

少女は彼の顔をチラチラ盗み見ながら又相手が怒りはしないかと怖れるような態度で云った。彼は全くどう云い逃れたらいいか窮地

に陥ってしまった。誰知るまいと思っていたのに、あろう事か若い娘が双眼鏡で素ッ裸の自分の一挙手一投足をすっかり見究めていたとは夢にも気付かぬ不覚であった。しかも彼女はその事に対して並々ならぬ関心を昂めているのである。彼は当惑を通り越して腹立たしくさえ感じられた。

「放つとけよ、人の事なんか！」

虚勢を張って一寸声を荒らげるのが精一杯だった。

「君はずい分変ってるね」

「あなただって変ってるわ」

二人はしばらく相手の心を探り合って沈黙した。

「双眼鏡で男の裸を覗いて喜んでるなんて君こそ、どうかしてるよ」

今度は彼が逆襲した。

「何もわざわざ覗いたんじゃないわ。この双眼鏡はお父さんが鮎の密猟者を監視するためにお役所から預っているものよ。だから私も時々お父さんの代りに彼処へ上ってずっと遠くまで覗いて見る必要があるの。そしたら或る日ひょっこり双眼鏡の中へあなたの姿が写ったのよ。初めは何とも思わなかったわ。川原じゃ毎日大勢の子供達が水浴びしていますもの、でもそれから度々それも同じ頃同じ場所と同じ事があったから、だんだん変に思えて来たのよ」

彼女の指さす方向は観音堂の少し先で内堤の一ヶ所が川に向って小高くせり出した場所だった。ぐるりを人の胸の辺りまで隠れる灌木の茂みに取り囲まれ見張りには絶好の位置であった。成程彼処へ上って見渡せば観音河原は眼の下に展がり見通しは万点であろう。しかし河原の方からは灌木の茂みに遮られて人間一人立っている位

は殆んど眼にとまるまいと思われた。
「一体、それがどうしたと云うんだい
僕は只、毎日彼処で勝手に水浴してい
ただけじゃないか。泳ごうと泳ぐまい
と僕の自由さ」

やり切れなくなった彼はいい加減
に、そんな話は切り上げたいと云う風
に突っ放した。少女は彼の語気を感じ
ると急に悄気てしまった。

「あなたは、きっと淋しい人だわ」

ポツンと投げ出すように娘は云った
遠雷が鳴っている。微妙な感情の交流
が却って二人を近づけた。

「そうでしょ」

共感を求めるように、彼女は控え目
に云った。

彼は何かしらジーンと胸に響くもの
を感じながら、だんだんこの少女に惹
かれてゆく自分を意識した。

そして彼女が決して自分をからかっ
ていたのではないと思いはじめた。

「私もよ」

消え入るような声でつぶやいた少女
の瞳がキラリと光った。

それにしてもこんな淋しい一軒屋に



可愛い少女がたった一人で居ることに彼
は何かしら常ならぬものを感じた。

「お父さんは？」

何時の間にか不思議な親しさを覚えな
がら、彼は語調を柔らげてやさしく訊ね
た。

「今、町へ行ってもっと遅くでないと帰
らないの」

少女は急にやさしくなった彼の態度に
やっと安心したらしい様子だった。

「じゃ君たちは此処でたった二人っきり
で暮して居るんだね」

少女は黙って淋し気に肯いた。

「でも、本当のお父さんじゃないのよ」
彼は、意外なことを聞かされて驚きを
感じた。

「じゃ君は？」

「私はあの山のずっと奥で生れたの。私
を生んだお母さんは、何故か私をとて
嫌いでした。赤ん坊の時でもお乳さえ飲
ましてくれなかったそうよ。お父さんは
私の顔を少しも見たがらなかったし、腰
の曲ったおばあさんは何時も私を見ては
ブツブツ口の中で独り言を云いながら泣
いてばかりいたわ。私は幼な心にこんな

つまらない世の中に生れて来なければよかったのと思っていたのを覚えてるわ。何もかも分らない事ばかりよ。七つの時に筏に乗せられて此処へ貰われて来たの、川へ落ちないように筏の上に櫓を打ちつけて貰って、その中へ座ってよるえていたのよ。筏が余り速く走るから怖わかったのね。覚えてるのはそれだけ」

そう云えば、この少女の顔に漂う秋草のような憂いの色を彼は一目見た瞬間から感じていた。何か深い事情がありそうで彼はもっと二人で話し合って見たい気がして来た。

「中へ入らない？もっとお話ししようよ」

彼の心を見透したように少女はすっかり打ち解けて彼をさし招いた。彼は惹かれるように小屋の中へ足を踏み入れた。見かけによらず小屋の中は意外な程よく整っていた。天井から釣ってある古びたランプも彼の眼には物珍らしく映った。彼は上り框に腰を下し少女はその横へ来て並んで腰を掛けた。

「この生活は幸福かい？」

彼は何かしら、慰さめてやりたいような気持で訊ねた。

「私、幸福って云うことの意味がわからないの。人からいじめられない事なのかしら」

少女の瞳のあどけなさは近づくにつれ彼の心を捕えた。

「さあ、変な云い方だけど、多分そんなものだろうね。僕にだってわからない」

二人は声を立てて笑った。

「只それだけの事なら幸福なんて案外つまらないわね。世の中に幸福よりもっといい事ってあるかしら？」

この突飛な質問は、すっかり彼を面喰らわせた。

「そうだね。あるかも知れない。僕なんか、お父さんもお母さんも兄弟もいるし、誰からもしじめれやしないから、幸福かも知れないけれど、何だかそれだけじゃ頼りない気がするんだ」

と少女は顔を輝かして云った。

「だからあなたは一人ぼっちになるのね」

「どうしてさ？」

「どうしてって！やっぱりわからないわ」

又二人はずっと大きな声で笑った。

彼は部屋の隅にある小さな仏壇を指さして訊ねた。

「あそこに誰が祀ってあるの？」

少女はチラリとその方を見ながら無表情な面持で答えた。

「お父さんの本当の子供と奥さんよ。二人ともこの川で死んだそうだわ」

「一緒に？」

「いいえ、子供が先に溺れて、それから奥さんが気が狂って後から身投げをしたんですって」

彼は次々と新らしい事実を聞かされて少女をめぐる運命の数奇さに驚きを新たにせずには居られなかった。

「本当に気の毒なんだなあ。それで淋しいから君を子に貰ったんだね」

彼女は黙って肯いた。

「じゃ、君はお父さんに可愛がって貰っている訳だね。死んだ子供の代りになったんだから」

「ええ、お父さんは私をとて可愛がってくれるわ。」

少女はそう云って何処か空ろな眼付になった。

「そんな間違いなし君は幸福さ」

彼はそう断定しながらも彼女から何らかの反撥を期待していた。

「幸福な人で私、信じてない。そんなもの私が見付けたんじゃないんだもの。何時か私を見捨ててしまふに決ってる！私は今にきつと不幸になるわ。ええきつとよ。こんな所にお父さんとたった二人っきりで暮している限り、私は自分の手で自分の幸福を捕えることなんか一生出来ないわ。私は幸福でなくてもいいから、もっと生甲斐が欲しいの。お父さんにいじめられたって構わない！」

彼はこの純真な少女にこんな激しい感情が潜んでいるようななどとは思ひもよらなかった。

「ね、何故あなたは一人ぼっちが好きなの？ ね、教えて頂戴！」

彼女の瞳はうるんで今にも涙があふれそうに見えた。その言葉には詰るような強さと嘆願するような憐れさが入り混っていた。

「私、怖いよ、とっても怖い。何故か知らないけど時々、お父さんさえ怖くなってくるのよ！」

彼は少女が淋しさの余りひどく神経質になっているのではないかと疑った。

「何か面白い本でも持って来てやろうか？」

と彼はやさしく云った。

「私、あまり字が読めないわ。学校へ行ったことないから。本なんか要らない！ 何も要らない！」

少女は急に感情を昂ぶらして、じっと彼の顔を見つめた。かと思うと彼の肩に顔を押し当ててワッと泣き出した。

あまりの衝撃に彼の心は木の葉のように震えた。そして今にも父

なる人の姿が小屋の入口に現れやしないかと云う怖れに戦いた。雷が余程近くで鳴り出した。あたりが次第に暗くなってきた。フト彼は川の女神が嫉妬を起したのではないかと云う幻覚に襲れた。

「夕立が来そうだ。僕はもう帰るよ。明日又きつと来るからね」

そう云って立ち上ると少女は恨めし気に彼の顔を見上げた。臉が赤く、まつ毛が濡れていた。

「もう帰るの？」

と力なく呟いて、しょんぼり眼を伏せた。

「さようなら」

肩にかけようと思って延ばした手があらぬ方へ外れて彼は瞬間、この少女が堪らなくいとしく思われた。しかし彼の足は既に小屋を出ていた。

「さようなら、又明日ね」

少女はっと走り寄って云った。

「指切りしてよ」

彼は笑って指を出した。ほんの指先同志が触れて二三度強く振られた。それから二人は手を振り合って別れた。湿っぽい風が川原を吹き渡って来た。雷鳴に追われるように彼はあと振り向きもせず走り出した。

老人は桃色の眩惑を感じた。羅の裳が彼の顔をそよ風のようにかすめ、芳香があたりに立ち籠めるかと思うと、観世音菩薩の金鈴を振るようなおん声が彼の耳に響いて来た。

「われ汝が若くして最愛の妻子を失い、あたらしい人生を追憶の涙のうちに終らむとするを憐みて、汝が失いたる歡びを再び

与えんとて来たり。汝に告ぐ、われは汝がかりそめの娘に化身して、汝の許に来れるなり。その幼き時は子の愛をもて、又長じては妻の愛をもて汝の靈肉を慰さむるなり。不倫にあらず慈悲なり、汝わが済度を受けよ。惑う勿れ」

老人は我れにもあらずひれ伏して菩薩のふくやかな桜色のおん足首に口づけしようとした。忽ちそのみ姿は煙のように掻き消えると見えて、彼の夢は覚めた。

しっとり夜露を含んだ川風が細目に開けた雨戸のすき間から月の光に乗って、冷や冷やと吹き込み青蚊帳が波のように揺れていた。はや秋を告げる虫の音がさやかに戸外に溢れ川のせせらぎの音がそれに和していた。静かな夜更けであった。蒼い一条の光の落ちるところに健やかな少女の寝顔がほんのり真珠のように輝いていた。

自らの妄執が結んだものとは、思いもよらず、老人は今見た夢の啓示に憑かれて理性を失っていた。信仰厚き堤の観世音菩薩がわが娘に化身し給うて煩惱を済度せんが為現われ給うたと思えば、如何許り忝けなくも勿体なく思われ、俄に五体に甦る生氣に彼は激しく揺り覚まされたのだった。

観音川原の浅瀬に何時も只一人、川の精のように現れては鮎のように輝く若々しい裸身を惜し気もなく真夏の太陽にさらしながら、水と戯れている幻想的なその姿。初めてその姿を垣間見てから何時しか彼女は夢見るような日々を送るようになった。同じ時刻同じ場所へ今日も又憧れの姿を見出した時の胸のときめきこそは、彼女がこの世に生を享けて以来、初めて知る憧れの感情であった。双眼鏡が間近く引き寄せる少年の魅惑に充ちた数々の姿態の美しさ妖しさ

に彼女の眠れる官能の蕾は次第にふくらみ初めて行った。更に彼女の心を捕えた事はその少年がいつも自分と同じように孤独であることだった。きっと彼も何か淋しさを持っているに違いないと思うと云い知れぬ親愛の情が湧いてくるのだった。彼の姿が堤の彼方に見えなくなったその後で、彼女は観音堂の前に額づいて一心に祈るのであった。

「観音さま。どうやら私はあの人を他人とは思えなくなりました。世界中でこんなにあの人をいといい思いで見つめている者がありましょうか。私はきっとあなたが一人ぼっちの私を慰んであの人を連れて来て下さったとは思えません。でなくばどうしてこんな淋しい場所へたった一人、あんな美しい人が私の眼に入るところを選んで毎日同じ時刻に現れるでしょうか。観音さま、お願いします、どうか私とあの人とをお結び下さい。たった一度でも構いません。その為に私の幸福とやらが永遠に消え失せてしましましょうとも！」
熱い涙がいつしか頬を伝って流れた。

「観音さま。私は近頃お父さんの眼が恐ろしいのです。今まで私を見て来た眼とは違います。私は昼も夜も身体じうにお父さんの眼を感じるのです。私は自分の身体が何だか穢らわしいものにつき纏われているように思えて恐ろしくなりません。けれどあの人を姿を見てみると、その恐ろしさ穢らわしさが心から洗い清められるような生々とした気持になるのです。それは私のまだ知らない幸福と云うものとは違うのでしょうか、そんな事はどうでも構いません。どうせ私はお父さんの傍から離れて生きて行くことのできない娘ですもの。貰われて来た時から心にそう決めていました。今も変わりありません。けれども、私のこのいという若さがどうして美しい

花をつけてはいけないのでしょうか。あなたはきっと私のこの訴えをお聞き届け下さると思います。たった一度でいいのです。あの人の身体に触れさせて下さい。後で幸福になれなくても、決して泣きは致しませんから……」

奇蹟が現われた。今日こそ、私はその人と言葉を交したのだ。ほんの指先だけではあったが触れ合うことができたのだ。そして明日はきっと……。その希望は彼女に底知れぬ勇気を与えた。

「酷いことを聞かせるようだが、お前と云う娘は、どうしても世間並の結婚は出来ぬ女なのだ。こればかりは口が裂けても、わしの口から云うまいと誓っていたが、尋常のことわりでは到底お前の心を靡かせることは出来ないと悟った今、最後の手段として、それをお前に聞かせねばならぬ破目になってしまった。何も知るまいが、お前という娘は世にも因果な身の上に生れついたのじゃ。よいか！

お前の両親は血肉を分けた兄いもうとの間柄だったのじゃ」

電撃のようなショックが彼女の耳をつん裂いた。闇の中で彼女は血の氣を失った。

「聞きとうない！ 聞きとうない！」

ふり絞るように、絶叫した彼女は身悶えした。

「許してくれ、云わねばならなかったのだ。わしは、もうお前の父ではないぞ。一人の男だ。お前にとって、この男の外に世界中で身も心も許す男は唯一人も居ないことを知って貰いたかったんだ。

血のつながりのないわしとお前は、仮初の親子の名で結ばれたが、今こそ観音様の濟度を受けて晴れて夫婦の契りを結ばねばならぬのじゃ」

再び雲を出た月は老人の姿を幽鬼のように浮び上らせた。

「たった今、夢枕に観音さまがお立ちになって有難いお告げがあったのじゃ。お前は観音様の化身じゃ。この慙れなわしを濟度してやろうと思召してお遣しになったのじゃ。」

月光を頼りに老人の腕は再び彼女の肩の辺りに伸びた。

「嫌ッ！ 寄らないでッ！ たとえ私がどんな因果な生れつきであろうとも、それは私の罪ではありません。私は観音さまの化身などではありません。人間です。女です。娘ですわ。私はお父さんを大恩ある親としますけれど、今さら娘からお嫁さんになることは出来ません。そんな浅ましいことをどうして慈悲深い観音さまがお許しになるでしょうか」

何かが娘の心をしっかりと支えて居るように老人には思われた。こんな娘ではなかった。こんな激しい反抗を示す子ではなかった。

「まだわからないのか。お前には何の罪科はなくとも因果というものは、何処までも付き纏ってお前を苦しめるぞ！ 早くその因果の程を悟って、それをお前一代で断ち切って新しい種を蒔かぬようにするのこそ、観音さまの慈悲に適うというものだ。新しい罪障を重ねるよりも、その代りに哀れな男を一人救い上げて観音さまのみ心に副うてくれ！」

かき口説きつつも老人の指先は蛇のような執拗さで彼女を求めて這い寄るのだった。

「分ってくれたか？」

白い浴衣の寝巻がまるやかな曲線を形作っているあたりが節くれ立った指先が撫で廻した。娘は無言でそれを激しく振り払った。

「嘘！ 嘘！ 勝手な嘘です。観音さまがお父さんと私のどちらを慙れんでいて下さるか、立派な証拠を見せて上げましょう」

切迫つまった気持で彼女は思わず心にもない言葉を投げつけてしまった。ハッと思った時はもう遅かった。少年の顔が臉の中でぐるぐると廻った。

「何だと！ 証拠とは何だ！」

老人は勢込んで詰め寄った。

「優しい立派な若者です！」

彼は急にカラカラと笑い出した。

「何を他愛もない！ お前はきっと夢を見たんだ。こんな浮世離れの別天地に、どうしてそんなあつらえ向きの色男が現われたりするもんか！」

不思議な対決が始まった。

「私が夢を見たのなら、お父さんこそ真正銘の夢を見たんでしょ。私の証拠はちゃんと生きて血の通っている人間です！ 観音さまはお父さんと、私のまるっきり違った願いを同時に聞き届けになる筈はありません。私こそ涙と憎しみのない立派な証拠をお眼にかけますわ」

娘の言葉には、何処か犯し難い強さがあつた。

「よし、お前がそんなに迄云い張るのなら、望み通りその優しい立派な若者とやらをわしに一目見せて貰うとしよう。そしてお前がその男と手を取った姿を見たら、わしは何日迄もお前の父で居てやろう。その代り」

と彼は唾を呑み込んで続けた。

「もしも約束通りの事が出来なかったその折は、わしはもう決してお前の父ではなくなるぞ！」

老人の言葉には、脅かすような響きが籠っていた。

「覚悟しています。もし、それが事実となってお父さんの眼の前に現われた時は、私は何日迄もお父さんの娘にして置いて下さいますか？」

娘の、惑う気配もない冷静さにもしやと云う不安が、彼の脳裡にかすめた。しかし、どう考えてみても、そんな馬鹿氣たことは想像することさえできなかった。瞬時のためらいを退けて

「よし約束しよう」

と彼は肯いた。

それ切り会話が途絶え、深い沈黙が訪れると娘は父に背を向けて一心に観世音菩薩のみ名を唱えた。

寝苦しい夜は漸く明け初めた。克二はその朝、寝覚めの気分が何日もと違ってのを感じた。熱っぽい異和感が全身を包み波状の悪感が背筋を走った。風邪のようでもあり何処か又違った疲労があるようにも思われた。夕方に近づくにつれ頭痛がだんだん激しくなり食欲が全くなかった。

就寝前に頓服薬を二服呑みとろろまどろんだかと思うと云いようのない厭な夢を見てうなされて目が覚めた。額に油汗がたうもろこしのように吹き出していた。熱は三十九度に達していた。

すぐ医者が来た。長い間小首をかしげていた医者は触診で背中や腹を綿密に調べていたが、やがて眉をひそめながら

「チフスですな」

と言った。

翌朝病院から寝台車が迎えに来て彼を隔離病棟へ運んで行った。消毒液が家中をクレゾールの臭いで充満させて帰って行った。

伝染病のため付添婦の他身内の者の看護は許されなかった。夜になると更に体温計は上昇を示し四〇度を越した。激しい尿意を混濁した意識で斗いながら声が出ずベッドから転がり落ちて失禁した。

水面に石油を流した時のようなガラガラしたどぎつい色彩の幻覚がひっきりなしに臉の裏に現われた。脳症を起していることが家人に知らされ直ちに親許へウナ電が飛んだ。宙を飛んで駆けつけた両親の顔も、高熱にぼやけた眼には輪郭さえ朧ろで、その声は深い井戸の底から響いてくる木魂のようにワンワンと鼓膜を叩くばかりだった。

その朦朧たる生死の境をさまよう意識の底にさえ、かの渡守の少女の臍肉がうごめいていた。それは死に挑む若い官能の反撃だった。死神の金剛力を跳ね返そうとする十八才の肉体の怒りでもあった。

やがて彼は危機を脱した。

別人のようにこけた頬と、脱けて薄くなった蓬々たる頭を撫でながら鏡の中の自分に対して彼は新らしい出発を呼びかけていた。

半月振りで昨日やっと退院した許りの身体は、未だ独歩も覚束なげに衰弱していながら食欲だけは別の生き物のように三度の飯を餓鬼のように待ち焦いさせた。

もう二学期が始まっていた。進学のキイポイントともなるこの学期のロスを思うと、じっとして居れない焦燥を感じて一日も早く家に帰りたい思いに駆られるのだった。

一度ボストンバッグの整理でもして置こうとチャックを開けると何時の間にか美しく洗濯した下着類が折目正しくアイロンを当てキ

チンと揃えて詰めてあった。その中から皺一つない褌を見出すと、彼は我れにもなく顔の赤くなるのを覚えた。

思い出は川に飛び渡し守の小屋の少女との心浅りな別れをしみじみと思い浮べた。

「明日又きつと来てね」

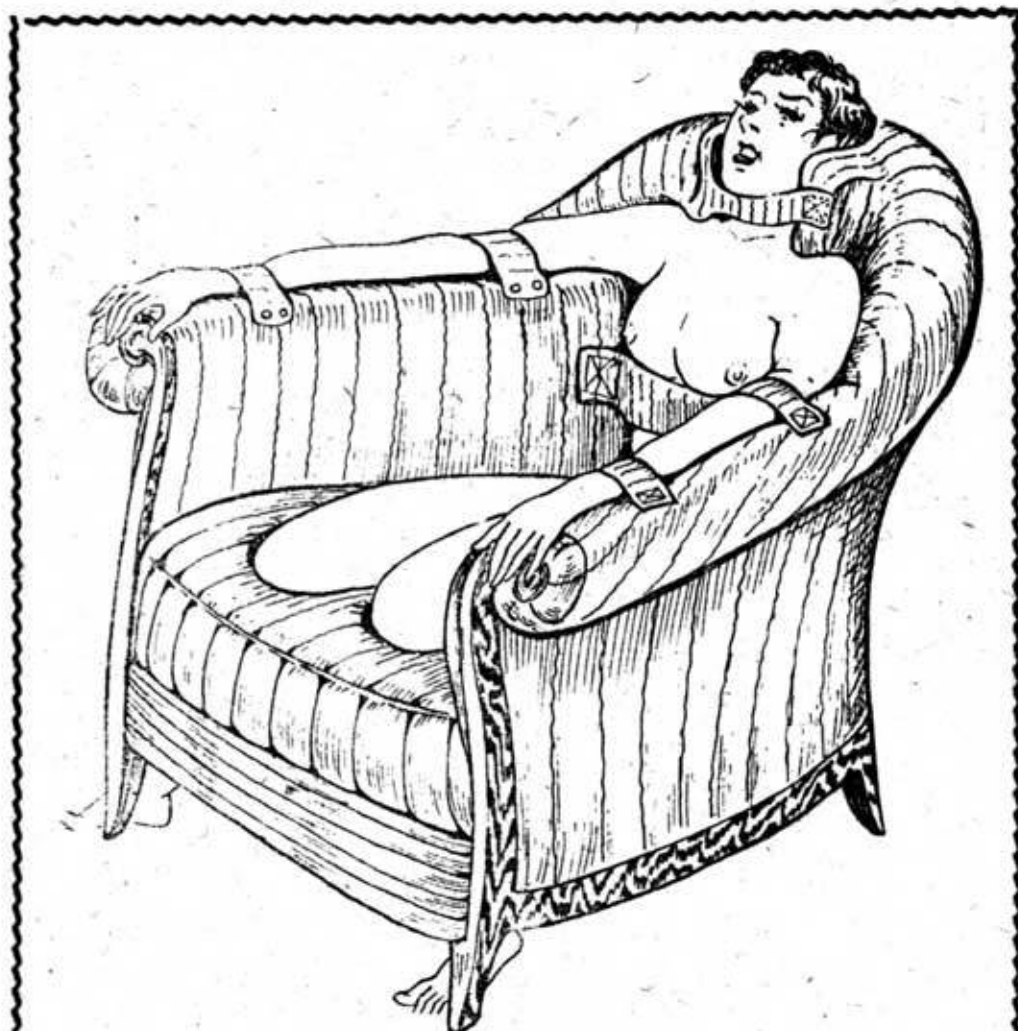
と追い縋って指切りさせた彼女の何かを訴えるような、うるんだ瞳をまざまざ思い起すと、たった四五町彼方にある、その小屋へ今からでも走って行きたい程の懐しさを覚えるのだった。たった二人きりの小屋の中で生れて初めて与えられた機会を、徒らに萎え震える心で空しく逸し去ったあの時の自分は、すでに疫病の虜になっていたのであらうか。

運命的な機会は自分の怯懦に依って空しく消え去った。もしあのとき自分に男らしい勇気があったら、疫病のつけ入る隙もない大歓喜が訪れていたであらう。

たった二旬の時日が彼の肉体に対する誇りと自信を絶望的に打ち砕いてしまった。この瘦せさらばえた醜い姿で再び彼女の前に現われたとしたら、彼女は如何に驚き怖れ、そして嫌厭の情を示すであらうか。

来年又来よう、一年の間に再び紅顔を取り戻し、勇氣と自信を身につけて君の前に現われよう。それまでどうか健在で待っていてくれ！彼はそう心に誓うと、初めて明るい希望が甦ってくるのを感じた。

無垢の少女が双眼鏡を両手に食い入るような視線を自分の裸身に集中している姿を再び想像すると、嵐のような昂奮が襲ってくるのだった。



＜倒錯の手記＞

妻になりたい 永遠の願い

上 木 慶 二

私は自分が男であると言うことが、うとましくなりません。自分が生れながらにして女であつたら、どんなによかつただろうと思わぬことはありません。

事実、私の体つきは、ふっくらとまるみを帯びており、きめの細かい肌をしております。二十四にもなりながら、年も二十一か二十二位にしか見られません。一度女装をして

みたらと思うのですが、金がないのと、買に行くのが恥しいので、まだ一度もしたことがありません。

私には全然頬髯がなく、ただ鼻の下の口髭が一週間ばかり放つたらかしておくと、ぼやぼやと生毛のように生えて来るだけです。よく女みたいな体だと云われ、いっそのこと、女装してみたら、と考えます。私が男である

のは、男の生理を持っているというだけにはすぎません。それでも、それは周期的に男の機能をもたらすのですが、私は女を見つけることが出来ません。柄こそ一米五九と小柄ですが、自惚なしに私は美男子で通っているのです。それも女性的であるが故の美男子かも知れませんが。私は幾人かの女に愛されました。彼女達はいずれも世間的な意味での美人でした。他の男でしたら喜んで彼女達の愛を受け入れたでしょう。しかし、私には出来ませんでした。私は彼女達を愛することは出来ても、異性として交際することは出来なかったのです。私は彼女達の美しい顔を見ながら友達のように平静な気持でした。彼女達を両腕に抱きかかえることなど想像することも出来ませんでした。女性的な彼女達と接していると、私の気持は萎えてしまうのです。私は二十四才の今でも童貞です。私は女性を無理矢理自分のものにしてしまうなどということとは、とても出来ません。私の体つきは、そのように力強くは出来ていないのです。

けれど、私とて女性を愛することは出来るのです。ただそれには条件があり、その条件に合った女性を探すのは、絶望的といつていい位、大変むずかしいのです。私は人一倍恥

かしがり屋ですから、仮りにそう云った女性に会ったところで口をきくどころか、近づくことすら出来ないと思います。もしこの手記でそう云う女性に会えたら望外の喜びです。

条件と云うのは、第一に大柄でなければなりません。少なくとも私より五センチ以上は大きくなければなりません。第二に頑健な骨張った体つきでなければなりません。ただし骨張ったというのはやせた女性というのではありません。女子のやり投げや砲丸投げの選手に見られるような肩幅の広い、しまったがっしりした体つきです。女性的な柔軟な肌を持つなどとはまっぴらです。そして、第三は口幅が広いこと。これは理由がわかりません。ただ電車の中などで口幅が広くて、きりっとしまった女性を見ると腰がへたへたと抜けるほど激しいショックを感じるのです。おそらく本能が、そう云う女性を要求しているのだと思います。第四に私より年長であること。いくつ上でもかまいません。第五はやはり口元に関することですが、髭の生えていることです。二三日放ったらかしておくと、口のまわりが黒ずむような女性です。更に頬髭もあるような女性は、なお望ましいのですが、それは不可能だと思います。

以上の条件に合った女性なら、必然的にこれは声も太く、頬骨も高く体力も性格も男性的だと思うので、これは条件に入れるまでもありません。最後の条件は処女であること云うことです。以上の条件に合致していれば、五十過ぎの女性でもかまわないのです。

私はそうした、たくましい男性的な女性の両腕の下に組み敷かれ、自分は美しくも可憐な女性として愛されたいのです。私は夢想するのです。私よりはるかに体格も大きくて力強い妻に圧倒され、身動きも出来ないまでに押さえつけられるという場面を。

そして、やがて羞恥と恐怖と無駄な逃走に疲れ果てて、ぐったりとした私に対して彼女が主導権を握ってくり拡げる無限の調和を。無限の調和と書きました。そうです。俗悪な世間の風習や常識から解放された無限の調和です。私のような柔弱な男には、そう云う女性が必要です。又、今上げた条件に合致する女性には私のような男が必要なのだと思うのです。

私はそうした女性と二人でどこか浴室つきのアパートか小さな家を借り、正式に夫婦生活がしたいのです。勿論私はパンティからブラジャーに至るまで、すっかり女装します。朝

から夜まで、いや死ぬまで変りません。又一方私の妻たる女性は、これもやはり着るもの全部、男装してもらいます。そして二人きりで生活するのです。そうすれば世間の常識から見ておかしくありません。彼女は夫として生活の重荷は彼女にかかりますが、その代り私は彼女の妻として従順に仕えることは当然です。男性的な女性としての彼女と女性的な男性の私はびったり調和することと思います。彼女は私をこわれやすい楽器かなにかのよう扱ってくれましょう。そして、ある時は多くの夫がそうであるように惨酷にいじめることもあるでしょう。彼女が優しい微笑を浮べた時には、私は身をすりつけて妻の幸福と夫への信頼を感じるでしょう。私がなにか気に入らぬことをした時の彼女の憤怒の表情に私は恐怖し身の縮まる思いがするでしょう。又ある時、いつになく早く帰って来た彼女は勤め先できっと不愉快なことがあったのでしょう。ふき掃除をしている私に無理難題をふきかけ、果ては口答えをしたといって、私の頬を激しく乱打します。逃げようとした私の強引に引ずり倒します。盛り上った固い両の乳房は二人のこの争いで背広やYシャツからむき出ててすざまじい躍動ぶりを見せるの

です。彼女のふき出る汗と荒々しい息使いは身の縮むような恐怖と歓喜と嫌悪に繊細な私の神経をさいなむのです。しかし、それは彼女の夫としての悦びの表現であり、本能でありますから、妻としての私は忍ばねばなりません。

そして、翌日は脹れ上った私の顔を優しく手当してくれるし、浴室では静かに全身を洗ってくれます。私は勿論妻らしく前を手で隠しますが、彼女は含み笑いをしながら、その手を退けます。すると私はどうしようもない羞恥に顔をまっ赤にさせて彼女の胸に隠すのです。

それは如何なる男性も及ばぬ優しさです。私は女性です。だから私をマゾヒストと呼ぶのは間ちがいです。私は男性の生理を除いた上での肉体上からも精神上からも貞淑そのものの女性なのです。同様に私の条件に合致した女性もサデストではありません。彼女は男性なのです。サド・マゾは精神のひずみから生れたものです。私はこのことに関して世間では絶大な誤りを犯していると信じております。夫とか妻とか云うものは男性とか女性とかいう生理の如何だけできめるものではなくて、それはむしろ人間各個人の持っている

女体切腹の構想

壯絶、志士の妻たち

扇

芝

昭和二十年八月十五日

大東塾生達の妻が一室に集っている。塾長の妻も娘達も同座している。中で話は続く。「私達も夫のあとを追って自決するのが妻としての道です。今夜、夫達は皇居前でそれぞれ割腹なされますが、私達も夫と同じ様に女ながらも割腹して陛下にお詫び致すべきだと思います。」

塾長の妻は一同の覚悟を促し、女の切腹をそれぞれの型に従って、これから自分達が家で模範を示すことを述べ、一同も賛成の者は一緒に腹を切ることを勧める。

ややあって、一同は賛成した後、今までしめてあった襖をあけると、そこには切腹の座がしつらえてある。真中に塾長の妻、右から長女、二女、左には三女、四女が一同に向って一列に並ぶ。次の間の敷居には女の腹切を賛成した一同が、それぞれ腹を切り易い間隔をおいて並ぶ。

座についた塾長の妻と家族は、「天照皇

太神宮」の軸に礼拝の後、諸肌ぬぎの一同に「自分は十文字腹、長女は前を寛ろげた一文字腹、二女は胸許だけ開いた自害、三女は諸肌ぬぎの古式十文字、四女は腰巻一枚だけで切る所謂腰巻をやる」と述べ、それぞれ、どれでも手本にするように述べると、始めに二女がモンペの紐をとき胸許をゆったりあけて短刀を両手で逆手に握り左乳下を突き、返す刀で頸動脈を突き立てのど笛をかき切り乍ら前に伏す。

次に長女がモンペをずらして肌着と上着を重ねて両肩のあたりまで開き、腰巻もゆったり腰骨まで下して臍下四寸あたりを真一文字に気合もろとも掻き切り、乳房を一抉りして矢張りのど笛をかき切って前に突っ伏す。次に三女が上着、肌着を脱ぎすて腰巻共にゆったり押し下げて左脇腹に短刀を突っ込むと、まっすぐに下に切り下し

内面にひそんだ本質によってのみ判断さるべきものです。

この偏見が絶えぬかぎり永遠に結婚できない女性・男性が絶えぬことでしょう。世には多くの年若い独身男女がおります。少数の例外を除いて彼らは全て中性的なのです。男は女性的であり、女は男性的なのです。彼らの大部分は私ほど極端でないにしても世間の偏見にわずらわされてつかむべき幸福の一とかけらをとり逃したのではないのでしょうか。

欲する男には欲する女の型を、欲する女には欲する男の型を。これが人間社会の理想の一つではないでしょうか。

この手記には、少しの嘘いつわりもありません。私の肉体は精神も含めてここに書いたとおりなのです。

私の夫にふさわしい女性はおりませんでしょうか。私はその女性に身も心も捧げ外面も妻になり切って一生仕えるつもりです。そのような女性と知り合う機会はないものでしょうか。この手記をごらんになった女性の中で私を妻として娶ってくれる方はいないでしょうか。私は貴女のその男性的な気概を充分に發揮出来るように、貴女にふさわしい貞淑な妻になるつもりです。

(おわり)

刀を直角に角度を変え、そのまま臍下四、五寸のあたりを真一文字に横に掻き切る。

更に右脇腹で直角に切り上げ、抜いた刃を臍に深々と突き立てると、そのまま切り下して刀をぬいて膝にかまえ、手で腸をつかみ出し、三宝口にのせ、右手の刃で切りはなすと同時に乳の下を挟み乍ら息絶える。

最後に四女が一切の衣服を脱ぎ腰巻一枚になり、それも十分に脱ぎ下して臍の下四寸あたりを一文字に切り、更に臍の上を今度は右脇にかけてもう一本、真一文字に掻き切る。つまり二文字腹である。そして返えす刀で乳房を挟み、のど笛をはねて血の海に突伏す。

ここで塾長の妻は、無念の十文字腹を切ることを述べ、さらに一同に一緒に切るところを勧める。一同もそれぞれ思いのままに用意を装える。腰巻一枚になって更に押し下げる者、肌脱ぎ乍ら腰巻の上から切ろうとする者。前だけ掻きあげるもの、上半身裸体となるもの。或は長襦袢一枚となって、その上から乳房を突こうとするもの、胸許をかきあげ乳房に短刀をぎす者さまざま、塾長の妻も上着肌着をぬぎ、モンペ腰巻

共にゆるめて押し下げたが、不十分なので逆にモンペも脱ぐ。そして一同の自害や切腹を見届けるようにして、ゆっくり時間をかけて腹を切りつづける。或る者はすでに乳房の短刀もろとも突伏したもの、或る者は塾長の妻と同じ早さで、ゆっくり掻き切るもの、又はすでに一文字腹を切り終えたもの、二文字腹の中途の者、のど笛をはねて血を噴出させているもの、など、さまざま。

塾長の妻は、それをゆっくり見乍ら右脇まで切ると、そのまま腹中に刃を突っ込んで一同を見ている。ややあって、大半が息絶え、或は突っ伏すのを見ると、残った者を励ます様に気分をこめて刀を引き抜き、オゾオチから下腹まで、まっすぐ切り下すと腹中に手を突っ込んで腸を引き出し、三宝に納めて刀で切断し、再び腰巻をつけて傷口にまとうと、今は左の乳房を大きく挟み、返え刀で天皇陛下万才を叫び乍ら、のど笛を突き立て左から右にはね切って、どっと突っ伏してしまう。やがて二十分後には一同完全に息たえて、あたりは血の海と化している。

「奇譚三十九夜物語」

~~~~~(第十九夜)~~~~~

辻村 隆

## 第四十五話 麗芳の足

残暑の厳しさが何時までも尾を曳く今日此頃です。例によってメ  
ンバーは八人——。日焼けのした顔をほころばせてゴルフ自慢に余  
念のないのはパイプ氏です。寅さん直伝のお仕込みで相当に腕を磨  
いたようで、次回の例会を、美加の原か春日台辺りのカントリーク  
ラブで開いてはどうかと、しきりに一同を説得しているのです。  
冷房のきいたクラブのルームは、外の熱気を遮断して、快よい酔  
が退屈男達の、体の隅々までも浸透して行きます。

聴て人々は誰からともなく、最近話から遠ざかっているステッキ  
氏を指名したのでした。

ステッキ氏は徐むろにグラスを措くと、にこやかな笑みを湛えて  
扱てと口を切ったのです。

「最近コレラ騒動で、随分騒がれている台湾の基隆——。この地も  
昭和二十年迄は、れっきとした日本国土だったのです。私の知友、  
吉村氏が、基隆のU貿易商会の渉外課長として昭和十四年赴任して  
以来、昭和二十二年の八月に引揚げてくるまでの八年間、彼は世に  
も妖しい魅力にとり憑かれていたのです。谷崎潤一郎の古い小説  
に、『富美子の足』と云う、耽美的な作がありますが、世にも稀れ  
な麗わしい足に、没頭し耽溺した、これは一紳士のざんげ録でもあ  
るのです」

×

×

×



深い霧に包まれた夜だった。基隆の港は模糊と霞んで、埠頭には  
 儲えたバナナの強烈な果香が充満していた。

嘉義出張所へ戻る出張所長を見送ったあと吉村源太郎はいつにな  
 く深酔いの自分を発見した。この儘寝苦しい宿舎に帰るのがうとま  
 しく思われて来た。

龍眼を売る阿媽の、ヨチヨチとした纏足の足元にフト眼を落した  
 時、突然彼の脳裡に、女中の劉の言葉が蘇がえった。

「一度私の娘の纏足の脚を見てやって下さい。きっと旦那様、お氣  
 に召しますですよ。……それに基隆では珍しい美人です——」  
 宿舎で劉氏は、しきりにその話を持出しては、吉村に娘を見せた  
 がっていた。

時計を覗くと午后の十時半で夜は更けている。吉村の粹興が、む  
 らむらと娘に一度逢って見たい好奇心にかられた。

彼はH胡同の劉氏の陋宅へ、馬車を走らせていた。

「『纖々たる玉筍、輕雲につつまる』か——。杜甫の詩文には、纏  
 足を随分賞翫しているが、俺の好みに果して合うだろうか。これは、  
 西洋でのコルセットによる細腰と機を一にした、いわば一種の人体  
 美整術と人は云うが、可哀そうに、年頃の娘がヨチヨチと、家鴨の  
 様に尻を振って歩いているのは、余りいただけだ図ではないが……」  
 しかし吉村は、纏足が、この地に於て如何に珍重されているかは、  
 既に徒然なる儘の文献誌の抄読で充分知悉していた。

台北帝大の解剖学教授金関博士の研究によれば、纏足の有無が交  
 情に於て、如何なる感覺的な差異があるかを、数十名の台湾婦人を  
 対象にして調査した処、その結果は、實際にかなりの差異を認め、  
 纏足が男性を喜ばすためのものであることを発表していた。

その起原が、女を財物の一種と見做し、一夫多妻の習俗から、逃  
 亡を防ぐためのものであるとも云い、又一説には、腰部の肥大発達  
 を促進させるためだとも謂われている。

所謂、蓮歩楚々の形容の如く、纏足を金蓮と呼び、古い中国の男  
 性が、いかに纏足に憧がれ、これに傾倒したか、古書には蓮癖なる  
 言葉すらあるくらいである。

沓音も軽やかに歩く音を楽しみ——、次いでこれを近く、遠く、  
 或いは偷み見、凝視し、更に纏足に蒸れた匂いを嗅ぎとり、遂には  
 足にくちづけし、更に高じると、軽く歯をあててこれを「噛」み、  
 常規を逸する力を入れて強く「咬」みつき、最後には足をすっぱり  
 と口中に頬張り、「食」と云って、足指の間に西瓜や南瓜の種を挟  
 んでポリポリとこれを啖うようにまで昂進してぐる。

故に、フェティシズムの極致、中国の風習に勝るものはないと云  
 って憚らぬであろう。

吉村源太郎にしても、日本女性の、顔許り美しく粧おっても、そ  
 の足たるや、踵は靴づれでタコをつくり、小指はへし曲つてあるか  
 なきかの爪の痕跡をとどめた、大きな薄汚れた扁平足の水虫くさい  
 足には辟易していた。

足に対して極端に美的観念をもった中国人と、足には頓と無関心  
 の日本人と、果してどちらがいいとは云い切れぬにしても、せめて  
 くるぶしのコチコチの硬い餅のような皮や、足指の爪ぐらいは手入  
 して欲しいと、吉村も考えていた。

H胡同は街灯もなく、暗い闇に包まれていた。道端にアンペラを  
 置いて転がる苦力が、気味悪く黒々と地に這っている。

日本人街を出外れると、貧富の差はここも激しく、どぶのくさっ

た汚臭が充満していた。

吉村源太郎は淡い後悔をかみしめ乍ら、それでもここ迄きた以上、腹を据えて、やっとのことで劉氏の土塀に囲まれた家を発見することが出来た。

彼が入口で大声で呼び乍ら、古びた戸を叩くと、微かな光が洩れて、劉氏の顔が迂散臭げに戸に覗いた。四十七才と云うことだが、どう見ても六十を過ぎた老婆に見える。

「まあ一旦那さま。今頃どうなさいました」

劉氏は吃驚した様な声を揚げて、思いで戸を大きく開いた。

「急にお前が自慢の娘さんを見たくなったのさ。いいだろう？」

「ハイ。いいですとも——でもチョイト……」

老婆にフト困惑げな表情が走る。

酔った勢いで吉村は、ずっと体を暗い部屋に入りこませた。

「では、少し取片づけます。旦那様、汚ない処ですが、ここで暫らくお待ち下さい」

せかせかと老婆は、部屋にふさわしくない、極彩色のカーテンを引いた、次の部屋へかくれた。

彼は所在なく、スリーキャッスルの桃色の袋から煙草をつまみ出すと火をつけた。

静寂の中に、彼は隣室から啜り泣く若い女の声を聞いた様に思った。

われにもあらず腰を浮かせると、足音を忍ばせ、彼はカーテンに近づいた。カーテンの割れ目をそっと両指で音もなく開き、部屋を覗いて、吉村は呀々と声を立てそうになった。

吉村のいるこの薄汚ない土間にくらべ、隣室は何と云う見事さで

あろう。

紅帳の蔭に、眼も綾な夜具が伸べられ、それに腰を降した若い娘の、照り輝やく許りの、この世のものとも思えぬ美しさに、吉村は眼をみはる思いだった。

劉氏はひざまづいて、娘の金蓮をしきりに包んでいたが、それは老婆の姿に隠れてしかとは見えなかった。娘は時々痛そうに眉をしかめ、殺した呻きをあげている。

花冠をおろし、鬘をといった白磁の耳に、玉の耳飾りが微かに揺れ、身には淡紅色の金で竹梅を織りだした短衿をまとい、同じ淡紅色の長い裾が地に曳いている。

娘は既に履き終ったその片脚をついと立てた。裾からのぞく錐のように尖った足——踵の高い、淡紅のその鞋は僅か三寸——。

吉村は所を忘れて、ウーンと唸った。

市井で見かける、五寸、六寸の足には、纏足の妙味を感じなかった彼も、掌にすっぽり入りそうな、三寸のこのような見事な金蓮にお目にかかったのは、臍の緒きって以来始めてであった。

劉氏はゆるゆると娘の前から立上った。何かくどくどと念を押している様であったが、自分の娘に見惚れたようにしばし凝視し、それから振りむいてカーテンに歩いて来た。

吉村源太郎は慌てて、元の場所に返った。彼の眼先には、先程チラリと見た、娘の纖々と裾からはのかにのぞいている金蓮が、灼きついて離れなかった。あの瞬間、彼は纏足の造化の妙のとりこになったのであった。

劉氏が何を云っても、彼の耳に入らなかった。もう一瞬でも早く娘に逢いたい一心であった。娘の名は麗芳——。齡十七才。



歩一步近づいた吉村に、麗芳はただもう真赤になって、うつむく許りであった。

劉氏が尚もこれ以上小さく見せたいと、努力して強く巻いたのか彼女は、歩くことも困難なぐらいで、僅かに二三歩、楚々と辛うじて歩を運んだだけであった。

その夜は、劉氏の掌中の珠を拝しただけで、吉村は為すこともなく戻った。払えど払えど彼の脳裡は、麗芳の妖しい、この世のものとも思えぬ美しさに掻き乱された。

× × ×

やっと貯めた五千円を懐ろにして、吉村が劉氏を訪れた時、老婆は狂喜した。娘が未だ幼ない頃から粒々辛苦して美形に育て上げた報酬が、今老婆の手に握られたからだ。

吉村は独身であったが、日本に既に許婚が定まった体であった。彼は、麗芳を正妻としてでなく、内妻の扱いで劉氏に交渉した結果、身代金五千円でやっと受諾し



たのである。

麗芳は自分の父親を知らなかった。噂では劉氏が或る才匠の、三号か四号の扱いで、子供を産み落とすと共にお払い箱になったとか云う噂で、彼女の苦勞の長い生活が、四十七才の劉氏をすっかり老い込ませたに違いない。恐らく彼女の生甲斐は劉麗芳一人にかかってたと云っても過言ではなからう。

既に今宵まで、暇さえあれば足を運んで吉村に、麗芳も並々ならぬ好意を寄せていた。

文字通り欣喜雀躍、吉村は新婚の、この夜を只管に待ち望んでいた。劉氏が隣りの黄氏に泊りに行くこと、あとは唯二人切りの閨房である。

麗芳のいで立ちには、今宵の晴れ着で桃色の地に黄色い花を散らした長衿に、揃いの裙をつけ、踵の高い銀色の刺繍鞋をはいて、光りまばゆいばかりであった。

彼女はうつむいた儘、首の辺りまで紅葉を散らしていた。そっと

頬にさわると火の様に熱い。

吉村は、麗芳の体を、宝物のようにそっと抱え上げた。今こそ彼女の金蓮が、まざまざと紅帳の中で見られるのだ——。そう思うと吉村の心は疼いた。

麗芳の体を横たえ、下着だけににして、銀色の鞋を脱がせると、中に軟かい睡鞋をはいている。それはピッタリと足に合って、まるで彼女の皮膚の一部のように思われた。

睡鞋と靴下をとる時、麗芳は恥じらって、顔をそむけ、わなわなと震えた。

吉村は緊張をとく様に柔かいくちづけを与えた。

淡紅の八尺の布に包まれた玉筍のような金蓮が吉村の手でスルスルと解かれた。

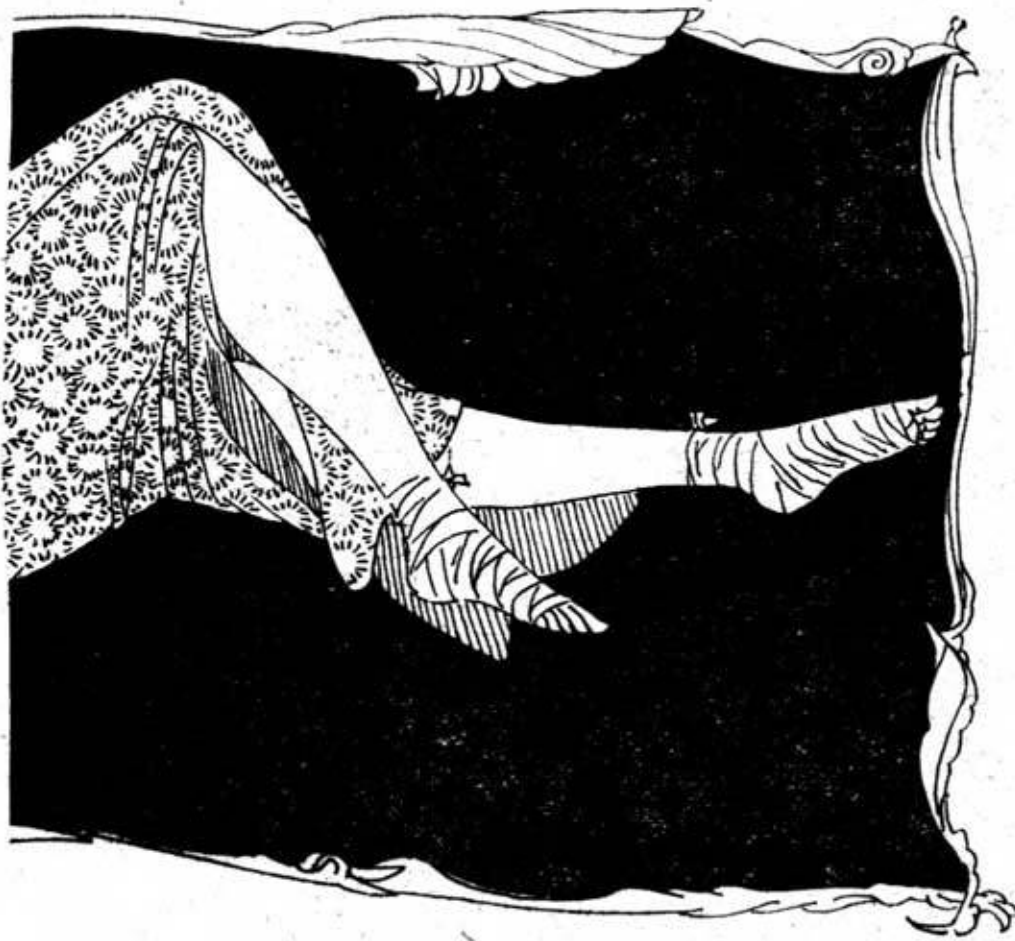
△ああ、これまで麗芳の母が、手づから布を巻く以外、誰一人として見る事の出来なかつたこの金蓮！。それを俺は今、思う存分、自由にもて遊ぶことが出来るのだ▽

彼は感動の余り、手でいじり廻した。麗芳は顔をしかめて、しきりにうめいた。

「痛むの？」

「離して——お願い……」

麗芳は涙さえ浮べて両脚をすぼめよ



うとした。彼は意地になって、尚も二つの金蓮をしっかりと握りしめた。

すると金蓮から、得も云われぬ芳香が漂い始めた。吉村は鉢をとるのもどかしく、密封している白布をズタズタに切りほぐしていった。

絶妙と云うも劣か、雪のように潔らかな白蓮が、ありありと彼の前に、その姿を現わした。それは何と表現しているのだろうか——。

二、三、四、五の指は足の裏に曲って、親指は尖って鉤のように上にめくれ上った翹の形をし、踵と足の中心の分界に一条の溝が出来て、その中に小さな指の群れがめり込んでいる。

くだけよと許り、彼はその素足を掌中に握りしめて、夢中でささやいていた。

「いくつの年から纏足にしたの？」

「四才からですわ……」

彼は劉氏の執念に眼の瞞る思いだった。麗芳は話すことによって、初夜の羞恥から逃れようとするかのように、一気に喋り始めた。まるで堰を切ったように……。

「でも、本当にきつく巻き始めたのは六才の頃からでした。八、九才の時が一番苦しくてたまりませんでした。母は毎朝、私の足を洗って包み直してくれましたが、誰一人として部屋には近づけませ



んでした。私の悲鳴が聞えるのを恐れたからでしょう。余り大声で私が泣き喚くと、母は私の口を塞ぎ猿轡をはめました。そして特別に作った、脚の長い細長いテーブルの上に布団をしいて、私の体をしっかりと身動き出来ぬ様、机に縛りつけました。母は口癖のように、纏足する時は決して足を動かしてはいけない、手で払いのけてもいけない。痛かったら、うんとお泣きと云われました。そうそうこんな事もありました。

纏足したあと、余りの痛みに堪えかねて、私が部屋の中でワアワア泣いていますと、隣の伯父さんが聞きつけ、わけを知ると、八、九才の小娘の足をこんなにきつく縛って、若し病気にでもなったらどうすると、とても母を責めたことがあります。母は終目泣いていましたが、その夜、お前があまり大袈裟に泣くから、遂に隣の伯父に見られてしまったじゃないか。折角内緒で苦勞していたのに水の泡になって、私の体を天井から縛って吊るすと、もう泣かないか泣かないと、鞭で思い切り叩かれました。それでも私の纏足の両脚だけは絶対叩きませんでした。私はもう決して泣き喚かないからと、必死に許しを乞うて、やっと天井から降されました。そんなことがあって以来、母は尚更今迄より嚴重に布を巻くよう



になりました。

私は痛くてたまりませんが、大声でも泣けないので、布はその儘でしたが、母に内緒で大きな鞋にはきかえました。すると四五日経って、足に豆が出来てしまいました。母はその事をしって、勝手なことをするから豆が出来たのだと、とても怒り、例のテーブルに少しの身動きも出来ないくらい犂々と強く、私の体を縛りつけ、足の豆に大きな針をプスリと突き刺しました。猿轡されているので声も出ませんが、私は思いきり泣きました。

母は容赦なく、豆は今のうちにすっかり取り去らぬば一生治らないんだと、汗をかくて、尚もつづけざまに針をつき刺します。その痛いことと云ったら口では申せません。私は体をガタガタ震わせ、

冷汗をかくて泣きました。

血が充分に出ると、今度は小さい鉄の毛抜きで、足の肉まで引き抜き、綿と薬で充分に手当をしてくれました。二三日は一步も歩けませんでした。」

「それで、今でもお母さんが巻いているの？」

「いいえ、十三の年から自分で巻くようになりました。それで貴方と一緒にあって、鞋をぬぐ機会が多くなって、若し大根足になったら大変だから、これからはずっと八尺の布を巻くと云われましたわ」

吉村は、今更乍ら改めて、緋と麗芳の白蓮を握りしめ、それにくちづけした。あたかも、夢の実か新月のような、可憐な素足は、吉村の唇の中で、はにかんで楚々と慄えていた。

「ずい分苦しい思いをしたんだね。でも、お前のこの足のお蔭で、僕等は結ばれたんだよ。何て素晴らしい足だろう。お前は、自分でまだ芳香ほとばしる、このよい匂いをかいだことはないだろう。じつとこうして唇を当て、匂いをかぐと羽化登仙の思いだよ。思いきってかいで御覧——」

彼は感激の余り、麗芳の足をぐっと彎曲させて、麗芳の顔の前へ持っていた。すると彼女は云われる儘に、鼻を近づけ、われとわが白蓮を唇に押しあてたが、嚙ていとほしい様に、感極まって、干切れるほどに口できつく指先を嚙むのであった。

彼の顔の横で、ひらひらとゆれる三寸の足——。

金蓮の七美。尖、彎、瘦、小、香、軟、が——。まさしく、麗芳の足は、その七美をものに見事に兼ね備えていた。

× × ×

郊外に繡洒な小邸を探すと、吉村と劉親娘はそこに移った。彼の業務に支障のない限り、吉村は麗芳の脚と戯むれ、一日の大半を二人で過した。

纏足の繡帯をほどいてやったり、洗ったり、揉んだり、爪の手入れをしてやったりすることに麗芳は甘い喜びを感じていた。

愛している男以外には絶対にあり得ない現象である。

吉村は又、手入れ台と称して、麗芳の母が作った様なテーブルを作り、彼女を裸にしてそれへ手足を拘束すると、時には冗談に鞭で打ったり、咬んだりした。愛の鞭や、愛咬や、愛の緊縛を彼女は甘

えた。華やいだ気持で甘受した。しかし世界の情勢は刻々と変わって行く——。

敗戦が二人の甘い生活を根底から覆がえした——。

蒋介石は、既に一九二三年に、新生活運動の一環として、纏足の風習を禁止していたが、台湾に新政府を作った時も、勿論纏足は奨励する筈もなかった。

彼の商社は接收され、昨日に変わる姿で、吉村源太郎は路頭に迷った。

敗戦となっても麗芳の心は変わらなかった。苦悩の彼を慰さめ、やつれた彼を精一杯に暖かく包容した。

併し二人の身に決定的なカタストロフが、突如、何の前触れもなく訪れた。

食糧を調達に行つて、漸やく若干のきびを得て、我が家に立戻った吉村の前に待っていたものは、無慚に打砕かれた石門と、落花狼藉の部屋であった。

魂を天外に飛ばして、彼は麗芳の部屋に駆け込んだ。

部屋は土足で荒され、彼女の姿は何処を探しても見当らなかった。裏に廻ると、劉氏が、まるでボロ屑のように、小さく転がってそのしわ多い顔は、無惨にも軍靴の跡も生々しく踏みにじられていた。慌てて助け起したが、急所でもけられたのか、既に虫の息であった。

一言、二言何か云ったが、云わずして分る、それは進駐の兵士による乱暴である事が吉村にはすぐにのみ込めた。

煮えたぎる怒りが、吉村の腹で渦巻いた。近隣の人々の口から、麗芳が数人の兵士達によって拐された事が分った。日本人の妻とな



った中国の女が漢奸としてリンチ同様の死を押しつけられている事実は、吉村も日毎夜毎この眼で見、この耳で聞いていた。

いかなる星の下に生れたかは知らないが、これ程の美女が金蓮を兼備しているのは、恐らく中国広しと雖ども、殆んど見掛けることは出来ないであろう。

兵士達は、麗芳の余りの美しさと、素晴らしい金蓮に幻惑されて、殺すに忍びず、何処かへ運び去ったに違いないのだ。

一層、一思いに殺害されていた方が、吉村にとって未だしも諦めがついた。

蓮杯の遊びの、あでやかな緑の刺繍靴が、主のいない部屋に転がっているのがひとしお吉村の胸を強くしめつけた。

△自分の鞋に酒を並々とついで、俺にささげ、金蓮の鼻をつく芬々たる芳香と共にのみ乾した夕べもあった……。麗芳——麗芳は何処へ行った……。あのたとえようもない金蓮が、卑しい男達の弄みものになり、あの玉をあざむく肌が、野蛮な文盲の奴等にじゅうりんされている……。俺は気が狂いそうだ……。麗芳——▽

×

×

×

「結局、麗芳の行方は沓として不明でした。巷間の噂では、大陸から亘って来た、明將軍に、素晴らしい纏足の美人が侍っていると云う噂もありましたが、それとても果して、その美女が麗芳かどうか、それは誰も知らなかったのです。

腑抜けの様になって帰還した吉村氏は、どうやら故郷で二三年して元気をとり戻しました。遅蒔き乍ら女房を貰ってどうにかやっているのですが、散々ねばって、足の小さい女房を貰ったのですが、これが九文——到底三寸の足とはくらぶくありません。唯、彼

の薰陶で、細君の足が人並外れて美しいのは、今も彼が、足に対する執着の並々ならぬものを物語っているようです」

ステッキ氏は、一息ついてグラスをとり上げました。ついでゴルフ氏がやおら一同を見廻して、みずから二番バッターを買って出たのです。

## 第四十六話 何でも見てやろう

「友人の話ですが、Sと云う男が、ある日、ある夜、大阪梅田の阪急東商店街を歩いていたら、若い人相のよくない男から突然、『ダシナ面白い子がいまっせ』と呼び止められたのです……」

×

×

×

私は足を止めた。云うまでもない、噂に聞いたポン引であろう。単なる交渉では、近頃、私の方も賢くなつて、相手のポン引が、如何に声をひそめて、『ダンナ、今日が商売始めの女学生の処女ですよ——』とか、『Hデパートガールのとびきり別嬪ですよ』と囁きかけても、彼女達が、これを準本職にしている事ぐらいは心得えている。

カラーのシロクロ映画でも実演でも、そろそろ阪急東商店族にとっては二番煎じで、眼新らしくなくなりつつある。

私は彼等の常套語である「面白い子」に、一向期待してはいなかったが、軽い気持で、程々に相手になつてやれ——と、さも興味を惹かれたように立止ったのが、運の尽きであった。

「面白い子って、何かやるんかい？」

「へへ、まあ一ぺん顔を見たつとくはなはれ。何しろ、二三年前まで

は、新東宝の女優をしてましたんやからな——。顔見たらきつと気に入らまっせ——」

「そんなことより、何が面白いの？」

するとポン引は、私に肩を並べ、手付きで一緒に歩こうと云う仕草をして、私の耳に口をよせた。

「へへ、旦那——女を縄でくくって、無茶したりまんねんがな……物凄いことコーブンしはる。どうだす——」

「そんなこと大丈夫かい？ 後くされがないのかい——」

「まかしといとくなはれ。絶対別条おまへんさかい。うそやと思うんやったら、一ぺん、テープレコーダー聞かしたげまひよか。但し聞き賃はお志ざしを頼みまっせ。さあ、早よきまひよ……」

私はフラフラとその言葉にのってしまった。もしも大した事なかったら、このポン引に少し握らすだけでもよいだろう。

堂山町の小料理屋の二階へ、男は物馴れた調子で、私をつれてトントンと上った。

ガランとして何もないベニヤ貼りの四帖半——。

「旦那、よかったら、ここでシロクロも見られまっせ——」

「いいよ、いいよ」

「そうだったか——。ほんなら、これ一ぺんきいとくなはれ。女の声が、これから紹介するみどりと云う娘の声でっせ。ようききなはれや——」

男は押入れから、型の古い、アカイのテレコーダーを取り出すと、二〇〇フィートの小さいテープをかけた。

「ここやったら、近頃流しのテープレコーダー屋見たいに、イヤホンできく必要もおまへんで——。あれは一人でニヤニヤしたり、

真剣な顔したり、気分が悪いもんですせ——。少々ボリュームあげても平気だす。それに、ようきいてななはれや。男の方が広島生れかして、広島弁丸出しでやりまっせ——」

男は勝手なことを云い乍ら、つまみを再生に廻した。

——微かにベッドのきしむ音、縄のしごく様な音が雑音と共に流れていたが——、突然、女の声が金属音で、『あっ、痛い！ 非道いわ——』とびっくりする程大きく聞えた。

「今のは、女を縛ってから、男が肩口に噛みつきよりましてん——」ポン引の説明入りである。

「君、見ていたの……」

「へへ、お手のもので——。例の片一方は鏡で、裏からはすっかり見通せる便利なのはめこんだホテルがありますな……。もうじき、パチリパチリと音がしますけど、それは男が、自分のズボンのバンドで、女の尻を打ちよるところですせ。ホレッ、聞えますやろ。女の声は始めヒイヒイ云うてますけど、段々そのうち声が変わって来ますやろ。あら、喜こんでるですわ。変わった女ですやろ……」

「その有様を、すっかり見ているんだね——」

私は長嘆息した。

「役得ですがな、何しろテープとらんことには話にならんさかいな。縄や、紐や、それに猿轡にする布まで、ちゃんと準備して来てくれまっせ——」

男の上ずった声——、女の阿鼻叫喚や、呻きが延々とつづいていく。

——今度逆吊りにしてやろう。この部屋はよくないけん、広い和室借りてやるよ……いいな……。かまわない？——



——ええ、かまわないわ……かまわないわ。もっともっと、きつく縛ってもいいのよ——

——よし、もっときつく縛ってやろう……さあ、みんなぬいで裸になるんだ——

——わたし、泣くかも知れないから、猿轡したっていいわ。私、貴方好きだわ……もっとお尻ぶってでもいいのよ……——

こんな会話が尚も続くのである。その間、鞭の音、ベッドのきしみ、女の呻き、男の激しい息使い ETC……

「女は縛られるのが好きらしいね……」

私の頭も異常に混乱して来た。睡をのみ込む様にして男にきいた。「何でも、新東宝にいた時、矢鱈に縛ったり、吊したりするのが好きな監督がいましたね。縛られるスターのスタンディンとかやらになって、断崖絶壁の松の樹から吊されたり、井戸に吊されたりしたんですって……。その間が又随分長い間で、テストテストで全然本番なしで、吊ったり、降したりの繰返しが続くんやっていてましたで——。結局、カントクさんの面白半分なんやな。ラッシュには撮っていても、封切の映画には、いつも消されてるんですって——。一体そんなフィルムどこへ流れるんやろな……。まあそんなわけで、この娘は、縛られるのが好きになりましたん」

新東宝の一応スター級の、三原葉子、小畑絹子、若杉嘉津子、久保菜穂子、万里明代、と云ったメンバーでも犇々縛られているんだから、況してや無名のスタンディンと来ては、恐らく、緊縛の型の稽古台ぐらいのつもりで、遠慮会釈もなく、あれこれと縛られて来たのだろう。稽古台の彼女こそ、いい面の皮である。

声が妖しくなって、そろそろポン引達の云う、所謂本番にかわっ

て来た。

「これからだっせ、ええところは……」

彼はニヤリと笑うと、少しポリュームを落した。

十五分のテープは、恐らく編集してあるのだろう、実に手際よくテープの最後をクライマックスにして終った。

「どうだす、面白い子でっしゃろ……」

「ウン、面白そうだね……」

私は百円札三枚を彼に渡した。男は一寸不服そうな顔付になったが、すぐ思い直した様に顔から陰をとって、愛想笑いをした。

「ほんなら、ここへ呼んできまっさ。十分だけここ動かんと待つとくはなはれや——」

男は駄目を押すとき、一寸凄みをつけて、大急ぎでトントンと階段を降りていった。

× × ×

確かにその女は美しかった。豊かな臀部に喰い込んだ、ピッチリとしたタイトスカートを窮屈そうにして横坐りに腰を降すと、黙ってピースをとり出して紫煙を天井に吹き上げた。

スペシャルのお遊びと云うので、私はポン引に既に五千円を手渡していた。明日の朝まで、煮て喰おうと、焼いて喰おうとお好み次第と云う彼の言葉に、私は少し懐かしい思いで金を渡したのだが：「何処かおなじみの旅館ありますの？」

「それがないんだ——」

「じゃあ、感じのいい行きつけのホテルありますから、ここを出ましようね……」

女は事務的な言葉で、自分から立上った。少し興醒めだが、ここ



ではムードも出ない。私も誘われて立上ると、階段をおりた。料理屋のおカミが無表情な顔で、ジロリと私達を見て、おおきにとも、さようならとも云わず、軽い軽蔑の眼で私達を見送った。

梅田の午後の十時半は未だ宵の口だ。

私はすべてを女に托して車を拾った。

梅田新道を左に折れ、梅ヶ枝町の辺りに入ると、間もなく車は止った。

出した。

「でも私、少しお酒のまないと、そんな気分になれないの。御心配いらないうわ、お酒代は私自分で払うわよ。おビールがいい？それとも洋酒になさる？」

「じゃあ、ビールがいい」

女は電話でビールを注文した。女中が二本のビールとつまみを運んで来て消える。

無言で二人はホテルのフロントに靴をぬぐ。心得顔のずるそうな女中が、私達を洋室に招じ入れる。形許りの菓子とお茶。

泊り代金千二百円を受取ると女中は奇妙に笑いと共に扉をしめた。女は椅子に腰を下すと云った。

「あの人からお聞きになりました？ わたくしのこと……？」

「聞いたよ。面白い子だって……」

「面白い？フフ、そうねえ。でも貴方、こんなことなさりたい？」

女はビニールの派手な手提袋の底から、白い柔かそうなロープの束を掴み出すと、私の眼の前で振って見せた。

「お望みならね——」

「……………」

女は意味ありげに無言で笑うと、ロープの束を眼と鼻の先のベッドにどさりと投げ



私達はコップにビールを注ぐと、何と云う意味もなく乾杯した。

女は再びビールをコップにそそぐと、ふと私に云った。

「私、これを脱ぎますから、済みませんが、バスのお湯を出してきて頂けません？」

「いいとも……」

私は気軽に立った。コールガールのお定まりコースを、私も又、気楽な気持で進行中である。唯そこにプラスアルファの、緊縛のプレイと、MSプレイが加味されているのが、いつもとは違っている。小さいバスの湯と水のカラーンを適当にひねって部屋に戻ると、女は服をぬぎ、黒いシュミーズ一枚になっていた。

女は私の目前で、無雑作にシュミーズの下からレースの飾りのあるパンティをぬぐと、ポイと乱れ籠に入れた。パット不要の逞ましい乳房が豊かに盛り上って情感をそそる。二十才前後だろうか。

私は今宵の緊縛の模様をあれこれと妖しく脳裡に描き、ともすれば弾む心を押えて、女がすすめる儘、ビールをあけた。

挑発する様に、女は足を組み、シュミーズの紐が腕に垂れて、豊かな乳房が覗いた。

謎めいた微笑を黒い瞳に浮べ、女はよくキラキラと光る眼で、誘いの手を待つ様にジッと私を凝視した。私の頭はジーンと痺れてくる。

見事に一杯くった私をベッドに発見したのは、翌日の朝の光が窓からこぼれる頃だった。

よくある手だ——注意しなければと、昨夜来、心に云い聞かせ乍ら、新手に私はまんまと一杯くった。

おそらく、バスに立った僅かの隙に、女はビールに睡眠薬を仕掛けたのだろう。突嗟に間に合う様、彼等は市販の点眼瓶に、強力な睡眠薬を液体にして持歩いている事を噂に聞き乍ら、やはり被害の当事者は、自分だけは別と甘く考えて、結果は人並にやられるのである。

上衣の内ポケットに入れておいた二万八千円は綺麗になくなり、腕時計も姿を消していた。

ズボンの儘シートに横たわっていたのか、水色のシートのひだにポケットからこぼれた十円玉が四五枚、私を嘲笑う様に転がっていた。

フロントで聞いたが知らぬ存ぜぬの一点張り——。共謀かとは思っても相手が拾った女であれば証拠もない。ホテルも薄々知ってはいてもかわりたくないであろう。

金は惜しくはなかったと云えば、多少痩せ我慢めくが、私はむしろ、MSプレイと云う、新手がカゴ抜けした、ポン引や女が憎かった。きっと奴等は梅田をショバに、今日も明日も明後日も、この手でやっているに違いない。ポン引の男は女のヒモかも知れない。

兎も角、きわどいテープを聞かせ、男の心を煽っておいて、いざと云う時逃げられたとあっては、アブニストを自認する私にとって、些か面白くない。私は彼等に何らかの痛快な復讐を試みる事を思い立ったのである。

アブニスト仲間のKに話すと、相談にのってくれた。あれから八日目のことである。

私は顔を知られているから、普段のサバサバの髪を珍らしくボマ

イトとチックでねかして七三に分け、太いロイド眼鏡をかけ服を替えた。

今宵もKから十米許り離れて、夜の十時頃の梅田阪急の東商店街を歩く――。

前を歩くKにふと寄りそった奴がある――。一週間振りにやっとあいつにお目にかかった。

私は奴であることを知らず為、かねての手配通り、二人の横を通り過ぎてから、ごく自然に立止って煙草を吸った。通り過ぎて煙草を吸う――これが合図である。

奴は全然私の存在に気がつかない。再びやり過ぎて今度は真剣にあとを追った。

お定まりの堂山町の小料理屋――。恐らくここのおかみも共謀だろう――。

私は小料理屋の向いのパチンコ屋で、百円で玉を買う。パチンパチンと向いを気にし乍ら弾いていたら、無欲はこわいもので、幾らでもジャラジャラと這入り、玉受けが一杯になって来た。日頃はこうはいかない。皮肉なものだ。テープの拝聴料三百円は、優にパチンコで浮かせそうである。

待つこと三十分――男がそわそわと飛出す――。再びして、女と共に連れ出して二人は小料理屋に消えた。何もかも同じである――。辺りを払う程に女は憎いが美人である。

Kと女が現われる。私は大急ぎで玉を処分して跡を追った。これから先きが、彼等のルートとは違うのだ。私のハートは異常にときめいてくる。

私は先廻りしていち早くガードをこえて大阪駅の裏に走り、とめ

ておいたセドリックをゆるゆると梅田の交通地獄へと乗り入れていった。

かねての約束通り曾根崎警察署の方から二人が歩いてくる。彼は自然に手を振る。私は駐車禁止の地域で思い切ってドアをあけ二人を待った。

「梅ヶ枝町のMホテルへ行って頂戴――」

女は心得顔に私の背に声をかけた。

「この車白ナンバーね……」

女はフト気づいた様につぶやいた。私は無言で梅田新道を左に折れると、百米許りつづいた交差点をやっと切抜け梅ヶ枝町に走った。「あつ、そうそう急に思い出したけど、ミナミにデラックスなホテルがあるんだ――。そこへ行こう。運転手君、南へ走ってくれ給え」梅ヶ枝町の近くで、Kは予定通り私に言った。

「あらっ、近くのここでもいいじゃないの――」

女は意表をつかれて、不満気に呟やくと、後ろを振り返って窓から覗いた――

《ポン引奴、つけていやがるな――よしッ》

「近くでも、遠くでも、明日の朝までだろう。又ここまで送ってやるよ――」

「ええ、私は構わないけど……」

女は腹をきめてさりげなくよそおった。

私は空心町を曲って、松屋町筋をドンドンミナミへ走った。

「どうだい、運ちゃん、一層のこともう少し遠出してくれないか。浜寺辺りまで……」

「あらッ駄目よ。そんな遠くへ……」



「いいじゃないか、送ってやるよー」

女は無言で体を硬くして、プツとふくれた。

二百米程うしろから、小型のタクシーが懸命に追いかけてくる。

△面白い。クルクル舞いさせてやれ▽

私は夜の国道二十六号線を更に飛ばした。

女の顔に不安な表情が浮んでくる。

気をほぐす様にKはチョコレート・ボンボンを出した。

「食えよー」

Kは一つを女にすすめて、自分も口へ入れる。女は渋々、軽い睡眠薬を注入しておいたボンボンを前歯でかんでのどを通した。

「へへ、速効性ー。すぐ効くね……」

軽い寝息をうかがってKはニヤリとほくそ笑む。

車は既に岸和田市に近い。

「ホイホイ、奴さん、性懲りもなくつけてくるぜ。今夜の売上ペアだろうにな……」

「あきらめるまで引ずり廻してやるかー」

六三年のセドリックは闇について、音もなく走りつづけている。

いつしか諦めたのか、つけていた車のライトはなかった。

午前一時――

私は車を人里離れたS山の山道にとめていた。ナンバプレートに念の為袋をかぶせ、そこでKと二人で女を裸にして、女の持参した縄で後手に縛り上げた。

女は既に正気づいてもがいている。Kは女の口の中にストッキングをまるめて押し込み、もう一脚でしっかり猿轡をした。

車から引づり出すと、両足を揃えて縛り、車の後尾に太いロープ

でつないだ。

道は石ころの山道だ。私はギヤをロウに入れてスタートした。

Kは女のうしろから両手を組んで、女の引曳られてゆくのを愉しうに見物し乍らついてくる。

百米でストップ――

夜目乍ら、女は息も絶え絶えに喘いでいた。恐らく、肩やひじや、後手や尻に、相当の血が流れている事だろう。

私は車を降り眼鏡を外して女に近づいた。

「此の間は有難う。二万八千円分のお遊びをさして戴くよ」

と女に顔を近づけて、パツと懐中電灯をとす。果して女は驚愕した横様だった。ランプに照らされた女の体は、泥と血で奇妙な斑点を全身につくっていた。

「テープで望みだった逆吊りをやらしてもらおうよ」

私は痛快を全身に感じ乍ら女を引起した。ヌード撮影や、野外緊縛ヌードを撮りに、何度となく訪れたこの地だ。夜と云っても、私の記憶は確かだった。

車からロープを外し、その端をもって、私はずるずるとKと二人掛りで、山道に出張っている松の梢の下まで引曳っていった。

何度も失敗して、やっと太い梢にロープをかけると、Kと一緒にウンウンと滑り悪いロープを懸命に引っ張り、少ししか上らないので、今度はKが女の体をぐっと抱えて持ち上げ、私がロープを勢よく引っ張った。

地上一尺のところまで、女は頭を逆さにして吊り下った。

ランプでその顔を照らすと、眼は恐怖に引つり、蒼褪めてひたいから血が惨んでいた。

今迄この地を訪れても、辺りに気掛ねして、ついぞ逆吊りを道端で撮ったことはなかった。

私は用意のストロボをカメラにとりつけ、Kのかざすランプを目じるしにピントを合せて、夢中で数枚を様々の角度からうつした。

Kが猿轡を外してやった。私は逆吊りの女の髪を撫んで、

「どうだ！本望か？本望だろう……嬉しかったと云え！」

とガクンガクン頭をこつき廻した。

二人で逆吊りの女を松から降すと、抱えて再び自動車内に運び込んだ。

「俺は今から、お前の髪の毛を切って坊主にするつもりだ。しかし本当の事を云えば許してやる——どうだ」

「何でも云います。髪の毛を切るのだけは許して……」

女は意地も張りもなく涙をこぼした。

「お前はあのポン引の女房か——」

「いいえ、違います。でも関係はあります」

「ヒモの関係だな……。ところで、お前は新東宝の女優をしたことがあるのか——」

「ありません。皆あの人のつくり話です——」

「では今迄何をしていた——」

「兵庫県の氷上郡から大阪へ出て来たところを、あの人に拐わかされました。そしていろいろと仕込まれたのです」

「お前は最初から縛られるのが好きか？」

「そんなことは全然知りませんでした。あの人とあの人の友達三人が、私が云うことをきかぬと、縛ったり、叩いたりして責めました。そのうちに、自分でも何だかそうして、縛られたり、責められ

たりするのが好きになりました」

「あのテープは客と一緒にの時か——」

「いいえ、あの人の友達が、私を責めたり、縛ったり、いろいろなことをしたのを、あの人がそばに居てとったのです」

「今夜の責めは、どうだった？」

「殺されると思って、怖かったのです。でも命をとらないと分れば、今頃になって思い出すと、凄く体中が燃えて来ます」

「命なんかとらないし、お前のものも奪らないよ。俺達はそのかわり、高価な二万八千円分の遊びをするんだ。よしと云うまで交際するか？」

「……」

女は暫らく考えていたが、コクリとうなづいて見せた。

× × ×

私は、優にアルバム数冊分のフィルムを彼女の体から得た。(体中の無数の傷がひどく刺激的だ。)

易々として女は私に懲慚し、別段逃げようとしなかった。

眼隠しして連れ込んだ、私の宅で、彼女をその間ずっと裸にしておいたから、逃げられなかったのかも知れない。

四日目に私は眼隠しして女を車にのせ、大阪の街へ入って、それをとらせた。

大阪駅のガードの下で女を降した時、名残りを惜しそうに女は何度も手を振っていた。

氷上へ帰れと渡した幾許かの旅費であるが、彼女が丹波へ帰るか帰らないか、そこ迄は私は知らない。四日間のアヴンチュールがどれ程に楽しかったかは、私と彼女だけが知っていることである。



何でも見てやろうー。そうだ私は確かに彼女のすべてを見終った。

「四日間の出来事については、何れ又後日話をする事にしましょう、ここで喋ってゐては夜が明けてしまいそうです」

ゴルフ氏はそういって、ぬるくなったビールを一气呵成に乾したのです。

何処かでこほろぎの音がします。秋の訪れも間近く、商都大阪も流石に寝静まってきたか、遠くレールのかすかな響きが、夜の深さを物語るように人々の耳に伝わってくるのでした。(完)

## 〔新版〕女体悦虐フォト七十選

### Z組七十集

大手札判印画紙(9×13型)焼付

#### 各組一枚一組(送料共)

|        |        |
|--------|--------|
| 一組一枚   | 一〇〇〇円  |
| 五組五枚   | 四〇〇〇円  |
| 十組十枚   | 七五〇〇円  |
| 二十組二十枚 | 一四〇〇〇円 |
| 三十組三十枚 | 二〇〇〇〇円 |
| 四十組四十枚 | 二五〇〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 三〇〇〇〇円 |
| 六十組六十枚 | 三五〇〇〇円 |
| 七十組七十枚 | 四〇〇〇〇円 |

|    |       |         |
|----|-------|---------|
| Z1 | ゴム猿轡  | (梨花悠紀子) |
| Z2 | 囚女六三号 | (柳初子)   |
| Z3 | 猪手足吊り | (梨花悠紀子) |
| Z4 | 逆エビ縛り | (大塚啓子)  |
| Z5 | ローソク責 | (東浦ひかる) |
| Z6 | 豊賢責め  | (絹川文代)  |
| Z7 | 淫らな縛り | (愛川悦子)  |

|     |        |         |
|-----|--------|---------|
| Z8  | ザリガニ   | (梨花悠紀子) |
| Z9  | 引き回し   | (東浦ひかる) |
| Z10 | 全裸後手縛  | (加茂良子)  |
| Z11 | 豊満被虐   | (大井小夜子) |
| Z12 | 黒髪いじめ  | (大塚啓子)  |
| Z13 | 足吊り嬌態  | (絹川文代)  |
| Z14 | 黒縄高手小手 | (四方清美)  |
| Z15 | 強烈荒縄責  | (梨花悠紀子) |
| Z16 | 喰込む白縄  | (東浦ひかる) |
| Z17 | くの字の足指 | (桜井葉子)  |
| Z18 | 裸身の受縄  | (前本妙子)  |
| Z19 | 無茶な猿轡  | (竹野ひろ子) |
| Z20 | ハリツケ   | (梨花悠紀子) |
| Z21 | 臍なぶり   | (大塚啓子)  |
| Z22 | 逆手足吊り  | (東浦ひかる) |
| Z23 | 美肌いじめ  | (絹川文代)  |
| Z24 | 鼻ゼメ仰向  | (加茂良子)  |
| Z25 | 恐怖の瞬間  | (若原明子)  |

|     |        |         |
|-----|--------|---------|
| Z26 | 火箸責め   | (梨花悠紀子) |
| Z27 | 全裸海老責め | (熱海容子)  |
| Z28 | ベッドの痴態 | (絹川文代)  |
| Z29 | 足の裏操り  | (大塚啓子)  |
| Z30 | 闇の女体飾  | (竹野ひろ子) |
| Z31 | 首絞めゼメ  | (大塚啓子)  |
| Z32 | 鼻孔責め   | (若原明子)  |
| Z33 | 悦虐放心   | (梨花悠紀子) |
| Z34 | 手枷足ぐさり | (四方清美)  |
| Z35 | 寝室のプレイ | (花本京子)  |
| Z36 | 猿轡の妙味  | (梨花悠紀子) |
| Z37 | 首縄柱しばり | (絹川文代)  |
| Z38 | 巻煙草責め  | (大塚啓子)  |
| Z39 | 尻立てポーズ | (桜井葉子)  |
| Z40 | エビ責    | (東浦ひかる) |
| Z41 | 彼女の好物  | (竹野ひろ子) |
| Z42 | ワンピース  | (花本京子)  |
| Z43 | 荒縄竹棒責  | (梨花悠紀子) |
| Z44 | 浣腸責ポーズ | (大塚啓子)  |
| Z45 | 鏡に映す裸  | (山路ミヨ子) |
| Z46 | 苦悶に喘ぐ  | (大塚啓子)  |
| Z47 | 酔後の緊縛  | (絹川文代)  |
| Z48 | 逆十字エビ  | (大塚啓子)  |

|     |         |         |
|-----|---------|---------|
| Z49 | 全裸猿轡    | (東浦ひかる) |
| Z50 | 欄間宙吊り   | (梨花悠紀子) |
| Z51 | 全裸逆エビ縛  | (絹川文代)  |
| Z52 | 荒縄仕置室   | (梨花悠紀子) |
| Z53 | 庭園の惨虐   | (館典子)   |
| Z54 | 被虐の果て   | (大塚啓子)  |
| Z55 | 痛めた全裸像  | (大塚啓子)  |
| Z56 | 鏡の中の全裸  | (愛川悦子)  |
| Z57 | セーラー服   | (梨花悠紀子) |
| Z58 | 檻の緊縛裸体  | (愛川悦子)  |
| Z59 | 全裸股間縛り  | (絹川文代)  |
| Z60 | オムツ逆エビ  | (田中芳代)  |
| Z61 | 胴縄の重量感  | (桜井葉子)  |
| Z62 | ゴム人形    | (竹野ひろ子) |
| Z63 | 縄トゲ責め   | (梨花悠紀子) |
| Z64 | 女大生恥態   | (田中芳代)  |
| Z65 | 白肌全裸縛り  | (絹川文代)  |
| Z66 | 強制的開股縛  | (絹川文代)  |
| Z67 | 強烈的全裸晒  | (愛川悦子)  |
| Z68 | 亀甲乳房責   | (梨花悠紀子) |
| Z69 | ベッドの悶え  | (愛川悦子)  |
| Z70 | 恥しさに耐えて | (館典子)   |



△短信▽

# プレイをあなたと

中田 明

十月号を手にして津利さん、あなたはグラビアの二頁を見開いて思わず歓声を挙げられた事でしょう。タイトルの夢の緊縛にふさわしい強烈な逆吊りフォト。たった一葉なのが残念でありませんが、あこがれの梨花嬢の吊責めフォトには違いありません。天星社代理部分譲品総目録の中に記載の☆梨花悠紀子☆「大の字逆さ吊り」の関係フォトの一枚のようには思えるこの写真は、着衣ではあれ荒縄で胸に腹部にひしひしと緊縛されて開股の恥辱的加虐を受けていて、見る目に緊張と愉悅を知らせてくれました。素晴らしい！と口にしたにはいられない衝動を見るたびに感じますが如何です？

編集部の方の御取計らいで、再度私のあな

たへの短信が掲載されましたが、お読み下さ

ったでしょうか。しかし、貴女へいくら最高の関心と想いを寄せても、あの文章だけでは何等貴女との实际的交歓を果せる日が近付いた事にはなりません。奇ク編集にたずさわる方の特別な計らいか、貴女御自身が積極的に私の存在を認め、求められぬ限り、飽くまでも読者の間で相手判らず夢を吐露しあった戯事となり、告白、体験等を通じて新風俗の文献的価値の記事を求めている奇クの編集方針とは裏腹の無価値なウメクサ的役割しか果たさなかった結果を、他の一般読者に印象づける事となるのを惧れると、半年に亘って吊り責めへの讃歌をお互いに謳い上げて来た事の結着だけは読者交歓のしめくくりとして報告し

たいと考えずにはられません。

考え方によると、奇クを通じての読者相互の実際の交歓の成りゆきが、私たちの場合一つのテストケースとなって、はっきり形を表わす事が望ましいように思え、亦、そうした意味合をも含めて△短信▽としてのスペースを奇クが与えていて下さるように思えてなりません。何と云っても、投稿する度に、こんなにトントんと掲載されるのは、本当にめずらしい事なのですから。

× × ×

読者通信に時折り被虐願望の女性の声が現われます。東浦ひかる嬢にしても竹野ひろ子嬢にしても、亦、十月号誌上では水野淑子嬢と、大いに加虐緊縛施術にあこがれる私の血を湧かすに充分なそれらの女性の存在は、手の届かぬ淵に咲く花の如くあってもチャンス次第ではプレイの対象を求められると云うかなかな希望となっています。しかし、それらの三人が異口同音に云った「貞操不可侵」の絶対的条件が、プレイを楽しむ為の阻害となるのかどうかは判断しかねますが、貴女の場合もやはりその点に積極性を欠く根源がおありなのでしょうか。



責めると云う事には本来何かを強制させる  
と云う人権無視の行為が意味されています。  
しかし、私が求め、亦、貴女が憧れる「責」  
と云う語意には何等強要服従の手段が含ま  
れてはいない筈です。犯罪的処罰の手段とし  
てそれらがなされる訳でもない筈です。只、  
非現実的環境の希求と、その産物であるこ  
ろの空想的遊戯への憧憬。そしてそれらの実  
現による満足感。云うなればひとときの現実  
逃避の開放感の満喫が望まれているだけで、  
結婚の誓約もなく、性的交渉の目的から遠く  
はなれての立場からではプレイは何等前戯的  
意味もない訳です。

× × ×  
吊ると云う事は大変な苦勞がいりますし、  
吊られる事は非常な苦痛を覚える事は知って  
います。電車やバスの吊皮に身体の支えを求  
めているだけでもそれらの過酷さは容易に想  
像出来る事です。学校時代、軽い筈の体であ  
るくせに、懸垂十回を云われるつらさに体操  
の時間に仮病つかったりした経験も人によっ  
ては持っているでしょう。

田村泰次郎の「肉体の門」が空気座で上演  
され戦後の軽演劇でセンセーショナルな問題

作となった時、劇中のリンチの景が見たくて  
うずうずした時はまだ中学生。学校よりのき  
ついお達しで木戸もくぐれず、やっと映画化  
されて株主パスで、そのリンチなるものを観  
た時の異様な胸のときめきは今もわすれませ  
ん。月丘千秋の熱演に酔いしれたものでし  
た。それ以来洋の東西を問わず一カットでも  
そうしたサジスチックな場面のある映画を  
観、亦、求めています。大衆娯楽の映画の  
中ではおのずと生じる制約の為に、息を飲む  
ような光景には余りお目にかかれません。そ  
れでも初期の日活映画や大蔵商魂が露骨にな  
った頃の新東宝映画には話題をふりまくよう  
な場面にちよくちよくお目にはかかれて、わ  
ずかな慰めを与えてはくれました。

津利さん。十月号の誌上ではほんの思い付  
きの吊責プランを差し上げましたね。でも、  
本当はもっと多くのアイディアが、私の手許  
のスケッチブックや、クロッキーの画帳にメ  
モしてあるのです。吊責めを大きく分けると  
五体そのものを吊る方式と、身体の一部を  
吊って被虐感で全身をしばれさせる方式とふ  
た通りに大別出来るでしょう。

前者には ①両手首にロープをまきつけ吊

ると云う基本型から始まって、 ②両手首を  
それぞれ離して吊るY字型 ③大の字型(X  
字型) ④開股型(逆さY字型) ⑤以上の  
逆さ吊り四態。更に胴吊り、胸部を主に緊縛  
した後手高手小手の宙吊り、猪吊り、四肢の  
四方吊り等々。後者には ①片手吊り、 ②  
片足吊り、 ③座形顎吊り、 ④立形鼻穴吊  
り、 ⑤四這腰部吊り等々際限なく、更にア  
クロバットをおもわせる曲折型などを入れる  
と大変興味あるものが考案されて来ます。亦  
小道具も、出来るだけ変化に富んだ物を利用  
すると面白いものです。恥しがり屋の貴女に  
「魔女」の烙印をおして中世の魔女裁判で行  
われたような拷問からヒントを得た種々の方  
式で責める事も、秋、紅葉の下で大樹の枝に  
身をまかせた野趣の構図。冬、雪国のつらら  
のように、寒風晒しの雪ん娘吊り責めと、貴  
女と二人だけの悦楽の園をこの地上の何処か  
に築く事、そんな望みを持ち続け乍ら、お便  
りある事を待ち望んでいます。本誌が発売さ  
れて五日間、午前九時、行きつけの喫茶店  
でお待ちしています。お電話連絡を頂ければ幸  
甚です。(369) 0729。ゆっくり私を観察し  
て下さい。



「告白的随想」

## 臍窩慕情

須藤 律夫

○「ネービー、カット」に端を発した今年の

流行は俄然「臍出しスタイル」のブームとなり、B、Gのお臍が堂々と銀座街頭を闊歩する時代となった。さき頃も「週刊読売」のグラビアが之をテーマに、歩く度にチラチラ見え隠れするB、Gのお臍ルックを捕えていたが、真黒な臍窩に執着的な美を感じる私には、誠に見逃せない写真であった。

○それより前、今年の七月初め、愛用のカメラを携えて逗子海岸に出かけた事がある。情けない話だがビキニスタイルの臍窩に憧れ、若しシャッター、チャンスが許すならケツ作などものにしようと、咄！偏執者とは兎角無

意味に時を過すものだ。

○七月の空は紺碧に晴れて遙か浪子不動の方を眺めると、山々の緑も一入に冴えている。湘南の海は流石に若いB、Gが多く、その水着姿もニュー、モードのものが断然多い。T建設の海の家の前まで来ると面白い光景にぶつかった。ビキニ・スタイルの女性が砂浜に仰向けに寝て、乳房の下辺りからは誰がかけたのか砂で埋めつくされている。本来ならその美しい臍窩が眺められるのに——と誠に残念であった。そして、こんもりと小高く盛り上った腹部の中央、恰度お臍の真上と思われる辺りには、風船のついた細竹が突きささっている。事もなげに海を眺めている朋輩、

サングラスをかけ、眠っているようなビキニの女、スナップとしても面白いと思ったので素早くシャッターを切った。

○渚ホテルの近く迄来ると、ネービー・カットの三人の女性に出合った。例によって一瞥お臍の品定め、背丈は皆同じ位だが真中の女性が稍脂肪肥りである。左側の女性は神経質なのか柳の葉の様に、典型的な縦長のお臍である。然し窩の深さが充分あるので神秘的な暗い翳を宿し、私の好きな臍型の一つだ。真中の女性——大きさも深さも常人以上、殊に臍窩の周囲は異常な位脂肪が沈着して、愈々深い臍窩のひろごりを見せている。接近してすれ違う迄の間、ゴマの数まで数えられそうなお臍だ。

扱、右側の女性——は腹部の肌も色白く、その中央より少し高目に、小さな然し驚く程深い臍が円い影を落している。昔、村上浪六が形容した。

——銀盤上に墨の滴とも見る可き臍——とはこうした臍窩を言うのであろう。そう言えは相学の古書にも、美女三十二相の一つとして、腹は豊かに、臍は小さく、臍穴深くし



て円し。——と出ているが、不幸にして顔の方迄見定める暇はなかった。然し小さな円いお臍、その神秘的な彫りの深さに、私は何時も言い知れない魅力を感じるのである。

○  
今年の夏のもう一つの収穫は、車を駆って内房州の富津海岸に出かけた時の事だ。ビキニのスタイルは殆んど見られなかったが、珍らしく巨腹の婦人を見かけた事である。

○  
恰度十二号台風の余波を受けてか、その日は朝から荒れていた。皆、浪と戯れるのが関の山で、余程自信のある者でなければ泳げない。磯伝いに錦山寄りに歩いていた私は、子供連れの若い妊婦に出合ったのである。見るともう七ヶ月も過ぎているのであろうか、その腹は巨象の様に膨れ上がり、然し両脚はよく均勢がとれていて、大理石の円柱の様に輝いている。濡れた小豆色のナイロンの水着がぴったりと密着して、殊にそのお腹はブルーの様に張り詰めていた。私が珍らしく感じたのは、その中央に臍窩が猶美しい窪みを残していた事である。普通妊娠すると、臍窩は一時的には深くなるが、後次第に伸展して、遂いには胡麻も飛び出して平坦となる。この

婦人の様に、ゆるやかに大きな窪みを宿すのは珍らしい事だ。嗚呼！若しヌードで見られたらどんなに美しい事であろう。否、それよりも豊かなその臍窩を思う存分愛撫出来たら、その指頭に感ずる触覚はどれ程素晴らしき事であろうか。連れていた子供に事よせて、私は写真を一枚撮らせて貰ったが、視野の片隅には西爪の様に円い、その婦人の巨腹を入れる事を忘れなかった。

○  
私は曾って外房の御宿に遊んだ時、之と同じ様な発見をした事がある。その女は海女で、妊娠してはいなかったのだが、張り切ったその太鼓腹は女相撲を思わせるに充分なものがあった。水からあがって岩場に立つと、慣れた恰好でポーズをとる。厚い胸壁の双丘は折柄の西日を受けて、水滴は真珠の様に輝いていた。横じわ一つないその腹壁は巨大な丘の様に盛り上がり、小高くなった頂点に、ポツカリと口を開けた臍窩の奥には、漆黒の胡麻が濡れて輝いている。若し下腹部の膨満を山々とするならば、きりきりと喰い込む様に引き締った臍穴は、中空にかかる月とも見られ、それは臍、腹、偏執者にとって好個の

画材だったのである。

海女あまの腹ふりさけ見れば豊かなる

乳房の下に出でし臍かも

そんなざれ歌を想い出し乍らも、猶黒い臍窩の幻想に誘われ、私は独り、岬に向って歩いていた。

筆者後記。

前記「週刊読売」グラフ中にも、お臍ルツクの流行をはやして、「お臍の胡麻を取る機械を発明したら儲かる」など冗談を飛ばしていたが、「週刊サンケイ」九月十三日号、トピック欄にも同じ様な笑話が載っていた。つまりそれによれば、今夏臍出しスタイルを誇示した婦人達は、目下その相当数が下痢をしていると言う。原因は胡麻を余り取り過ぎた為めと、お腹を冷やし過ぎた為めだと言うのだが……。尤も各自、自信のあるお臍を見せ歩くのだから、ひだの奥に隠れている胡麻は兎に角、外から見える胡麻文はきれいに取れ除いていたのかも知れない。私は寧ろ胡麻を含んでいた方が臍窩は却って美しいと思うのだが、この点読者の御意見如何？

# 世界に於ける刑罰の種々相

荒 森 充 助

## 一

一定の不法行為に対して国家が法律に基いて個人に科する処罰として刑罰がある。

然し法律のない以前、又は現在法律のない所に於ては種々の刑罰の代りに私刑なるものが行われている。否、法律が規定されている所に於ても、世に文明国と称する欧米諸国に於てすら現在、私刑は公然に近く行われてきている。

そして、その惨虐さは目にあまるものがある。私はここで私刑をも含めたあらゆる刑罰

について、どのようなものがあるかということに限られた紙数に於いて簡単に述べてみようと思う。

然し全部につき載せる事は到底紙数の制約もあるので主なもの、そして惨虐性をおびたもののみ述べてみる。

## 二

先ず初めは刑罰制度について概観してみよう。日本に於いては、古くは大宝律令なるものがあって、それには「笞・杖・徒・流・死」の五刑があった。

笞刑は一〇より五〇迄の五階級。杖刑は六〇から一〇〇迄の五階級。に分れ徒刑は一年より三年迄、やはり五階級に分れ、流刑は三階級に分れ、死刑は二階級に分れていた。

然し、この大宝律令は、そのまま行われることなく刑罰は適当にに応じて行われていた。

鎌倉幕府時代に於ては斬罪、梟首、磔、流刑、追放、禁獄等があった。

それが戦国時代に入ると釜煎、逆磔、火焙、松明焼、牛割、車裂、鋸引、生埋等の極刑が行われるようになった。かの明智光秀の母の逆磔は世にも有名である。又釜煎なる刑は豊臣秀臣が石川五右エ門に行ったことで有名



である。

油の中に五右エ門とその子供を入れ、下よりたきぎに火をつけ燃やす。冷たいうちは良いが長時間入っているため皮膚はふやけてゆるみ、かれこれするうち、そのぐらぐらとしたときの苦しさ、最初のうちは両手に高く子供をかかっていた五右エ門も、余りの熱さにたえきれず、己が足の下に子供を入れたとか、その熱さ苦しさは物すごいものである。

江戸時代に入ると敲、(たたき)、追放、遠島、死罪の四種となり、敲は五十と百の二種あった。然しこれも力一杯たたくのではなく適当に加減し、又「つる」なるものによって打方も異なつたと言われている。追放には所払、江戸十里四方払、軽追放、中追放、重追放等あったが、共に夫々抜穴があつて、親の基参等は目玉にみて時々妻子には会えたものである。

遠島には七種類、死罪には五種類あった。其の他武士、僧侶等は夫々別の刑罰の方法があつた。例えば閉門、改易、切腹、追放等又、婦女の閨刑として剃髪、奴の二種があつた。庶人には叱、過料、戸閉、手鎖の四種があつた。

明治に入り明治初年に「大宝律」と支那の

「刑律」とを参考に採入れて「新律綱領」をば定め、次いで明治十三年には刑法の發布を見るに至り、明治四十年に現行刑法發布され終戦後一部改正され今日に至っている。

### 三

隣国中国に於ては、刑罰は古くよりあり理論的には進歩していたが、実行方法は残忍を極めたものが多かった。

古くは墨、劓、剕、大辟の五刑があつた。墨とは入墨のことであり、劓とは鼻を切ることである。墨は日本に於ても江戸時代に於いて行われた。

剕とは足を切ることであり、宮とは男子に於ては陰部を切りとり、男としての用をなさなくすることである。又大辟とは死罪のことである。次いで火あぶり、またぎき、目ぬき、耳切り、轢、車裂、体解等、定められ議、請、減、贖、当、免、の制度となつた。そして首かせ、手かせ、足かせ等は古代より用いられていた。

然して有余曲折を経て現代に至るも、今のことは竹のカーテンのこととして詳細は分らない。

### 四

西法即ち西洋に於ては、私刑時代と公刑時代とに分たれている。各時代各民族に依り異なるも、私刑時代に於ては笞刑、灼刑、剕刑、幽閉、入墨又は殺傷、斬、火あぶり、毒殺、獄門、磔、のこぎり引き、等があつた。

又モーゼによる「目には目を口には口を」という報復主義が行われ、傷を負わしめた者には傷つけ、やけどさせた者には火あぶり等が行われた。次いで物等による賠償等認められるに至つた。やがて公刑時代となつたが中世期に於ける即ち世にいう成嚇時代に於ては、苛酷極まりない拷問が採用され、その使用機械器具の数は七八百に及ぶといわれている。然し現在に至りては殆んど我が国現行刑法と差異なき刑罰制度になつた。

現在世界に行われている刑罰としての最高のもものは死刑で、これには電気殺、首つり、ガス殺、ギロチン、斬首等がある。

前置が長くなり恐縮だが、次に今迄世界に於て行われた種々の惨虐刑について、どの様なものがあつたかを記してみよう。

#### 一、火 焙 り

両手を後にゆわき枯木をしよわせ、又は木にゆわき、まわりに枯木を置いて火をつける。中には枯木に油をそそぐものあり。又キリシタンに行いし如く、枯木に水をひたして燃えを永びかせる極めて残忍なものもある。苦痛甚しく煙にむせび目に入り苦しむさまは実にすごいという。

然し、これは先に煙のため窒息する方が早いとかいわれている。

## 二、石子 詰

奈良興福寺の鹿を侵せし者に用いられるので有名である。

土中に埋め大小の石をば投げさせ生埋にする。石の一つはひたいりあたり鮮血りんりとして目に入り、その目も他の石にてつぶされ呼吸も石にうずまりて出来ず、首のみ地上にだし顔面血だらけとなり死に行くといわれる。

## 三、吊し 責め

昔、淀君間者をさがすため腰元十数名とらえ、横木にその髪の毛を以ってつるし、両手はうしろに縛し全裸体とし白状させたりと、腰元共苦しみ悶えたりしも平然たりと昔の本

にあり。恥かしさといたさで腰元許しをこうたが許さず、その木をゆすぶりたりとか。その人々（腰元）目はつり上り、口はさけ、毛は抜け血のかたまりついた毛は多数という。中の間者とおぼしき腰元に対しては、わきに百奴ローソクをあてたり、足のうらにローソクをあて熱さに足を動かせば全身の重みにて頭髮は抜け全身血にまみれ苦しむさまものすごく、まゆ目のつり上り、口のさけたる様は悪鬼の如く花の顔も一時に七八十のばあさんの顔となれりという。

## 四、蛇 責め

かの加賀騒動に於ける浅尾局に対し行い有名である。土中穴をあけ木に両足を大の字にしてしばり立たせ、首のみ地上に出してふたをし（浅尾局の場合は桶に入れる）中に蛇數十匹を入れる。人の体至る所に酒をふきかけるか酒中に入れ、蛇苦しきのため、足にまきついたり肛門其他陰部等にもぐりこみ内臓をかみきりて外に出たり、ひどきは胃を破り口中より出るとか、その苦しみ絶語につきるとかいわれている。

蛇をみるのさえ気絶する人が多いのに体をつたわり身体に深入するは聞くだけでも、そ

の残酷さ目をおおわしめるものがある。まして女性の身としては如何ばかりであろうか。

## 五、豆 拾い

奸婦奸夫に対する仕置として行うものである。残酷さはないが、その恥しさは耐えることが出来ぬといわれている。

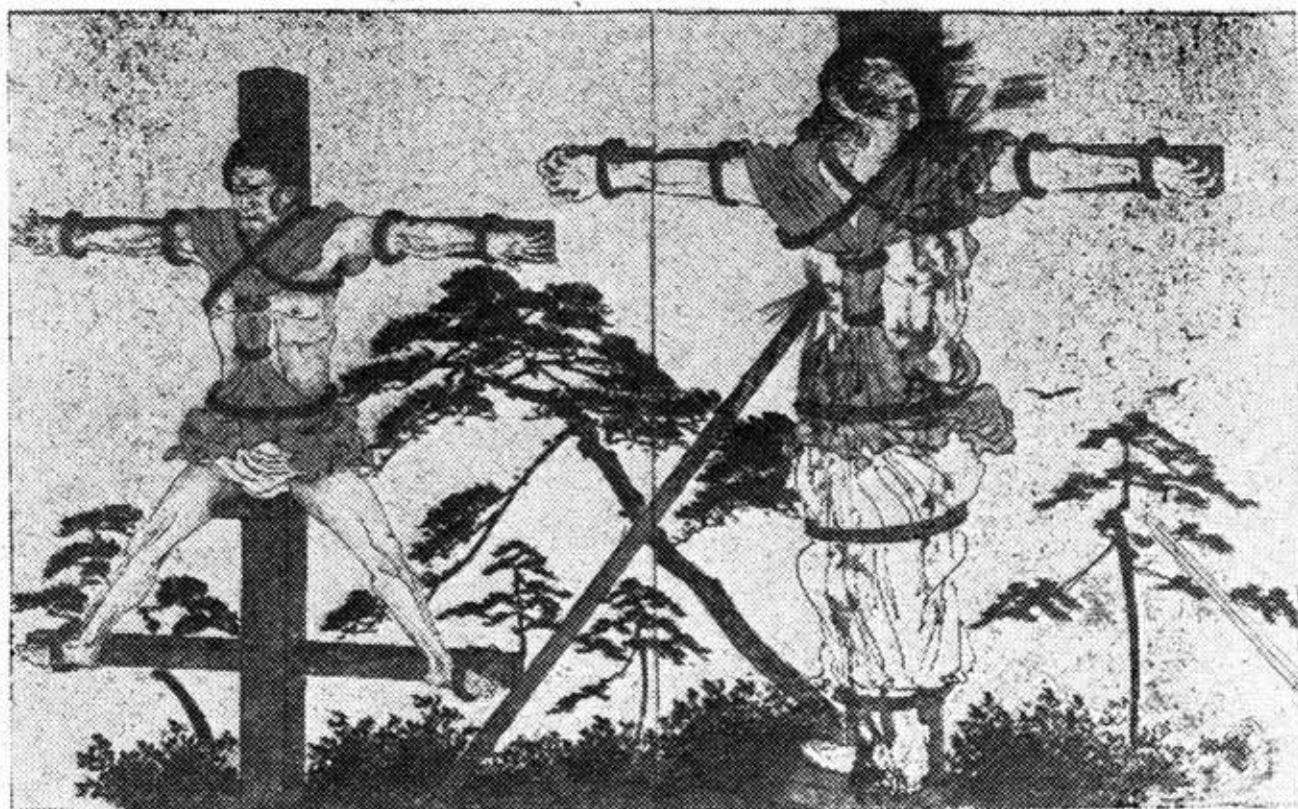
男女両人を全裸体となし腰ひもにて腰のみうしろむきにゆわき、地上に二升の豆をこぼし夫々一升枴をもたせて拾わせるという。そして四方の見物にみせるのである。

いくらずうずうしい奸婦奸夫でも、全裸体にて衆人の前では、全身迄赤くなるといわれ、見物人は見物人にて下らぬことを言い恥をかかすとか。又豆も一度に二つとれず、一つずつであり、時にはひもを短くして両人がかかめぬようにし、片方がとれば片方が前がまるみえとなり（やや後ろむきにそるため）奸夫のとる場合に於ては如何なる奸婦も顔をますにて隠すという。

然してこの刑は、絶対にしゃがんでとらせず、寛永年間に於て百姓五兵衛なる者、呉服間屋伊勢屋内儀おしまと行いし時は、ひもをゆるめ足をまげず前かがみにとらせたという。よって両人共臀部を突出し衆人にさらけた



## 磔刑の図



り、人々のうち一人の男、竹ぼうきにてその割目をつきくすぐりたりしてからかいたれど、

衆人みせしみのため、役人何も言わずさせるがままにしときたりと『徳川時代庶民刑罰実記』に記しある。

## 六、耳きり

これは公刑として定められ、中国に於ても又我国に於ても平安末期迄行われた。

## 七、鼻そぎ

耳きりと同じ。

## 八、ふくろたたき

古来より中世紀頃迄欧州各国に於て行われたるものである。

ふくろの中に罪人を入れ、口元をしめて宙づりにしたたきという。所かまわずたたく故、ふくろたたきという語が出た。又時にはふくろの中に猿や鶏や猫や犬なども共に入れたという。

## 九、ほうろく刑

天野屋利兵衛の子に井上河内守が行わんとしたの是有名である。

殷の紂王や傑王これを行ったという。真赤に焼けしほうろくに全裸にしてのせれ

ば、「ヂュウ」と音をたて全身ちじみて即死するという。又この両者は惨虐刑を行ったりしたので有名である。例えば次の虫責めも、その一例である。

## 十、虫責め

彼の愛妾にみせんものとして後宮の女十何名を全裸として白日の下にさらす。恥しさのため、うずくまりて詫を請う彼女達のために土を掘り中に「げじげじ」「むかで」「かまきり」「蛇」「さそり」等を一杯入れたる中につきおとす。土中より上らんとした女の手はまわりの軍兵に指をきらせておとし恥と苦しさのため大声をあげ苦しむさまをみて喜べりとかという。この愛妾こそ誰れあろう蛇己その人である。

## 十一、身体裂き

これは幾種類もある故、そのうち一つだけ挙げておこう。

大の字として右手、左手、首、右足、左足にと夫々たいまつをつけた牛にひっぱらせ、そのまま放置して置く、そして牛にはかいばをあたえおき衆人環視のもと恥しめておく。やがて短くなったたいまつ火の熱さのた

め苦しみあはれる牛の力で首、右手、右足と引きぬける。胴体は留置くため交々引いてはずれるといわれている。

## 十二、野ざらし

裸体にし横木にて手を十字にし高札を傍にかかげ盗みし品物を置いておく。

## 十三、頭毛醋

台湾にて昔行われしものにて、髪の毛を廁の中に入れ、尿やその他をしみこませて口よりつぎ込み食させる。常に咳を出して苦しむとか。

## 十四、姦夫姦婦刑

中国に於て古くより行われたるものにて、姦夫姦婦を裸体となし、向い合せに筏にゆわき川へ押出す。もしくはどちらかの首をきり生首を首許において流す。

声を挙げて叫ぶも助ける人もなく飢餓のため命を失うというが、夏の暑さなぞ塩分のため直射日光を受け苦しみ一入なりという。

## 十五、爆竹責め

裸体とせし男女を四つばいにしてゆわき肛

門に爆竹を挿入し火を点んじて爆炸せしめるといふ。

## 十六、皮剥ぎ

全身の皮を剥ぐことなり

## 十七、引延し責め

大の字にてしはり夫々の先端を万力にて引けば、足、手はすぐぬけるとか。又抜かぬ迄も引延し放置しておけば苦しみひどいという。

## 十八、石抱き

薪又は算盤形の木の上に後手にゆわいて両膝をまくらせ、その上にのせ膝へ伊豆石を載せ時にはゆずるといふ。

算盤木の上にのりてさえ骨あたりて痛むに伊豆石（一つ十三貫目）一枚、二枚と、多きは五枚も重ねられては如何なる人も殆んどが悲鳴を上げるといわれている。目はつり上り口中はかわきてからからとなり油汗は流れ鼻より鼻水がたれ骨はくだけるかと思われる程である。

## 十九、海老責

斬罪取片付の図



これは皆さん承知と思います。  
一名箱責めともいわれています。



胡座をかかせ両足指を一つに結び右足指から首になわをかけ、前の方へ段々とせめよせることです。

## 二十、釣責め

両手をうしろに縛し梁に引揚げ放置すると、二、三時間たてば全身の重みは繩にかかり呼吸苦しく繩は皮より肉に喰い込んで最後には足の先からポトリポトリと血をたらし、全身の油汗はたらたらこぼれるといわれる。

## 二十一、蚊責め

全裸体にし全身に酒をふきつけ蚊などいる墓の所に杭を立て縛すと、夜のため寺も特に墓場など、男でも気持悪き中を女で、このような責め方をされると、恥しさよりおそろしさのため気絶する者あるとか。

その中、酒の臭をひたつてよる蚊、そして虫、バツタ等かゆさ、痛さ全身余す所なく吸収される時は死に到るといふ。特に重罪の時は百奴ローソクをたて蚊を呼びあつめるといふ。

## 二十二、牛裂き

これはみなさん存じていること故略す。

## 二十三、牛責め

牛の脊に裸体にし両足をば牛の角にゆわき、あお向けにして首をばたらし両手をば牛の後足に各々ゆわき、角には足と共にたいまつをつける。

牛はその火の粉のあつさのためあばれ、脊にくぐらわれている人は牛の脊骨に脊をあてられ苦しく、足はたいまつにじりじりと焼け苦しきもだえ異臭をはなち牛の暴れる度に脊を打たれみるも無様な有様なりという。

又、一般に行われるものでは、有名な「クオ・バディス」にかかれていた面白可憐の少女リギアに行われたのと同じである。

## 二十四、尿責め

足を上にゆわき、ひらかせ尿桶に首を突込ませる。呼吸するたびに異臭すごく又口中、鼻に糞入りして息苦しく死に至るものありとか。

## 二十五、鉛責め

これにも四種類あり。

有名で一般的のものはかの黒田騒動にて行われたものを挙げることができる。キオイ谷

の城主の息たる人やられしは、全裸体にし四つんばいにゆわきて先ず肛門に熱したる鉛のとけたるを一滴こぼしふさぐ、次に塩水、食物等をたべらせ下痢をさせて放置しておく。

やがて、その苦しみひどく、遂に口中より全部吐出す。その後脊を割り熱したる醤油と塩水とを注ぎたればその苦しみひどくものすごく人々顔をそむけり、然しながら尚責めるも白状せず、どろどろにとけし鉛の熱湯を脊に注げば「ジュウジュウ」と、その苦しむ様子は、この世の地獄もかくやと思わしむとあり、と、聞くだけでもげにすさまじきものである。後に後藤又兵衛諫めたれど忠之（黒田）聞かずとあり。

## 二十六、飢渴刑

両手を柱に縛し食物を与えず放置すれば、目はくらみ口中かわき腹と脊はつく気すると、然して、その後、目の前に「スシ」「ムスビ」などの食物を置く。その苦しむ様ごくほんとに口元より汁を出すといわれる。食物責は実際人々考える以上に苦しきものであると想像される。

## 二十七、さらし責め

火刑の図



中世ヨーロッパに主に行われしもので、四角な板に首穴、手穴をあけて首と両手を突込

みさらす。その一種には全裸にし衆人に視せるとか。間者に於ける白状の仕方制裁はひどく首穴より首を出させ手あなより手を出させ突出したる肛門に火をつけて苦ます。又衆人をして肛門をのぞかせ、悪口をゆいっつ恥しみを与えたりとか。尚ひどきは顔面に与三郎の如く一切り二切りと切らせて苦しみを長くさせ同様に脊に火をあて皮肉を焼き又陰毛を一本宛ぬけば苦しさ、恥しさ、痛さで大概白状するとか。

それでも白状せぬスパイには四つんばいにゆわかせ動さず髪の毛を少し宛束ねて抜き陰毛を一本宛抜き肛門にローソクをあて五寸釘を脊に少しづつ打込みペンチにて（その頃はなくはさむもの）ちちくびをつぶせば、たまらず一切白状せしと物の本にあり。

二十八、鋸引き

これ首を鉄鋸にて引くことである。又徳川時代に於けるは日本橋に罪状札を立ててさらし、刀にて一、二寸切り、その切口を通行人をして竹鋸りにて引かせたといわれている。

二十九、車落し

車の車輪に弓なりに裸体にせし人を縛し坂よりころがり落せば、顔面目茶目茶となりて二目ともみられずという。

三十、牛像焼き

ヨーロッパに於て行われ牛の形をせし金具の胴内に人を入れ、下より火を焚くという。

三十一、頭かぶし

足利時代、我国にてよく行われたものであって、熱したるなべ若しくはかまを頭にかぶせるをいう。

三十二、陰囊さし

足利時代、僧何某、宗旨更えせぬを怒り、僧侶全員を集めて責むるも一言も言わず、止むをえず熱したるなべ頭にかぶせ両手を後ろに縛し、松に宙づりにし陰囊をば竹槍にて突き、そしてたいまつ火にて焼き、突いては焼き、その苦しさひどきも一言も口を緘んしと言わず、余りのことに並いる僧侶もあきれたりと古文書にあり。これ日連上人が弟子にて氏名忘却せしも著名なり、然して時の將軍



義尚とかが、その信念のかたさに賞し遂に許せりという。

### 三十三、アイゼルネ・

#### ユングフラウ

世に鉄娘といわれ、奇譚クラブには二十九年の何月号かに口絵にてのせてあったので見た人もあると思う。(六月号か七月号)鉄で作った女の人の形をしたもので、双方に釘を打ちつけてあり胴内に人を入れ、双方より閉じると目、鼻、口、心臓、胃などの急所を長い釘で突くようになっていた。

それで非常に苦しみ血を流して死ぬという。実際のは首をつけてあるが本誌のにはつけてなく、ひらいたのを左に右に両手をゆわかれた女性を描いてあった。

### 三十四、生爪責め

中国に於て行われた事あり。生爪を一枚宛抜くのである。その苦しみはひどく、日本ではキリシタンに両手の生爪をはがし草をむしらせ、そのはがした手にて土をほらしめたことあり。

### 三十五、さかさづり

新撰組の土方歳三が長州藩士に行つて池田

屋乗込みをつかんだもととして有名である。

さかさづりにし足の甲より下に五寸釘を打込み、その上、ローソク(百匁)を立て白状させり。

初めは武士らしく一言もしゃべらずにいた武士も、ろうがとけ、その熱いのが釘をとおした皮にとけこむや、余りの痛さに遂に白状せりという。

又、講談にてよくいわれる、羽黒山中に於ける塚原卜伝のさかさづりは有名である。血は逆流し遂に氣狂いとなり死すという。

### 三十六、水責め

これには種々あり。

我が国に於ては年具未納の百姓に対し、水牢に入れたりした。水の中に足を入れさせばなしが、冬のさなかに腰迄水の中に入れておき横になることも寝ることも出来ず、体はふやけ感覚はなくなりひどいという。

仏国に於ては水責めとして、囚人をして梯子におお向けにゆわき、少しづつ顔面一杯に水を注ぐ、そのうち一回、二回と口中や鼻に入り息をするたびにのどに入りして腹一杯となりふくれものすごし。

腹ふくれてその苦しむ様はひどく、それを

腹をおしたり又足を持って逆さにつるせば、口、鼻よりほどばしり出て、血もまじるものすごしとか。そして又水を注ぎ又出すとくり返しくり返し行ふという。

### 三十七、木馬責め

これは日本にもヨーロッパにもあり。通常は三角形(△形)の木の上にまたがせ足に夫々重石をつるし放置せば、股はさける苦しみである。ただ重石を引くだけでなく中には宙づりするものもあり、そのため股はさけ皮肉喰い込み血が流れてるという。

ひどきは△形の先に突起物を置き、その突起物を肛門に入れ足をまたがらせて大石を両足につるす。突起物は遂に腸を破り股はさけものすごしとか。

時に於て重石をつけず、たぶ繩にて足を横に引き、その尖端にとどく如くローソクをおき足を焼く、その熱さ、そして皮肉をやかれる苦しきのため、木馬の上の上半身は苦しきもだえる。もがかんとして動かず、わずかにきく腰を動かせば、股はさけるか突起物のため肛門はいためつけられ苦しみ言語に絶すと記してある。

### 三十八、駿河責め

四肢をまげて後ろにまわし一まとめにしてかたくゆわえ、宙につるして背中に石をのせ、くるくるとこまの如くまわす。

そうすると、その反動にて逆まわりし、その時に於ては全身の油のたれる様子は水しぶきの如くであるといわれ、我国に行われた刑罰の中では、これ以上の極刑はないといわれている。

我が国に於ては大鳥一平と曾根何某の妻と他に三人計五行われたのみ。内一人は途中にて止めたりといわれ、石抱え、えび責め、釣責めを経てこれを行う故、これ迄我慢せぬうちに皆白状せしため少しとか。

### 三十九、はりつけ

これにも種々あり。普通のはりつけと逆はりつけと、男子の場合は両足を開かせるも、女子の場合は両足を合せ縛る。

両脇を非人にさび槍にてつかせるが、二十回位迄大体は死なぬという。一回で死ぬ事なし。

逆はりつけは極刑で、かのキリシタンに品川沖にて行ったことは有名である。

これは水中逆さはりつけで、その苦しみはこの世になしといわれている。

血は逆流し、海水満つれば、目、耳、鼻、口と入りこみ呼吸出来ず、たまにせばとて海水入り腹はふくれ顔面むくれ殆んどが気絶する程の苦しみとか。即ち直射日光にあてられ海水にあたりし所はヒリヒリと焼かれ、その上飢と三日も四日も放置され体の感覚はなくふやけた顔面のき、たならしきなんともいえないなりと。

### 四十、屎責め

屎責めといえる一種にて昔中国地方にあったのは悲惨である。

お近という十七才になる女農、期限迄納米せぬとて、大の字に裸体にされ全身屎をかけられ、太陽に当て、かわきては又かけ、三日放置されたり。路行く人々助けたきも代官を恐れ、可哀いそうと思っても見て見ぬふりをしてる。花恥し年頃の娘、ひなにまれなる容姿のため、横目でみたり大びらにみたり、その度に娘顔をそむけるもそむけるたびに顔面に屎をかけられ、苦しみ恥る様はまことにむごく、四日目にして諸人みせしみのため他の納米せぬ娘三人とさかさづりにして、顔面

を屎桶につっこませ、気絶させること三度。

四度目にお近なる娘のみ、それでも納米出来ぬというので、他の三人の承知せし娘のみ許し、大の字のゆわきて常に顔面に屎をこぼし髪を焼きて丸坊主とし、次で陰部の毛を焼き脇毛を焼き四つんばいに車のつきし台の上にせ引廻しの上肛門に矢を通し殺しめしみにせしたため納米はかどりたれど、余りのむごさに人々はおどろき恐れ入りたりとか古文献に記しあり。

### 四十一、遊女刑

これは徳川時代、吉原に於て行われた刑罰で、殴打、絶食、水責め等あり。水責め其他はよんで字の如きである。他に雪責めあり。

浦里時次郎といわれ新内の明烏夢淡雪の遊女浦里に加えられ有名である。又水責めには、あの小松嵐にて馬子の時が「殺さば殺せと馬子の時」という如く丸裸にし、冬のさなか井戸水をかけられ竹(割竹)でたたかれるので有名であるが、遊女の水責めは宙づりにして水を何回もかけるのである。

やがて水かわきて縄ちぢみて苦しさ一入という。そして時に責殺す事多々あり。又逃げ出してつかまりし時は、殺しても羞支えなき



ためといわれている位なる故、その時の責めはひどかったらしい。

真裸体として宙づりにし「竹べら」にて絶入る迄打ちたたき又は丸裸になして口へくつわの如く手拭をばかませて両手両足を四つにしばり梁へつり上げて打つ。これこの所の言葉にて世にづりづりといわれている。

## 四十二、キリシタンに加えられたる刑罰

最後にキリシタンに加えられたる刑罰を二つ三つ記してみよう。

我が国に於ける惨虐刑は、之につきるとまでいわれ、その惨忍さはひどいものであった。「みのおどり」といい、老幼男女を問わず身一物も与えず丸裸にしみのを着せ後手に縛し火をつける。熱さのためのうち苦しみころころところがるさまは、丁度みの虫の如くなる故かくつけたり。

又「温泉投没」なるものあり。目をおおわしめるぐらぐらとたぎりたつ雲仙の火口へ投込みする。又脊を割りて温泉の湯をながしこみ苦しませたり。

もつこにのせられ、火口につりさげられたり水中逆はりつけさせられたり「吊上げ」と

いう両手指をゆわきて梁りかけ繩を引き宙づりになしたる所をでんぶにむちあていたさに動けば全身の重み二本の指にかかり肩の骨は抜け或は

「火責め」といい丸裸にして立たせ周圍に枯木を水にひたして火をつけ煙にてむせば熱風と火勢に苦しませ、それを諸人へのみせしみのため繩をゆるくし、その苦しむさまをみせ、少しでも苦しみを永くさせるためには或消し或はつけたり。

「硫黄責め」といい口と鼻にくだをつけてゆわき、硫黄をやかせ呼吸する毎に硫黄の煙を吸う。

息をせねば苦しく、又すれば硫黄のけむり口鼻に入り周圍に水にしたした枯木をもやし、その煙目に入り、顔面は硫黄のため青黒く呼吸は「ハアハア」と苦しく、その惨虐目をおおわしめるものあり。かくしてはやめ、かくしては行いたれど転宗せぬ人々も偉大といふべきである。げに信念とは信心とはおそろしきものである。

## 四十三、松葉いぶし

これはよんで字の通り松葉にていぶすことである。

## 四十四、鼻輪通し

これは中国に於てよく行われてきたものであるが、日本の足利末期即ち戦国の初め頃、中国に於て、この刑の面白いものあったということが記録に残っているが、どこ迄ほんとうか分らない。鼻に丸輪を通し、そのひもを木にぐるぐるゆわきて責めたとかいう。

初めに裸体にし臀部をめった打にせりとか、その娘苦しみあはれるが鼻千切れそうなので、手足自由なるも、手を後へもって行かず鼻輪にもっていつて耐えしのびしが、両手を後ろに縛り足にたいまつみたいのものをゆわけば熱さにとび上り遂に鼻輪を千切り飛廻りたれど腕にゆわきし繩のはじ木にゆわきありしたため、飛上りつつ右に左に木を廻り遂に斃れたり。

次に鼻輪の両端に横に三寸程の棒をつけ千切れぬように固定（鼻面）させた右孔に火を近づければやはりあばれたれど只両足を、ばたつかせるのみ、さればと炎を上げている灯油を鼻先に一つ肛門に一つあてがえば、さしもの鼻輪又千切れたりという。

この女性、後宮の者たりしも、帝の目をぬすみ雑仕なるものに通せんとせしをいかりてかく行えりとか。

## 最新代理部分讓品案内

## 女体緊縛フオトの部

## 一、//大の字//逆さ吊り

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円

略号(つり) モデル 梨花悠紀子

責めの中で吊りが一番好きだという梨花悠紀子を逆さ吊りの大の字に両足をいっぱいに広げさせた強烈な吊り責めフオト。

## 二、立木//宙縛り//

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円

略号(くた) モデル 梨花悠紀子

荒縄が全身にぐるぐると喰い込み、立木に高々と宙じばりになった悠紀子の足場のない足先だけが徒らに苦痛にうごめいている。

## 三、凄惨//乳房責//

大手札印画紙 三枚一組 二五〇円

略号(とい) モデル 梨花悠紀子

ヒョウタンのように根元を縄でくびられてもうこれ以上大きくならないという極限まで虐げられた乳房の大写し写真。

## 四、//妊婦の緊縛//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(にむ) モデル 某女

読者の紹介で得た妊娠中の若い女性をモデ

ルとして、その胸や腹を緊縛した写真。誌上に掲載しないという約束の稀少作品。

## 五、//全裸の仕置//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(すお) モデル 東浦ひかる

マゾの遍歴から。より強烈な試練の庭に立ちたいと願う東浦ひかるの最も新しい生態をここに、あからさまに紹介したいと思う。

## 女体切腹フオトの部

## 一、血紅女体自害

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひち) モデル 大塚啓子

白鞘の短刀を豊満な下腹へぐざりと突き立て、きりりと臍下を切り裂き、溢れる血汐がしたたり落ちる凄まじくも美しい光景。

## 二、女体切腹マンダラ

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(あま) モデル 甘木春子外

あるマニヤが同好者の女性をモデルとして野外にて自らその女性の腹部を切り裂いてゆく有様を撮影した血紅利用の切腹写真。

## 三、悲愴女体自決

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひい) モデル 大塚啓子

真白い肌に突き立てられる氷のような九寸五分の脇差。臍下に、乳房に、咽喉元に最期のとどめは容赦なく加えられてゆく。

## 四、哀艶女体割腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(かつ) モデル 梨花悠紀子

正面向いて両膝を立て、或は右膝を一步踏み出して全身の力を両手にこめ、ううう、とばかり無垢の柔肌に突っ立てる刃先。

## 五、凄惨血紅女体立腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひさ) モデル 大塚啓子

柱を背にして立ち壮絶な立腹を演じるさまを豊富な血紅を用いて刻々と変りゆく経過と苦悶と哀切の表情を捉えた血汐のフオト。

## 六、苦悶切腹表情

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円

略号(せく) モデル 梨花悠紀子

切腹によって起る激痛による苦悶の表情を真迫的に描写しようとして、顔面は勿論、手足の指先に至るまで刻明に写した作品。

## フェチ・フオトの部

## 一、バンド着用フオト

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(めい) モデル 梨花悠紀子

メンスバンド・マニヤ待望のバンド着用のありさまを刻明且つ鮮明に美しいモデル嬢によって、あらゆる場面をごらんに入れます。



## 二、バンド着用の縛り（後手）

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円

略号（めろ） モデル 梨花悠紀子

後手高手小手にメンスバンドを着けられた女性の口も鼻も、猿ぐつわとしての替ゴムがムシムシするゴム特有の臭気を放っている。

## 三、バンド着用の縛り（前手）

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円

略号（めは） モデル 梨花悠紀子

バンドや替ゴム着用の部分を殊更鮮明に大寫しするための前手しぼりによる脚拳ポーズ等、のびやかな下肢の動きは美しい。

## 四、女性の六尺褌

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号（ろく） モデル 大塚啓子

晒の六尺褌をきりと締めた裸女が、正面背面、横臥、側面とフンドシ着用の女体をあらゆる角度からキャッチしたマニヤ向作品。

## 五、ゴム・マニヤ

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号（こむ） モデル 梨花悠紀子

ヌメヌメとした生ゴムのタッチとあの特有の臭気にむせびながら、頭の先から手足の先までゴムづくめのゴムフェチの女体。

## 六、メンス・バンド

大手札印画紙四枚 一組 四〇〇円

略号（めす） モデル 梨花悠紀子

両の自由を奪われてしまつては、もう強制的に装着させられたメンスバンドをはずすことも出来ない。鮮鋭なレンズはシワの一つも見逃すまいとフィルムに印してゆく。

## 七、ゴムカバー着縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号（かは）

ぬめぬめとしたアメゴムのオシメ・カバーが身の自由にならぬ下半身にはかされてこれから排泄の汚辱にむせばんとするカバー・プレイの三場面。ゴムの臭気が鼻の先に匂ってくる迫力。

## 八、脱がされたバンド

大手札 二枚一組 二五〇円

梨花悠紀子 略号（めに）

見るのは勿論のこと、手にとるのさえ恥しいメンスバンドを他人の手で脱がされるといふのは、なんといういらだたしいことだろう。でも、後手に括られてるんだもの。仕方がないわ。

## 九、アテゴムの猿ぐつわ

大手札 二枚一組 二五〇円

梨花悠紀子 略号（めほ）

後手にしぼられた身体には、メンスバンドをはかされ、口には、バンドのアテゴムが鼻も口もすっぽりと掩いかぶさって猿ぐつわをかまされている息ぐるしくも又、悩ましい陶醉のひととき。

## Mフオトの部

## 一、足で戴く珍味

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号（くさ） モデル 絹川文代外

足の指に挟んだお菓子をもそのまま直接口で受けて戴くのは、マゾヒストの夢にまで描いた幸福の構図ではなからうか。

## 二、靴の下にうごめく

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号（くつ） モデル 絹川文代外

鋭く尖ったハイヒールの靴先が、或は踵が口の中へぐつと押し込まれる汚辱の瞬間。床に転った顔を踏みにじる非情な靴の裏。

## 特殊趣向フオトの部

## 一、絞首処刑

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号（こう） モデル 絹川文代

後手に縛られたフンドシ一本の裸の女首には絞首刑の縄が垂れ下り、脇腹には白刃が突きたてられて血汐が溢れる苦悶の形相。

## 二、鼻料理

大手札印画紙 六枚一組 六〇〇円

略号（はか） モデル 大塚啓子

若い女の鼻に対して、これでもか、これでもかと、いろいろの苛虐が手をかえ品をかえて加えられてゆく鼻マニヤの作品。

◎お申込みは「略号」にてお願いします。



○ 編集部の皆様、残暑きびしき中を毎日の御活躍を本当に御苦労に存じます。はじめてお便りさせて頂きますが、奇クは二年前より毎号欠かさず愛読致しております。私は本年二十五才、五尺三寸、十四貫のS趣味の女性です。いつも御誌を拝見する度に思うのですが、世の中には、なんと愚かな男共の多いことでしょう。もっともM的な男がいるから、又私の様なものは人世が楽しいのかも知れませんが。さて奇ク読者の中で心の底から忠誠を誓い絶対的に私の命令一切に服従し、鞭打ち、足蹴、海老

責め、火焙り等の刑罰に堪えられる男奴隷志願者がいたら御手紙下さい。私は私の若さと美貌を誇り守るために思う存分に犬共を酷使しタツプリ可愛がって上げます。今、一匹四十男を飼育しています

が、毎日ヒーヒー云い乍らも、私の許から逃げ出せず、あらゆるプレイをさせられているけど、本人はとても幸福そうですし、毎月私の為に少なからぬ金品を捧げて忠勤をはげんでいます。私は商売じゃないから金銭を目的とはしません。が、十月号の一読者のように双方の都合のよい土地までお互いに出張して会見したい等という様な虫のよいみみっちい考えの人や貧乏人は大嫌い。女王は常に驕慢である筈です。すべてのものを投げ捨てて女王の足下にひれ伏してこそM男といえるのではないでしょう。か。私の豊かな尻に敷かれ、顔を足で踏みにして貰いたい人は志願しなさい。申込みが多い時は次々と呼びつけるなり出張してテストした上で、二、三人採用してあげます。(静岡県伊豆下田局区内△沢田かおる▽)

○ 水野淑子様、十月号の通信欄を拝見、奇ク御愛読の由、貴女様は

Mマニヤの御様子、小生はハーフです。貴女様の御満足の出来るまです。貴女様の出来る小生です。お好みなら写真も撮れます。まだまだ沢山なそれでいて、あまり身体を責めない、それでいて、とてもすごいプレイがごさいます。縛る事もよろしいが、あまり度を過すと貴女様の「やわ肌にあとかたが出来、数日を経ないとなおらないです。美容体操をかねたものなら、よろしいと思います。一度心ゆくまで色々とお話しをしたいと思います。無敵守るべき事は誓います。二十九才、一六五種、五十五キロです。顔は橋蔵的な型です。デパートへお勤の由、日曜日はお休みに出来ないでしょうが、御都合下さいまして九月九日より毎日曜日、午前十一時三十分より十二時迄約三十分の間、上六バス乗り場、あべの方面行き附近でおまち下さい。其の時は黄色い花を胸か胸下にお付け下さい。では、其の日迄。(大阪市△秋津郁夫▽)

○ 御誌、毎号楽しく拝見させて頂いております。四月号所載の「私の切腹体験記より」を読み感激しました。私は既にカミソリの刃で浅く経験をしているのですが、こ

の筆者のように未だ本格的な切腹法を経験していません。この文章、真実と思いますので、一度筆者の藤村陵子様にお会いしてお話をお聞きしたく筆をとりました。或は何の読者の方々でも結構です。どなたか女性の方で切腹に関心をお持ちの方をご紹介下さいましたら幸いです。東京附近の方でなくても結構です。例え九州の方でも。プレイの上、普通の写真並に八ミリで写したいと思っています。写真が出来ましたら御誌へ寄贈いたします。なるべくなら女性のマニアの方を望みますが、若し、どうしてもそれが不可能でしたら、完全な女装(下着のみ)にて撮影してもと考えております(東京都△黒田輝一▽)

○ 八、九月合併号読ませてもらいました。昭和三十五年十月号では、新装号とめい打って新しい発足をされて今までの販売方式を変えて堂々と店頭で貴誌のきれいな表紙が姿を見せましたが、翌年の三十六年十月号からは、定価も二百円となり頁数もうんと増し、私達愛読者を喜ばせてくれました。嘗て、昭和三十年十月号が復刊第一号の皮切りであったように、貴誌



はいつも十月号というのが、一つの転帰になつてゐるように思えます。今年も一つ、十月号をポイントとして、一大発展を遂げて頂きたいと願うのは私ばかりではないと思います。例の勧告以来、たしかに貴誌は自粛され、模範生に近くなつていますが、私達純粹な愛読者にとっては、全く淋しいかぎりです。これからも、このような恰好で発行されるのかと思うと残念でなりません。これも時代の流れかと思えば、自分の望みばかりを言うわけにはいかないのだと諦めています。そして、せめても願ひとして、今後休みなしに毎号確実な発行を続けて下さい。貴誌のない人世は淋しくつまらなく、前途に希望を持つことが出来ません。私達愛読者の生きる糧としての貴誌が存続されますことを心から希求いたします。私は浣腸にあこがれる者です。読者の中にも浣腸に興味をもっている人は数多くいると思います。私はどういうわけか幼いときから浣腸に関心をもち、今では若い女の人に浣腸を施してみたくてなりません。しかし、実際はそういう機会に恵まれないこともなく、貴誌によって僅かに慰められているのです。マニ

ヤの方で浣腸や浣腸器についてお精しい方は、誌上にいろいろなお教え願えませんでしょうか。私は今日まで購入しましたものは、エネマシリンジ（三〇〇円）、ガラス製ポンプ二〇〇〇（一五〇円）の二種類です。その他色々の器具、あるいは浣腸液などについてお知らせ下さい。では読者の皆様、さようなら。（東京八阪東太郎）

○ 真崎咲子さん。八、九月合併号にて貴女のお便りを拝見致しました。本及び同好の方を……との事でしたので早速お便りいたしました。貴女は大阪にお住いの様ですが、私達同好の男女が、大阪、奈良、京都に在住の者が時々集つて話し合つたり、又資料の披歴などして居ります。又、本「奇ク」の毎号保存してあります。其の他写真資料も少々あります。もし貴女が御希望であれば同好の方々の集りに御招待致したいと思ひます。又其の時に、本、写真、資料等もお見せ致します。連絡の仕方をお知らせ下さい。私達同好の集いに御招待したいと思ひます。それまでに一度ゆっくり面談致したく思ひます。御連絡下さい。（奈良市八阿部勇造）

○ 半ダコ礼讀者の鎌倉のO・T（大川辰次）様。小生も以前から半ダコファンですが、中々いろいろ種類の半ダコを作つて身につけることが出来ず、貴兄をうらやましく思つています。小生は半ダコのほか、胸割シャツ、晒の腹巻、六尺褌、ダボシャツなど、日本古来の下着に人一倍愛着をもつています。どうか一度直接会つて、実際に指導して下さい。なお、以前描かれたような半ダコ姿のいなせな兄哥姿の絵を、もう一度投稿し

て誌面をかざつてもらいたいものです。小生二十五才の青年です。御返事は十月十日までに左記へ願ひます。（東京都新宿区住吉郵便局止八川本進）

## 自刃悶絶

（略号 せよ）

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚啓子

豊満な肉づきをみせている下腹を脇差で掻き切ると溢れる血潮が（血紅使用）臍の下一面をくれないに彩る。今はもう覚悟の切腹であるから、力いっぱい深々と腸に至るまで刃を突き刺し、自刃の恍惚感に陶醉するのであった。

腰まで垂れる黒髪の大塚啓子が豊かな姿態をくねらせて、切腹の痛手に悶絶する光景。

## ダブル切腹

（略号 せる）

大手札型印画紙焼付

二枚一組 二五〇円

モデル 絹川文代、大塚啓子

すでに切腹し果てた啓子は、絶命した渾一本の裸身を長々と晒している。文代はその死骸の上に跨がり、自分も又、彼女のあとを追つて、臍の下へ深々と刃を突き立てる。一瞬電撃のように全身に走る疼痛、しかし、健気にも氣をとり直し、勇をふるってかっさばいてゆく文代の雄々しい六尺渾一本の男まさりの切腹ポーズ



り縛りあげて心ゆくまで責めてみたいと思います。そしてあなたがぐったりしたら、水をかけて正気にかえらせて今度は浣腸責めです。あなたのお腹が大きくふくらむ程液を注ぎこみます。私は鼻責めにも非常に興味を持っております。ぐったりたおれたあなたの空向いた鼻の孔を念入りにそうじしてあげます。あなたの白い鼻が赤く色づくころ、私は次の責めをはじめます。あなたはきつと桃源境をさまようことでしょう。あなたが望む時、いつでもお会いできるでしょう。とっても親切なところもある男ですよ。これはうぬぼれ！私は希望が湧いてきました。大阪の街にあなたのような人がいるのだと云うことを知って……。あなたとの毎日が過せたら、どんなにたのしいでしょう。そして最後に私を信用して下さい。守るべきものは、ちゃんと守り抜くつもりです。まだ会わぬあなたを想像して、さっそく縄を用意しました。首から股に二本固くしばって両手両足をきつく縛ります。あなたは固く棒のようにしばられた自分のからだに満足するでしょう。そのまま一晩中放っておいたら、どうでしょう。心配しないで下さい。

そんなことは絶対にしませんから。いろいろとあなたのすばらしい肉体に加える責めの方法を次々と思ひおこしては、今からたのしみにしています。是非是非、お会いしたい。水野様、どうか次号の読者通信欄で住所をおあかし下さい。(大阪府高槻市八水野巖)

皆様初めまして。私は中年の未亡人でございます。実は貴誌の浣腸記事に魅せられ筆をとった次第です。浣腸——なんと魅力的な言葉でしょう。私ひとりかと思っていた秘密が、こんなに沢山の同好の方々がおられる事を知り、大変うれしく思いますと共に、ぜひ一緒にプレイをお願いしたいと思っています。只はひとりでプレイしているに過ぎませんが、もし、どなたか同好の方々とお知り合いになれたとしたら、どんなにすばらしいことでしょう。今いろいろの浣腸の道具を使用しておりますが、私が最も好みますのは、オミソによる人工排便です。又、使用済の下着にもすごく魅力を感じます。もっとも女性に限りませんが、出来れば私と同じぐらいの年輩の方との交際を望みます。ぜひ貴女の体臭と汗のしみた下着

## 特写連続組物資料

次に掲げますものは特別の趣向アイデア等によったもの或は連続的な組写真の中、殊に興味あるものを選び出しました。

### 裸女争闘場面

(略号)

大手札型印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 田中芳代、愛川悦子

揮一本の若々しい張りのあるピチピチとした身体の裸女が互いに相手を押え込もうとして根かぎりの力を尽して争う場面。胴絞め、ヘッドロック、腕とり、押え込みなどの手を使って、やがては自分の尻の下に相手の顔面を敷いてしまおうとする。結局は一回宛、誇り高き自分の顔を相手の巨大な臀部の下に押しひしがれて、息もたえだえになるという争闘の各シーンを連続三十枚撮影の中から、十二枚を選び出した。

メトミファン、女斗ファン並に女性のサドマゾに興味をお持ちの方、女相撲ファンなど、どうぞ。

## 説教強盗侵入

(略号)

大手札型印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 絹川文代

外出から帰った一人居の美女が部屋の卓の前でほとと一息ついたところへ、宵の口から早くも侵入していた説教強盗が突然、目の前へ現れた。驚いて口もきけない彼女の細腕をとった男は、逆手にねじながら、帰ったばかりの晴れ着をむざむざにも引きはがすのであった。こうして、夕方から翌朝の明け方まで、悠々と戸締りの不備を説教しながら、あたかも猫が捕えたネズミを弄び楽しむように、ゆっくりと時間をかけて、一人暮らしの彼女をいたぶるのであった。晴れ着を長襦袢をはがされた女の白い胸や膝、荒々しい縄は後手ばかりか、胸から二の腕にもきびしく掛けられてゆく。連続十二枚の鮮明なフォトは、縄にもだえ、いたぶられ尽す若く美しい女の被虐の生態を余すところなく活写して、嗜虐マニヤの目を楽しませてゆくのであった。



をお送り下さい。もちろん私だって負けずに香り高いショーツを送ります。読者通信欄へ御返事下さい。(浣腸マニヤ、伊集院かおる)

○ 始めて便りをいたします。貴社発行のキダンクラブの愛読者です。毎号かかさず愛読しており内容も一段と充実され、うれしく思っております。私はおむつカバーマニヤです。いつもキダンクラブの写真及び記事を見ますが、いつも少いのが残念に思っております。あのヌメヌメしたゴムの感触はたまらない程好きです。私は余り浣腸は好みませんが、女の人が子供の両足を片手でもちあげ、おむつカバーをあてるところ、又、あてられたカバーが両股に密着しているところが好きです。若い女の人でおむつカバーに興味を持っている人がありましたら、便りでもいたしたいのでお知らせ下さい。(茨城八森利一)

○ 或る方面より高圧的な規制のもとに御苦労なざる編集部の方々。さぞや世の中は狭く楽しみの少ない事を嘆じて居られる事でしょう。それにも拘らず、我々鼻責めマニヤにとって世にも得難き大塚嬢の

「鼻責め料理」をものにして下さった御配慮、誠に有難き贈りものでありました。クローズアップされた指の躍動を見る時の恍惚さ、老生にとっても長生きはしたきものよとツクズク思いました。それにつけても梨花嬢、絹川嬢の鼻責め御好み料理の新しい発表を乞いのぞんでやみません。鼻責め特集写真、又は記録の包丁加減を是非拝見致したいものです。此の頃のK誌はグラビヤ写真には或る程度の限界がある関係上、中々読者の望む線までは手一杯載せかねる点がほの見えるており鼻マニヤにとっては分譲写真こそそれこそ金銭にかえ難い魅力の対象のような気がいたします。値段はいくら高価になっても構いませんから、どうぞ今後ともドシドシ新しいアイデアの鼻責め描写をクリエートして頂きたいと懇願致します。(東京八Y・K生)

○ 裸女血斗のファンの方々の通信が毎号本欄を賑わせてマニヤの端くれである私は大いに楽しませていただいています。前に記しておきましたように、室井様、川下米子様の通信は毎号楽しみにしておりますが、八、九月号では残念な

から御目にかかれませんでした。前日の通信を出しました後で、ふと私なりの裸女血斗の模様のイメージが浮かびましたので、ここに同好諸氏に御紹介したいと思ひます。従来通りやはり双方の女はふんどし一本の裸体での血斗ですが、私は一方の女性を紅毛又は金髪、青い目の泰西の女としました。対する日本の女性は、やはり

ブリジータの豊満な裸身を持つ女性性がモデルとして適当と思ひます。又、日本娘と紅毛金髪の女の集団が共にふんどし一つで斬り合う「大奥裸女血斗」的なものでもよいでしょう。裸女血斗シリーズの一つとして、このささやかな私のイメージの実現をお願いいたします。(北村英一)

日本髪姿(御守殿髷)で紫縮緬、又は日本を代表する色のふんどしをしめ、薙刀又は小太刀を得物として、外人の女性も勿論ふんどし一つですが、これも日本の六尺禪と違って細目のもの(例えば水泳禪の如きもの)を体にくいこませ、得物はナイフ又は細身の剣とします。ふんどしはバラ色の鮮やかなものが、白い肌にこの上もないアクセントをなすことでしょう。そして、これらの女性はいかに斬合の果、遂に紫ふんどしの日本娘が、自分より大柄のグラマーな身体、金髪又は紅色の裸女を討ち取って首級をあげるという筋書きです。双方の女はそれぞれ日本と外国を代表する美を備えているとの設定です。例えば日本娘は山本富士子、外国娘はリズ・テラーか、年増女とすれば、ジーナ・ロ

○ 始めてお手紙いたします。小生、本年二十九才の青年医師で或る病院に勤務しておりますが、貴社の「奇譚クラブ」を知り、非常に興味を持ちました。小生は少年時代から特に切腹に興味を感じ、その物語、画、写真等を見ると非常に感激します。まだ一度も切腹する所は見ただけではありませんが、実際に切腹した例の手術を行った報告等は集めており、もし希望でしたら差し上げても良いと思っております。小生は女性の切腹には全く興味がなく、男性の切腹、特に少年や筋骨たくましい青年が腹を打ち割る所に非常な共感をおぼえます。また小生なりの、切腹に対するファンタジーも有りますので、よかったですら投稿して見たいと思います。(福岡市八田瀬進)



八・九月号の滝れい子様の「生首シリーズ」大へん楽しく拝見しました。そして私達の念願を、編集部の皆様がとりあげて下さったことに對して厚く御礼申しあげます。もとより不満もちょっぴりないではありません。たとえば、あの題に「裸女血斗の果て」とありましたが、「大奥裸女決斗」のイメージがこびりついていて私達には、やはり痺を締めた立姿で、敵の女の生首をかかげたポーズでありたかったのですが。そして滝れい子様なら死首も、もう少しなまめかしく画いていただけたのではないかと、次号を期待しています。出来ればグラビヤに、ああいうシリーズ絵をのせ、本文の方にその解説の物語でものせていただけたら、一層素晴らしいと思います。何れにせよ、ああいうシリーズをのせていただければ、次号はどんなものがのるか、胸を躍らせて待つだけでも、私達「女の首マニア」はほんとに生き甲斐を感じます。重ねて編集部の皆様に御礼を申しあげます。(東京都八川上米子V)

○ 小生事東京都下在住の奇ク愛読者で三十四才の男性マゾです。数

年来奇クは身辺を離せぬ心の伴侶です。稀少価値を持つ刊行物として編集諸氏の御苦勞、御努力に衷心より敬意を表します。貴誌十月号読者通信で早川芳夫様(東京)山田正男様(京都)、石本完治様(大阪)、服部様(名古屋)等数多くのマゾ男性の方々が、名乗り出られたのを知り同性行の者として誠に心強く思っています。小生は都下に住み家庭をもつ関係上、名古屋の北絳紗子楽、大阪の佐川奈津子様の様な理想の女王様方に奉仕する機会がないのを全く残念に思っています。東京都内又は近郊に御住まいの女王様方、どなたかこのささやかな希いに悩む一人のマゾ男に被凌辱の陶醉を御恵み下さる方はございませんか。名古屋の服部様同様勤めの都合上週末(土及日曜)しか自由な時間はありませんが土、日曜日なら——出来れば土曜午後から日曜朝迄の間——場所、時刻、目標等を御指定下されば必ず参上致します。偏に女性へのプレイを御願ひ致します。飽く迄個人的な秘密として——。何分にも体格が華奢なため、又自らの性好として残酷な責めには堪えられません、女性の手で後手に縛り上げら

れ足を舐めさせられ、あらゆる舌の奉仕やパンティのさるぐつわの辱しめを御受け致し度く日夜悶えて居ります。どうか今すぐにも読者通信に御名乗り下さいませよう——都内及近郊地区に御住まいの女王様方に伏して御願ひ申し上げます。(東京都下八宮崎浩V)

○ 梨花嬢の縛られ姿について一寸注文を書かせていただきます。小生が梨花嬢の作品について一番物足りなく思うことは、彼女の表情が縛りに對して服従し切ってしまうていることです。あきらめの表情、苦痛の表情にも魅力があることはたしかですが、小生は美貌の彼女の場合は、むしろ辱しめにたえ、顔を上げ瞳を見開いて空しいながら、あくまで抗議の身振りを示している姿こそ、ふさわしいと思うのです。気丈さと誇りを失うまいとする姿があつてこそ、その身にかけられた高小手縛りや首なわや股間縛りが痛々しい魅力を發揮するのだと思うのです。また猿轡については、彼女のような美貌に對しては単に声を奪うための役割ばかりでなく、美貌に對する冒瀆の役割をも果させるべきです。荒々しいロープを噛まされ半

開きにされた口、口を圧迫する布のため伸びのぞけられた鼻孔、或は恥かしくも鼻孔に突込まれて二本の煙草。このような屈辱的な顔をむりに上げさせられ瞳を見開かせられ、鏡をのぞかせられている姿。いわば、さまざまな辱しめを与えられ必死に痛々しい表情でたえていて理智的な美女のポーズの魅力を作品化して慾しいのです。縛りの方法や猿轡の掛け方、煙草責め等については異論も多いでしょうが、顔をきつと上げ瞳を見開いているという件は、あらゆるポーズの場合、その彼女の力をより引立てることに役立つと思うのです。何卒この点御留意下さるようお願い致します。(東京八須田左右夫V)

○ 水野淑子様。十月号誌上にて、貴女の通信を読みました。貴女は、S的男性にとつて、正に理想の女性と言えるでしょう。不幸にして私は、東京に住んでいるので、貴女とプレイを楽しむことは、一寸、出来そうにありませんが、せめて、文通だけでも、してもらえないかと思つて、この呼びかけをいたします。私は、廿八才のサラリーマンですが、私は、女性の肉體



## 浣腸関連資料

自分ではくバンド (略号はく)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

誰にない自分ひとりの部屋で、ひそかにメンス・バンドを穿いてみる。月に一度は御厄介になる女の必需品ではあるけれど、今こうして、つくずくと眺めながら自分の身に着けてみると、言うにいわれぬ奇妙な気持が湧いてくる。

生理のときに穿くからだろうかそれとも、この布とゴムとで出来上った下着に、何か不思議な魅力でもあるのだろうか。私のこのバンドをつけた姿をよく見て頂戴。私のこの秘密のポーズは、私の部屋の鏡とカメラのレンズだけが知っている。

モデル 梨花悠紀子

の中で乳房を、最も、美しいものだと思っていますから、貴女の通信の中で「……きつと乳房責めをはじめとして喜んで受けましよう。」とある箇所、大変強く、

ひきつけられました。また、同じく、女性切腹のファンでもありませんので、前記通信文中の「お望みでしたら、切腹もやってみますし……」と云う箇所にも注目せず

## ○オシメ浣腸責

大手札四枚一組 三〇〇円

略号(せち) 大塚 啓子

ガラス製三〇CC浣腸器、エネマシリンジを用いて浣腸を施したモデル嬢にオシメカバーをつけさせ、後手に縛って自由を奪うと忽ち激しい便宜が七転八倒の苦しみとなって全身をさいなむ。その有様を執拗にカメラは狙ってゆく。

## ○オシメカバー着用と浣腸連続フオート

大手札十二枚一組 九〇〇円

略号(ちし)

これは或るオシメ浣腸マニヤのアイデアによって連続撮影した十二枚続きの組写真です。即ちパンティを脱した若い女性が30CCのガラス製浣腸器によって浣腸を施し、やがてオシメを当てて総ゴム製のオシメカバーを着用して、排泄するに至るまでの経過を刻明に描写したものであります。

にはおられませんでした。ただ私は、余り残酷な責めは、好みませんので、貴女と好みが合うかどうかかわかりませんが、若し文通が出来るなら、イメージの上で、いくらでも、私の思い通りに、貴女を責めてやれると思います。しかし、私の正直な感想を申しあげれば、貴女のような女性が、小説や、その他のフィクションの世界だけでなしに、この現代の社会のなかに実在しているのだと云うことが、まだ信じられません。若し、この通信が、没にならずに誌上にのり、それが、また若し、貴女の眼にふれたら、誌上を通してよいです。私の呼びかけに答えたいと思います。(東京八吉行・淳)

○ その月その月は奇クの発売と共に足早やに過ぎて行きます。十月号を手にしたのも残暑のきびしい八月二十四日の事でした。そうして一夜を徹してむしゃぶり読んだ後、あなたへお便りしています。山崎美代子様。確か以前に御夫婦の方で交歓を望むと云う通信を拝見した事があります。でも、そう規定されると私などは、その圏外にあるわけで当時文通を希望しな

から遠慮したのです。十月号誌上での「東京の中野様」とあるのは、きつと誤植だと私には思えたのでこうしてペンを走らせています。が、かつて私が読者通信に提案した事は、全く真面目な意図からで、これを営利に結びつけて地下組織を確立するが如き野心はみじんもなかったのです。せんだったのうに思いもかけぬ奇タ休刊の事態に当面すると本当に落胆しますが、こんな時こそ、心のつながりがあってもと思わずにはいられなくなるのは、私ばかりではありません。プライバシーの確立が難しい昨今では、仲々思い通りの相互交歓は出来ないでしょう。でも社会秩序の中で、ささやかな秘事を楽しみ分ち合う位は信頼と努力とで叶えられると云う夢位は持つて、手さぐりで理解し合える友人を探し求めたいとは常々考えています。各自がお互いの生活、社会的な地位、名誉を尊重し合い、かくれた人間の性的な美を求めて親交を深めるなら、一部の好奇、猟奇家の例にされず、本来のクラブ的友好の雰囲気の中で集いが持てると思うのは、甘い夢の見過ぎなのでしょうか。ともあれ、私としては同趣旨に賛同して下さった



方が居られたのを知る事が出来て大変嬉しく思っております。これを機会に文通などから始めて夢の実現へと協力し合えたなら、長年奇クを読み読けて来た甲斐があったと思うかも知れません。奇クの読者通信欄を通じてお近づき願うと云う事は甚だ困難な様です。現に私は再度短信の掲載を許されて、「吊責め願望」の豊島さんに呼びかけていますが、住所を明らかにしていても記事としての関係か、いづれ何等かの理由があつて編集部の方が削除されるらしく今迄に直接親書を差上げる迄に至っていません。よき連絡方法があれば御知らせ頂きたいものです。尚この通信を御覧になつて新たに關心を持たれた方がありならば是非お便りお寄せ下さい。アパート住いの私故、郵便物の誤配を惧れて一応局止め扱いを希望しておりますが、御返信申し上げる折、正確な住所を明記致します。(東京中野住吉局八中田明)

○ 自分の行動に責任を持つ、この前提の下に同志を求めます。自分は昭和17年六月生れの男子、願ひるに昨年五月、市内アベノ区の斎場前附近の古書店で貴誌を手にし

た瞬間、目の前の世界が大きく開けました。中学時代江戸川乱歩の探偵小説に憧れ、文中の少年探偵気取りで浮浪者の尾行をしたり、自宅の勉強室を幽囚の牢に見立て、紙紐で手足を自縛したり、寄稿の諸兄がそうであるが如く、自分も又、彼等の囚れの姿に限りなき憧憬を抱いたのです。郊外の学区であつたのと、小学校時代よりの氣心の合つた友達が大半であつたため、休み時間と放課後の遊びにはいつも探偵ごっこが行われ友人のうちの誰かが縛られる外は自分が哀れな姿で縄目にかかつていたのです。高校での雰囲気は全く別なものと成り、今日に至るまで、その嗜好(敢えて嗜好と呼ぶならば)は抑制されて来たのです。高校から大学に至る迄の間、自分には諸兄の如き、同性愛云々とか、異性に心をひかれるとか、或は又、運動の最中にサド感を味わつたとかマゾ的快感を得た、と云つたたぐいのものは全くありませんでした。いわば自分で云うのもオカシイ話ですが、模範生徒であつた訳です。一年の間、ただ縛る、縛られる、といった嗜好の外に実に多種多様な嗜好が存在することを知りました。当然の事ながら、

学校では教えてくれない、生活に密着した社会学の重要な分野、とでも讃辞を呈します。世界中のあらゆる人間の心の奥底には先天的にサド的、マゾ的な断片がひそんでゐる。全く然りですね。愚かしい話ですが、一年の自分には、どうして男子の褌に美しさがあるか、どうして小説に出てくる人物が革や鋼鉄の褌をつけさせられるのか、糊の利いた麻のズボンよりも人絹のよれよれの半ズボンの方が魅惑的なのか、色の褪せたGパンが好まれるのか、見当がつかせませんでした。でも一年経た今日、その魅力的な要素が納得出来ました。ですから、自分の求める同志も必ず素肌に革の褌か、よれよれの人絹の半ズボンか、色の褪せた寸足らずのGパンを着用した人を求めます。自分と同年輩か、それ以下の人、貴誌の一冊もあれば縛り方など説明するのは、愚の骨頂です。条件としては、自身に傷をつけない用心から見苦しくない限界内で肌着を着用すること、サド、マゾ的な要素を共有している人、女性はお断りします、未成年者も然りです。毎月最終土曜日の夕方に、私に新らしい、素晴らしい世界を示してくれた書店の附

近で同志を待っています。(市内在住) T・T生

○ 佐川奈津子様、十月号でお便り拝見致しました。私は現在二十七才になるマゾ青年です。二年程前は貴女様と同じく梅新でささやかなバーを経営しておりましたが、持つて生れたマゾとしての思慮分別にささか欠けたがために大失敗を演じ、その不名誉から逃れるために店を手離し、今はある店に当時の傷をいやしつづつ働いておりますが、貴女様のお呼びかけを拝見したこの際、私の全てを捨てて、貴女様の下僕として又最も現在の私にふさわしい生き方として貴女様に私の生涯をゆだねて再出発し一生懸命お仕えしたいと決心致し謹んでお願い申し上げます。次第でございます。長年の経験から貴女様の御心労も充分心得てお仕え出来ると思ひます。お仕事の方は一切御命令通りに働き又努力致しますし幸い体の方は至って健康です。ので、少々のことならへたれない自信も十分ございます。勿論下僕として将来、貴女様の足下にてお仕えするについて、その間には激しいお仕置を受けることもあり恐らくその毎日は私にとって苦し



辛い日であることは存じますが。それこそ自ら望んだ生活故、その様な最低辺の生活から下僕としての幸福をつかんで見たいと思います。どうか私の御主人様として私に試練をお与え下さいませ。そして第二の人生をひたすら御主人様に奉仕する最良の下僕として過し、懸命に努力する機会をお与え下さいませ。尚、私の現在の生活から秘かに逃れるために誰れにも知られたくありませんので、大変失礼ですがとりあえず局止にてお便り下さいますれば幸甚に存じます。

## 生理帯シリーズ

A 6判感光紙焼付

二十枚一組 一〇〇〇円

略号(め20)

バンドマニアのために、ここに、バンドタイプバンド、ズローズ型バンド並にパンネットの三種の生理帯の着脱フोटを大塚啓子嬢を煩して特にトイレを背景にして作りました。

「パンネット」の特長

一、ウーリーナイロンでネット状に作ってありますから、アン

す。(大阪南局止八西岡裕司)

奇クの皆様、女斗美マニアの皆様お元気ですか。8月号は発行されなくて大変心配しましたが、9月号の合併号を見て安心しました。いろいろ御苦労のことと拝察します。さて10月号では雄松比良彦氏の健筆でわれらの女斗美にもいよいよ可愛いジュニアが登場しフレッシュな感じではほえましく面白く拝見しました。ジュニアといいましても中々いい体格のグラマ——揃いの様子ですが。ピチピチしたさわやかなエロティシズム

ネナプキンと併用すれば絶対ズレません。

二、布地を使わず伸縮自由で、どなたにもピッタリ、スタイルをくずしません。

三、軽くて、ムレません。

四、価格が安く、五色ありますから、毎日とりかえてご使用になれます。

五、小さくたたためて、携帯にも便利です。

おしゃれたな生理帯を全裸の女体に着脱するさまを順を追って前後左右からカメラの視点を当てた生理帯シリーズです。

が結構で、小林嬢(?)以下選手たちに声援をおくります。ただ挿図の皆無なのが大変残念でした。

ひきしまった子鹿のような娘達のフェエな力斗の図が欲しかったです。後半の実戦記のパンチのきいた文もよろしいが前半の考証も面白く「女子相撲」というものの現実を構成される意欲は注目に残ります。ただ「女子土俵」の直径が3・5メートルというのは、何かのまちがいではありませんか。現在の標準(十五尺、八・四・五メートル)のひろさは女子には不要なのは判りますが3・5メートルでは一寸せますぎる様に思います。十五尺では「寸のび俵」を使うのでいわゆる「女俵」は普通の米俵をそのままつかえばよく、直径4メートル位になるのではないのでしょうか。古典趣味、無残趣味の女斗美それぞれによろしいがこういうピチピチした健康なエロティシズムも大いにいただけたいです。可愛い女子部員たちの練習生活なども紹介して下さい。なお土俵上の引き幕は陰をあらわすので女体の上にはかけぬ御説のようですがあれは男陽女陰のことではなく戦斗格技そのものを陽としたのでそれを中和するためのものですからた

とえ女子相撲でも必要かと存じます。念のため。(京都八殿田生)

○

佐川奈津子様、奇ク十月月号誌上で貴女様のお便りを拝見致し、驚喜のあまり不躰をも顧みず早速ペンをとりました失礼お許し下さい。小生の永年渴望して参りました理想の境地、女御主人様に召使われ奉仕を致す下僕ドレイをお求めになるお言葉に今回図らずも接し、万が一夢ではないかと不安半ばの狂るほしい望みに胸を動揺させながら、奴隷志願のお便りを致します。私は当年三十三才の独身者で、一応大学を経て技術者としての職に目下就いておりますが、生来マゾ性向をもち、気位高く身分高い支配的な女性の足下に跪き、驕慢且つ残虐な女御主人様の御意のおもむくままに、こき使われ、更に堪え難い辱しめを受け、恐れおののきながら畜生にも劣る境遇に身を委ねることができたら、どんなに最高の生きがいであらうかと念ずる賤しい男です。私の体格は身長五尺五寸、十三貫余の瘦型で、些少にも通常の性に対する慾望や興味をおぼえず、唯支配に慣れ嗜虐性向をもつ女性によって叱責折檻などをうけ屈伏致



すときのみは無上の恍惚境を覚  
り、然かもそのような女性には例  
えどのように理不尽過酷な仕打ち  
を受けましても、反撥や反抗を試  
みる勇氣さえもち合わせぬ内気な  
性格にて、奴隷又は玩弄物として  
支配女性に酷使され、使役される  
ための生物として生れついて参っ  
た宿命観さえもつ私であります。  
従つてご主人様に必ずや忠実且つ  
恭順、どのような処遇に際しても  
絶対危険など懸念に及びませ  
ん。好適性の奴隷下僕としてご満  
足いただく自信を抱いておりま  
す。幸い下僕としてご採用下され  
ました暁には、貴女様を貴い御主  
人様として日夜崇め伏し拝し、貴  
女様のお為なら生贄、実験台、肥  
料となるも厭わぬ覚悟であります  
し、御命令には無条件で盲従致し  
ます。犬小屋に鎖に繋がれて起居  
し、踏みにじられたり、投げ与え  
られる浅ましい家畜用の餌を喜々  
として頂戴致します。いささかで  
も怠慢や、落度ありますとき、無  
礼な振舞に際しましては、容赦の  
ない仕置、折檻、凌虐をもって、  
常に卑しき分際だということを骨  
身に思い知らされることを日課と  
いたしたく存じます。例え何の理  
由がなくとも、ご主人様が氣まぐ

れのお氣晴らしの意味でお氣に召  
すままの慰みものにも致して下さ  
い。足拭き雑巾、踏台、痰コップ、  
トイレ代用等あらゆる御用命を言  
いつけられましても結構でござい  
ます。試用してやるから来なさい  
とご命じ下さいましたなら、直ち  
に御地に飛んで参り、貴女様のみ  
足にひれ伏します。何卒、微意を  
お汲取り下さり、奴隷の一匹とし  
てご採用戴けますよう伏してお願  
い申し上げます。尚ご連絡は貴女様  
の御都合よき場所・日時など誌上  
にご明記下さるなり、私方の局止  
メでお便り戴きたく鶴首してお待  
ち致しております。(東京葛飾局  
止メ早川芳夫)

水野淑子さん。不思議な魅力を  
たたえた貴女の便り、私は全くの  
心のときめきを覚えながら読みま  
した。私は貴女をM女性として得  
難い人だと考えます。単刀直入に  
云つて私は貴女をテーマに、本格  
的な責め研究をしてみたいと思つ  
ています。故人になられましたた  
が、伊藤晴雨と云う画伯がいろい  
ろと女性の責めを試みられて、貴  
重な資料を残されましたが、今に  
残るその時どきの写真などは、到  
底今日の技術的立場で見ると幼稚

## 避暑地の切腹

(略号  
せひ)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 絹川 文代

海岸近い有名な水浴場の貸別荘  
の二階の一室で、失恋した美貌の  
令嬢が、最後の海水浴を終えた上  
で、いさぎよく女ながらも切腹し  
て、この世に別れを告げようとす  
る。水着の上から、ぎりぎり短  
刀を引きまわすと、ナイロンの布  
はさつと切り開かれて、真白い肌

からは紅の血潮が溢れ出る。  
更に切り続ける刃、水着の布は  
肌と共に破れてゆく。流れる血汐  
の海。やがて鳩落ちにも刃先は加  
えられて、苦悶と苦痛は足先にま  
で伝わり、全身エビのように折れ  
まがるといった血紅使用のロマン  
チックな女体切腹の場面。

で現代的な生活背景の中では考え  
られないカビ臭いものです。貴女  
が文中書き記された事が、誠、貴  
女の願望であるなら、存分にプレ  
イが出来る私のアトリエを貴女を  
責める獄舎にみたてて拷問して上  
げましょう。お勤めの都合で、ち  
よっくらそつとは休暇がとれな  
いかもしれませんが、まとめ  
一週間位東京へ観光旅行が出来る  
なら、大いに歓迎、歓待して、以  
前本誌に古川裕子さんが手記を寄  
せられたような「長期刑」を宣告  
して、丸一週間、いろいろな責め  
を加虐を待つ貴女の五体に施して  
上げましょう。しかし安心なさ  
い。貴女の操は手製の貞操帯を締  
めて絶対守って上げますから。つ  
まり、貴女はその締め心地の感想  
を私に教えてくれる為の報告者に  
もなるのです。鞭打は一週間で、  
一日五日以上としましょう。下剤  
をかけ、浣腸をして、毎日軽々と  
した清潔感の中で、ブラジャーの  
下に犬鎖を仕掛けてその一端を袖  
から手首へ出させ、まるで腕を組  
む仲睦い恋人同志かのように見  
せかけて東京見物に引立てて行き  
ます。高層ビルのホテルで一泊す  
る時は、全く干渉のない豪華なム  
ードでアメリカンスタイルのプレ  
イを楽しむのもいいものです。パ  
ス(湯槽)の中に浸して水責め、  
湯責め、或いはシャワーでの冷水  
責め。洋式便器へ顔を押し込めた  
り、強制排泄など考えただけで貴



女の呻吟と感泣をこの目で見てみたいと強く望まずにはいられませんが、特殊な嵌口具、馬車馬のような目かくし、画ビヨウを内側に並べたブラパット。首枷、足枷、手錠など、本格的プレイは明日にでも可能です。新劇の研究生として劇団について行き大阪でも舞台に立った私ですから、メイクアップに細心の注意を払えば、記録の写真を奇巧に提供しても、貴女のお友達にも肉親の方にも、まさか貴女がモデルになっっているのだとは気づかれずに済むでしょう。ですから秘密は絶対守れると思います。貴女が上京した日が例えば十一月二十八日だとしたら、ナチの徴用慰安婦達のそれのように、乳房の上にマジックインキで「二〇〇」とナンバーを記入し、その時以後その番号を呼んで指示することになります。更に逃亡防止の見地から眉を剃り落し、作業時間―責めの研究―と食事時間以外は頭に剣道の面をスッポリかぶせておく事にします。日没から夜半まで「二〇〇」は自転車に跨がり、発電機を回わして私の読書その他の照明を

供給しなければなりません。疲れと共に輝度が低下したら、線香の火をチツチツと肌におし当ててカツを入れ、同時にその回数が翌日の罰に加算されるのです。例えば腋毛を同数だけの本数抜きとるとか、臍窩へなきローを滴らすとか、鼻の穴にスポイドで塩水を入れるとか、キンカンをぬるとかするのです。出来るだけ形々しい儀式的な処罰がよいでしょう。やがて予定の期日も来て帰阪する事になったら、貴女は、貞操帯をはずされ、胸の番号はアルコールで消されて水野淑子嬢になるのです。全身オリブ油でのマッサージは、鞭の跡も、線香をおしつけられた小さな火傷も完全に癒してくるでしょう。又の機会に、又アバンチュールな刺戟を欲した時に気軽にいふでなさいと別れを告げて、ホームで綺麗な思い出深い別れ方をしましょう。以上のような事で若し私に興味を湧いたならお便り下さいお返事します。奇巧を購読する喜びは一つふえたような気がします。お元気で。(東京・新宿局止八高橋正利)

次号(十二月号)は十月二十五日発売いたします。

○ 残暑の候も過ぎ灯火親しむ候と相成りました。貴誌も号を追う度に素晴しくなつて参りました。小生は復刊以前よりの愛読者です。貴誌の発売を毎月指折り数えて待っています。女性の下着マニヤです。でも新しいものには何も魅力を感じません。汚れたままの女性の下着難を常々欲しいと思つていますが、どうしても入手できません。パンティ、メンスバンド等は古くして汚れたままのものが欲しいのですが、女性の愛読者の方々、小生のこの切なる願いをかなえて下さいませんか、お願いします。(新潟八〇生)

○ さてクラブ愛読者の一員として始めてお便り致します。小生もこのクラブを愛読して何年になるか、現在二十六になる小生にとって、もう数年分のクラブが書斎の本棚にぎっしりと詰っています。或る時は中々書店で買うことが出来ず集めるのに苦労したときもありましたが、今では書店にさえ顔を出せば手軽に買えるようになり喜んでおります。これから、よりよい、いや、趣のある本にするため、編集者の方々及びファンの

皆様方と共に力を合せてゆきたいと思つて居ります。ここで小生も始めての便りの事でもあり、ファンの皆様方男女を問わず交歓したいと思ひます。又お望みの方が御座いましたならば、映画の縛り写真等御一緒に送致したいとも考へて居ります。小生も二年程前に映画の宣伝部に勤務していた関係上、苦心して数十枚程の縛りシートの写真をあつめました。昔の映画、最近の映画等小生にとつて、みな中々趣のある写真ばかりなので、捨てがたい資料となつています。どうか皆様方の中で、もっと変った写真等御座いましたならば交換していただけたなら、結構かと存じます。又、先にも述べました通り市内近辺の方々との交通も希望しております。それから水野淑子様、先月号の通信文で拝見させていただきました。ぜひ御相談致したく思つて居ります。(大阪市東成区八山内毅)

○ 八九月合併号拝見、一時は如何なることかと案じておりました。が、健在と知つて喜んでおります。特に今月号から「生首シリーズ」が口絵になることを知つて嬉しく思つております。女人切腹画もシ



リーズとして巻頭を飾ることも喜んでおります。室井様、北斗生様それに、女性の生首マニヤの川下米子様、如何お過しでしょうか。吾々の夢が実現されるのを共に喜んでおられることと存じます。第一号は裸女血斗の果てといっても、ふんどし姿のそれではなく、一寸残念でした。「裸女血斗」ものとなると、どうしても私は京洛生氏創始の「大奥裸女血斗」にあるふんどし一本の姿の女のそれを先ず思い浮かべます。特に古風な髪形の女性のふんどし一本の姿は、私にとっては異常なまでの憧れの対象となります。室井様も同じことと思いますが、特に私はこの女性のふんどしをした後姿にたまらない魅力を感じています。ふくやかな臀部の割目にきりりとしめこまれ、きれいに結びつけられたふんどしの結び目と、つややかに結い上げられた日本髪とを合せた美が、私の憧れの対象です。このような女性が刃物を持って命を的に相争う無惨絵模様の出現をのぞんで止みません。特にサロメの如き女性の日本化——日本髪に赤ふんどし——は是非望みます。同好の方々のお便りをお待ちします。(布施ヒキノ)

○ 水野淑子様、貴女の御通信を奇ク誌上にて拝見致し、我が意を得たりとばかり早速ペンを取った次第です。小生は数年来、奇クを愛読しているサドファンです。毎月奇クの華麗なグラビヤを見たり読物を読みながら、自分でさまざまなアイデアを思い描き、いつか貴女のような女性とプレイすれば、どんなに素晴らしいだろうと考えているのです。小生は製鋼会社の作業管理部に勤務している二十四才のサラリーマンです。自分の事を紳士だとは、あえて自負致しておりませんが、貴女の要求される秘密及び最後の一线を守るという事は必ず厳守致します。小生のこの拙文をお読みになって、もし同好の交りをしてよいとお考えになれば御返事下さい。(大阪市福島区八永井生)

○ 初めてお便りします。貴社の発展を心から願っている者の一人です。水野淑子さんのような女性はいないかと心待ちにしていたものです。水野さん、僕への呼びかけありがとうございます。僕はSらしく毎号グラビヤや口絵を見る度に体がカールとしてきていつも縛ったり責めた

## 今月の新版「女体切腹フォト」

### 腸露出 「無念腹」 女体切腹図譜

A5判(本誌の大きさ)感光紙焼付 十枚一組 八〇〇円

モデル……大塚啓子、略号(せ10)

やわらかなヘソ下の肌に今や深々と刃を突き立てれば、溢れる血汐は、唐くれないに、とびちり、腸が切口から、むくりむくりと盛り上ってくる。無念の形相も物凄く、血に染った手に更に力をこめて引きまわせば、腸は刃のきりきりと皮膚をさき皮下脂肪を割け、肉を切るにつれて、みるみる創口いっぱいひろがってくる。

左手で腸を押えながら右脇腹まで切りさいてゆくと、刃を抜いて、今度は下腹からみぞおちまで一気に凄惨な十文字腹。今まで試みられなかった腸露出の有様を今回はじめて写真化した女体切腹フォトの決定版ともいうべき迫力のある連続写真集である。凄絶、女体切腹フォトの決定版として自信を以ておすすめできる切腹フォト集です。

りしている写真編集の人達がうらやましくなりません。僕の念願はMの女の方と心ゆくまでプレイすることです。まず最初に僕は貴女をがんじがらめに、縛りあげることでしよう。そして僕はそんな貴女を煙草をふかしながら眺めるでしよう。身動きもできない貴女に僕はバンドで貴女のお尻といわず脚といわず、打って痛めつけてやるのです。貴女はさるぐつわをはめられ声をたてることすら許さ

れていません。次に僕は貴女をうつぶせに寝かせるでしよう。貴女の足を無理に開けて副木を当てて縛ります。腕はこれ以上曲らないという具合まで後手に縛ります。そして僕は……という具合に日夜妄想をたくましくしています。まだ実際に女性を縛ったり責めた経験はありません。どうか僕を満足させて下さい。最後の線とかや秘密とかは確実に守る積りです。お互にドライに楽しみ合



# ●代理部分護品総目録(第五号)出来ました。

十円切手封入の上お申込み下されば、折返し急送いたします。

いましょう。僕は身長一七〇センチぐらい、体重十六貫五百、マスクと才能には自信を持っている大学生。淑子さんの王子様としてガツカリさせるような点はないと思っ  
ています。九月二十九日(土)都合が悪ければ十月八日(月)へ  
なんと都合をつけて下さい)貴女は天王寺駅七番線から十四時十二分に発つ車に乗って次の駅の美  
章園(十四時十四分着)で降り右手と左手とに一冊ずつ週刊誌を持ってプラットホームをゆっくり歩いていて下さい。その日の事を想像して試験の勉強も手につかない  
僕を編集部の方水野さんゆめ失望させるなかれ、もし両日共都合が悪ければ次号に連絡方法を示して下さい。(大阪八淑子の王子)

悩みと苦しみをもった方々や、私どもを驚喜させる現想のサド女性方からの呼びかけを読者通信という広場を通して確認でき意を強くすることができました。どなたか全国の女性、特に都近県の方で、私を奴隷、または賤しい生物同様に扱って下さい。うんと残酷に苛めたり辱しめて下さる方はいられませんか。サド的な女御主人様に本物の奴隷として一生買殺しの運めいにおかれ、弄ばれ酷使されればこの上もない幸いです。が、そこまでゆかなくとも、一寸ばかり男を虐めてみたい踏みにじってみたいと望まれる美しい女性の方お便りいただきたく思います。私は独身の技術者で自由独身です。私は自分の出費謝礼は心得ております。秘密厳守、ご迷惑をかけることは絶対ありません。(東京荒川局森川一郎)

益々内容の充実して貴誌に対して愛読者の一人としてうれしく思っています。八、九月合併号を手にして内容をみると、第一に従前発行の号に比べて迫力にかけているように思います。文章にしても実に遠まわしに描写してあり肝じんのところでは削ってあるようです。それとグラビヤの数が少なかった事です。某方面からの勧告もあったことが原因だとは思いますが、貴誌は最初から子供向の雑誌ではなく大人用として編集しているわけですから、そのところをよくよくわきまえて絶対に私達を失望させるようなことのないことを誓って下さい最近では浣腸ファンもだいぶん増えたようです。私も浣腸に強くひかれ、こういったことに関連した趣味を持っています。例えば女性の下着といったものに對してもです。ところで、この際多くの浣腸ファンの為に浣腸に關した特集号を発行して下さい。内容も口絵、グラビヤ告白、創作、体験、手記、物語、通信など浣腸に關したもののばかりを載せるのです。ファンの皆様、一人でも多く原稿を編集部まで送って下さい。そして良い本を発行してもらいましょう。全国の浣腸ファンのために。浣腸に興味をお持ちの方、文通をお願い致します。モデル嬢使用消の下着、器物などほし

いと思います。たとえば、いろいろの浣腸器、オシメカバー、オマル、パンティ、バタフライ、スリッパなど。特に大塚さん、梨花さんの、絹川さんなどの使用されたものがほしいと思います。(福岡市間長生)

## △間長生△

○

△編集部便り△先月号の編集後記にてモデルの募集について一言しましたところ、女性の読者の方々から写真入りにて二、三の応募を頂きました。若し今まで通信を寄せられた以外の方で、御希望の向がございましたら、編集部まで御一報下さるようお願いいたします。○本誌におきましては数年前から私信の転送や文通の幹旋などは一切中止いたしておりますので悪しからず御諒承願います。トラブルの原因となったり誤解を招く恐れもあります故、読者の共通の広場である読者通信欄を通して交歓下されば幸甚です。○本誌の内容を補う意味で、新しい資料や新人モデルのフォト等、次々と分護品として発表してゆく考えですから、どうか御期待下さい。本誌と併せて御覧頂ければ一段と迫力の盛上りを見せることでしょう。では次号の発売日まで、さようなら。



△體驗、告白、手記▽

△創作、小説、物語▽

△(映画、雑誌)通信▽

☆本誌御愛読の栞

|      |      |      |
|------|------|------|
| 一月分  | 三月分  | 半年分  |
| (1冊) | (3冊) | (6冊) |
| 二百円  | 六百円  | 千二百円 |
| △送共▽ | △送共▽ | △送共▽ |

本誌は各地書店にて毎月二十五日一斉に発売致しますが、若し入手困難でしたら、直接発行所へ代金御送りの上お申込み下さい。予約お申込みの場合は発行と同時に、厳重包装の上、急送申し上げます。尚既刊号の内、在庫分は別項に一覧表を掲げてあります故、御注文頂き次第に急送いたします。

△レポート・マニヤ通信▽

△讀者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に對する希望や御意見、感想、思ひ出話、或いは読者相互間の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。誌面の許す限り、つとめて掲載いたします。

## 募集要項

一、原稿の内容は風俗雑誌の尖端をゆく本誌にふさわしいもの。例えば、オールソックスなSMに關連した小説、創作、研究、資料、體驗、告白、紹介、論說といったものを始めとして、浣腸、女裝、切腹、フェチ、女相撲、女斗美、輝美、身体各部に対する狂崇等に關連したものを含めます。

一、表紙、口絵、挿絵、或は写真なども努めて掲載したいと考えます。一、原稿の枚数は別に定めません。合によつては、御自由です。尚、御都合に構いません。便箋や鉛筆がき等にて未発表のものに限りません。一、締切は特別に定めません。掲載可能な作品は最近号から漸次発表いたしました。優秀作品の投稿者には編集部から題材を提供して寄稿を御依頼することがあります。一、採用原稿に対しては相当の原稿料をお支払い致します。一、誌上での匿名は御自由です。又投稿者や寄稿家の住所本名は絶対に他へ洩すようなことは致しません。故御安心下さい。

奇譚クラブ編集部

○本誌代理部の分譲品は、最近分譲品案内並に読者通信欄の記事中に広告してあります。

他に『代理部分讓品総目録』を準備しており  
ますから、それに依ってお申込願います。目  
録は十円切手同封にてお申込下されば急送申  
し上げます。

○雑誌は嚴重包裝の上、第三種便にて、写真類は密封の第一種便にて、その他は第五種便にてお送りいたします。

○代理部に對する御送金は、なるべく現金書留、振替、定額小為替、小為替、切手代用の節は、八円又は十円切手等の小額のものに願います。

本誌に發表した口絵、写真の複写或は無断転載等は固くお断りいたします。

(第十六卷第十号)  
(通刊第一百七十号)

昭和三十七年十月二十日印刷

昭和三十七年十一月一日発行

編集印刷兼発行人 箕田京二

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

發行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)  
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二号)